
多重人格な彼女 【完全版】

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多重人格な彼女 【完全版】

【Nコード】

N0097F

【作者名】

NAO

【あらすじ】

オタクな俺の幼なじみ、夕風佳乃^{ゆづなぎかの}には、短所とも長所とも言える最大で最強の特徴がある。俺はそんな彼女や、無口で絶世の美少女ウメ、天真爛漫な下級生杏里^{あんり}、奇人変人なクラスメイト達に翻弄されながらも、かけがえのないものを見つけていく……王道コメディ仕立ての主人公成長物語。その完全版です。

プロローグ・「幼馴染み」

自分でも恵まれていると思う。

「仁君^{じん}、起きて」

世界中の目覚ましを探しても、こんなに優しい声で起こしてくれる目覚ましは見つからないだろう。

「仁君^{じん}ってば」

俺は頭が覚醒しているのにもかかわらず、あえて眠ったふりをしている。決して叩き起こすわけではなく、優しく体を揺り動かしてくれるのは、俺を想ってのことだろう。

「佳乃^{かの}……あと五分……」

俺は薄目を開けながら、ベッドの脇で困ったように眉根を下げる幼馴染みを見る。中腰になるように俺を揺り動かすから、高校生にしては大きすぎる胸が右に左に揺れているのがはっきりと見えた。

「うーん、眼福……むにゃむにゃ」

できるならば、もう少し前かがみになってくれると、色々とサービス満点だぞ。

「もう、仁君、毎朝起こしに来る私の身にもなっ……」

「うん……そんなに重そうなものをぶら下げていると、肩が疲れそ

うだな。むにやむにや」

「そつだよ、疲れるんだよ。こつやって揺り動かすのだって腕に負担がかかるんだから」

「むにやむにや……キスをしてくれたら、起きるかも」

「き、キス……っ！？ 仁君に……キ、キス……さ、魚じゃないよね？ あ、あの……唇と唇の……だよな……？」

おろおろしているところが見ていて面白い。

「……したら、起きてくれる？」

お、おい、その赤い頬は、まさか……。

「きちんと起きて制服に着替えて、一緒に登校して、一緒にお昼食べて、放課後は一緒に帰って、夕飯食べに来てくれる？」

それだと今日一日の予定が全てなくなってしまうが、キスしてくれるのなら考えなくもない。むしろ、前向きに検討しようではないか。

「結婚式は教会で親族だけ集めた、質素だけどすごく暖かい挙式で、もちろん友達まなみの真奈美ちゃんも招待して」

さすがの俺もそこまで前向きには検討できないぞ。俺は敷かれたレールを歩いたりはないのだ。

「新婚旅行はトルコで、二人でカップドキアを見てくれる？ もち

るんケバブも食べようね？」

カッパドキア……？ あの有名なキノコのような白い居住岩のこ
とだろうか。

「子供は……九人がいいな。野球チームができるくらいがいい」

もじもじ。もじもじ。両手の人差し指をつけたり離したり。

うつ……我ながらかわいい幼馴染みじゃないか。

「あ、でもパリーグならDH制だから、十人いなきやだよね？ で
も、DH制だと守備が出来ないって言うてケンカになりそう……な
ら、やっぱり、サッカーが出来るぐらいがいいかな？ ううん、仁
君なら、きつとラグビーが出来るくらいに」

「これ以上増やすなっ！」

思わず飛び起きてしまった俺を見て、佳乃はにっこりと微笑む。

「やっと起きてくれたあっ！」

歓喜もそこそこに俺に抱きついてくる。まるで、眠りから覚めた
王子様の気分だ。もちろん、そんな王子様は聞いたことも、見たこ
ともないが。

それにしても、女の子はやっぱり柔らかい。こうして頭と背中を
撫でながら少し抱きしめる力を強めてみると、それが良く分かる。

「あう……仁君の撫で方、なんかやさしい。でも、仁君に抱きしめ
られているとなんか眠くなっちゃうよ。あつたかくて、気持ちよく
て……」

「ん、そうか？」

小鳥のさえずりをBGMに、三分待たずとも即席の甘い空間が出来上がる。

「うん、仁君の匂いは少し汗臭いけど、これがないや仁君じゃないもんね」

それはそれで少し傷つくんだが。どうやら佳乃は、年頃の男子の繊細な心情を理解していないご様子。しかし、下手に俗世間じみていないのも佳乃の魅力。幼い頃から、俺が正しい幼馴染の道について説いてきた甲斐があったというものだ。

我曰く、幼馴染み必須五箇条。

- 一、幼なじみは朝起こしに行かなければならない。
- 二、幼なじみは家事ができなければいけない
- 三、幼なじみは家が主人公の隣家でなければ

「ねえ、仁君」

「ん？ どうした佳乃？」

残りの二条は割愛しよう。今は俺を見上げるつぶらな瞳の方が優先だ。

「…………ぎゅってしていい？」

「い…………いいぞ」

「うん、ありがと仁君」

佳乃はさらに俺の胸に顔をうずめてくる。

そんな佳乃の頭を優しく撫でながら、俺はこんな幸せな日々は長くは続かないと心のどこかで考えていた。あとに待つ大きな不幸とか、大事件とかそういう深い意味ではなく、ただ単純に佳乃の特性故のことだ。何というか、俺は刹那主義だ。後は野となれ山となれ、据え膳食わねばなんとやら……何か上手い言葉が見つからないな。

「……」

俺を下から覗き込んでいる佳乃のつぶらな瞳が、一瞬にして色を変えるのが見えた。

ああ……やっぱりね。人生山あり谷あり、とはよく言ったものだよ。

「仁、質問があるわ……」

俺を呼び捨てで呼ぶ佳乃。佳乃の短所とも長所とも言える、最大で最強の特徴が、顕現する。

「あ、ああ……なんだ？」

俺が自分の生まれの不幸を呪う間もなく、佳乃が大きく息を吸い込む。

「なんで朝からアンタなんか抱きしめられなくちゃいけないのよっ！ いい？ 私がまだ落ちていていられるうちにその手を離しなさい。五秒の猶予をあげるわ！」

本来の佳乃からは想像できない鋭い声と、啖呵。

「ま、待て、佳乃！」

名残惜しい柔らかさを、ぎりぎりまで味わおうとする淫らな俺の腕。

「五、四……」

よしよし、もう少しは大丈夫だな。

「ゼロっ！」

ーは！？

みぞおちに見事なまでのボディブローを受けて俺は宙に浮く。そのまま星になれたらどんなに楽だったろうか。

「マイナスー！」

ちょ、ちょっ！？

「マイナス二！」

「ぐお……っ！」

床に叩きふせられる俺は、空想の中で盛大に吐血していた。次の瞬間、見事な復活を遂げられるのが漫画の世界だが、現実はそう甘くはない。

「朝から、くだらないものを殴ってしまったわ」

振り切ったこぶしを広げ、ぶらぶらさせる佳乃。

「よ、容赦なく……やるようになったな……佳乃」

「そうね、これはアレよ。鞭と鞭よ」

……頼む、飴をくれ。

力尽き、地面にうつぶせに倒れ込む。これも、ある意味で二度寝なのだろうか。

「……。あ、あれ……？ 仁君……さっきまで目の前にいたのに……？」

俺の幼馴染であり、毎朝起こしに来てくれる優しい佳乃。

「あれ、足下に何か……？ きゃあっ！ 仁君がボロ雑巾のように倒れて！ 一体誰が仁君にこんなことを！？」

彼女は 二重人格だった。

第一話・「俺なんか……どうせオタクだぜ……」

「仁君、お腹大丈夫？」

家を出てもなお痛む腹部をさすりながら、俺は佳乃に笑って見せた。

「名誉の負傷さ。心配するな、佳乃」

俺が佳乃の頭をばんばんとでやると、佳乃は安心したような笑顔を見せた。俺の腹部に零距离からの突きを放った人間のものとは思えない、天使の笑顔。

「どうしてかな？ 仁君の表情が硬いような気がする。心なしか、私の手も痛いし……気がついたらベッドのそばに仁君が倒れてるし、お腹から煙が立ってるし……」

漫画的な演出にはあえて触れずに、俺はある一軒家の前で不意に立ち止まる。朝には似合わない騒がしい声が、その家の窓から聞こえてくる。

お兄ちゃん、朝だよー！

「真奈美ちゃんの声だね」

佳乃が背伸びをして、窓の中をうかがおつとする。

「ああ、いつ聞いても萌えるな」

腹部の痛みも忘れるようなハスキーボイスが、俺の鼓膜を満たす。

お兄ちゃん、どうして起きてるの！？　ダメだよ、絶対にダメ！　可愛いしっかり者の義妹がだらしのない兄を起こさないと、人類の存在理由の半分が失われるの！

その意見には激しく納得だ。腕を組んでうんうんとうなずく。血のつながった妹ではなく、義妹というのもまたいい。

だからお兄ちゃんは、この真奈美の釘バットでもう一回夢を見るの！

「すごいね……真奈美ちゃんの家から、とても朝には思えない音が聞こえてくるよ」

どったんばったん、ぎっこんばったん……家が震えている。

「さすが鹿岡^{のつおか}兄妹、常軌を逸している……鹿岡兄の安否が気遣われるな」

本棚をひっくり返すような音、タイヤをバットで叩くような音。強盗に襲われているのではないかという支離滅裂な破壊音。

お兄ちゃん！　逃げちゃダメ！　おとなしく真奈美に殴られるのっ！

「バットで見るのは夢ではなくて、地獄だと思うのはきつと俺だけでは……」

そのとき、俺の言葉をさえぎるようにして、家の窓を突き破った

目覚まし時計が俺の顔面を直撃する。

「……ない……はずだ……」

顔面が真っ暗になりかける。額にめり込んだ目覚まし時計を引き剥がして、口に入っていた単一電池を口から吐き出す。アルカリの味は不味かった。

「仁君つて、電気で動いてるんだね」

両手を合わせて感動している佳乃。

「いいか佳乃、天然ボケというキャラクターは、やたらボケればいいというわけではないんだ」

「あれ、そうなの？」

佳乃は驚いたふりを撤回して、眼を丸くする。

「そうだ。現実と思われる場面でボケなければ、それはただの馬鹿だ。いいか、馬鹿と天然は違う。この差は大きい。とてつもなく大きい。たとえば、そうだな……電車の中で周囲の迷惑を考えずに大声で話している女子高生がいるだろ？」

「ええと、三次元の話だね」

「……いや、そういう笑顔での確認は、いらない誤解を招くから止めてくれ。次元とかそういう差別化するような単語を使うから、居心地が悪くなるんじゃないか。確かに俺は二次元に異様な愛着と安心感と美的好奇心と多種の欲望を刺激されるが……と、いやいや、

そついう言い訳じみたことではなくて」

ちくりと痛む胸の痛みを我慢しながら、佳乃に言い聞かせる。

「もう一度頭からだ。電車の中で周囲の迷惑を考えずに大声で話している女子高生がいるだろ？ あれは馬鹿だ。だけど、転校初日の曲がり角で、パンを加えながらあわてて走ってきた女の子と激突して、朝の教室で再開して『お、お前は！』的なうるさは」

「ええと、三次元の話だね、仁君？ あれ、仁君？ 道の真ん中で背中丸めてどうしたの？」

「いいさ。今のはアグレッシブにいった結果さ、オーケーさ……」

胸の激痛に耐えながら、道端に美少女の絵を描き始めた俺。うん、やっぱり髪型は金髪ツインテールが最強だな……。

「あ、仁君がまた二次元に逃避してるよ」

「いいんだ、俺なんか……どうせオタクだぜ……」

そんな泣きべそをかく俺に、佳乃が顔を寄せながら、びしっと親指を立てる。ウインクした片目からきら星が飛び出すほどに。

「大丈夫だよ。これより下はないよ、仁君！」

「なぐさめるよね！？ 普通慰めるよねっ！？」

「よしよし、仁君はいい子でちゅねー、だから早く三次元に帰ってきてねー」

裏声で頭をなでなでされる。

「……………ダメエ」

丸めた背中のまま、肩越しに牙を剥く俺。それを見た佳乃はおどけながら逃げていき、少し走った後、突然佳乃が振り返る。

「もう、先に行っちゃうよ、お兄ちゃん」

鹿岡義妹の真似をしているのだろうか、佳乃の頬は桜色。

恥ずかしいならやるなよ、俺まで恥ずかしくなるだろうが。朝日のまぶしさが、佳乃のまぶしさと重なって、俺は目を細める。

「うーん、妹という設定も捨てがたいな」

あごに手をやってつぶやく俺に、佳乃はまぶたを指で下げて舌を出す。

いわゆる、あかんべー状態。

じゃ、真奈美は着替えるねっ！ お兄ちゃんはこっち向いていて

分かった。お前を見ていればいいんだな……………って、ここで着替えるなー！

そんな声が頭上から降ってきたので、俺は携帯電話を開いて時刻を確認する。歩いて遅刻ギリギリだ。

「世はこともなし。……………ま、俺たちも行くか」

佳乃の背中を追いかける。
腹部の痛みはどこかへ消えてしまっていた。

第二話・「かちかちに固くなったところを手で」

昼休み。

ざわざわ……ざわざわ。

教室中の男子の頭上に、ざわざわ、の文字が躍る。胸板の厚いレスリング部の田中と、その他大勢の男子生徒が妙なさつきを漂わせていた。その原因となっていたのは。

弁当だ……。

きつと妹さんのお手製なんだ。

男子生徒の視線の先には、ピンクの布に包まれた箱があった。

時は昼、持ってきたのは鹿岡義妹。昼休みの始まりの鐘が学校内に響き渡るのとはほぼ同時に、教室の扉が勢いよく開け放たれた。まるで、甲子園の試合開始のサイレンが鳴りやまぬ内にヒットを打たれてしまったピッチャーのような気分だった。キーン、コーン、カーン、コーンの最後のコーンの部分を上書きするような大声で、鹿岡義妹は手に持った弁当を天にかかげる。

細かいところをつつこませてもらえば、鹿岡義妹は一年生で、この二年生の教室までは結構な距離がある。したがって鹿岡義妹は、授業が終わる前に教室を飛び出してきたことになる。

……恐ろしいほどの兄への執念だ。

「お兄ちゃん、真奈美と一緒に弁当の時間だよー！」

「ま、真奈美……ちょっと声が大きいよ……？」

教室のざわめきに取り囲まれる兄などお構いなし。

「これは愛妻弁当ならぬ、愛妹弁当だな」

「おっ、上手いこと言うじゃないか」

俺が鹿岡義妹の持つかわいらしい弁当箱を指差しながら言うと、周囲の男子が一樣に納得していた。

「今度記事にしくちや的な感じね」

「言い得て妙ですう」

新聞部の皆川亜矢子^{みながわあやこ}が腕を組んで大きくうなずけば、早坂美緒^{はやさかみお}が日向ぼっこをする猫のような、気の抜けた声でゆっくりと拍手していた。

二人は遠巻きに男子の喧騒を眺めながら、弁当を広げていた。

「あれ、そういえば美緒係で軍事オタクの桐岡^{きりおか}は？」

「桐岡君はお休みですう」

両手で持ったメロンパンをちびりちびりと口にしながら、ぽけぽけと話す。

「なんでもお、私の作ったケーキを食べてからあ、調子が悪くなつたそうなんですう……」

さすがのアメリカ帰りの屈強な軍事オタクも、美緒のぽけぽけ攻撃には勝てなかったということか。パンケーキを作ったつもりの美緒だろうが、桐岡にとってはコンポジション4爆弾と代わらぬ威力

だつたに違いない。南無。

「ま、いつも一緒にいる恋人的な奴がいないうんじゃ、元気出ないのな感じよね」

たこさんウインナーを空中に放り投げ、それを口でキャッチしながらにやりと笑ってみせる亜矢子。彼女の三つ編みが揺れると同時に、美緒が動揺する。

「はわ〜っ！ 桐岡君と私はそういうえっちい関係じゃ！ 勝ちかちに固くなったところを手でもみもみするぐらいですよぉ！」

メロンパンをお手玉するほどにあわてふためく。

「あれれ？ 美緒のことを言ったんじゃない的な感じだけどな〜」

「あううう……」

「大人ので、魅惑的なことをしているわけね、美緒？」

口癖である、 的という言葉にも力が入る。

「そんなことないですう……」

「おい、そんなことより聞き逃してはならない言葉があつたらう！ 俺は聞き逃さなかつたぞっ！」

純朴な美緒の口から、あんな言葉が聞ける日が来るとは。俺はすぐさま頭を抱えて脳内ハードディスクを巻き戻す。

「リバーズ！」

桐岡君はお休みですう。

「いかん！ もつと先！」

ま、いつも一緒にいる恋人的な奴が……。

「もう少し先！」

かちかちに固くなったところを手で……。

「そう！ そこだっ！」

「あ、仁が危機的な感じ」

亜矢子の声が聞こえた瞬間。

「もみもみつ！？」

俺の視界が真っ暗になる。

レスリング部の田中が、横回転しながら俺の後頭部を直撃してきたのだ。

レスリング部の田中が、恥ずかしさに我を忘れた鹿岡に一撃でやられたぞ！ 追え、追え！

粉塵を巻き上げながら、教室中の男子が一斉に出撃していく。

お兄ちゃん待ってー！

スカートを翻しながら兄を追いかける鹿岡義妹。他学年の教室に堂々と入ってくる度胸もさることながら、ハートをあれだけ周囲に撒き散らす一途なラブラブ光線も、実に見えていて幸せになる。……

俺に殺意が芽生えるのと同じくして、勢いよく田中が立ち上がる。

さすがレスリング部、タフだ。

「今のはさすがの俺もきいたぜ……鹿岡っ！」

田中の周囲の空気が爆発する。むあつとした生暖かい風が俺の頬を撫でる。気持ち悪い。

田中はそのまま、教室のドアを突き破って猛ダッシュで教室を出て行ってしまった。

おい、ドアは後で直すんだろうな。

俺は痛む後頭部をさすりながら起き上がる。

「田中君のが膨張していたですう」

「今の美緒が膨張とか言うと、扇情的に聞こえるわね」

「そうだった！ もみもみが膨張っ！？」

メロンパンにかぶりついたまま、きょとんと俺に視線を向ける美緒。

「そうよ、私だって聞き逃さなかった的な感じなんだからね？ もみもみ？ 膨張って何的なことなの？ もしかして美緒、桐岡のを情熱的に……？」

「どきっ……………ですう」

なんだと！？ まさかのまさかなのか！？

「み、美緒……………お前……………その白魚のような手で何を？ ハア……………ハア……………」

「はわあっ……………亜矢子ちゃんと仁君の顔が怖いですう……………」

美緒は無垢な顔を羞恥に染めて、あきらめたようにぼつりと言葉をもらす。

「そのお……………揉みですう……………」

虫の鳴くような声。さらに接近する俺と亜矢子の顔。もはや犯罪臭すら漂っている。

「肩もみですうっ！」

「……………は？」

俺と亜矢子の声がぴつたりと重なっていた。

「桐岡君にはあ、いつも何かと助けられてばかりなのですう……………だから精一杯の恩返しのもりでえ……………凝った肩をほぐしてあげたのですう……………」

狂気がほとばしっていた俺と亜矢子の顔が美緒から徐々に離れていく。

「……まあ、なんだ」

「そんな杞憂なことだろうとは、思っていたけどね」

亜矢子は残念そうに懷にメモ帳と鉛筆をしまふ。俺は強烈な脱力感に見舞われていた。

「そういえばあ、佳乃ちゃんをほおっておいていいんですかあ？」

授業を途中で抜け出した佳乃のことを思い出す。

「授業の途中で出て行った的な感じよね。客観的に見て、なんかつまらなそうにしてた的な感じね」

「少し近寄りがたかったですう……」

「うーん……体調でも悪いのかもな」

どうやら今はツンデレ佳乃に切り替わっているようだ。

「弁当は佳乃が持つてるし、昼一緒に食べるって約束もしたし、少し探してみるかな」

「約束？……弁当だと？」

レスリング部の田中が俺の背後に立つ。汗を蒸発させたような暑苦しいオーラが、俺の周囲で渦を巻く。

「田中……いつの間に俺の背後を！それに、鹿岡兄を探しに行っ

たんじゃ……？」

「ふんっ！ バックを取ることなぞ、レスリング部にとっては赤子の手をひねるようなものだ」

「使い方が間違っているような気がするが、何か納得させられてしまっ！」

矛先の変わった戦いは、のんびりした美緒の微笑をもって始まりを告げる。

「はわわっ……田中君の筋肉が二割り増しですう……！」

「まさに超人的だわ」

「ふふ……佐々木仁、戦いの中で戦いを忘れていたようだな！」

「や、や、めて……」

ぜんまい仕掛けのように振り返る俺に、田中は二の句を継がせてはくれなかった。

第三話・「ただの宣戦布告」

佳乃が教室を去ったのは授業中。

真面目に授業を聞いていた佳乃が、思い立ったように立ち上がった。

体調が悪いから、保健室で休んでくるわ。

普段の佳乃からは想像もつかない強い口調で、数学の教師に突きつけた。それにはさすがの数学教師も、口をあんぐりとあけてうなずくしかなかった。

普段の佳乃は明るくて、面倒見が良くて、誰もが理想とする完璧な幼馴染だ。そんな彼女を知っているから、余計に驚いたのだろう。数学教師が教鞭を落とすのも当然だ。

「……って、佳乃のやつ、どこに行ったんだか」

昼食を催促する胃袋を押さえ込みながらひとりごちる。

「保健室にもいない、一階にも二階にも、学食にもいない。となる
と……」

俺は、最後の望みとばかりに屋上の扉を開けた。

「いた」

佳乃は青空の袂で、風を一身に受け止めていた。

肩まで伸びた美しい黒髪がそよ風と戯れている。風が強く吹けば顔にかからないように髪を押さえる。その一連の動作さえ美しい。

どこか気だるげに転落防止の金網に指を通し、外界を眺めている。
校舎にぶつかり、足下から吹き上げる好奇心旺盛な風が、佳乃のスカートをなびかせるから、俺はついつい彼女のスカートの内側に目がいつてしまう。

白地に黒の水玉。あの輝き方は、おそらくポリエステル素材。値段の手ごろなところを選んでいるのも佳乃らしかった。見るのは初めてだったが、佳乃らしさが出ていて可愛い。

……いや、そんな描写はいいとして。

「なあ、俺、午後の戦に備えないといけないんだけど」

「ああ、弁当？　美味しかったわよ。でも私には少し量が多かったわね」

「え？」

佳乃の視線が奥にあるベンチに向けられたので、俺も無意識のうちにもその視線を追う。

そのとき俺は。

俺の心が潰れる音を聴いた気がした。

ぐうつうつうつ……。――

「仁の胃袋はかわいい声で鳴くわね」

「胃袋違う！　潰れたのは心だ！」

金網から手を離して、俺の胃袋を馬鹿にする佳乃をまくし立てる。

「お前食べたな？ 俺の弁当、食べたな？」

「食べたわよ。私が作った弁当だもの、食べて当然だと思うけど」

「否！ 断じて否！ いいか、あの弁当は佳乃が俺のために作ってくれたものなんだぞ。それをお前が食べていいなんて理由はないんだぞ！」

怒りに肩を震わせる俺に対し、呆れたように肩をすくめ、鼻を鳴らす。

「私も佳乃なんだけど」

「いや、それは分かってるけど、なんと言つか、佳乃であって佳乃じゃないというか。佳乃Aに対して佳乃Bというか、表佳乃に対して裏佳乃というか……」

「何そのオタクっぽい表現……キモイんだけど」

一刀両断。

俺は肩を落として、屋上のコンクリートにくずおれる。

気持ち悪いと言われるよりも、キモイと言われる方が傷つくのはなぜだろう。

「お、俺の弱点を容赦なく……俺のハートがそこはかたく傷ついたぞ」

「ま、弱点ぐらいいは分かるわよ。佳乃との記憶を一方的に共有してるし。……佳乃は私のことを知らないけど、私は佳乃のことを知っている……悪平等よね」

ふと、佳乃の表情が曇る。

「……仁と会ったのって、いつくらいかしらね」

「生まれたときから、隣に住んでただろ」

佳乃のついた大きなため息が、屋上から校庭に落ちていった。

「あ、いや……佳乃が事故で心臓を移植したのが七歳の頃だから、
大体……」

腕を組んで、思い出の引き出しを開ける。

「かれこれ、十年くらいになるのかな」

事故以来、佳乃はいつでも自分の財布の中にドナーカードを忍ばせている。誰かに生かされた分、誰かを救えたら。そんな佳乃の意思表示なのかもしれない。

「長いと思わない？ 十年って」

ニヒルな笑みが佳乃の唇をゆがませた。握り締めた金網が軋みをあげる。

「ねえ、聞きたい？」

俺はうなづくことをしなかった。うなずいても、うなずかなくても佳乃はその先を言うことが分かっていたから。それは、今まで付き合ってきた年月を物語っていたし、それがたとえ幼馴染の佳乃で

あつても、ツンデレな佳乃であつても、同じことだった。

「最近ね、あの子と入れ替わることが難しくなってきたの」

「まさか。好き勝手に佳乃と入れ替わって、自由にしてるじゃないか」

「そうね、確かにそうかもしれないわね」

「藪から棒になんだっていうんだよ」

「あらかじめ言っておくけど」

金網を握り締めたまま、顔を前髪で隠す。

前髪の中に消えた瞳はどこか不安げなように見えた。

それを払拭するように、顔を上げて俺を真正面から見据える。

「こつ見えても……私、仁のこと好きだから。佳乃には負けな
いから」

都合よく吹いてきた突風は、やはり都合よく佳乃の言葉をかすめ
とつていった。

「へ？ 今何て？」

そして、俺はさも当然のごとく、彼女の言葉を聞き逃すのであつ
た。まるで俺の人生を、運命をもてあそぶ神様でも存在しているか
のように。

ただひとつ、俺の視界をさえぎるものはなかったから、佳乃の姿
だけは知ることができた。

胸に手を当て、真剣なまなざしで。

頬をこわばらせて、少し赤みが差した顔で。

堪えるように、苦しそうに彼女は俺に告げていた。

「……別に。ただの宣戦布告」

その印象的な姿で投げかけた宣戦布告を、俺は聞くことができなかったのだ。

「佳乃？」

くるりと背中を向けた佳乃に問いかけるが、佳乃は何も言うてはくれない。そのまま佳乃はベンチへと歩いていき、弁当を持ってこちらへやってくる。

「受け取りなさい」

空の弁当箱を俺に突きつける。

「自分で食べたんだから、自分で片付けろよ」

「いつ、いいから受け取りなさい！」

俺の胸に押し込めた弁当箱には、確かな重量感。首をひねりながら弁当箱を紐解くと、中身はきれいに二分されていた。

ご飯も半分、おかずも半分。

すべてが均等に分けられている。その中で、俺が好きな玉子焼きだけがきれいに半分にならずに顕在していた。

「佳乃、これって……」

「ただの食べ残しっ！……言っただでしょ、量が少し多かったって」
目をそらしながら前髪をいじる。

「悔しいけど、美味しかったわ。さすが佳乃ね」

「いや、佳乃はお前だろ」

「そうだけど、そうじゃないのよ！ 例えるなら佳乃Aと佳乃Bってところね」

「もうやったる！ それに、俺の面白いボケを盗むな。いいか？ 著作権の侵害は三年以下の懲役または、三百万円以下の罰金なんぞ。ネットに無断アップロードとかもしたらいけないんだぞ。分かるだろ？」

「……そんな話どうでもいいんだけど」

興がそがれたのか、眉をひくつかせている。

「じゃあ、話を変える。佳乃は盗作をどう思う？ 俺、過去の作品を盗作することは良くないと思うんだ。百歩譲って盗作するのなら、せめて視聴者に分からないように巧みに盗作してほしい。それが製作者ってもののなに」

悲しみの次には、怒りと憎しみがこみ上げる。
このやり場のない怒りをどこへやればいいのか。

「オタクの戯れ言はいいから、弁当食べたらず？ いい加減付き合うのも疲れたんだけど」

「だからツインテールにしてくれ！」

「何がだからよ！ 支離滅裂もいい加減にしなさいよっ！」

佳乃の容赦のない回し蹴りが繰り出される。スカートが翻ったかと思うと、俺の前髪がはらはらと落下していった。受ければデッドエンド確定の威力。

「アンタのオタっぶりには、いい加減にうんざりなのよ」

「……っ、ごめんなさい」

「分かったなら、ベンチに座りなさい」

尻餅をつく格好で回し蹴りをよけた俺に命令する。佳乃はすでにベンチに座っていた。自分の横の空席を、不満げに手のひらで叩いている。

「ほら、早く」

不意に足を組む佳乃。本人は無意識のうちにやってしまったようだ。しまったという顔を見せた刹那、つついスカートの中身に目がいつてしまった俺と目が合う。予想通り、青筋を立てながら冷ややかに微笑んだ。

「まさに氷の微笑」

「死にたいの？」

「アイスピックは止めてください」

俺は小さくなりながら、佳乃の隣に座った。

以前から分かっていたことだが、俺はツンデレ佳乃にはめっぽう弱い。

「口、開けなさい」

だから、こうして彼女の言うことに唯々諾々としたがって口を開くしかない。

「あれ？」

「……………なによ」

佳乃が一膳しかない箸で玉子焼きをつかみ、俺の口の中へ持つてこようとしている。

「あれ？」

俺は気づいてしまった。

「……………気がつかなくていいのに」

箸と玉子焼きの位置はそのまま、俺から顔を不自然にそらし続ける。頬は朱色に染まり、小さな唇は何事かをつぶやいていた。

なんだろう。胸が異様にどきどきする。動悸、息切れ、めまい。まるで漢方薬の宣伝文句のような。

「……か、佳乃？ その……これはもしかして？」

気まずい沈黙のはずなのに、どんどん体が火照っていく。佳乃の真っ赤な横顔を見ると、今の俺もこんな顔をしているんだろ
うな、と思ってしまう。

普段からつつけんどんなもう一人の佳乃。振り絞った勇気の大きさ。それを思うと、その恩に報いたいという気持ちがあふれてくる。

「お腹が減ったなあっ！」

だから俺は馬鹿みたいに一人で大きな声を出しながら、箸を持
った彼女の手をとる。

「いただきます」

体温が上がった彼女の手を助けながら、俺は口内に玉子焼きを納
めた。

「うん、おいひいよ」

咀嚼しながら青空を眺める。玉子焼きはあえて半熟気味に調理さ
れ、ほんのりと甘味が広がっていく。口の中だけではない、体中
にもその甘味は広がっていった。

「……やなやつ」

一言つぶやいたかと思うと。

「ふん！ ムカツク！ イライラする！ 最悪！」

箸をその場に投げ捨てて、大またで屋上の出口へと進んでいく。

「あ、佳乃！」

いったん振り返ったものの、佳乃は赤鬼そのもの。

「あ、あの……その……」

待てとも、行くなとも言えず、俺は立ち尽くしたまま。

アニメや漫画、映画の台詞や知識はいくらでも出てくるのに、肝心の自分自身の言葉が出てこない。

そんな自分が、何よりも齒がゆい。

屋上のドアが開け放たれる。

運がいいのか悪いのか、それは佳乃が開けたのではなかった。息を切らしたクラスメイトが、俺と佳乃の顔を見比べながら後ろ手に扉を閉める。

「と、取り込み中？」

佳乃は出て行こうとする扉を閉められて、ばつが悪そうだ。

「仁！ 頼むから、哀れな僕をかくまって！」

「今の今まで逃げてたのか？」

息を切らして飛び込んできたのは、鹿岡兄だった。義妹が義妹なせいで、クラス内には敵が多い。愛されるお兄ちゃんも辛いようだった。三時限の体育では、ゴールキーパーからフォワードまでたった一人でこなしている。もちろん俺も敵側に回らせてもらった。

「も、もう限界……」

閉めた扉に背中をもたれながら、へたり込む。荒い呼吸を繰り返して、体力の回復に励んでいる。

しかし、息つく暇もなく、どこからか世にも恐ろしい声が聞こえてきた。

「真奈美のお兄ちゃんは、いねがー！」

訂正、世にも可愛らしい声だった。

「いや、いなきやいけないのは悪い子だから」

そんな義妹に対して律儀に突っ込む鹿岡兄。

「ここかー！」

「うわっ、気づかれたか!？」

突っ込んだら負けだ。

「扉はもともとひとつしかないわよ」

突っ込んでる！でも突っ込みどころが微妙に違う！

隣の校舎を見れば、男子生徒の群れが鹿岡兄追跡に殺気立っているのが見えた。さらに階下からはレスリング部の田中の不気味な咆哮が聞こえる。

「どこだ鹿岡ああっ！見つけたら俺がたっぷりと可愛がってや

る！ 寝技だ、嫌ってぐらい寝技で可愛がつてやる！ 三角締めから腕ひしぎ十字固めに移行し、袈裟固めに持っていった後、横四方固めでとどめだ！ ふふふ……おっと、よだれが……じゅるり……やはり崩れ袈裟固めもいいな！」

「全部柔道技であつ！」

鹿岡兄が叫んだ。それがアダとなる。

「みーつけたつ お・に・い・ちゃん！」

扉を突き破らん勢いで鹿岡義妹が飛び出してくる。大事そうに弁当箱。

「もう逃げられないよ！ というか、恥ずかしがらなくていいよつ」

体をくねくねとさせて、ほんのりと頬を染める。

「二人はもうベッドの中でささやき合うような関係なんだから……」

頬を両手で覆いながらもじもじ。俺と佳乃が鹿岡兄に鋭い視線を向ける。

「ち、ちが、違う！ 真奈美！ でたらめ言うんじゃない！」

「真奈美、嘘言つてないもん！」

「確かに嘘ではないけど、その言い方はいかんともしがたい誤解を招くじゃないか！」

嘘ではないことに驚愕だ。

「火のないところに煙は立たないぞ、鹿岡兄」

「だから馬鹿と煙は高いところが好きなのね」

俺と佳乃の辛辣な物言いに、高いところ（屋上）の鹿岡兄は頭をたれる。どうやら、罪人は断罪を覚悟したようだ。しかし、鹿岡義妹は罪人の元へは向かわず、口元を震わせている。視線の先には、豊満な胸の前で腕を組む佳乃。

「お、お姉さまあつ！」

進行方向にいた俺　思わず二人の胸を比べてしまった　を跳ね飛ばし、佳乃に抱きつく。

「あ……あれ？　真奈美ちゃん……鹿岡君に、仁君……？」

どうやら抱きつかれることを予想して佳乃が人格を切り替えたようだ。……便利だな。

「相変わらず美しいです……お姉さまあ」

胸に顔をうずめながら、俺に挑発的なまなざしを向ける。むっ……これは敵意なのか。

「もう、真奈美ちゃんは甘えん坊さんなんだから」

猫をかわいがるように鹿岡義妹の頭をなでる。

「はい、真奈美は甘えん坊さんですう……ごろごろ」

俺はそんな百合な光景を見ながら、鹿岡兄と同時に大きなため息をつく。なぜか中年親父然としたふたり。

おや、あなたもですか。実は私もなんですよ。
そんな会話が成り立ちそうだった。

第四話・「一撃でしとめます！」

鹿岡兄妹を交えた昼食は、和やかに過ぎていく。

「お姉様！ はいっ、あ〜んしてください」

「真奈美ちゃん恥ずかしいよ。ほら、仁君たちも見てるし……」

体を必要以上に寄せ合い、半ばもつれ合うようにして、佳乃の口元にミートボールを持って行く鹿岡義妹。

「もう、真奈美ちゃん、強引だよ……んん、んっ……！」

鹿岡義妹は佳乃の言葉を聞きもせず、無理矢理ミートボールを口に押し込んだ。

「ミートボールに付いていたソースが、佳乃の口元を汚す。それは、べたべたとして、禁忌を犯す液体のように思えた。その一方で頬は桃色に染まり……」

「仁のその独白はどうかと思うな」

ぼそりと鹿岡兄。

「こ、声に出てたのか？」

「思いつきりね」

「いかん、重傷かも……」

頭を抱える俺の目の前で繰り広げられる、女の子二人の絡み合い。今度は、頬についてしまったソースを鹿岡義妹が舌で舐めとろうとしていた。

「こら、真奈美！　夕風さんが困ってるじゃない。それぐらいにしないと僕も怒るよ」

「むむう、レフェリーストップです。これからがお姉様との良いところなのに」

先輩である佳乃を押し倒そうとするその度胸は、もはや年下の枠に収まっていない。名残惜しそうに佳乃から離れた鹿岡義妹と目が合つと、やはり不敵な笑みを浮かべる。

むむ、胸の奥にくすぶるものがあるぞ。

「ごめんね、夕風さん、うちの馬鹿義妹が……」

「馬鹿っ！？　今、お兄ちゃん、真奈美のこと馬鹿って言った！」

瞳を一瞬にして透明な膜で覆う。

「そこまでひどくないですよ、真奈美ちゃんは」

「お姉様、そこは否定するところです！」

「……ぷぷっ……」

俺がこぼした笑いに、鹿岡義妹の眼光が鋭くなる。メデューサも

かくやという眼光に、俺は石化する。

浮かべた涙はどこへいったんだ、鹿岡義妹。

「もう、お兄ちゃんたら。嫉妬しなくても真奈美はお兄ちゃんのものだよっ！」

「真奈美、それは間違っているよ。真奈美は誰のものでもない、真奈美は真奈美自身のものなんだ」

……今のは何気ないが、名台詞ではないだろうか。

そんな兄の言葉に耳を貸さず、用意してきた弁当箱から唐揚げを取り上げて、鹿岡兄の口元へ。

「はい、お兄ちゃん あ〜ん、して」

「う……僕にだって、プライドが……」

俺たち二人の手前、何とか一連の萌え行為から逃れようとする鹿岡兄。

「佳乃、良い天気だな」

「そ、そうだね、仁君」

「二人で不自然に目を反らさないで！」

「ほらほら、お兄ちゃん、真奈美の愛を受け取って」

何だろっ、悔しくもないのに涙が出そうだ。

見つめた青空の下では、トビが気持ちよさそうに旋回していた。

「仁君」

「……なんだ、佳乃。今俺はどうしようもなく黄昏れたいんだ」

腹の奥にわだかまる気持ちを押し込んで、何とかそれだけを伝える。

「はい、あゝん」

佳乃が玉子焼きを俺に差し出す。口内に放り込むと、俺に適用された最高の甘さがほつぺたをとろけさせる。絶妙な半熟具合。冷めてもなお、美味という情報が俺の中枢神経を独占する。学食や購買の食事なんて足下にも及ばない。俺にとってデフォルトがこの味だ。俺が美味しいと感じる一定値はもはや飛び抜けて高くなりつつある。嬉しいような、悲しいような。でも、学校生活が続く限りこの卵焼きは食べられるわけで。いやいや、卒業してから、就職してから、老後だって……じゅるじゅるり。おっと、心がよだれでべとべとだぜ。

俺は拳を握りしめ、感涙にむせぶ。

「佳乃、俺は史上最高の果報者だぞ！」

「仁君、大げさだよー」

恥ずかしそうに頬を染める佳乃。両手を頬に当てていやいやと顔を振る。俺はそんな佳乃の愛らしい姿を眺めながら、口を大きく開けて佳乃の玉子焼きを口に入れ続ける。

「うん、やっぱり佳乃の玉子焼きは世界一だ」

舌の上でとろけて、芳醇な後味が口内に浸透していく。どこか心までも暖かくしてくれるようだった。

「仁君……嬉しいな」

佳乃の輝くような笑顔。

「すごく不思議……」

「ん？ どうした？」

「仁君が美味しいって言うてくれる度に、嬉しいって気持ちだが、胸の奥からどんどん溢れてくるの。きつと……史上最高の果報者なのは、仁君に美味しいと言ってもらえる私なんだよ。だから、仁君は史上二番目の果報者」

極上の笑顔。俺は沸騰した顔をごまかすように卵焼きを口内に放り込む。

「もぐもぐ……でも、まあ、二番に甘んじてやらないわけでもないぞ」

俺は佳乃の頭を優しく撫でてやる。さらさらと、絹のようなめらかさをもった髪の毛が、俺の手の下でくしゃっとなる。

「仁君、くすぐりたい……」

佳乃は嫌がる素振りを見せずに俺にされるがまま。

「でも、気持ちいいよ……もつとしてほしい、かも」

……幸せの反動なのだろうか。佳乃が俺に尽くしてくれる心遣い
が分かるから、逆に俺は心苦しくなるときがある。佳乃の純粋な奉
仕に、俺は応えるすべをもっているのだろうか、と。佳乃がしてく
れるものを一方的に受け取り続けている。申し訳なさと、情けなさ
の板挟みにあいながら、俺は佳乃が喜んでくれるならと、せめても
の感謝をもって頭を撫で続けてやる。

「仁君に撫でられるのって、大好き」

今度は佳乃の髪の毛をすくようにする。佳乃は陶然としたまま、
目をつぶる。キスをねだる恋人のように思えてしまうのは、きっと
俺のうぬぼれだ。

佳乃の髪の毛の感触を味わい続けながら、俺は愛しさを感じてい
く。世界でただ一人の幼馴染みに。

「……お兄ちゃん。どうぞ」

「何？ 真奈美、どうぞ」

「真奈美は我慢なりません。撃ちます。どうぞ」

「真奈美、そのM82A1スナイパーライフルはどこから持ってきたの？ どうぞ」

「もはや、お姉様と真奈美の間に無用な説明はいらないのです。ど
うぞ」

「真奈美、50口径弾の人体への射撃は威力的に非人道的だよ。ど

うぞ」

「落ち着いて狙えば大丈夫。真奈美は石。真奈美は石なんです……！」

「って、鹿岡兄妹、何をやってるんだ？」

ランチマットの上で腹ばいになっている鹿岡義妹に話しかける。

「お兄ちゃん！ 目標に気づかれましたっ！」

スコープをのぞいたまま、鹿岡義妹が叫ぶ。話しかけた先の鹿岡兄は、黙々と弁当を口に運んでいた。何とも、対極な光景。

それにしても、そんな大がかりな狙撃銃を、女の子が撃てるのだろうか。蛇足だが、二千メートル先の装甲車を撃破したという伝説をもつ、アンチマテリアルライフル（対物銃）だぞ。

「一撃でしとめます！」

それだけ俺が憎いつてことなのかっ！？

鹿岡義妹が引き金を絞るのが視認できた。
轟く銃声。

「真奈美ちゃん、駄目！」

佳乃が俺の前に飛び出す。

「お姉様！」

「佳乃！」

放たれた凶弾。

残酷な一閃は、佳乃の胸に到達する。

ゆっくりと、スローモーションのように佳乃の体が傾いていった。俺はそれを腕の中に受けとめて、佳乃のはかない笑顔を瞳にうつす。

「真奈美は、真奈美は……取り返しのつかないことをしてしまったのですっ……！　愛するお姉様を……っ！」

鹿岡義妹の絶望が屋上に漂う。

「仁君、泣かないで」

「泣いてなんかない、泣いてなんかないさ！」

下手な笑顔をつくらって佳乃に届ける。

「じゃ、これは何……？」

俺はペイント弾で真っ赤になった佳乃の制服を見て、齒ぎしりする。

助からない（服が）。そう分かってしまったから。

残りわずかな命の灯火を輝かせるように、佳乃が俺の頬に手を添える。

「これは……心の汗さ……！」

俺の涙が、佳乃の制服に染み込んでいく。やがて佳乃はゆっくりと瞳を閉じ

「真奈美、今日の弁当は少し味が濃すぎたんじゃないかな。梅おにぎりも妙に塩っ辛いし」

次元の違う会話が聞こえてきた。

「だつてえ、朝、お兄ちゃんが急がせるんだもんっ！」

「朝は真奈美が勝手にしたことじゃないか！……あ、思い出した……教室に戻るのが憂鬱だよ」

「そんな、お兄ちゃんったらあ、真奈美と離れたくないだなんてっ」

「そんなこと言ってないよ！憂鬱なのはレスリング部の田中のとで！」

「いやん えっち！お兄ちゃんたら、つつこむふりして真奈美の胸を」

「触っていないから！それにそんな感触があったことすら気がつかなかったし！」

「な……っ！お兄ちゃん！」

何だろう、この沸々とわき上がってくる感情は。

「仁君、ペイント弾で汚れた制服どうしよう？真っ赤に染まつちやって、きつと助からないよ」

佳乃の声も、どこか衛星中継のように遅れて聞こえてくる。

「真奈美はまな板じゃない！」

「うわっ！ 危ないだろ！ ライフルといい、釘バットといい、一体どこから……！」

乱闘騒ぎを起こす鹿岡兄妹。釘バットの犠牲になった弁当箱から、梅干しの種が弧を描く。それは俺の頭に飛来した。梅干しの種が俺の頭にぶつかって落ちる。

「あ、仁君がキレた」

「誰かつっこめよおおおおおっ！」

第五話・「とくとく……とくとく……」

昼休みの終了を告げるチャイムが遠ざかっていく。

晴天の甲子園に響き渡る、試合終了のサイレンのように。入道雲の威容さや、上空に尾を引く飛行機雲が、俺にそんな風景を想像させた。

鹿岡兄妹……特に鹿岡義妹は、ペイント弾で汚れてしまった佳乃の制服を、濡れたハンカチで丹念に拭き取りながら、やはり挑戦的な眼光で俺を見つめていた。

「サボ……るんだよな」

「……うん」

佳乃が俺の小指をわずかな握力で握っている。鹿岡兄妹の背中を追いながら教室に向かおうとした矢先、俺の小指を柔らかな感触が包み込んだ。それが、佳乃の意志。

「初めてなんじゃないか？ 佳乃が授業をサボるのは」

佳乃の握力は、強すぎず弱すぎず。振り解こうと思えば容易にふりほどける、微妙な握力。それは、サボタージュが最後の最後で俺の意志にゆだねられているということを意味する。

「見て。廊下に誰もいなくなっちゃった」

「当たり前だろ？ みんな授業を受けているんだから」

佳乃が俺の小指を引きながら、屋上から廊下を眺めている。

屋上をぐるりと一周したところで、佳乃は金網に寄りかかった。

「気持ちいい風だね」

風に乗って、グラウンドからホイッスルの音が聞こえてくる。よく見れば鹿岡義妹のクラスだった。午後一で体育とは難儀なものだ。

「この風の匂いや、涼しさ、一度味わった気がするのとはなんですか……？」

ひととき高らかなホイッスル。クラスを半分に分けての男女混合サッカーのキックオフ。

中央でボールを受け取った鹿岡義妹が、素早くディフェンダーにボールを返し、自らは敵陣に走り込んでいった。

「仁君のために作ってきたお弁当……仁君いつの間にか食べていたよね。でも私……何も食べていないはずなのにお腹一杯なんだ」

「いつもの悪い癖だろ。佳乃はいつもぼーっとしてるから。居眠りしながら食べてると、時間がたつのも早いし、味だつてしない。当然記憶にも残らない。でも、満腹感だけは残る。ほら、佳乃の三分クッキング完成だ」

「むう……仁君、私のこと馬鹿にしてる」

俺の小指が窮屈になる。むくれた佳乃が握力を強めたのだ。

「私は若年生健忘症じゃないもん」

金網に切り取られたグラウンド。鹿岡義妹はどうやらフォワード

のようだった。中央から左翼に開いて、ボールを受け取るスペースを作る。素人とはいえ、オフ・ザ・ボールの動きができているから、いつでもパスを受け取れる状況を作り出している。したがって、ボールをもらう確率も高くなる。

「真奈美ちゃん、生き生きしてるね」

俺の視線をなぞる佳乃。その先には、オフサイドラインぎりぎりでボールを受けた鹿岡義妹がいる。ちょうど屈強な男子生徒に積極的にドリブルを仕掛けるところだった。

対するは、サッカー部期待のホープ木村^{きむら}。

本来はフォワードのポジションだが、お遊びでディフェンダーを買って出ているようだ。

お兄ちゃんフェイント！

ボールを一度またいでフェイントをかける。素人目に見てもサッカー部相手には引つかからないであろう、明らかに幼稚なフェイントだった。

……だが、なぜか彼は引つかかる。

そして、いとも簡単に体重をかけた方とは逆の方向にボールを通され、鹿岡義妹は体重をかけた方向を駆け抜けた。ボールは右を、鹿岡義妹は左を。それぞれ木村を中間点にして抜き去る。

抜き去った鹿岡義妹は、すぐさまボールと合流し、ゴールに突進していく。

だが、対するディフェンダーはさらに三人。サッカー部ですら、抜き去るには苦難の道程。

みつきー！

誰もが予期していなかった第三者が、鹿岡義妹のドリブルに介入してきたのだ。

敵か。味方か。

真実は、鹿岡義妹の表情を見れば明らか。言葉よりも先にボールをみつきーに預け、自らはさらに加速していく。

美樹^{みき}！ みつきー言うな！ …… っと、真奈美！

ダイレクトで鹿岡義妹にボールを返却する。一瞬のうちにワンツ―パスの完成。

俺も佳乃も、そんな女の子二人の妙技に釘付けだった。

みつきーはみつきーだよ！ これは決定事項なのっ！

言葉のやりとりほど、鹿岡義妹のプレーは生易しくはない。ゴールキーパーと一対一になった刹那、飛び出してきたゴールキーパーをあざ笑うかのように背中を向ける。

真奈美必殺っ！

右足で止めたボール。体を回転させつつ、すぐさま左足の裏でボールを転がす。ゴールキーパーからボールを隠すように鹿岡義妹は回転し、何もなかったかのようにドリブル再開。

「あ、あれは！」

スピードを殺さず、なおかつゴールキーパーを幻惑する回転演舞。

「ロシアンルーレットだね！」

「マルセイユルーレットです！」

思わず声を荒げた俺と時を同じくして、鹿岡義妹を追いかけるゴールキーパー。だが、時すでに遅し。鹿岡義妹は、軽く蹴り込んで先制点。紫電一閃とはこのことか。

みつきー見た？ 真奈美のお兄ちゃんルーレット！

はいはい、相変わらずお兄ちゃんを冠につけると切れ味抜群ね。

お兄ちゃん是世界一だから、そのお兄ちゃんを好きな真奈美も世界一なのっ！

よく分からないけど……ナイスシュート！

みつきーもね！

だから美樹だつてば！

アシストしたみつきーと鹿岡義妹がハイタッチしている。

「真奈美ちゃん！ かつこいいよー！」

「馬鹿！」

スタジアムで応援していると勘違いしたのか、佳乃が大声で声援をおくってしまう。両手を大きく振る最悪のおまけ付き。俺たちはサボっているのだ。見つければ、ただでは済まされない。

「……見つかったか？」

俺は佳乃の頭を抱え込んで、地面にうつぶせになって隠れる。グラウンドの体育教師まで聞こえないと分かっている、息を殺し、身を潜める。

数秒後、試合再開のホイッスルが鳴ったので、俺は安心して息を吐く。

「まったく、浅はかすぎるぞ、佳乃」

咄嗟にコンクリートにうつぶせになってしまったが、俺は佳乃をかばうようにして地面に伏せたから、佳乃に怪我はないはずだ。

「……ごめんなさい、仁君」

佳乃は俺の腕の中で縮こまっている。

「よし、反省しているようだから許す」

「うん……」

時間をかけて、佳乃の腕が俺の背中に回る。

「私が忘れないうちに、仁君を覚えておくね。仁君の暖かさとか、たくましさとか、いっぱい……」

佳乃の声が、押しつけられる胸の谷間から聞こえてくるようだ。俺の視線は行き場を失い、遠くに広がる閑静な住宅街に漂う。

「どきどきするよ。信じられないくらいどきどきしてる。仁君もど

きどきする？ 私に抱きしめられてきどきしてる？ 心臓がとくとくしてる？」

高校生とは思えないくらい幼稚な会話。

「ああ……きどき、する」

俺の返答を確認するように、佳乃が俺の心臓に耳を押し当てる。

「ほんとだ。……とくとく……とくとく……この音を聞くと安心する。仁君の音楽だね。仁君の、人生の音色……」

目を閉じて、俺の心音に没頭する佳乃。長いまつげの一本一本が美しい。

「仁君の生に一番近い場所に、私はいるんだね」

自分の心臓が、本当は自分のものではない。見知らぬ誰かの犠牲の下に生かされている。十年という歲月、佳乃はその感情とともに過ごしてきた。それゆえ、佳乃は人一倍、生に執着するきらいがある。

罪悪感と、安堵感。

生きていてごめんなさい。

生きているができてよかった。

昔とは違って明るさを取り戻した佳乃であっても、その思念は佳乃の心底に根付いている。

「とくとく……とくとく……」

言葉を覚えたばかりの赤ん坊のように佳乃が繰り返す。俺の鼓動

を丁寧なトレースしていく。

「仁君」

午後の風にそよいでいく二人の髪の毛。体は急速に火照り、覚醒した耳は、音を際限なく吸い込んでいく。俺は、佳乃の上唇と下唇が離れる音でさえも、聞いたような気がした。

「……キス」

佳乃がとんでもないことを口走る。

「仁君のキスが欲しいよ……」

切なそうに俺を見上げる。媚びるような目。

「私が生きていてもいいって……仁君を動機付けにしたいから」

佳乃が幼馴染みであること。それは当たり前のように、実はとても重要で。俺が佳乃の幼馴染みであることすら、佳乃は生きる理由にしている。

「佳乃……俺も」

俺にかいがいしく、そして従順で、世話を焼いてくれる。それは佳乃元来の優しさや、好意だけではなくて。

俺が佳乃に依存しているのと同じぐらい、佳乃は俺に依存しているから。

俺の心が振り子のように振れ続ける中、キスをねだる佳乃の顔が、突然切迫したものに変わる。

「胸が……痛い」

「佳乃？」

制服の上から苦しそうに左胸を押さえる。

「おかしいよ……私の胸のときどき、変だよ……」

佳乃の左手が心臓を押さえ、右手は俺の制服を握りしめる。

「このときどき、違うよ……幸せなときどきのはずなのに、なんでこんなに苦しいの……？」

困惑し、瞳が揺れる。

「私じゃないみたいに、心臓が走り回る感覚……私は私なのに……」

俺は佳乃を力強く抱きしめた。佳乃が苦しんでも構わない。力を、思いに変えたかったから。言葉よりも早く、強く佳乃に伝えたかったから。

「仁君、助けて……？ 私、仁君のこと好き、ずっとずっと好き。今までも、これからだよ」

自分自身に問いかけ、確かめるように、佳乃は復唱する。

「仁君が好きなの。なのに、どうして？ 誰かを片思いするかのよ

うに、苦しくなるんだろう……切なくなるんだろう……？」

人は、自分の体が自分の思い通りに動くことに慣れすぎている。当たり前だと思いつぎている。だから、いざ身体が自分のいうことを聞かなくなるとひどく狼狽する。どうということはない。それは当たり前のこと。

「聞いて？ 私は仁君が好き。好きなの。忘れないで」

佳乃は自分がもう一人の自分に入れ替わることを知らない。それが、佳乃をより不安にさせる。

目が覚めると、そこは自分の知らない場所。まるで映画の最中に居眠りをしたかのように、起承転結が判然としない。だから、繰り返し好きと言い、記憶にとどめようとする。この先いつ、もう一人の佳乃と入れ替わってもいいように。

「なのに、こんなに胸が痛い……。こんな私のときどきじゃないよ！」

それきり、佳乃は俺の胸の中で沈黙する。すすり泣くわけでもなく、弱音を漏らすでもなく、ただ静寂を守った。

薄れた時間の感覚を呼び覚ますように、ホイッスルがグラウンドに響き渡る。それは試合終了の合図。

「佳乃、落ち着いたのか？」

授業もそろそろ終わる。休み時間になれば、屋上に生徒が来るだろう。授業をサボって男女触れ合っていたことが知れば大問題だ。

「佳乃？」

「……………ん……………」

手探りで俺の唇を探し当て、震える口唇を俺のそれにあてがう。
前歯がぶつかつた少し痛い交接。

……………それは明らかにキスだった。

響くチャイムの音。

授業の終わりと、キスの終わりを同時に告げるリズム。

佳乃はそそくさと俺の胸の中から抜け出して背中を向ける。恥ずかしがっているのか、それともまだ胸が痛むのか、佳乃はこちらを振り向こうとはしない。俺は佳乃の背中を見ながら、制服についた汚れを払い、廊下を走り回る生徒の喧噪を耳にする。

「まだ、胸のときどきが収まらない……………」

佳乃は腰に手を当てて、俺を振り向く。

「危うく、佳乃に先を越されるところだったわ」

胸、心臓の位置を押さえる佳乃は強気に笑った。尋常ではない汗の量と、すり切れるような喘鳴。加えて、小刻みに震える足は、死闘を繰り広げた兵士のようなようだ。

「負けられないのよ。私も、あの子も」

俺は、宣戦布告と言ったもう一人の佳乃を思い出す。

「生きて、仁と添い遂げたい。それだけが、私とあの子の共通の願いであり、譲れない想い」

目の前にいる一人の幼馴染みが、左手で胸を押さえて存在を主張する。

「それこそが、ずっと変わらない二人の気持ちよ」

一人の幼馴染みに、奇跡的に宿った二つの魂。
共有する身体、そして佳乃の中心で震える心臓。
その臓器が冠する文字の意味を、今更に思い知る。

心。

「……ずっと、今までのような関係だったらよかったのに」

心の琴線を爪弾く声。

俺は、それが二人の意志として感じられて仕方がなかった。

「一つだけ言わせてくれ！」

屋上から去ろうとする佳乃の背中を呼び止める。

まっすぐに伸びた背中。小さな頃からずっと一緒だった佳乃の背中。俺の後ろについて回るだけだった佳乃の背中。その直立した背中が、ことのほか大きく見える。

……佳乃は、いつの間にか大人になっていたのだ。心も、身体も。俺が気づかないだけで、時は二人を容赦なく成長させていた。

「俺は、佳乃が好きだ」

なのに俺は、心だけは子供だった。何も分かっていない。ただの萌え好きなオタク。現実を受け止める懐の深さもない、浅はかな人

間。

「知ってるわよ、そんなこと」

佳乃は、夢く微笑んだ。

第六話・「私が、佳乃か」

校舎の屋上での会話の後、俺は魂を吸い出されてしまったような足取りで家路についた。いつも隣を半歩遅れて歩く佳乃は伴っていない。

何度も確認しているのにもかかわらず、俺は斜め後ろを確認し、佳乃がいらないことを知ってため息をつく。後ろから足音が聞こえてくると、ビーチフラッグの選手もびくりするような速度で背後を振り向き、また嘆息する。そして、家に到着するやいなや、鞆を放り投げて、ベッドにうつぶせに倒れこむ。

シーツの匂いを思いっきり肺に吸い込むと、とたんに眠気が襲ってきた。振り返りすぎて痛む首と、鋭敏化しすぎた聴覚の疲労は、自分が思っていた以上のようなようだ。

「佳乃……」

俺は顔を枕の中に隠して、情けなくつぶやいた。デパートで迷子になって、母親を呼ぶ子供そのもの。

「幼馴染み…… ツンデレ…… 佳乃……」

名前を呼んで安心する。その名前を聞いただけで、なぜか暖かくなれる。南無阿弥陀仏、と唱えれば極楽浄土にいけるように、俺は佳乃の名前を唱えるだけで、俺はどこか救われていたのかもしれない。

「情けない声出さないでよ。気持ち悪い」

「……佳乃？」

「そうよ、佳乃よ。仁が大好きで大好きで仕方がない佳乃様よ」

腕を組んで、ベッドにうずくまる俺を見下ろしてくる。

「……どっちの意味にも取れるな、今の台詞」

俺が佳乃を好きで仕方がないのか。

佳乃が俺を好きで仕方がないのか。

「ま、両方でしょうね」

臆面もなく言つてのける佳乃。

「そうか……って、佳乃！ お前、人が感傷に浸ってるのに勝手に入ってくるなよ！」

屋上でのやり取りがあつた直後だから、いつもよりオーバーなアクションでベッドの上に立つ。腕を組む佳乃に指差し、つばを飛ばして声を荒げる。佳乃は、俺のつばにものすごく嫌な顔をし、そのままこぶしに血管を浮かび上がらせると、問答無用で鉄拳制裁が執行される。ベッドに顔面からめり込むが、スプリングのせいでもたもとの位置に飛び上がる。

「馬鹿！ 痛いだろうが！」

「あ、今、馬鹿っていったわね！ 関西人にとって馬鹿ってのは結構傷つくのに！ せめてアホにしなさいよっ！」

再び下る鉄拳制裁。

だが、俺とて早々いつまでも甘んじて受けるわけではない。うまく体をひねって佳乃の鉄槌を回避する。佳乃はそれを予期していなかったようで、バランスを崩して前のめりに倒れこんでしまう。

「……黙ってぶたれていればいいのに」

佳乃によってベッドに押し倒される態勢となった俺は、必要以上に近づけられた佳乃の瞳に釘付けになる。

佳乃の髪の毛が、重力にしたがって俺のほうに流れ落ちてくる。それはまるで、俺と佳乃だけの空間を演出する緞帳のようで、周囲の景色を遮断していく。

「だ、黙ってぶたれるなんて……俺は、マ、マズじゃない」

あまりの至近距離に顔面が熱くなるのを感じて下方に視線をそらせば、そこには俺と佳乃の密接した上半身と下半身があった。

年齢に相応しい佳乃の小柄な体。年齢に相応しくない佳乃のたわわな巨峰。それは髪の毛同様に重力に引かれ、凶悪なやわらかさを誇っていた。

俺は視線のやり場に困りに困って、結局は佳乃の瞳に落ち着くのだった。

「なし崩しみたいになっただけ……私、こうなればいいって思ってたのよ」

ベッドのスプリングが二人の体重に悲鳴を上げる。そんな音でさえも卑猥に聞こえてしまう俺の煩惱は、きつと百八個では足りないだろう。

けれども、俺はそんな本能的な欲望の渦中にありながらも、かすかに残る理性が佳乃の瞳の中にある焦燥を看破する。

「……な、なんで……そんなに焦ってるんだよ」

佳乃は、急に鼻白むような顔つきになって俺から距離をとる。距離をとるといっても、ほんの二、三センチ程度だ。

「焦ってなんかいないわよ」

「いや、焦ってる」

佳乃の眉間にしわが寄る。形のいい眉はそれに引っ張られるようにVの字に変形した。

「じゃあ、逆に仁は何でそんなに落ち着いていられるのよ」

「落ち着いてなんかいない。胸だっでときどきしてるし、今にも狼になりそうなくらい」

「誰も止めやしないから、狼になれば？」

佳乃の瞳が揺れる。

「止めやしないって、佳乃、お前……」

「据え膳食わねば男の恥、でしょ？」

主導権が自分に移ったことに満足したのか、怒りはどこかへ消えて、今度は挑発的に微笑む。

これほどまでに蠱惑的な佳乃を誰が想像できるだろうか。

本来の佳乃からはありえないほどの妖艶な潤いをたたえた唇と、

その潤いを作り出す朱色の舌。長いまっげは今にも俺の目に付き刺さりそうなほどに反り返っている。それでもなくともつぶらな瞳なのに、それはよりいっそう佳乃のまなざしを際立たせる。

「私がいって言ってるんだから、仁はそれに応えるべきじゃない？ 屋上で言ってくれたじゃない。私のことが好きだって」

あれは嘘ではない。

嘘偽りなんかではない、俺の本当の気持ちだった。

……でも、それは。

「仁？」

俺は佳乃の肩を押しやって、自分の燃え上がるうとする欲望の炎に蓋をした。誘惑という酸素を得ることのできなくなった炎は、徐々に力を減退させていく。

「このままの関係でいたかった……なんて言うと、ありふれた物語みたいだけど」

佳乃の肩をつかんだ手に力を込める。

「俺は佳乃が佳乃のじゃないときでも、佳乃が佳乃であるときも、佳乃は佳乃だって、そう思ってた」

佳乃は困惑しているようだった。俺の瞳を覗き込み、必死に真意を探ろうとしている。

「けど、佳乃は佳乃じゃない。二人の佳乃なんだ。……どこかで分かってた。おかしいだろ？ 俺さ……佳乃が佳乃でなくなっても、

嬉しかったんだ」

格好悪い。

佳乃の肩をつかんだ手が震えている。慣れないことをしているのもあったが、一番に言えるのは、それが借り物の言葉ではないからだ。

アニメや、映画、ドラマの名言ではない、自分だけの言葉。

心を全力で搾りあげて、やっとのことで零れ落ちる一滴。

俺の中で溜め込んできた雫は、やがて大きな水溜りとなり、湖となり

「幼馴染の佳乃が、ツンデレの佳乃に変わっても嬉しかったし、その逆でも嬉しかったんだ。二人の佳乃が笑ってくれて、その笑顔の違いに心が跳ね上がってさ……。幼馴染の佳乃は、タンポポのように、優しくて柔らかい笑顔で……。眉毛が垂れていって、目じりがうつとりするほど可愛いんだ。ツンデレの佳乃は……。なかなか笑ってくれないけど、いざ笑ってくれたときは、俺の心臓が爆発しそうなくらいに喜ぶんだ。華やかで、顔面の筋肉を全部使って笑ってくれてさ、太陽のようで……」

そして、溢れ出す。

「ああ、佳乃はこんな笑い方もできるんだなって、嬉しかったんだ」

佳乃は苦しそうな表情に変わる。先ほどの妖艶さは一過して、今はただ心苦しそうに頬を歪めるだけ。

「だけど、変わらないものなんてないんだよな。いつまでも、その二つの笑顔の真ん中で生きていくことなんて、できないんだよな」

「仁……」

その言葉が零れ落ちると、佳乃は顔を伏せた。

「……できない。仁の言うとおり、いつまでも私たちは一緒にいられないの。佳乃も、仁も、私も」

ベッドのシーツが、佳乃のこぶしの中に巻き込まれていく。

「二人でひとつの体を共有することはできないの。それでは、人は生きていけない。体に存在できる心はひとつだけ。日常生活に齟齬がきたすのは目に見えてる。……いずれはどちらも駄目になるわ」

佳乃の肩が震え、俺の手も震える。

二人の心が震え、言葉も震える。

「もう、二人じゃいられないのよ!」

佳乃がかんしゃくを起こしたように叫んだ。言い換えるとするならば、慟哭。

「だから……ね」

顔をあげた佳乃に涙はなく、そこには作りなれない笑顔が仮面のように張り付いているだけ。

「仁、デートしなさい。これは命令」

肩に置かれた俺の手を乱雑に払い、ベッドから降りて立ち上がる。その粗暴さだけが、ツンデレな佳乃であることを示していた。

「ちょうど明日、明後日は、土日で休みだし」

「二日連続で？」

俺はシートにつけられたしわを見下ろす。アイロンをかけなければ元に戻らないようなしわ。佳乃の感情の握力が、そこに刻み込まれているような気がした。

「違うわ。一日だけよ」

屋上で見せた儂げな笑顔。

「明日は佳乃と、明後日は私と。二人で一日ずつ」

佳乃のしようとしていることが理解できた気がした。

「それで決めて欲しいの」

その先を言っで欲しくないという俺の思いは、もろくも打ち砕かれてしまう。

「私か、佳乃か」

自らの胸に手のひらをあてがう佳乃。自分の心の中で聞いているかもしれない本来の佳乃に言い聞かせているかのようにだった。

「まったく同じデートコースで、まったく同じものを食べて、まったく同じ服で……」

それは、ツンデレ佳乃なりのフェア精神なのだろう。

「仁……お願い」

意思とは裏腹に、動こうとしない首の筋肉を無理矢理に動かして、首肯する。

「ありがとう。好きよ、仁」

佳乃は慣れないウインクに手間取って、両目をつぶってしまう。
そんな自分がかっこ悪く思ったのか、素早くドアの向こうに姿を消す。

「ったく……スタートダッシュかよ……」

ベッドには佳乃の残り香。

一本のきらめくような彼女の髪の毛が、シーツに流線を描いていた。

第七話・「絶好のデート日和」

カーテンの隙間から、休日の朝日が注ぐ。

映写機から放たれる真っ白な光に似たそれは、細かいほこりを映し出す。舞い降りることもできずにゆらゆらと漂うさまを見ていると、室内の空気がよどんでいることが分かる。

負けられないのよ。私も、あの子も。生きて、仁と添い遂げたい。それだけが、私とあの子の共通の願いであり、譲れない想い。

頭の中で自動再生する。ビデオテープのように擦り切れることなく、鮮明に記憶された映像。

それこそが、ずっと変わらない二人の気持ちよ。

俺は停滞した空気を開放することもせずに、残り香のあるベッドから体を起こす。

最後の二日間。

ふとそんな言葉が頭をよぎり、俺は頭を振る。

デートしなさい。これは命令よ。

「絶好のデート日和だな……」

思い切って開けたカーテンの外は、突き抜けるような蒼穹だった。

「本当に、絶好すぎるくらいに」

「仁君が誘ってくれるなんて、珍しいね」

俺に半歩遅れながら隣を歩く佳乃。

デニムのショートパンツに、すかし編みの黒いチュニツク。佳乃にしては少々大胆にも取れる格好に、俺は待ち合わせ場所であっけに取られた。

仁君！

恥ずかしげもなく遠くから大手を振る佳乃が、何人の男の視線をひきつけたことか。公衆の面前で大声を上げたこともそうだが、男衆の目を長くひきつけることができるのは、それだけが理由ではない。

ショートパンツからのぞく太ももの白さ、そして張り具合。肉付きがいいということではなく、すっきりと締まっていて、俺は改めて自分の幼馴染に感嘆の念を覚える。

ご主人様の投げたボールを取ってくる忠犬のように、喜び勇んで小走りになるものだから、見ているこちらが恥ずかしくなるくらいに、チュニツクを押し上げる二つの双丘が上下する。

決してやましい光景があるわけでもないのに、俺は顔が熱くなった。佳乃に手を振ることさえためらわれてしまうのは、俺が明らかに佳乃に釣り合っていないからだ。

俺が佳乃に対してアクションを起こしたのは、佳乃の履く黒いパンプスの音が、耳元で聞こえる距離になってからだった。

ごめんね、準備に時間がかかって遅れちゃった。

苦しそくに肺を押さえて苦笑いする。

急に仁君が誘うんだもん。早めに言ってくれないと困るよ……コーディネートとか、メイクとか……その……心の準備とか、あるんだから。

太陽から注がれる光で、佳乃の胸で一片の葉をあしらったネックレスが光る。

言われて見ると、確かに念入りに準備したことがうかがえる。普段は化粧すらろくにしていない佳乃が、今日はほんのりと肌を染め、薄紅色のルージュが、湖面に反射する光のように存在を主張していた。

仁君？

佳乃がつけたフレグランスが、俺の鼻先をくすぐる。まるで、ダーズリンティーのような匂いだ……と、飲んだこともないのに見栄を張ってたとえに使うのも、どこか虚しい。

「仁君が誘ってくれるなんて、珍しいね」

佳乃を見つめることすら恥ずかしくなった俺は、佳乃の姿に感想すら言うことができない。ただ、毎日の登校のようにさっさと目的地へ向かうだけ。

佳乃はそんな俺に少しだけ寂しそうな笑顔を向ける。

「仁君は、いつもどおりだね。なんか、私だけ舞い上がってるみたい……」

「そんなことないぞ。俺だって緊張してる」

ロボットダンスのように、俺の首が回転する。そんな俺に安心したのか、佳乃がジャケットの袖をくいくいと引く。

「あのね……実は私も少し恥ずかしいんだ」

前髪の間隙からのぞく上目遣いが、なんとも愛らしい。

「こんなに肌を出して歩いたことないから……。だからね、いつもこんな格好してるわけじゃないんだよ。ちょっとだけ、勇気をね……ふり絞ってみたの」

「そ、そうか」

誰でもいいから、今の佳乃の言葉に対する理想の返答を教えたい欲しかった。

俺の経験上　主に二次元　を駆使しても正解は得られない。
そうか……って俺は馬鹿だ。気が利いた褒め言葉の一つも言えない自分の情けなさに改めて嫌悪感。

「うん……そうなの」

ジャケットの袖から手を離れた佳乃が、恥ずかしそうにうつむいてしまう。

正面から歩いてくる男性群が、すれ違いざまに佳乃をちらりと見て、背中を向けたあととも振り返って二度見しているのだ。

「こんな細身で小柄な体に、凶悪な兵器を二つも装備していれば、それは当然か……」

「仁君、私、兵器じゃないよ」

「いやいや。ある意味で兵器なんだよ、うん」

……と言つか、声に出ていたのか。てっきり心の中だけかと思っていた。

「仁君？」

「あ、こっちのことこっちのこと」

俺は頭をかいてとぼけて見せる。

「で、ときに佳乃」

「何？」

「今日の予定だけ」

佳乃の耳がウサギのようにぴくりと跳ね上がる。

「その、思いついたのが昨日でさ。俺のほうもなかなか準備できなかったんだけど」

ツンデレ佳乃の叫びがよみがえり、胸にとげが刺さる。

「私は気にしないよ。だって、仁君とお出かけできるだけで嬉しかったもん」

幼馴染、恐るべし。

俺の長年の熱心な教育の賜物か、ここぞというときに凶悪なワ

ドを投げかけてくる。言葉尻の『もん』や、名詞の頭に『お』をつける。ほかに、泥棒さん、と、あえてさん付けで呼ぶのもひとつの手だ。など、どこことなく二次元的な可愛らしさを演出するところが身についている。

……というか、解説していて虚しくなってくる。今日の俺は虚しくなっただけだ。

俺は大きく咳払いをする。仕切り直した。

「まず映画を見る。それから食事する。それから……サプライズだ」

「仁君、本当に考えてなかったんだね。それってデートの王道だよ」
言い切ったところで、佳乃ははっとして口をふさぐ。

「まさか仁君、これってデート……なの？」

のどにもちを詰まらせたなら、きっとこんな風に顔を赤くするんだろうな……そんな不吉なたえが俺の頭の中に浮かんだ。

「まあ、今更だけどそうなるかな、一応」

頬を人差し指でかきながら、俺は目をそらす。佳乃は手で顔をサンドイッチのように挟みこんで、狂喜にもだえている。

「で、映画だけど」

引率の先生のように手をたたき、佳乃に落ち着きを取り戻させる。

「うん、どんな映画かな？」

「はい、これ」

俺は胸ポケットに忍ばせておいたチケットを取り出して、佳乃の前に差し出す。

「ええと……『スクール・オブ・ザ・デッド』……ホラー映画？」

「ああ、俺の好みで悪いけど典型的なB級和製ホラーだ」

「どんな映画なの？」

「ん……ツンデレが化け物をばったばったと倒していくアクションものだった気がする」

「ところで、仁君、サプライズって」

スルーされて悲しいなどとは言えない。
言わないぞ、俺は。

「私なりに意識すると『行き当たりばったり』に聞こえるよ」

「まったく、おっしゃるとおりで」

俺は立ちながら両手をあげて、土下座するまねをする。

「ううん、がっかりなんてしないよ。仁君が急に誘ってくれたってことは、思い立ったが吉日なんだよね。その相手になれただけでも、私は嬉しいから。たとえばC級映画だって、仁君と一緒に満足だよ」

映画のランクが下がっているぞ、佳乃。いくらなんでも作者がかわいそうだ。

「ね、ポップコーン買おうよ。キャラメルマキートを飲みながら見ようね」

俺の腕を取って走り出す佳乃に、前のめりになりそうになる。

「映画館の飲食物は高いんだよなあ……」

飲食を我慢すれば、もう一本映画を見ることができそうなのに。

「もう、けちけちないんだよ。映画は、雰囲気も料金のうちに入ってるんだから」

佳乃の小柄な体が、俺を引っ張っていく。道行く人ごみを押しのけていくから、俺はぶつかる人たちに頭を下げっぱなしだ。外国映画で描かれる極端な日本人像さながらの風景。

「すみません！……あ、ごめんなさい！」

ぶつかってしまった人に頭を下げ続ける俺の視界の隅に、佳乃の笑顔がある。

胸に刺さったとげから、じくじくと血が漏れ出しているのが理解できた。

楽しくて、嬉しくて、そして恥ずかしくてたまらないデートなのに、俺にはそれが終わりの始まりのような気がして、やるせなくなる。

最後の二日間。

寝起きの朝にふと思いついたフレーズがよみがえる。

「……佳乃、ごめんな」

佳乃を誘ったのは俺じゃない。

確かに誘ったのは俺だけど、そう差し向けてくれたのは、他ならないもう一人の佳乃なんだ。

「仁君？ 何か言った？」

俺一人では何もできなかった。気が強くて、わがままな、もう一人の幼馴染が背中を押してくれなければ、きっと俺は一步たりとも前に踏み出せなかった。

「アホ佳乃！ 前見て走らないと……」

関西人にとって馬鹿ってのは結構傷つくのに！ せめてアホにしなさいよ！

意識しないうちに出た言葉に、自分でも驚いてしまう。

「女の子にアホって言うなんて……ひどいよ仁君」

涙目になりながらも、佳乃は俺の手を離さない。

「でも、なんでかな。馬鹿って言われるより軽い気がするよ」

笑顔。

万華鏡のような、多種で華やかな佳乃の表情が、本当にまぶしく

感じられる。

俺は佳乃に引つ張られて空回る足に本腰を入れて、逆に佳乃の手をとって先導する。

確かに俺は、一人では一步を踏み出せなかった。
でも、それでも、一步を踏み出すことができた。

「わっ！ 仁君、早いよ！」

佳乃の細くて柔らかな手のひらを握り締めながら、俺は映画館に飛び込んでいく。

佳乃が好きだから。

この世でたった一人の幼馴染が好きだから。

俺は君との約束を果たすよ。

これは最後の二日間なんかじゃない、最初の二日間なんだ。

第八話・「答えてよ！」

薄暗い映画館の中で、俺と佳乃は中央の席を確保する。人気がない映画なのか、場内は閑古鳥が鳴いていて、まるで俺と佳乃の貸切のようだった。

右に座る佳乃と、左に座る俺。その中間にポップコーンを置いて、二人の両翼にはキャラメルマキアート。

「佳乃、そんなにパンフレットばかり見てると、映画が面白くなるぞ」

俺はポップコーンを口の中に放り込む。

「あ、この主人公の女の子かわいいね」

「ああ、そうだな。結構人気があるみたいだぞ。最近流行りのツンデレだし。ちなみに、主人公はその女の子じゃなくて、地味な中央の男だからな」

パンフレットの表紙を指し示す。

「ふん、仁君もツンデレ好き？」

口に運ぼうとしたポップコーンを取り落とす。ポップコーンは俺のひざの上を転がって、足元に消えていった。

「べ、別に……好きになったやつがツンデレだったら、ツンデレが好きになるだろうし、幼馴染だったら幼馴染が好きになる……と思う」

閉じたパンフレットで鼻から下を隠す佳乃。
それは明らかな照れ隠し。

「キャラメルマキアート……ちょっと甘すぎるかも」

甘すぎると言いつつも、佳乃はストローを離さない。そんな佳乃の横顔が駄々をこねる子供のようでかわいらしく思えた。

照明が光量を失い、二人を暗闇が包んでいく。

胸が高鳴っているのは、これから始まる映画への高揚感ではない。首筋に当てられた決断という白刃。先程の佳乃の発言に、二日後に訪れるだろうその瞬間を垣間見せられたような気がしたからだ。冗談で返すこともできず、ただ優柔不断に身を任せてしまったのもそのため。

「仁君、携帯電話、マナーモードにした？」

佳乃の声で我に返る。目に飛び込んできたのは、来春公開予定の大作映画の広報映像。総制作費百億円という大々的な文字がスクリーンを躍る。映画名を読み上げる外国人の流暢な英語が、映像の最後を締めくくった。

「俺、今日は佳乃と会ったときから電源切ってるから。佳乃こそ、そんなこと言って上映中鳴らすなよ？」

「私の携帯電話は、今頃、私のベッドの上かな。最初から持ってきてないもん。それに……仁君といるときは、携帯電話いじったりしたことはないよ」

スクリーンは、冒頭、遅刻をしたらしい主人公が玄関のドアを開

けるシーンを映し出している。スクリーンの光を受けて七色に輝く佳乃の表情。

主人公がヒロインに殴り飛ばされるシーンでは、痛みに呼応して表情を歪め。

親友が主人公を送り出すシーンでは、目頭を熱くさせ。

物語のクライマックスでは、目じりに浮かべた涙が頬を伝った。

俺が見ていたのは、映画なんかではなかった。

生まれてから、今まで、ずっと佳乃を見てきた。佳乃の姿を見ない日なんてなかった。

振り返れば佳乃はいたし、名前を呼べば佳乃は返事をしてくれた。そこにいるのは当たり前なんてうぬばれたことも、本気で思えてしまいうくらいに、佳乃は俺の当たり前だった。

佳乃という人間をこれほど真剣に見つめたことはない。

失うかもしれないと分かって、やっと俺は佳乃の存在は当たり前ではないという危機感を持って見つめることができた。

今更。本当に今更。

誰しも、失ってから気がつくということが分かっているのに、実際問題、それを身近に認識している人間はいない。知識は経験とは違う。分かったふりをしているだけで、実際には分かっていないだけ。

俺も例外にもれることはなかった。

喜ぶ佳乃、怒る佳乃、哀しむ佳乃、楽しむ佳乃。それが次の瞬間には消えてしまうような気がして……。気付けば、佳乃の姿が陽炎のように揺らめいていた。

「仁……君？」

佳乃の手を握り締める。

無意識に動いてしまった右手が、佳乃の左手をつかんで離さない。佳乃が映画に熱中していたことが、その体温から分かった。ほんの

りと熱を帯びた佳乃の柔らかい手。体温が俺の手の中から流入してくるたび、俺の心に刺さったとげが内部に押し込まれていく。

「ごめん、映画観ないとな」

映画に没頭するふりをした。佳乃はそんな俺を不安げな眼差しで見つめる。

しかし、俺が視線を戻す気がないことを知ると、自らも煮え切らない表情で映画に戻るのだった。

……正直なところ、デートなんてどうすべきかなんて分からなかった。

佳乃以外の女の子と遊んだこともなければ、恋人関係に発展したこともない俺だ。シチュエーションとか、エスコートとか、恋人の理想の筋道なんて分からない。

だから、俺と佳乃はいつも通りのはずだった。文明開化に沸き立った当時の人々のように、佳乃が目を爛々と輝かせてウインドウショッピングをして回る。俺はそんな佳乃を悪態をつきながら見守って、ああでもないこうでもないと思痴をこぼす。佳乃は頬を膨らませながらも、次の瞬間には俺の手を引いて笑っている。

もし、俺と佳乃のこういった行動がデートだとするならば、きっと俺たちは毎日デートしていたのだろう。

登下校、昼休み、放課後……。佳乃といない日はなかったのだから。顔をあわせるたびに笑っていたのだから。俺たちはずっとデートしてきたのだ。幼いころから、ずっと。

……ただ、悲しいことに、俺がそれに気がついたのは、日も傾き始めた電車の中。

満員の電車の中で俺のジャケットをつかみながら、必死に横揺れに耐える佳乃を見下ろしていたときだった。

俺はつり革に両手でつかまり、佳乃はそんな俺につかまっている。樹木にしがみつく蟬のような格好で、二人は電車に揺られていた。

ハプニングも何もなく、ありふれた日常の如く過ぎていくデートの時間。

俺が佳乃を暴漢から救うこともなければ、転んだ佳乃の胸に触れてしまうこともない。ただ楽しいだけの時間が過ぎて行くばかり。それでいいと思える。それでいいはずなのだ。胸を張れる。なのに、俺の中では焦りだけが募っていった。

最後の二日間。

その一日目が終わろうとしている。

電車を降りて二人で家路につくころには、すっかり町は闇にのみこまれていた。

道行く人間が足早になる中で、俺と佳乃の足取りだけはどこか緩慢。それは別れを惜しむ恋人というよりは、恐怖に震えるヘンデルとグレーテルのようだった。

「昔、よく遊んだね、この公園で」

駅前からずっと無言だった佳乃が突然走り出したので、俺は何事かと首をめぐらす。

佳乃は公園を照らす電灯の袂で、くるくると回って見せた。明らかに奇妙な光景なのに、俺はそれを舞台で踊るバレリーナのようにだと思った。誰よりも気高いプリンシパル。そんな風に評させたのは、幼馴染ゆえの鼻真目ではない。

回りすぎて転びそうになる佳乃が、俺に舌を出しておどけて見せる。

「あ、この電灯……もう消えそうだね」

公園の中央にあるたった一つの電灯が、寿命を迎えようとしている

た。その真下にいる佳乃の姿が、点滅しているように感じられた。

それは不吉な暗喩のように思えて、俺の心がざわつく。

電灯を見上げる佳乃の姿は、どこはかなげで、次の瞬間、佳乃は闇の中に消失してしまうのではないかという漠然とした不安に駆られる。

「仁君……今日はありがとう。すごく楽しかったし、嬉しかったよ」

佳乃が後ろで手を組みながら、にっこりと笑う。

「仁君といわれたからかな……眠くならなかったし。仁君も分かってると思うんだけど、最近どうしても急に眠くなっちゃうの。せっかく仁君のお弁当を作ったのに、いつの間にか食べちゃってるし」

小さな握りこぶしで、自分の頭を小突いてみせる。

「自分のことなのにな」

「そんなことない。俺だって、自分のことでわからないことなんてたくさんあるし、佳乃もそれは同じだろ？」

佳乃の不安を取り除こうと躍起になっている俺がいた。

「ありがとう、仁君。フォローうれしいな」

「フォローじゃない！」

俺の声におびえるかのように電灯が明滅した。佳乃は俺の怒声に答えることはせずに、ブランコに腰掛けた。錆付いたブランコの鎖がこすれる。

……耳障りな音だった。

「今日家に帰ってね。仁君との一日を思い浮かべるの。映画館で手を握ってくれたこととか、一緒にいろいろなものを見て回ったこととか、こうして二人でお話したこととか……」

佳乃が反動をつけると、ブランコは大きく前後に揺れた。

「仁君の真剣な顔、仁君の苦笑い、仁君の恥ずかしそうな顔、仁君の……」

仁君、仁君、仁君……。俺の名前をうわごとのように繰り返す。

「繰り返し、繰り返し、仁君の一つ一つを思い浮かべるんだよ」

佳乃は勢いのついたブランコから手を放し、前方にジャンプする。着地はきれいに決まり、佳乃は両手を空中に高くと突き上げた。体操選手さながらだった。

しかし、完璧に決まった着地のはずなのに、佳乃の表情に笑顔はない。

それどころか。

「でも、仁君の笑顔が思い出せないの」

佳乃は悲痛に微笑んでいた。

「どうしても思い出せないのかな……？」

佳乃が俺にゆっくりと近づいてくる。幽霊の如くふらふらと、たとえどしく。

「それって、今日、仁君が一度も……心の底からの笑顔をみせてくれなかったからだよね……？」

俺のジャケットの袖をつかんで、揺り動かす。

「仁君は、どうしてもみたいに笑ってくれないの？」

……俺は甘かった。

約束を果たすとか、一步を踏み出したとか。

言葉で言うよりも、考えていたよりも、直面した現実は大変だった。生易しい決意でどうにかできることではなかった。

「どうして今日誘ってくれたの？」

俺の視界が佳乃の力で揺れていた。俺たち二人を照らす電灯の光が、最後の力を振り絞る。

「どうして、そんな悲しい顔をするの……？」

今日一日、俺はいつも通りだったはずなのに。最高のデートをしようとして誓ったはずなのに。

どうしてこんなに辛い気持ちになるんだ。

どうして佳乃は泣いているんだ。

どうして俺にすぎるようにして苦しんでいるんだ。

どうして笑うことができなかったんだ。

「どうして……どうして？ 仁君……！」

最後の二日間。

でも、各々に与えられたのはたった一日だけ。

幼馴染の佳乃と、悔いのない一日を過ごすことができたか。
最高の一日を過ごすことができたか。
分らない。

「仁君！」

分らない。

「答えて！」

答えられない。答えがない。

「答えてよ！」

電灯の光が費え、俺たち二人は闇に飲み込まれる。
最後の二日間　その一日目が終わった。

第九話・「じめんなさい」

最後の日曜日。

俺は不思議なことに、前日と全く同じ時間に目が覚めた。

毎日毎日、佳乃に起こされるような寝坊の常習犯だった俺が、どうしてこんな時に限ってきっちり起きることが出来るのだろうか。それだけ、この二日という時間の重みを身をもって感じているのだろう。

俺はベッドから体を起こし、床に無造作に脱ぎ捨てられたジャケツトとダメージ加工の施してあるジーンズを見下ろす。

ブランドにもデザインにも気をつかっていない、機能的なだけの上下には、佳乃の涙と香りが染みこんでいた。

答えてよ！

胸に刺さったとげが、いよいよ取り出せないところまで潜り込んできた。継続的に俺をさいなむ疼痛。

コメディで彩られていた日常が、ひどく懐かしく感じられる。

萌えるとか、ツンデレとか、クーデレとか、ヤンデレとか……。鑄型にはめ込まれた特徴を持つキャラクターが、画面の向こうでどたばたと騒動を繰り広げている。

いつもは食い入るようにつめるアニメが、ひどくつまらなく思えた。壁に貼ってある美少女ゲームのヒロインが常に俺に笑いかけても、俺はそれに笑い返すことすら出来ない。

仁君は、どうしていつもみたいに笑ってくれないの？

佳乃、いつもの俺はどんな風に笑っていたんだ……？

心の底からの笑みってなんなんだよ。知らないうちに俺は、笑いを忘れてしまったみたいだ。それこそ、アニメによくあるキャラクターみたいに。

あのと看、俺はどんな表情をしたらいいのか分からなかった。

どうして、そんな悲しい顔をするの……？

俺はそんな顔をしていたのか？

どんな顔をしたらいいのか逡巡していた俺が、そんなに悲しそうな顔をしていたっていうのか？

答えて欲しいのは俺の方だ。

上下を拾い上げて出かける準備をする。最後に、机に置いてある鏡の前で顔の筋肉をほぐして、笑顔の練習を試みた。某ファーストフード店のアルバイトみたいにきちんとした笑顔は作れてはいないが、十分及第点を与えられる笑顔だ。

「……笑えるじゃないか、俺……」

自己採点をすませて、俺は自室の扉を開いた。
泣いても笑っても、今日が最後の一日なのだ。

……が、その中で、ただ一つ確定的なことがある。多分、俺はどちらに転んでも辛い思いをするだろうということ。笑うことは出来ないだろうということ。

いつそのこと、ゲームのように今の状態、この時点でセーブして二つある選択肢のうちどちらも選ぶということができたなら。

『幼馴染みの佳乃を選ぶ』

『ツンデレの佳乃を選ぶ』

そんなことが出来たらどんなに心が楽になるだろう。一つの結末

にたどり着いたら、セーブしたところからやり直して、未選択の選択肢を選ぶ。最後にはどちらの笑顔も見ることが出来るし、後悔もきつと少なくてすむ。

「世界最高の馬鹿だな、俺は……」

現実に非現実を持ち込んでいる自分自身が、ひどく滑稽に思えてしかたがなかった。

待ち合わせ時間を十分ほど過ぎた頃、昨日と全く同じ姿をした佳乃が待ち合わせ場所に現れた。

昨日と同じ服装といっても、佳乃の人格が違えば、その印象はがらりと変わる。幼馴染みの佳乃にとっては背伸びをした服装でも、ツンデレの佳乃にとっては相応の服装に感じられた。

自信のみなぎった大股の歩みは、パリコレクションで流行の最先端を身にまとうモデルのようだ。気後れした様子もなく、視線を一心に浴びて、颯爽と俺に近づく。

「悪いわね。待たされるのは嫌だったから、遅れて出てきたの」

悪い、と言いながら全く悪びれた様子はない。

「別に、それほど待ってないよ」

鏡に映した自分の顔をイメージする。及第点の笑顔。頬の筋肉、目尻、眉、それぞれの動きを寸分の狂いなく重ね合わせる。

「あっそ、で、どこ行くの？」

腕を組んだまま、人差し指で自分の腕をとんとたたく。佳乃が少しだけいらだっているように思えた。

「佳乃の記憶を共有しているんだろ？ 聞くまでもないだろ、そんなこと」

一瞬だけ、唇を引き結んだ佳乃の表情が険しくなるが、それはずぐに消え去った。

「今回は共有してないの。そんなことしたらアンフェアでしょ？」

人差し指をたてて、得意げに俺に説明する。

「便利なんだな」

俺は昨日と同じように、映画館のチケットを胸ポケットから取り出して、佳乃に差し出す。

「映画館……鉄板ね」

それってデートの王道だよ。

俺は胸が急激に収縮して、一気に爆発する感覚を覚えた。目の前が、雪原のように真っ白になり、なにも考えられなくなりそうになった。宇宙創生期、つまり、ビックバンのような爆発的な高鳴りだった。

どうして幼馴染みの佳乃の言葉が頭に浮かんできたのか。

その訳を考えることも出来ずに、俺はうずくまりたい衝動に駆られていた。

「……どうかしたの？」

佳乃が腰に手を当てながら、のぞき込んでくる。だから俺は悟られまいと顔をそらし、胸に左手を当てた。うずくまりたい衝動は、必死に押し殺す。

心臓はいつまでも伸縮を繰り返すと思えたが、やがて収束していった。

「あ、言い忘れてたけどさ。昨日、佳乃と観た映画と同じじゃないんだけど……」

俺は努めて平静を装った。今日は、幼馴染みの佳乃のためにある日ではない。今日は、もう一人の佳乃のためにある日だ。

ツンデレ佳乃の言葉を借りれば、今日という日に、幼馴染み佳乃のことを考えるのはアンフェアだと思った。

「別にいいわよ。仁も、同じ映画を二日連続で観るのはつらいですよ」

素直な佳乃の返事に俺は安堵する。ここで駄々をこねられたら、デートは頓挫してしまうところだったのだ。無計画なデートほど、バラエティに富まないものはないと、俺は昨日のデートで知った。サプライズと前向きに考えても、結局それは行き当たりばったり。たいまつを持たないで、洞窟にはいるようなものだ。

「にしても、仁……デートだっていうのに、冴えないのね」

遠巻きに眺めながら、両手の親指と人差し指で作ったフォトフレームに俺を納める。

「見てみなさいよ。佳乃なんて、普段こんな服着ないのに背伸びしちゃって。香水だって、アクセサリーだって、パンプスだって……結構高いのよ、これ」

自らの着る黒いチュニツクをつまんで見せる。

「それに下着だっていつ脱いでもかまわないように、勝負ものだし」

爆弾発言だ。

「なかなかきわどい下着よ？」

佳乃は洋服の首元を引つ張って、自分の胸元をのぞく。

その仕草は、衆人環視の中のことではないと思うぞ。

見知らぬ男が、すれ違いざまに背伸びをしてのぞき込み、だらしなく鼻を伸ばしていた。

「見なさいよ、仁、ほら」

そんなことはつゆ知らず、俺に見せるように前屈みになる佳乃。

二つの雪山の谷間が、ちらりと見えた。

「か、佳乃！」

俺は真っ赤にゆであがってしまって、目の前で両手をぶんぶん振り回す。

「その慌てっぷりだと、昨日、仁とあの子はそこまでいってないってことか」

得心したようにうなずく。

「はぁ……？」

「どうしたの？ 狐に化かされたような顔して」

「……鎌をかけた？」

「私は人間を化かしただけコン」

佳乃は目が点になっている俺の額を、中指ではじく。

「だから、鎌をかけ」

「知らないコン」

「鎌をか」

「仁が馬鹿なだけコン」

「鎌」

「さっさと行くコン。映画が始まるコン」

俺はふつつつとたぎり始めた復讐心を腹の奥に押さえ込んで、佳乃の背中を追いかける。佳乃は楽しそうに、コンコンと口ずさんでいる。どうやら狐スタイルの自分がお気に召したようだ。

「一コン、二コン、三コン……」

それは三人分のコントローラーという意味だろうか。

「商魂、士魂、闘魂……」

なにかプロレス興業を想像させる。荒々しいビンタが、リングの上で炸裂しているように思えた。

「合コン、結婚、重婚、離婚、再婚、遺恨、血痕……」

「昼下がりの団地妻が目を輝かせそうなドロドロな展開だな」

「男こ」

その先を言うつっ!?

「……飽きた」

「早!」

というか、ネタ切れの感が強い。

「仁、私ふと思ったんだけど、『昼下がり』って言葉を頭につけると、不思議と嫌らしい感じがしない?」

「そうか?」

佳乃の横に並んで首を傾げる。俺の中の暗い気持ちは、いつの間にか消え去っていた。

「たとえば、そうね……」

佳乃がたわいもないことを真剣に考えている。

「……昼下がりの郵便配達」

想像してみる。

夫が単身赴任。寂しさを抱えた主婦の元に、ある日、若さをもてあました郵便配達員が……。

「なぜだ……！　なぜか、無性にいやらしいぞっ！」

体が武者振いを起こす。

「……昼下がりのもも肉」

く……なぜ、なぜもも肉がこうも卑猥に聞こえてしまうんだ……

！　若鶏なのか？　若鶏のもも肉だからなのか！？

すごいぜ『昼下がり』……おまえにそんな魔力があったなんてな……っ！

「昼下がりの課外授業」

おいおい佳乃、それは反則だぜ。『課外授業』だって、語尾につければ無性にいやらしく聞こえてしまうじゃないか。それをねらつての二重攻撃……鼻血ものだ。

昼休みに課外授業はあり得ないと分かっているけど、俺の妄想を加速させる。

「昼下がりの佳乃」

エプロンを着けた佳乃が優しく振り返り、俺に優しく微笑みかける。

仁君、今日は早いんだねっ　ご飯にする、お風呂にする、それとも、少し早いけど……わ、た、し？

ふっ、決まっているじゃないか。もちろん、全部お前と一緒にさ。

……なんてやりとりを考えてしまう自分自身が恐ろしい。

「くっつ……佳乃でさえ卑猥に聞こえるなんて、なんて魔力なんだ、『昼下がり』のヤツめっ……！」

俺は地団駄を踏む。

「ねえ、仁」

俺は歩道を踏み鳴らしながら、佳乃言葉に耳を傾ける。

次はどんなたとえなんだ。俺はもう『昼下がり』には屈しないぞ。何でもござれだ。

「　　今、どっちの佳乃を思い浮かべたの？」

「……え？」

不意を突かれた佳乃の言葉に、アスファルトに振り下ろそうとした足が急停止する。

「だから」

佳乃の瞳は真摯な光で満ちていた。

「昼下がりに、どっちの佳乃を思い浮かべたの、って聞いているのよ」

「どっちって……なんだよ、それ」

治ったはずの心臓の収縮活動。死火山が活火山へと変貌する。

佳乃は何を言っている？

「俺は、何も……」

俺はとっさに嘘をついた。

「嘘ね。目を見れば分かるわよ」

詰め寄ってくる。俺を追求するように一歩、近づいてくる。

俺は薄暗い路地裏に追い込まれ、青いゴミ箱にかかとをぶつけて横倒しになってしまう。それにびっくりした黒いカラスが、空中に飛び去り、電線の上で俺たちの行方を見下ろしている。

「私はね、仁」

俺はついに逃げ場を失った。壁に背を預けているから、佳乃の威圧感に押しつぶされそうになる。

「正直に言っと、この二日間に意味がないことを分かっていたの。だって、そうでしょ？ 私たちが過ごしてきた……私たちと過ごしてきた長い月日が、たった二日でひっくり返したり出来るわけない」

路地に連続して吹き込んでくる風が、俺と佳乃の間を駆け抜ける。
「私がいくら宣戦布告しても、あの手この手を尽くしても……仁の中で、もう答えは出てるような気がする。無意識下で、もう仁はどちらを必要としているか決断できているはずよ」

風にもてあそばれる前髪の方こうで、佳乃の瞳が強い決意に揺れていた。

「この二日間は……うつん、違うわね」

路地に絶え間なく吹き込んでいた風がぴたりとやんだ。身勝手な風だと思った。聞き逃したいときに限って、風はその動きを止める。聞きたいときは容赦なくその言葉をさらっていくのに。
身勝手すぎる。

「今日という日は」

風も、佳乃も。

「自分勝手な私の……お別れ会」

風のなくなった路地裏で、佳乃は俺の唇を奪った。

俺をののしってばかりだった唇が、今はおとなしく俺の唇をふさいでいる。

佳乃の唇は震えていた。

潤いのある口唇は、俺の唇にそっと張り付く。冷たいと感じた後に、佳乃の体温が唇を通して伝わってきた。唇、口紅、唇。その中央の薄い膜を、二人で暖めていく。そんな奇異な作業に感じられた。ついはむことも、舌を動かすこともないただの接触。幼稚なキス。それでも、佳乃にとっては勇気を振り絞るものだったのだろう。

屋上の上でのそれとはまるで違ったもの。あのときの勇氣と今の勇氣。その二つは明らかに違う。端的に言うなら、挑戦の勇氣と、別離の勇氣。

「……ん……」

佳乃の呻き。驚きのあまり目すら閉じられない俺の眼前には、まぶたを閉じる佳乃の顔がアップになっている。

そのとき、佳乃の揺れるまぶたの後ろから、きらりと光るものが流れ落ちた。美しくカールした長いまつげにも、その光る物体は付着している。

俺は身動き一つとれない。

突き飛ばすわけでもなく、慌てるでもなく、佳乃はゆっくりと名残惜しそうに俺の唇から離れていく。目をつぶり、感触をかみしめているように感じられた。

大きく息を吸い、肺を膨らませる。目を開くのと同時に、肺の空気を逃がしていく。大きな、大きな深呼吸。

「お別れ会、終了」

佳乃は俺の胸を、とん、とこづいた。これで終わり。そう伝えるかのような意思表示。

佳乃の匂いが路地裏から消えていく。俺に背を向けて、薄暗い路地から、光り輝く表通りへ。佳乃を光が包んでいくような幻想的な錯覚。

カラスが鳴いた。これで終わりか。さっさとどこかへ行ってしまう。そう言っているような気がした。

胸に刺さったトゲが、ついに中心部へと入り込んだ。俺の感情のターミナルコア。

中心、それは文字通り、心だ。次いで訪れる激痛。泣き叫びたく

なるような激痛。涙を流し、鼻水を流し、体中の穴という穴から水分を吹き出したくなるような衝撃。衝撃。そして、衝撃。痛みのみ、あまり、俺は声を出すことすらままならない。

佳乃は振り向かない。最後に見たのは笑顔だったか。それとも泣き顔だったか。

大きく息を吸い、佳乃が浮かべたものは。

「か……」

佳乃。佳乃。

俺は金魚のように口を閉じたり開いたり。

簡単なことだ。肺に空気をため込んで、声帯を爆発させればいい。でも、俺にはそれが出来なかった。

「……の」

蚊の鳴くような声しか、出てこようとしな。

佳乃が光に飲み込まれる。

「……身勝手なんだよ……」

心がはじけようとしている。今までずっと秘めてきた。胸の奥で大事に大事に育んできた、何ものにも代え難いもの。

「佳乃の体を共有して、都合のいいときに現れて、悪態ばかりついて、俺を困らせて……」

佳乃を見る度にそれは大きくなった。元気になった。と、同時に苦しくもなった。心に入り込んだトゲの痛みで、俺は今、赤子のように泣き叫びたい。でも、そのトゲの痛みは肉体的な痛みとは異なる

っている。

この内側の痛みは？　なぜ痛むんだ？

「なにがデートだよ、なにが宣戦布告だよ……」

トゲが俺の中心に突き刺さり、俺の心がはじけ飛ぶ。

「勝手なんだ……自分勝手すぎるんだ！　佳乃も……俺も！」

その内側に隠れていたのは、小さな、けれども強く輝く宝石。

恋。

何よりも純粋な、好き、という気持ち。

俺の心は生まれたがっていたんだ。

生みの苦しみを経て、産声を上げたかったんだ。

「俺は！」

ただがむしやらに。ただ純朴に。

「佳乃を泣かせたりしたくない！」

去り際に浮かべたのは、泣き顔だった。

「佳乃の涙は、嬉し涙だけで十分だ！」

路地裏を飛び出した。人混みの中をぐるりと見回して、佳乃を見

つけようとする。

どちらの佳乃を選ぶ。

そんな大層な権利は俺にはない。佳乃は、二人で佳乃なんだ。たとえ佳乃が二人の佳乃として存在することが困難でも、それが日常に齟齬をきたしても、俺はそれでも今の佳乃であることを選びたい。ハードルは越えるためにある。弱点は克服するためにある。困難は立ち向かうためにある。

選択肢を選んで、どちらかを必ず決めるのはゲームの世界だけで十分だ。

これは、現実なんだ。

選択肢なんか存在しない、現実の世界なんだ。

佳乃の残り香が、車通りの多い中央通りの方へと流れていく。俺は嗅覚を犬のようにとぎすまして、人の波をすり抜けていく。

俺はどちらかなんて選ばない。現実の世界には二者択一の理はない。

「俺は、どっちも選んでやる！ 幸せにしてみせる！」

ジャケットを脱ぎ捨てる。後ろ手に脱ぎ去ったジャケットは、雑踏に飲み込まれてあっという間に消失した。

「何回でもキスしてやる！ 佳乃にも、もう一人の佳乃にも！」

馬鹿げた発想だと思った。でも、出来ないとも思わなかった。

今までそうしてきたように……いや、それ以上に今は佳乃を愛せるような気がする。

愛に限りはない。愛は無限大だ。俺は佳乃に萌えている。萌え尽きることなんてない。

「俺は、二人とも愛してやる！」

道路を挟んだ反対側で、佳乃が涙を浮かべていた。あれは、ツンデレの方の佳乃だ。

らしくないぞ、ツンデレ。

いつも強がっているくせに、子供みたいにあんなに涙を浮かべて。ああ、そうか、だからツンデレなんだっけ。

「出来るわけじゃない！」

「出来るさ！ 人を愛することも、キャラクターに萌えることも、同時にやってのけたんだ！ 出来ないわけない！」

低次元の屁理屈。でも、佳乃は笑ってくれた。俺も笑った。

抱きしめたいという衝動が俺の中心から決壊する。遮るものなんてない。俺は佳乃に向かって走り出した。

キスの雨を降らせてやる、なんて恋愛小説めいたフレーズも準備済みだ。

抱きしめて、耳元でささやいてやる。

佳乃は少しだけツンツンしながら、すぐにデレデレするだろう。

溢れた。

気持ちちが、心が、愛が伝わるといことがこれほど気持ちのいいものだとは思わなかった。

だから、伝えたい。

佳乃が佳乃の記憶を共有したように、俺も佳乃とこの溢れる気持ちを共有したい。

今すぐに、永遠に。

「仁！」

佳乃がこちらに向かってくるのが見えた。なぜか必死の形相だった。佳乃が涙を頬に残したまま走ってくる。

刹那、かぎ爪でひつかくような大きな音が、俺に迫ってきているのが分かった。

携帯電話をいじっている若い運転手が俺の目に飛び込んでくる。運転中の携帯電話の使用は罰金だって、ニュースで言ってただろ。下を向いて運転するなよ。ぶつかったら危ないだろ。

冷静に頭の中で考えることが出来た。

顔を上げた運転手。俺と目があう。目が大きく見開かれ、携帯電話を取り落とす。

直後、暗転する俺の視界。

二回転。三回転。アスファルトの硬質な感触を身体に受けながら、俺は自分が事故にあったのだと悟る。

事故の直後、スローモーションになるってよく言うけれど、あれは嘘だ。だって、現に俺は時間を肌で感じ取ることが出来る。人々の叫び声や、怒号が何のフィルターもなく聞こえてくる。

君、大丈夫か！

俺は誰かに乱暴に揺り動かされていた。事故にあった人間をそんなに乱暴に扱わないで欲しい。気道確保とか、体を横に倒すとか、救急救命の知識には疎いが、とにかく細心の注意を払って欲しい。

こっちは大丈夫だ！ 特に外傷はない！

どうして俺を揺り動かしている人が叫んでいるんだ。
それに……こっちは？ あっちでもあるって言っのか？

おい！ 女の子の方を早く病院に！

あちこちから怒号が飛び交う。

……女の子？

ささやく声が耳に忍び込んでくる。

おい、ひどい出血だぜ……助かるのかよ、あれ……。

指差し、顔をしかめる野次馬の群れ。

……ひどい出血？

とっさに自分の体が動いた。

悪夢から覚めたベッドの上、布団を払いのけるように飛び起きた俺は、自分の体が五体満足なことに驚いた。両手を見、そして、揺り動かしていた男の人を見た。精悍な顔つきのサラリーマンだった。その肩越し、両足を震わせ、手を口にくわえた若い運転手の姿があった。茫然自失といった体だ。

嫌な予感がした。サラリーマンの元から離れて、運転手の見つめる方向に歩いていく。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

念仏のように運転手は震える声でつぶやいている。

運転手の足下には、特大の赤い花が咲いていた。

ヘッドライトが壊れたのか、プラスチックの残骸が至る所に散らばっている。

その真ん中に、佳乃がいた。

黒のチュニツクは、赤い液体を吸い込んでさらなる黒に染まり、白い佳乃の肌も真っ赤に染まっている。次第に広がっていく赤い水

たまりは、細かい目のアスファルトに染みこんでいく。徐々にはあるが、その範囲を広げながら。

視界がちかちかする。頭が痛い。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ああ、そうか。俺は佳乃に助けられたのか。

それで佳乃が代わりにはねられて、血を流して……。

血溜まりが広がっていく。

佳乃、血を流しすぎだぞ。それ以上流したら、お前、出血多量で死……。

「佳乃……？」

死？ 佳乃が？ どうして？

だって佳乃は……佳乃は、俺の一番大切な人で、やっと思いが通じて、二人まとめて愛してやるって、そう宣言したんだ。ついさっき、ここで。

そうだろ、佳乃。

そうだよな？

なあ、佳乃……。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

救急車の耳障りなサイレンが聞こえてくる。その音は、目覚めたはずの俺を再度、悪夢戻すには十分な現実感を伴っていた。

今日という日は、自分勝手な私の……お別れ会。

佳乃の笑顔が浮かんで、消えた。

第十話・「……遅刻……」

物思いにふける。

小説や、漫画、映画を観たり読んだりしていると、色々と法則がある。

そのひとつに物語冒頭が朝、というものがある。確かに主人公の一日の風景を説明するのには、最適なものだろう。ありきたりな始まりだが、でも、そのありきたりが安心できたりする。

人間はもともと、進化には寛容だが、革命には狭量だ。

既存のものがどんどん便利になっていくのには、何の疑いもなく諸手をあげて喜ぶのに、まったくコンセプトの異なったものを使おうとすると二の足を踏んでしまう……。

ともあれ、俺はそんなありきたりな朝を迎えている。

胃に詰め込んだ朝食をゆらゆらと揺らしながらの登校風景。

二匹のすすめが電線から電線へと飛び移り、会話にいそしんでいる。先に飛んだすすめを、もう一方のすすめが追いかけるといううな、仲睦まじいのかそうでないのかよく分からない苦笑いの風景。俺の隣を自転車に乗ったOし[○]が走り去っていく。駅の駐輪場において、電車に乗る腹積もりなのだろう。

黄色い帽子が四つ並んで揺れているのは、小学生の集団。会話の一端を聞くと、どうやら昨日のアニメの話題らしかった。主人公のまねをしてパンチしたりキックしたり。そうして改めて登校風景を眺めていると、いろいろな発見があることに気がつく。

自分達の世界に入って登校していたところに比べると、とても新鮮味があふれた朝。道端に見知らぬ花が一輪咲いているだけでも、なぜか嬉しくなってしまう。

朝はこんなにもまぶしい。一日の始まりにうつむいて歩くのはも

つてのほかだ。

朝、玄関のチャイムを鳴らすことが日課になってから、俺は欠かさず早起きを繰り返している。

あまり気にしなかった身だしなみにも気を使うようになり、鏡の前にいる時間も長くなった。一見するとオタクからの脱却のようにも思えるが、その実、内面は思った以上に変わっていない。

ゲームの初回限定を求めて電気街を走り回ったりしているし、声優さんの握手会にも足繁く通っている。声優さんに覚えてもらおうと、被り物をして会場に行っているのは内緒だ。

チャイムを鳴らすと、ドアの向こうから喧騒が降りてくるのが分かった。よくも階段を踏み外さないものだと思議になる。俺は携帯電話を開いて時刻を確認した。

間に合わないこともないが、そろそろ出発しないと危険な時間帯だ。サッカード言うところの終了直前、得点直後のようなもの。ま、遅刻にロスタイムはないのだが。

「仁、ご、ごめん！　こら、真奈美！　はなしてよっ！」

気崩した制服は、わざとではない。首に巻きついた愛らしい義妹との戦闘　じゃれあいとも言つ　を思わせた。

「お兄ちゃん！　一日の始まりは真奈美のキスだって、全国義妹協会会則第一条第一項で義務付けられているんだから、おとなしくそのお兄ちゃんの唇を　」

「今作つたろ！　絶対今作つたろ！」

毎度毎度、朝からバリエーションの多いボケとツツコミだ。

「もう……お兄ちゃんたら、恥ずかしがり屋なんだからっ！　人の

いないところでは『もつといい声で鳴いてみるよ』とか耳元で甘くささやくのにつ

「恥ずかしがり屋は、影で甘いものを売っているのか……。多角経
営だな」

鹿岡義妹と俺のダブルボケに、鹿岡兄の体が地面にくず折れる。
どうやら、力尽きたらしい。

「ボケに対して、ツツコミの人数が足りない気がする。ううん、絶
対に足りないよ……」

鹿岡兄の怨嗟が、快晴に吸い込まれていった。

「なあ、鹿岡……」

俺は流れていく景色と、のどを伝う汗を後方に置き去りにする。

「何、仁？」

「何よ、仁先輩」

二人に問うたつもりはないのだが、俺の呼び方が悪かったのか、
息を切らせた二人が俺を振り向く。

「俺は毎日早起きしてる。でも、なぜか遅刻すれすれ。何でだろ
う?。」

「真奈美が！」

「お兄ちゃんが！」

刀を持っていたら、きつとつばぜり合いをしているだろう。兄妹が鋭い眼光をぶつけ合い、火花を散らしている。

「何だよ」

「何よ」

お兄ちゃん大好きな鹿岡義妹が、兄に食ってかかる。珍しいこともあるものだな、と興味深く観察していたら、突然、義妹の姿が消失した。

素早く後方を振り返ると、鹿岡義妹が前のめりになって倒れている。サッカー選手も真っ青になるくらい派手な転倒だった。

だが、俺はその一連の出来事に、不可解な感触が残る。

「だ、大丈夫！？ 真奈美！」

真っ青な顔をした鹿岡兄が、倒れた義妹に駆け寄っていく。なんだかんだ言っても大事な義妹だ。表面上は喧嘩をしているようでも、思いやりは人一倍なのだ。

「お、お兄ちゃん……ごめんね、真奈美が、真奈美が頼りないばかりに……」

うるうるうる。しっとりと目に涙を浮かべる。今にも大粒の涙が頬を滑り落ちていきそうな義妹の姿に、兄は後悔の色を濃くする。

「いや、全部俺が悪いんだ。真奈美の言うとおりにしていれば、こんなことにはならなかったんだよ。僕はお兄ちゃんなのに……ごめん」

それは朝のキスを必ずしてやると解釈していいんだな、鹿岡兄。

「しかし、なんだろう。この拭い去れない不可解さは」

俺は目をつぶり、自分の頭を両手で押さえて、脳内メモリーをフル回転させる。

今のシーン、リプレイでもう一度。

解説が入り、画像が砂嵐に切り替わる。すると、三人で並走していた映像が浮かび上がる。

何だよ。

何よ。

ここまで不可解な出来事はない。問題はその後だ。

義妹、走りながら何かにつまずいて転ぶ。鹿岡兄があわてて義妹に駆け寄っていく。

「もう一度！ 二倍速巻き戻し！ そして再生！」

義妹、走りながら……。

「ここだ！ 一時停止！ そして、ズーム！」

鹿岡義妹のすらりと伸びた白い足が、視界を埋め尽くしていく。

「さらに三倍ズーム！」

画面いっぱいに広がる鹿岡義妹のつま先。

「四分の一コマ送り！」

そして、俺は見た。カモシカのごとく颯爽と足を回転させていた鹿岡義妹が、次の瞬間、何もないうところで転んでいたのだ。

俺の感じた不可解の答えが見つかり、俺は真実を告げようと、脳内ハードディスク態勢を解除して、鹿岡兄を振り返る。

鹿岡兄は、義妹をおんぶしているところだった。

「鹿岡兄！　だまされ　」

俺は背中に負われている義妹と視線を交差させてしまう。視線で射抜く、とはよく言われるが、俺はまさにそんな心地だった。心地で言うのなら、生きた心地がしないとも言えた。蛇ににらまれた蛙のごとく、義妹の眼光に射すくめられてしまう。

イビルアイ、悪魔の瞳。

有無を言わず、俺の意識に刷り込まれる義妹の意思。

余計なことは、命に関わるから言わないほうが身のためだよ

ぞくり。戦慄が走った。

「あれ？　どうしたの仁？」

気が付け鹿岡兄！　さっきの一連の出来事は、サッカーで言うコミュニケーションなんだ。イエローカードをもらうのはお前じゃない

んだぞ！　むしろ背中を負っている義妹のほうなんだ！　レッドカード退場も視野に入れる悪質さだっ！

……俺は心の中で叫んだ。

それにしても、鹿岡義妹恐るべし。

「仁、先に行つて。僕たちの遅刻につき合わせるのはさすがにまずいから」

鹿岡義妹の鋭い視線が、おまけでついていた。

「あ、ああ……そうだな。先に行かせてもらつよ」

俺は女というものの容赦のなさを痛感しながら、二人に別れを告げて、校門を目指す。

朝の風を切つて走るのは、気持ちよかった。体についたもやもやとしたものを、振り払うことができる気がした。

立ち止まっていると、いつの間にか関節という関節にどろどろとしたものが詰まってくる。気力、体力、思考力……それらをすべて鈍らせ、果ては奪っていくような鈍重な油のようなもの。必死に考え、必死に動き、必死に追いつかれないようにしていたもの。立ち止まった瞬間に、それは俺を捕縛しようとする。

だから俺は、考え、動くしかなかった。

考えて、動いて、振り切るしかなかった。

全力疾走し、校門に滑り込む。そんな面倒と思えることでさえ、俺は歓迎していることに気がつく。

「……遅刻……」

ぼそりとした小さな声が聞こえた。

その声が曲がり角から飛び出してくる声だと気がついたときには、すでに二人の体は激しく衝突していた。

もんどりうってコンクリートに転がる俺と、声の主。

声の主は鞆を放り出してしまったらしい。

時間差で俺の頭に落ちてきた鞆を食らって、俺はそう判断した。

「……いてて」

俺は頭をさすりながら立ち上がり、ぶつかってしまった人物を見下ろした。

声の主は、尻餅をついたまま俺を見上げていた。第一印象は、とても小柄な女の子だった。

腰まで届く長くしなやかな髪の毛が、尻餅をついた衝撃のせいか乱れてしまっている。つぶらな瞳は宝石のように輝いていて、今にも吸い込まれそうなほど神秘的だった。

小さな口、小さな鼻、小さな顔。童顔でありながらも、意志の強そうな顔立ちをした美少女は、なおも俺から眼を離そうとはしない。

「あの、大丈夫？」

声をかける俺を呆けたように見上げるばかりで、自らの下着が見えてしまっていることにも気がついていないようだ。俺は無遠慮だと分かっているにもかかわらず、可愛らしい少女の顔から、下へ下へと視線をずらしまう。

身長は、童顔に見合っさほど高くない。俺と並べば、俺からは頭のとっぺんが容易に見えてしまうだろう。細い体は着やせしているようには見えないから、胸にある申し訳程度のふくらみは嘘ではないのだろう。

抱えあげようとすれば、ひょい、という擬音語がついて回るような華奢な体格。そんな体を支える足も細く、白磁器のように白い。

「あ、あの……見えてるぞ」

言わなければいいのだが、俺は固まったままの少女に申し訳ないような気がして、指摘した。少女は、点になっていた瞳を平常の大きさに戻して、自らの醜態を見下ろす。

俺は身構えた。

悲鳴と、平手打ち。その双方が俺に襲い掛かってくるような気がしたからだ。

「……ごめんなさい」

目をつぶり、耳を覆っていた俺の足元から小声が聞こえた。

少女は何事もなかったのかのように、スカートの汚れを手で払う。日本人形のような美しい長髪に手櫛をいれ、何事もなかったのかのように身支度を調えていく。

「……鞆、返して」

俺は左手に持っていた少女の鞆のことを言われているのに気がついて、あわてて少女に返した。

意図せずに、少女の手と触れ合ってしまう。氷のように冷たい指の感触。

「……ッ！」

少女は腫れ物にでも触られたかのように、鞆を受け取った手を慌てて引っ込める。その乱暴な所作に、俺は少し傷ついた。

「ごめんなさい……遅刻、するから」

慌てたせいか赤くなった顔を素早く翻し、少女は走り去っていった。颯爽と走る少女の背中が、朝日にまぶしい。

短いスカートがなびき、白い太ももがのぞいても、俺は胸が高鳴ったりしなかった。

あまりにも感情表現に乏しい少女の言葉だけが、俺の心の中に響く。

……が、それを相殺して余りある少女の真っ赤な顔が、印象的だった。

その真っ赤な顔を思い出して、なぜか俺は胸がドキドキしていることに気がつくのだった。

佳乃がこの世を去ってから、一年が経とうとしていた。

第十一話・「いい加減にしろよ！」

朝のホームルーム。遅刻してしまった俺を美緒のぽけぽけした声が出迎えた。

「転校生らしいですう」

「転校生？」

俺の台詞を奪った鹿岡兄が、肩越しに美緒に問いかけた。

「朝からその話題でもちきりなんですう」

教室を見渡すと、確かにどの生徒もそわそわしている。左右の生徒、あるいは前後の生徒同士で、転校生の話題に花を咲かせていた。田中はでかい図体をのけぞらせて、後ろの生徒と鼻息荒く話し込んでいる。だが、ある男が足りないのに気がついて、俺はぽけぽけ少女に向き直った。

「ところで桐岡が見えないようだけど……まさか、またなの？」

俺の台詞が二度、鹿岡兄にかすめ取られた。

「そのまさかなのですう……桐岡くんは、今日もお休みなんですう……」

寂しそうな美緒。どうやら、桐岡は先日の子調理実習時に作ったクッキーにやられて、まだ立ち上がれないでいるらしい。その原因を作ったぽけぽけ少女は、無垢に桐岡を心配している。自覚がな

いその天然さが、時に恐ろしく思える。

「はわっ、先生が来たみたいですよおっ！」

教室の扉が勢いよく開く音が聞こえて、俺たちは慌てて着席した。教室内を埋め尽くしていた喧騒も、とたんに静まり返る。

「あー……みんな知ってるようだから、改めて言うのもなんだが……ま、とにかく、転校生だ」

俺は一番後ろの席に座りながら、前列の男子生徒が盛り上がりつついるのを他人事のように眺める。

頬杖について外を眺めれば、大きな雲がゆっくりと窓の外を流れていく。俺の席の隣は空席で、誰も座ることはない。四十九日、花瓶がそこに飾られていたことを思い出す。

「転校生は、女だ」

先生の言葉に、男子生徒が唇を尖らせて口笛を吹いた。頭の上で両手をたたいて喜ぶ者もいる。まだ美人だと決まったわけでもないのに狂喜乱舞しているところを見ると、よほど女に飢えているのかと勘ぐりたくなる。

「先生！ 質問です！ その子は美人ですか？」

授業中には見たことのない速度で手が挙がる。先生はもったいぶったように教卓に両手をついて、教室中を見渡した。

「はっきり言うぞ」

大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。

「転校生は」

教室中が唾液を飲み込むのが分かった。

「美少女だ」

瞬間、教室中が興奮のるつぼと化した。九回裏ツーアウトから三点差を跳ね返す逆転満塁ホームランを打ったかのような地鳴りだった。教室にあふれていた男　あえてオスと言ったほうがいいかが雄叫びを上げた。

「じゃ、そろそろ自己紹介をしてもらおうか。おい、入ってきていぞ」

教室の扉が開くと同時に、再び教室が静まり返った。こういうときの協調性には、正直、目を見張るものがある。
開かれた扉から現れる小柄な体躯。

「……あつ！」

間抜けな声は俺のものだった。

入室してきた転校生は、気品すら漂わせた歩みで、きびきびと教卓の横まで歩いていく。男子生徒は歓声を上げることすら忘れ、女子生徒は少女の西洋の人形のような姿に息を呑む。あまりにも小柄で、あまりにも童顔で、あまりにも場に不釣り合いな少女は、笑うことも微笑むこともなく、教室を一瞥した。

「そ、それじゃ、自己紹介を頼む」

先生すらも、どこかその高貴な風に当てられたのだろうか。少女に話しかけられたら、今にもしどろもどろになりそうだ。

「山田ウメです。よろしくお願いします」

完全に名前負けしている。四球も許さぬ完封負け。せめて伊集院とか音無とか、平等院とか鳳凰堂とかそんな豪華な名前だったらいのに……と思ったのは俺だけではないだろう。

「山田さんは、最近まで重い病気を患っていて、ずっと入院していた身だ。体調の面もあって、みんなと同じようにはいかないだろうから、その点はフオローしてやってくれ。頼んだぞ」

誰もがあっけにと取られたまま。あらかじめ知っていた先生だけが、冷静に少女の座る席を指示する。少女はそれにわずかにうなずくと、何事もなかったのかのように机と机の間を闊歩していく。

髪の毛がふわりと舞い、少女の歩みに従う姿は、まるで草原を駆ける白馬を連想させる。

教室に存在する人間すべてが、少女を中心にして首を回転させている。ひまわりで言うところの太陽のような少女は、やがて俺の隣の席に腰掛けた。

その席に座るな。

腰を浮かしかけた俺の動きが、止まっていた。

半年前ならば、確実に激昂していたであろう。

しかし、俺は無我夢中になることもなく、怒ることはすれ、声に出すことはない。腰を浮かすことはすれ、立ち上がることはしない。先生に座るよう言われたのだから仕方がない。そう自分の中で納

得してしまえる俺がいた。

「……教科書、見せて」

無表情なまま席に着いた少女が、俺を見上げている。見下すわけでもなく、馬鹿にするわけでもなく、ただ無感情に俺を見上げる。

俺は浮かしかけた腰をイスに落ち着けて、一時間目の授業で使う教科書を机の中から取り出した。

ちら、と少女を見れば、小さな体を使って自分の机を俺の机に寄せようとしている。机を持ち上げることがとてもすごいことだと感心してしまうほど、少女の小柄さは際立っていた。机から教科書を出す状態のまま停止している俺をいぶかしげに思ったのか、少女は俺を見つめてくる。俺はその小柄な体に注視していたのが災いして、少女に見つめられているのに気がつくのに遅れてしまう。

そのわずかなタイムラグのち、俺は少女と視線が重なる。

少女の顔が、一瞬のうちに燃え上がった。

のどを詰まらせると真っ赤になる、というが、それを上回る急騰ぶりだった。

「ど、どうした？」

俺もつられて赤くなってしまい、慌てて視線をそらす。機械のように冷たく、それでいて怜悧にも思えた少女が、一瞬にして人間味を帯びるさまに、俺はある種の感激を覚えた。

「……分らない」

少女は自分でも不思議だ、とても言うように自らの頬に手をあて

がった。白い頬が仄かな赤に染まっているのを実感しているのか、少女は少しだけ驚いた表情をしている。

「あなたの顔を見たら、熱くなった」

少女はこともなげに言う。

「風邪？」

目をあわすことができない。

「違う」

「た、体調が悪いなら、保健室に行ったほうがいいぞ。転校してきただけりなんだ、不慣れないこともあるだろ？ 万が一ってこともあるしだな……それから……」

頭が暴走していた。次から次へと、身勝手にこぼれ落ちる言葉の数々。

「大丈夫」

俺の一方的な会話はそこで一刀両断された。冷徹な一言が、俺の真っ赤な顔を冷やしていく。抑揚も、感情もない、平板な声。

「ま、なんだ……俺は佐々木仁。佐々木とでも仁とでも呼んでくれ」

沈んでいく心をせき止めるように、俺は慌てて自己紹介をしていた。

「仁……………君？」

熱に浮かされるように口走った少女。

次の瞬間、我に返った少女は、信じられないといった風に、自らの口を押さえて、立ち上がった。椅子が倒れ、その音で教室中が静まり返る。すべての視線が、俺と少女の間を行ったりきたりしていた。

非難が俺に集まる雰囲気を感じて、俺は必死に首を横に振る。

ただ自己紹介しただけだぞ？ 本当だぞ？

「保健室、行くから」

少女はそれだけ言い残して、教室を出て行った。

少しだけ小走りになる少女の背中で踊る長髪。きらきらと清流のように輝く少女の髪が、最後まで少女の表情を隠していた。

「だから、俺は何もしてないんだよ」

昼休みになっても戻ってこない小柄な少女のせいで、俺はよからぬ容疑をかけられている。

「本当なの？ 気に触るようなことを言ったんじゃないの？」

鹿岡兄が俺の肩を揺り動かす。

「義妹をたぶらかす鬼畜な鹿岡君と違ってえ、佐々木君はそんなこと言わないですよ」

ばけぼけしているだけに、その言葉は鹿岡に少なからずダメージを与えたようだった。

結局、俺は容疑を晴らせないまま、床にうなだれる鹿岡兄を置き去りにして、昼休みの教室を抜け出していた。

昼休みの屋上は、思っていたとおり誰もいなかった。空気も冷たく、風も少なからずある。寒さに凍えながら弁当を食べようとする奇特な人間は、この学校にはいないということだ。

屋上のベンチに腰掛けながら、特大のため息を足元に落とす。

考えないようにしていた事柄が、脳味噌の奥から押し寄せてくる。大きく、高くそびえたそれは、津波のように俺を飲み込んでいく。俺は濁流に吞まれて息もできない。呼吸もできなくなり、俺は胸が締め付けられたように苦しくなる。

握りつぶされ、圧縮され、搾り取られた残りかす。心の残滓。それを巻き込んで膨れ上がっていく、悲哀。

寒風が俺の身を切り、体を、心を震わせる。

自分を抱きしめるようにして、俺はベンチに座りながらうずくま
った。

……佳乃がたまらなく恋しかった。

恋しくて、愛しくてたまらなかった。身が張り裂けそうだった。

「……なんで、佳乃がいないんだよ」

佳乃の存在しない日常に、慣れたと思っていた。時間が悲しみを
払拭してくれると思っていた。

「……佳乃……っ！」

悲嘆にくれていた俺に鹿岡兄は優しく声をかけてくれ、一緒に登校することを勧めてくれた。泣き晴らした鹿岡義妹の恨みのこもった目。真っ赤な目が俺の心を痛めつけた。

お姉さまを返して！

そう言われたりもした。

でも、義妹はどこかでそれをお門違いだと分かってもいて、後日俺に謝罪してきた。人目をはばからず泣いた鹿岡義妹の涙が、俺の胸を熱くさせた。

葬式の日、普段からぼけぼけした早坂美緒が、大粒の涙をぽたぽたとたらししている印象的な姿は、今でも俺の脳裏に焼きついて離れない。新聞部の皆川亜矢子は、新聞記者を目指しているくせに、事実を文章にすることが出来ず、最後まで記事ノートを涙でぐしょぐしょにしていたし、レスリング部の田中は、巨体の割に涙腺は弱いようで、近所にも響き渡る大声で号泣していた。美緒と仲の良い桐岡も、度々背中を向けては隠れて涙を拭い、気丈な姿で振り返ったと思えば、また涙ぐんで背中を向けていた。

クラス谁也が涙し、肩を抱き、献花をするさまを見て、俺は改めて佳乃がどれだけの人に愛されていたのかを知った。

佳乃の両親が、俺に身体を預けるように泣いていたときのことを思い出す。

俺はといえば、自分ではどうすることもできない、哀切、後悔、怨嗟を身のうちに溜め込んでいて、今にも爆発しそうだった。それでも俺は、自分でも驚くくらいの忍耐強さを発揮して、佳乃の両親の涙をぬぐってあげた。

自分の涙が流れていないことを不思議に思う一方で、俺は心の奥

に広がる、どうしようもない絶望とこれからも付き合っていくんだな、とあきらめかけてもいた。

……時間が流れるのは早い。

気がつけば、一年が経とうとしていて、俺は笑えるようになった。悲しみにも慣れ始め、冗談も言えるようになった。

人は慣れる動物だ、と誰かが言ったが、その通りだと思った。

しかし、一年が経とうとしている今でも、絶望は今もしっかりと俺の腹の奥に鎮座していて、不意に力を発揮させたりする。

トイレに入ったときとか、古文の授業を聞いているとき、ゲームをしているとき、レベルアップした直後、アニメのエンディングテーマが流れているとき……前触れもなく俺を襲う。

俺はそんな不意の悲しみが訪れると、腹部に力を加えて我慢する。目をつぶり、悲しみを内部に押しやるのだ。

……大丈夫。涙は出ない。我慢できる。

俺は念じながら、腹部に力を入れ続ける。

俺を心配する視線や同情が、やっとなくなってきたんだ。日常が戻ってきたんだ。せつかく立ち直りかけたクラスの雰囲気、また四十九日のときのように戻すわけにはいかない。

引いていく絶望の波を感じて、俺は安堵する。

今回も耐えることができた。俺は、大丈夫。

「なにしてるの」

誰もいないはずの屋上から聞こえてきた声に驚かされる。声のした方向を見れば、あらぬ容疑をかけられる原因を作った少女が、ぼ

つねんと立っていた。風に揺れる黒髪が、マントのようになびいている。

「泣いてるの？」

「なっ……！」

俺は慌てて目元に指を持っていくが、涙の痕跡は見つからない。

「て、適当なこと言うなよ」

悪態をつく俺に、少女はやはり無表情。嘲笑することもなく、ただ幽霊のように立っているだけ。

「泣いているように、見えたの」

「いつからそこにいたんだよ」

「最初から、いた」

フラットな発音。リズムのない小さな声は、風に簡単に連れ去られてしまいそうだ。

「そっか、最初からか……ははは」

むなしく笑う俺に、少しだけ少女は気の毒そうに眉を下げた。どうやら、完全に表情がないというわけではないらしい。

「情けない顔」

日本刀の切っ先を首元に突きつけるような言い方に、俺は眉根を寄せる。

「でも」

少女の言葉には続きがあった。

「ほおっておけないって」

「誰かがそう言っていたのかな？」

同い年に見えない少女の容姿に、どこか年下に話しかけるような口調になってしまう。

少女はそれを失礼だとは思わなかったようで、やはり平板な声で俺の問いに答える。失礼とは思わなかったようで……とはいったが、表情に乏しいから、気に障っているのかも分からない。

「……彼女がそう言ったの」

「彼女？」

屋上にこれまでにない強風が吹き荒れた。

少女の小さい体が今にも吹き飛ばされそうなほど、強い風。少女の髪が右から左に流れ、小さな口を隠す。短いスカートは国旗のようにはためき、中の下着をあらわにさせた。

それでも、少女は微動だにしない。

なにか強大な力によって、その場に押しとどめられているように思えた。

「……佳乃が、そう言った気がしたの」

刹那、俺の体から熱いものがこみ上げてくる。
憤怒、悲哀、そして絶望。

それらが熱い奔流となって染み出してきた。

「そんなわけないだろ！ 佳乃は……！」

命を落とした。

俺の目の前で、俺の不注意によって。

己の命を賭して、俺をかばって。

悔しさが、己の無力さが感情を決壊させる。

「佳乃は生きてる」

「ふざけるなよ！ 言っていいことと悪いことがある！」

侮辱された気がした。自分の愛するものを辱められた気がした。

頭の中が真っ白になる。

俺は少女に詰め寄って、俺はその小さな肩をつかんだ。

男ならば殴りつけていたところだ。少女のその感情のない言葉が、俺を最後の一線で押しとどめているに過ぎない。その一線さえも越えれば、俺は少女に対して何をしでかさか分からなかった。

「佳乃は生きてる」

「いい加減にしろ……」

「私にはそれが分かる」

「いい加減にしろよ！」

「彼女は生きてる」

少女は繰り返した。

「……私の中で」

少女は鬼気迫る俺に表情一つ変えず、自らの小さな胸を押さえた。

「佳乃は私。私は佳乃」

差し込まれた鍵が、錠を開ける音。俺の中で何かが氷解していた。

佳乃がいつも肌身離さず持っていたドナーカード。

常に誰かに生かされ続けているのだと。誰かの死の上に、自分の生があるのだと。

そんなコンプレックスを抱き続けていた佳乃。そんな佳乃が、いつか誰かのために何かしてあげられたら……と献身的に考えていたことは言うまでもない。最高の幼馴染としての奉仕的な態度がまさにそれだ。

……佳乃の臓器が誰かに移植されたことは知っていた。

けれども、その移植先が家族に知られることはない。提供者は、被提供者の情報をどんな些細なことでも知ることはできないのだ。それは、移植されないまま死を迎える人々に対する配慮。そのため、移植は境遇その他に関係なく、完全にランダムで選出される。

なぜ移植してくれない。こんなにも不幸なのに。時間もないのに。

お金はいくらでも払うから。人間として優れているのに。

もし、配慮なく情報が伝われば必ずそういったことになる。それを踏まえ、移植手術には徹底した守秘義務が課せられている。ただ……移植された人間には、ごくまれにある症例が襲う。

「佳乃は私の中で生きてる」

移植手術成功の後、急に味覚が変わったり、見知らぬ記憶が刷り込まれていたり、自分ではない人間の痕跡が残っていたりする。

「君は……」

「私は、山田ウメ」

ウメは感情のない声で名前を告げると、その冷たい腕で俺を抱きしめた。膝をつく俺を胸に抱く。小さな胸はそれでも女らしい柔らかさがあり、俺はその柔らかさの中に身を預ける。膝をつく俺は、ちょうどウメの胸の位置。ウメの身長の高さが感じられて、俺は少しだけ可笑しくなった。

「佳乃の音」

ウメは俺の顔を横に向ける。

「佳乃がくれた音」

俺の頭をがっちり固定して、恥ずかしげもなく自らの心臓の位置へ。俺の耳がウメの小柄な乳房の奥にある、鼓動を探り当てる。

……とくん、とくん。とくん、とくん。とくとく、とくとく。

元氣よく、まるで駆け回るように、それは速度を増していった。
目をつぶる俺のまぶたに、幻想的な景色が浮かぶ。

見渡す限りの大平原。モンゴルで見ることのできる広大な地平線
もかすむような、大平原。

その青一色の広大な平野を、猛スピードで駆けていく黒く逞しい
馬群。たてがみをなびかせながら、平原を横切っていく。

風は穏やかに草原を吹いていき、草花をそよそよと揺らす。太陽
が雲間から顔を出し、神々しいまでの直線が、真っ青な平原を切り
取っていく。

その光の袂で、一人の少女が背中を向けて座っている。何かに気
がついたように少女は立ち上がり、振り向く。白いワンピースに麦
わら帽子。その小さな胸に大事そうに、本当に大事そうに抱いたも
のをゆっくりと差し出す。

小さな両手に握り締められていたのは、大事に抱えていたものは。

命。

息づいている、懸命に生きようとしている。

生きたい、生きていたい。

そう必死に叫んでいる。

「ウメは佳乃を知らない。でも、佐々木は佳乃を知ってる」

佐々木、そう呼んでくれる目の前の少女が、なぜか懐かしく感じ
られる。

それが紛れもない錯覚だとしても、俺は思い込む。

これは、きつと出会いなんかではなく、再会なんだと。

どんな奇跡があつて、どんな偶然が重なって、もう一度佳乃と出
会うことができたのだろう。その確率はほとんどゼロといってもい

い。

でも、俺は再びめぐり合うことができた。

「佳乃のこと、知りたい」

揺らぐことのない無感情の声が降ってくる。

「佐々木と目が会った時に、急に赤くなるの、迷惑だから」

俺を抱きしめたまま、ウメはぶっきらぼうに言い捨てる。冷たく感じられたウメの両手が、いつしか温かくなっていた。それは、佳乃がそうさせているのだろうか。

仁君、格好悪いね。

飽くことなく、心臓の音を聞き続ける。

仁、格好悪いわよ。

とくとく、とくとく。

可愛らしく控えめな音が、俺に語りかけた気がした。

「佐々木、不細工」

「うるせえ……」

ウメは少しだけ抱きしめる力を強くしてくれる。

同情なのか、佳乃の意思なのかは分からない。

でも、その無感情な優しさに、少しだけ心が弾むのが分かった。

腹の奥に溜まった絶望が、わずかに身を震わせる。消えることは

なく、機をつかがうように身を固めてじっとしていた。……今は、それでいい。今はそれよりも重要なものがあるのだから。

「ウメ」

「何？」

幼馴染で、ツンデレで。それを宿すウメはクーデレで。

「……会いたかった……」

「私は別に」

少しだけ感情のこもった悪戯な声。ウメの声。俺は笑うことすらできず、頭の中でどう突っ込んだものか考える。

「……………佳乃……………」

俺の大好きな人は。

多重人格な彼女。

でも、今はこの音だけを聞いていたいんだ。
鼓膜を振わす優しい鐘の音。

とくとく、とくとく。

とくとく、とくとく……………。

……………後に俺が知る、終わりの始まりの音。

第十二話・「夕風佳乃」

……夕風佳乃。

俺の幼馴染みであり、内にはもう一人の人格を宿している少女。生まれたときからそうだったわけではなくて、幼い頃の事故によって、臓器移植を余儀なくされた苦勞人。俺はそのときもちろん幼馴染みだったし、近所でも評判になるほど仲が良い遊び相手だった。そんなに仲がよいと世間話好きの主婦が集まる井戸端会議場では、将来はきつと二人で結ばれて夫婦になるに違いないと勝手に噂し、俺達二人が遊んでいるのを見かけては、笑みを浮かべながら、これからも仲良くね、なんて当時の俺達にはうなずくことしか出ない微妙な台詞を残していくのだった。

そんな二人だったが、俺が当時好きだったアニメのキャラクターに異常な執着持ってしまったことが、普通の幼馴染みというステレオタイプから逸脱してしまう原因となった。

こんな事を人前で話して良いのかどうか分からないが……そうだ、その前に前置きをおきたい。幼い頃によくごっこ遊びというものをすると思う。仲睦まじい夫婦を演じてみたり、理想の職業を真似してみたりするあれだ。もちろんお医者さんごっこで、幼かった佳乃の体をあちこち触診したりもした。

今でこそ犯罪的に聞こえているかも知れないが、当時は幼かったし、加えて純真無垢でもあった。男の俺には付いていて女の佳乃には付いていない代物に半ば必然的に、むしろそれが運命であるように、いや通るしかない道というか、通過儀礼というか、登竜門というか、大人になるための階段というか、成人の儀式というか、単なる好奇心というか……ともかく丸々ひつくるめてそんな感情を抱いたり、それを取り沙汰して、立ちションを出来ないことで佳乃を馬鹿にしたりもした。後日そんなことで佳乃を泣かせてしまった事件

が母の耳にはいることになり、百叩きの刑に処されたことは成長した今でも記憶に鮮明だ。一週間ほど尻がひりひりしていたことを考えると、よほど男女間に横たわる性差というものは越えがたい壁であることを、身を以て知らされるのと同時に、気安く触れるべきではない聖域なのだということも自ずと理解できるようになった。

そういったごくごく当たり前の、普通の人間なら気が付かないうちに行ってしまったっているはずの恥ずかしい体験が、今の俺にどのような影響を与えているのかは機会があれば説明するとして、俺がこんなに長いくだりでもって言いたかったことは、当時の俺は、それはそれは周囲もうらやむ、きら星の如く輝く目を持った純朴な少年だったということだ。今でもそうだが……と、付け加えたら周囲から非難轟々なので　ここでは黙っておく。

……さて、ここで話は戻る。

ステレオタイプを逸脱してしまった原因の話だ。

純粹だった俺はアニメのキャラクターに異常な執着を持っていた、実際にそのキャラクターを佳乃に演じさせることにした。つまりは先に説明したように、ごっこ遊びだったのだ。戦隊もので、誰がレッドで、誰がブラックだとか。そんな無邪気なごっこ遊びの一つとして佳乃はそのキャラクターを演じることになった。ただ普通の人間と違っていたことは、佳乃があまりにも純粹すぎたせいで、まるでコピーでもするかのように人格の一つとしてすり込まれてしまったことだった。

下手な例えだが、そう、かくれんぼをしたまま夕方になり、みんなが帰ってしまったても隠れている方は遊びが終わったことにも気が付かず、ずっと隠れ続けてしまう……という寂しい現象と一緒だ。もともと、佳乃が幼い頃から俺の背中ばかり追いかけてくるような可愛い女の子だったから、俺の言ったことをすぐに実行し、まるでスポンジのように吸収していった。

それが重なって誕生したのが、一年前まで俺の隣で笑っていた彼

女だ。俺が幾度もなく好きになつては真似させ、言葉の節々にまで浸透させた愛すべきキャラクター達。

一時期、佳乃の言葉尻には、だっちゃ、という言葉まで付いた。もちろん俺の呼び方は、ダーリン。

今ではものすごく恥ずかしいが、人生色々。俺の人生、色々だ。佳乃の人生も色々だったに違いない。幼馴染みの佐々木仁というちよつと可愛いプチ変態に従わされ、無理難題を注文され、あるいは虐げられて、すすく育ってきたのだ。

俺から見た佳乃は楽しそうで、終始俺といるときは笑顔だった。が、もしかしたら俺のいないところでは仏頂面だったのかもしれない。

丑三つ時になれば、神社のご神木にあてがった藁人形に、父親の工具箱の中からくすねてきた五寸釘を仁王顔で打ち付けていたのかもしれない。俺は佳乃が生まれてから最後の瞬間まで、そんな彼女を見ることは出来なかったけれど、もし見ることが出来たのなら見てみたかった。

よく漫画などで、失った後で気が付くことがあるという後悔先に立たず的な台詞が使い回されているが、佳乃のその部分に限っては今思い返しても気が付ける部分なんてなかった。佳乃が俺の教育間違つても調教ではない　　を快く受け入れているような感じにしか見えなかった。

最近、家の佳乃が妙な言葉を言うんです、と佳乃の両親が心配顔でうちの母に相談していたときには背筋が凍るような思いだったが　　つまり背筋が凍るという時点で、自分のしていることが　人道に反しているという自覚は少なくともあったのだ　　何はともあれ、俺の悪癖を佳乃が受け継いでしまったということは誰も気が付かなかった。

というか、　　うすうす気が付いてはいたが、犯人が俺ということなので、将来二人で生きていくんだし、今のうちに主人色に染まっていた方が何かと良いかも……　　などと夕風家と佐々木家の間で俺達の知るよしもない談合があったのかもしれない。

それはそれとして、佳乃はこのまま俺の思い通りに成長していくかに思われたが、さすがにそうはいかなかった。

思春期や第二次性徴期などという気の利いた言葉で片付けることも出来たが、一番の原因になっているのは事故による後遺症だ。後遺症というにはいささか現実離れしている佳乃の二重人格、つまり二番面の人格　ここでは便宜上、裏佳乃と呼ぶ　のせいであった。

初めて発現したのは佳乃の事故の怪我が癒えた一年後のことだった。事故の当時は、此の世がいつ終焉を迎えてもいいと本気で思ってしまうほど悲しかったし、涙も十分に流した。幼い俺の涙腺からあれほど大量の涙が流れたんだから、きっと涙腺というのはきつと際限がないのだろう。涙の流しすぎで熱中症になってしまったりするのあろうか。

そんなことはここでは関係ないが、裏佳乃は突然その姿をあらわした。

アンタ変態じゃないの？

これが裏佳乃の最初の言葉だった。

俺はその言葉を聞いた瞬間に此の世がひっくり返ったのではないかというほどの衝撃を受けた挙げ句、もんどり打って倒れそうになった。

それは前述したとおり佳乃が裏ではどう思っているか分からないという不安ゆえでもあり、佳乃にまさか新たな人格が芽生えているなんて事はつゆ知らなかったわけでもあるから、驚くのは半ば当然というわけだ。

それから俺は失意のどん底を幾度となく幽霊のようにさまよい歩くことになる。

しばらくして佳乃が時々すぐ直前のことなのにもかかわらず記憶にないという不思議発言が相次ぐことになり、ようやく疑問が推測

の域を抜け出した。

裏佳乃発現当初から口調が著しく変わっていたのと、立ち振る舞いも一変していたから、長い付き合いということもあって、俺にはそういった推測が生まれていたのは言うまで もない。

それはそうだろう。

昨日まですごく仲の良かった友人なり親友なり恋人が、次の日に理由なくアンタなんか大嫌いと言われるようなものだ。キスをした後につばを吐きかけられるようなものだ。プロポーズをうけて指輪まで受け取ったのに、次の瞬間婚姻届に判を押さないようなものだ。ものだ、ものだ、ものだ。

面倒臭いので例えば以下省略するが、そういったことがあれば人間誰しも驚くだろう。ならば、多少突飛ではあるとしても、そういう推論が立つのも自然の流れというもので。

そういった経緯もあって、俺の論拠を当の佳乃本人に突きつけてみたところ、表佳乃は知らぬ存ぜぬの一点張り。それではと裏佳乃らしきときの佳乃にそのことを直撃すると、いとも簡単にうなずきやがった。……おっと、言葉が多少汚くなってしまった。

裏佳乃が面倒臭そうに言うには、臓器移植に関しては未だに解明されていない不思議な後遺症があるという。経験したことの無い記憶が脳に存在していたり デジャビュのようなものだな 利き腕が逆になったり、味の好みに変化があったり。

記憶は当たり前のように脳に記憶されるとばかり思っていたから、裏佳乃が言うことはびっくり仰天だった。だとしたら記憶は脳ではなくで臓器にもあるのか……などと考えたりもしてしまう。

裏佳乃もそんな自分の立場には混乱していたらしく、しばらくは発狂寸前にまで至っていたらしい。だとすると俺のぶしつけな質問 お前は佳乃じゃない人間なのか という質問に軽くうなずいて見せた裏佳乃は、そうとうな自己認識、つまりは新たなアイデンティティの確立を経た後の姿だったのかもしれない。

そう考えると、裏佳乃は意外な勉強家だな。

ともかく当時の俺にしてみれば、青天の霹靂だったというわけだ。青天の霹靂……一度使ってみたかった言葉なので許してくれ。というわけで、俺と佳乃の生活は一変したようにみえた。

が、しかし俺は佳乃がいかなる佳乃の時も俺はいつも通りに佳乃に接していたから、俺としては幼馴染みが一人増えたとぐらいにしか感じてなかった。

幼いということは時に人を助けるという事があると俺はそのときに理解した。お医者さんごっこのことを言っているんじゃないぞ。あれは時効だ。

そうして三度の入学と卒業を繰り返し、俺達はいつの間にか互いに惹かれ合ってしまったわけだ。いつだという決定的な事件があったわけではなく、ただ生活していく段階で少しずつ惹かれあっていたのだらうと思う。

吊り橋の法則なんて、ついぞ経験したことはないから、本当に長い時間をかけて蓄積していった経験値を経て、俺と佳乃は恋心というレベルを上げていったのだ。ゆっくりとゆっくりと。それこそ、宮崎県日南市にある鬼の洗濯岩のように、長い年月をかけて形づけられていったのだと思う。

後は追って知るべし。最後の二日間などというくだらなすぎるイベントのあとに、俺は最愛の人をあっけなく失い、今に至るというわけだ。

……………。

………なに、やってるんだろうな、俺。

自分で言っていてよく分らないカオス加減だ。

こんな事を考えても何も変わらないし、なにも始まらないのに。何で佳乃のことを考えると、こんなに饒舌になれるんだろうな。女の子と付き合ったことすらない俺がだぞ？

あ、いや、付き合ったことはある。

悪いが佳乃、俺はお前を彼女としてカウントすることにする。

お前は幼馴染みであり、俺の彼女だった。それで良いだろ。……
なんだろうな、考えると苦しいよ。お前がいないなんて、信じられないんだよ。

俺、お前と過ごしてきた年月だけで結構な量の小説が書けそうだ。

……誰も読まないだろうけどな。

第十三話・「……………パパ」

「毎回、自問自答するんだ」

今にも崩れてきそうなぼろぼろのアパートが目の前にある。

さびた鉄製の階段を上ると、鉄らしい金槌で打つような硬質な音が、朝もやの中に消えていった。

「俺は今まで、人には言えない量のゲームをしてきたが……………」

「人には言えないなら、口に出さないほうがいいと思うよ」

「お兄ちゃん……………どうせ二次元のえつちなゲームだから人に言えないんだよ」

階段を上らずに二人仲良く立っている鹿岡兄妹が、二階の階段を上り終えた俺に鋭い言葉を投げかける。

大人な俺は、それを引きつった半笑いでやり過ごすと、一番奥の部屋へ。

ごみごみした通路には、部屋に収まりきらないゴミ袋や、車のタイヤが散乱していた。

ただでさえ狭い通路がタイヤで遮られているのだ。俺は潜入任務さながらの運動神経で、微妙な角度で積まれたタイヤとタイヤの間をぬって歩くしかない。

どれほどの車好きの住人なのだろうか。タイヤの数だけを数えれば、ゆづに車五台分はあるだろう。

……………ちなみに、鹿岡兄妹が二階へ上がってこないはそのためである。

「仁ー、自問自答は終わりなのー？」

タイヤと格闘していた俺を見かねたのか、右手でメガホンを作った鹿岡兄が、朝に似つかわしくない声を上げる。

「お兄ちゃん、駄目だよっ！ 今は風景描写中！ 地の文と会話文のバランスは大事な。冒頭できちんと説明しておかないと、物語がスムーズに進行しないんだから」

鹿岡義妹にたしなめられ、鹿岡兄は口を自らの手でふさいだ。

「ご、ごめん、真奈美……僕は、そんなことも分からずに」

「お兄ちゃん、次は気をつけてね？」

人差し指をメトロノームのように揺らしながら、ち、ち、ち、と軽く舌打ちをする。

「小説は、シミュレーションゲームと違って背景がないんだから。文章上から、色々なものを読み取らなくてはいけないんだよ。だから、世の中には間違った先入観とか、いわれのない勘違いとかを抱きがちなものがたくさんあるの！」

ない胸を張る鹿岡義妹。

「真奈美……なんか話が脱線してるように感じられるのは僕だけ……？」

なんだろう、階下のやりとりを見てみると朝から怒りが芽生えてくる。

最後に食べようと思って残しておいたショートケーキのイチゴを、口に入れる直前でかすめ取られたような気分だ。タイヤに囲まれているシュールな情景の中で、俺は足下に転がる、あるゴミを発見する。

「そう、だから真奈美は切に訴えるのっ！ 真奈美の身体的特徴は、実はコンプレックスなどではなく」

俺はゴミを拾い上げると、二人の真ん中を狙ってブーメランさながらに投擲した。くるくると見事な軌道を描き、それは鹿岡兄妹の眼前に軟着陸する。長方形、かつ硬質、直線的で、丸みもふくらみもない、薄っぺらで真っ平らな……。

「あ……まな板」

「真奈美はまな板じゃない！」

鹿岡兄が戦慄する。気がついたときには、時すでに遅し。

他意のない言葉を訂正する暇も、義妹は与えてはくれない。

短いスカートが風の抵抗を受けてふわりと膨らむ。深く腰を沈めて打ち出された義妹の正拳突きは、兄の制服をかすめていく。コンマ一秒反応が遅れていたら、危なかっただろう。風を切る一撃は、鹿岡兄の焦りを誘う。

「謀ったな！ 仁！」

俺はにやりと笑う。

「さて、何のことだか」

俺のしてやっただけの笑みに歯ぎしりをする鹿岡兄。だが、今は悔しがっていていいときではない。コンマ単位で襲いかかる必殺の一撃が、鹿岡兄の思考までをも貫いていく。

考える暇は皆無。考えるよりも早く、反応しなければならない。

考えるな、感じる。

鹿岡兄の集中する横顔がそう語っている。

「お兄ちゃん、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿っ！」

一秒間に幾度となく繰り出される神速の拳。

髪の毛を切り裂き、飛び散った汗の雫を破裂させる。視界を両断し、風切り音は耳へ衝撃の余波を伝えた。

「意地悪！ 唐変木！ 朴念仁！ 天の邪鬼！」

顔面へ繰り出され続ける目にも留まらぬジャブの応酬に、鹿岡兄は上半身を傾げるだけで精一杯のようだった。その上半身の動きを支えるのは、間違いなく鍛えられた下半身だ。

バランスよく鍛えられているから、上半身を生かすことが出来る。鍛え上げた上半身があっても、それを支える下半身がなければ無意味なのだ。全身を使った格闘技ほど、それが顕著に表れる。

踏み鳴らされる大地。攻守を含めて刻み込まれる足跡は、それをよく証明している。

「分からず屋！ ちんどん屋！ 恥ずかしがり屋！ 皮肉屋！」

このわずかな時間で、鹿岡兄が五感で得た情報とは。

視覚。拳をかすませる高速攻撃の映像。

聴覚。切り裂かれる度に断末魔をあげる空氣の音。

味覚。極度のプレッシャーさらされ過ぎて、乾いてしまった口内

の味。

嗅覚。戦つてはいけない。歴戦の強者だけが得られる勝敗の嗅覚。触覚。鹿岡兄は、文字通り身を以て知ることになる。

「もう起こしてあげない！」

「うん……自分で起きれるし」

「うわああああんっ！」

兄の淡泊な反応に、義妹号泣。

涙が頬を伝うよりも早く、鹿岡義妹の体が大地に吸い込まれる。地面に座り込んだのかと錯覚したが、そうではなかった。涙は上空に置き去りだ。砂埃を巻き込むように、背中を向けながら回転。鹿岡義妹の髪の毛が、そんな彼女に華麗に従う。一方の足をたたみ、もう一方の足は最大に。高速回転したしなやかな足が、刈り取るように鹿岡兄の足首を強襲した。

執拗な顔面への攻撃が、膠着状態への打開策。

つまり、布石。兄の意識を上半身へそらすための。

「真奈」

妹の名前を呼ぶ兄の言葉の最初と最後は。

「美！」

まさに希望から絶望へと変わるスイッチ。

足払いをともに受けた鹿岡兄の苦痛の表情が、空中に投げ出される。大地から離れた体は、無防備な体勢のまま。

鹿岡兄は重力に身をゆだねるしかなかった。あるいは、目の前の

義妹に。

時間が引き延ばされる。

朝の光にきらめく義妹の髪の毛が見えた。山の奥地で湧く清流のように美しい。制服のスカートは、遠心力を得て、菊の花のように可憐に咲き誇る。足払いの回転力をそのままに、さらに一回転。さらなる力を蓄える。奇妙なもので、フィギュアスケートのアクセルジャンプのように思えた。義妹は二回転目で体を起こし、十分な力を得た体の力を解放する。ジャンプが決まり、着地と同時に足を伸ばすフィギュアスケートの選手が、まさに目の前で勝負を決めようとする鹿岡義妹に重なって見えた。

最後に感じた触覚。

鹿岡兄が得た情報は、特大の痛みだったはずだ。体を突き抜けるのではないかという衝撃。映像に遅れて、気持ちの悪い音が俺の耳に届く。

「……痛そうだな」

鹿岡兄の内蔵は大丈夫なのだろうか。

地面を滑っていき、生け垣に体を埋める鹿岡兄を見る。生け垣から足だけを出す格好で痙攣する鹿岡兄は、驚きを通り越して哀れすら誘う。

「きゃあっ！ 大好きなあまり兄ちゃんを！」

愛情表現にも限度があるぞ、鹿岡義妹。

「……ま、とにかく」

日常の枠を越えた兄妹を堪能した俺は、際奥の部屋にたどり着き、チャームに指を伸ばす。

「俺は人には言えない量のある種極端なゲームをしてきたが……」

薄汚れた表札には、山田の文字。

「普通、立場が逆じゃないのか？ ……うん、間違いない」

自問自答、終了。

ぴんぽん。ぴんぽん。……チャイムを鳴らすが反応がない。何度か繰り返しても同様の反応しか示さないの、扉に耳をあてて、中の様子を探ってみる。

「生体反応なし」

腕を組んで思考すると同時に、左手首に巻かれた腕時計に視線を落とす。遅刻までは、もはや一分一秒を争う状況だ。なりふり構ってはいられない。

「ウメ、悪いが入るぞー」

ウメの部屋にはいつも鍵がかかっているないので、俺は一度大きな声を上げてからノブを回した。もちろん、声をかけてから数秒待った。声と同時に入って、着替え中の女の子とご対面……というベタなオチは、すでに幼馴染みで経験済みだ。まして、それほど仲の良くない女の子であるならば、それは当然のことだった。

俺は、時と場合と人を考えてのぞくことの出来る、非常に誠実な人物だからだ。

我ながら、紳士的で素晴らしい。

「ウメー、起きてるのか？ 早くしないと遅刻だぞー」

朝だというのに真っ暗で、どんよりとしている室内。衛生的にも、印象的にも、絶対に好印象を与えないだろう。

「……ウメ？」

俺は靴を脱いで、一人暮らしのキッチンを横切る。索敵しながら進む俺を客観的に考えると、初めて探索するダンジョンのようだった。宝箱を全てとってからでないと先へ進もうとしないゲーマーくらい、神経質になっている。

唐突に、足下で何かがうごめいた気がした。

「こ、これは……！」

真っ暗闇の室内に浮かび上がる白くぼんやりとした姿。床に広がる長い髪の毛が、真っ赤な血のように思えて不気味だった。

「……どこからどう見ても、ウメだな。今更驚くまでもなく……。おい、ウメ。こんなところで寝てると風邪引くぞ。というか、起きろ」

玄関を開けると、そこには倒れた女の子。どこからどう見ても、事件発生としか思えない状況だが、俺は至って冷静だった。

……ウメの姿を見るまでは。

「こ、こいつ……！」

床に横たわるウメの肩を揺さぶろうとしたとき、俺は伸ばそうとした手を止めることしかできなかった。

「なんて格好で寝てるんだよ……」

座り込んで見てみれば、下着に、ワイシャツ一枚。細く小さな体を包みこむ、大人物の地味なワイシャツ。袖から手は出ておらず、袖の中程を握りしめて眠っている。第三ボタンから留められているせいか、首筋から、鎖骨、そして控えめな胸元、それを覆うフロントホックのブラ……と順を追って露わになっている。水滴を垂らせば、きめ細やかな肌の張りに勢いよく滑り落ちていきそうだ。

良くないと分かっているながらも、そんな俺の視線も滑り落ちる。

ボタンで止められているのは、第三、第四ボタンの二カ所のみで、残りは止められていない。つまり、脂肪のないお腹すら丸見えであるわけで。さらに付け加えさせてもらえば、シャツ一枚を羽織っただけなので、下半身にまとうのは純白の……純白の下着のみ。真っ白な肌にまとうのは、ほとんど無地の色気も全くない下着。それはそれで、今時見かけない無垢な白さを感じられる。

汚れ一つ無い、太ももからふくらはぎのなだらかなラインは、闇夜に光る刀の切っ先のように鮮やかに目に飛び込んでくる。

触れたらきつと柔らかいだろうと思える反面、すぐに跳ね返してくるような弾力を持っているに違いない。

……と、こうしてじっくりと眺めてしまったわけだが、視姦……もとい、観察されている本人は全く動きを見せない。

「おい、ウメ」

肩を揺り動かそうとするが、あまりの無防備な姿に、俺は触れるのをためらってしまう。下手に意識をしないほうがいいのだが、一度意識してしまったものは仕方がない。

「あんまり起きないと、いたずらするぞ」

うん、今のは我ながら犯罪に近いな。

「……でも、出来そうにないな」

犯罪的な言葉を言ってみて、それがよく分かった。

目の前に、食べてください、といわんばかりの姿で横たわるウメの姿を見ても、欲情一つ覚えないのだ。

小柄で、童顔で、無愛想な同級生が、大人の魅力に欠けるから。そんなありきたりな理由を思い浮かべてみるけれども、顔の作りは天下一品なのだ。普通の男なら、欲情して当然だろう。

考えてみれば、ウメは今時なかなか見かけない、いにしえの美しさをもっている。

深窓の佳人。つまりは身分違いで、大切に育てられ、世の汚れに染まらない美女。

未発達な体であるが故に、その美しさは一層際だつ。大人になるにつれて、失われていく純真さや、体の細さが、まるで時を止めたようにここに存在しているのだ。

世の中の汚さを知らないような天使の寝顔。

起きれば無愛想の固まりなのに、眠っている今だけは、不思議と安らかだった。

考えたくないが、俺の男性機能が退化してしまったのだろうか。若い身空で抱えたくない切実な悩みに、俺は慌ててウメを凝視してみる。安らかな寝顔を見、ワイシャツからのぞく胸元を見、すらりと伸びた足下を視線でなめてみる。

警察官が職務質問をしてきたら迷わず、私は犯罪者です、と答えることを胸に誓ったうえで、ウメを見つめ続ける。

……けれど、それでもだめだった。

美しさや、はかなさを感じることが出来ても、欲望を感じることにはなかった。俺は大きなため息をついて、その場を立ち去ろうとした。……この際、ウメのことはあきらめてさっさと学校へ行こう。

嫌われるなら嫌われるでいい。

嫌われていた方が、はつきりしていて気分も楽というものだ。起こしに来るといふ日課が始まったのも、まだ三日目だ。今なら、三日坊主で片が付く。

「悪いなウメ」

俺は立ち上がって、ウメに背中を向けた。右足を踏み出して、左足を前へ。

……けれど、左足は釘に打ち付けられたように動かなかった。何かに引っかかったのかと思って振り返れば、眠ったままのウメが俺のズボンの裾をつかんでいる。起きている様子はないから、寝ぼけているのだろう。

「……ったく」

俺は再度座り込んで、ウメの手をほごうとする。

「………ば」

小さな寝言。ウメの手に触れたところで俺は動きを止めた。

俺の手がウメに触れるやいなや、つかんでいた裾を離し、俺の手を握りしめてきた。眠っているとは思えないぐらい、力強い握力。決して離してはならないと、夢の中で思っているのだろうか。聞き取れなかった寝言が、ウメにどういった感情を抱かせているのか、すぐには理解できなかった。

「……………パパ」

胸がつぶれるかと思った。俺は無意識のうちにウメの手を強すぎ

るくらいに握りしめていた。

「パパって何だよ、パパってさ……こんなに若い奴を捕まえて」

ウメの目尻で信じられないものが輝いている。大粒で、透き通ったそれ。

たとえるなら、夜空の中心を飾る北極星。

たとえるなら、一カラットのダイヤモンド。

たとえるなら……佳乃の笑顔のような。

「くそ……朝からかよ……」

胸の奥でため込んで、ずっと我慢してきたものが、不意に飛び出してきて俺を襲う。

寂しさや、悲しさ、辛さが、一緒くたになった、薄汚れた感情の波。

絶望。

黒い服を着た友人達や、先生方、家族の姿が脳裏を横切る。

いつも見ていた幼馴染みの笑顔が、数え切れない花束の真ん中に飾られている光景。その光景が信じられなくて、写真とにらめっこをしてしまった滑稽な自分。これは現実ではなくて、にらめっこをしなければ、そのうち彼女の方から負けを認めて笑ってくれるんじゃないかって。

無表情でにらみ続けて、眺め続けて、ずっとずっと見続けて。

でも、結局、俺の負け。

勝算なんかはじめからなかった。写真とにらめっこをしたって勝てるはずないって事ぐらい分かっていたんだ。それでも、俺は見続けた。涙を流すことすらしないで。感情を腹の奥にしまい込んだん

だ。

「大丈夫さ……耐えられる」

腹部に力を入れて精神を集中させる。外側からドアを押し込んで、内にとどめる。今にも飛び出してきそうな濁流をせき止める。

大丈夫だ。俺は大丈夫。今回も、耐えることが出来た。

「……ったく、お前のせいだぞ」

ウメの手をゆっくりとほぐすと、大きく二回深呼吸をした。

胸の奥に追いやった絶望は、これでしばらくは出てこないはずだった。けれど油断は大敵。またいつどこで襲ってくるかもしれない。

「俺は怒った。やっぱり、いたずらしてやる」

俺は眠り姫に手を伸ばすと、第二ボタンの向こうにあるフロントホックのやや上に触れてみた。

そこには、かつて俺のそばにいた、かけがえのない少女がいる。

とくん、とくん、とくん、とくん……。

「今日も元気そうだな、佳乃」

少女がウメの中で元気に跳ね回っていた。
ふいに顔がほころんでしまう。

「……んっ……佐々木……？」

やっとお目覚めのようだった。慌てて手を引っ込める事もしない。

それは、決して犯罪行為に慣れっこだとか、そういった類のものではない。

「佳乃は今日も元気そうだな」

「私、まだ生きてるから」

予想していたとおりの無愛想な声で、ウメが応じる。俺に胸を触られているのを気にもせずに、ゆっくりと立ち上がる。

「ウメ、いい加減遅刻だぞ」

「……ごめんなさい」

心のこもっていない言葉だ。ただ、それはあくまで俺の主観によるもので、ウメ自身は心を込めているのかもしれない。いつでも、どんなときでも平板な声だから、感情の大小は全く読み取れないのだ。

「外で鹿岡兄妹も待つてるんだぞ」

腰に手を当てて不満顔を見せつけてやる。

「私、迎えに来てなんて言っていない」

俺に背中を向けて着替え始める。

「お前な……そういうこと言うなよ。願わずに来てくれるだけでもありがたいってもんだろ。むしろ俺の立場を考えてみる。普通、立場が逆だぞ。『仁君……起きて、ねえ、起きてってば!』って、優

しく起こしてくれるのが、スタンダードってもんだ」

ウメは、上半身を覆っていたワイシャツを脱ぐと、真っ白で一本線の通った美しい背中が披露される……って。

「お、お前……ウメ！」

悠長に情景描写をしている場合ではなかった。

「私、着替えてるの。邪魔しないで」

その声はやっぱりフラットで、感情の起伏は見られなかった。羞恥心はおるか、慌てることさえ知らない。俺の制止も何のその。背中を向けたまま、フロントホックのブラすためらいもなく外し、上半身にはまとうものをなくした。

綺麗だな、と思う一方で、そこには何の劣情も感じなかった。美術館で絵画を眺めるようなものに近い事に気がつく。

「外で待つてるぞ」

やはり高ぶらない欲望の心に落胆しながら、俺はあきらめて外へ出て行くのだった。

「分かった」

その声にも、やはり抑揚はなかった。

第十四話・「齒」

「……パパ、ねえ」

授業中、俺は隣に座るウメをちらりと盗み見てつぶやいた。夢にも思ってみなかった単語が、ウメの口から飛び出したのだ。寝言とはいえ、にわかには信じがたい。

ウメは、そんな俺の胸中などつゆ知らず、黒板に文字が書かれている様子もないのに、すらすらとノートに書き込んでいる。

俺は首を伸ばしてノートの中身をのぞき込むと、そこには先生が話している授業内容を書き留めている。黒板に書いた事項だけではなく、先生の言葉の端々にまで神経を行き渡らせているということか。

「……勉強熱心なことだ」

「授業は社会に出るために必要なの」

ノートに落としていた瞳の行く先を俺に変更する。顔を動かさずに、瞳だけ動かすものだから、その強烈な瞳の強さに、俺は少しだけうろたえる。

「ず、ずいぶんな地獄耳だな」

だとしたら、俺がパパとつぶやいたことも聞こえていたのだろうか。パパの真相を聞きたい俺にとっては、願ってもないきっかけが飛び込んできたということだ。

よし、ここは思い切って聞いてみるか。

しかし、それは有無を言わず、ウメの言葉によってたたき落と

される。

「勉強をしなければ、いい大学に進学できない。いい大学に進学できなければ、いい会社に入れない。望んだ職業に就けない、夢も叶わない。取り立てて才能のない人間が夢を叶えるにはこれが一番良い方法。残念だけど、これが現代社会のシステムだから」

癪に障る言い方だ。

「はいはい、建設的なご忠告痛み入るよ」

心音グラフで表現するならば、まさにご臨終。左から右へ、一直線に伸びていくだろう声の強弱。

「分かったら、少し黙ってて」

「……へいへい」

俺はほおづえをついて、黒板に向き直る。授業開始直後からページの変わらない古文の教科書にため息をこぼし、仕方なく教師に目を向ける。

それがあだとなった。

「よし、佐々木、次読んでみる」

目が合ってしまったことを良いことに、教師はにっこりと笑って俺を指名してきた。あの笑みは、俺が授業を聞いていなかったことを知っている笑みだ。

くっ……不当な権力の行使に、俺は屈してしまうのか。

「どうした、佐々木。早く読まないか。それとも何か？ 佐々木はこんなところなど読まなくとも分かるんだな。退屈そうにぼけっとしていられるんだから、当然だよな？ ついでだから、口語訳も一緒に行ってもらえると先生助かるんだぞ？」

意地が悪い古文教師が、にやついた笑いを浮かべている。

もちろん、授業を聞いていなかった俺が教科書を読むことも、口語訳することも出来るはずなくて。

俺は、クラスメイトの前で恥をかかされるしかない。数秒後に待つ、醜態に耐えるために唇を噛む。

「……………佐々木」

嫌らしく言葉に強弱をつける古典教師のものではない、おそろしくフラットな声。風が吹けば今にも飛ばされていきそうな、静かな声が、俺の耳に入り込んだ。

「……………あ、い、今読みます」

俺は慌てて教科書をめくると、目的の箇所を目を止める。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし……………」

読み慣れない古文独特の文章に舌を噛みそうになる。

ふと、視線を古文教師に向ければ、俺を馬鹿に出来なかった悔しさか、苦々しい顔をしているのが分かった。優越感に浸りたいところだが、もともと悪いのは授業を聞いていなかった俺なわけで。

「……その、あるじとすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるいは花しばみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし」

「……よし、いいだろう、座れ」

発散できなかったストレスをため息にして、古典教師は俺を座らせた。怒りの矛先は、どうやら別の生徒に向かってしまったようではげげとした女の子がその犠牲となっていた。

「早坂、今のところの口語訳を試みる」

「あ、当たってしまいましたですう……」

久しぶりに五体満足で登校している桐岡が、ほっと胸をなで下ろしているのが確認できた。どうやら、現在の授業内容を見失っていたらしい。慌てて『方丈記』のページを探していた。俺は、そんな二人の姿に苦笑いしながらも、隣に座るウメに声を掛ける。

「……ありがとな」

「別に。授業の進行が妨げられるのが嫌だっただけ」

相変わらずの声と態度で、机の端に寄せたノートを手元に引き寄せる。ノートの左隅には小さく丁寧な文字で、ページ数が書かれている。俺は教科書をめくる間にちらりと視線を落とし、そのページ数を確認したのだ。

「……な、流れゆく……河の水の流れはあ……」

「おい、早坂！ もっと語尾をきっちりと区切って読めんのか！」

教師と早坂美緒のやりとりに、クラスメイト達が笑いをこらえていた。

「は、はわっつ！ すみません……うっ……流れゆく……河の水の流れはあ……」

「早坂！ お前は日本語が通じないのか！ いいか、先生がお手本を聞かせてやる。よく聞け。流れゆく、河の水の流れは……」

一方のウメは、俺のカンニングに使った文字を消しゴムで消している。力を入れ過ぎか、ウメの小さい手で握られた消しゴムが、机の下に転がり落ちてしまった。

「あ……」

ウメの細い声が聞こえるのと同時に、俺は消しゴムを素早く拾い上げると、ウメの机の上に置いてやる。ウメはしばらく、置かれた消しゴムと俺の顔を交互に見比べて、そして。

「……ありがとう」

何かを隠すようにしてそつばを向いてしまった。耳たぶがほんのりと赤に染まっている。格好悪いと思っっているのだろうか。それとも、人に説教した手前、ドジなどところを見せるのが恥ずかしいのだろうか。どちらにせよ、これで俺の中のウメに対するいらだちは相殺されてしまった。

男とは本当に単純な生き物だと、俺は自分の身をもって証明して

しまったわけだ。我ながら、少し情けなくなる。

「……と、このように語尾をきっちり止めて音読するんだ。もう一度言ってみなさい」

語尾を伸ばさずにきっちり止めるという持論を一通り説明した古典教師が、同じように読めと促す。

「流れゆく……う……河の水の流れは……あ」

違うな、何か違うな。うん、絶対に違うぞ。これは、あれだ。しやつくりを必死に我慢する感じた。一言で言えば、苦し紛れ。時間差を利用しての苦し紛れだ。

「ふん、やれば出来るじゃないか」

「や、やっと終わりですう……」

「では、その調子で、もう一度最初からだ」

残酷な一言。楽しいおもちゃを見つけたような教師の目。

「は、はじめから……はうう……」

肩を落とす早坂美緒。その後方には、未だに目的のページを探し当てられない美緒係の桐岡がいた。彼は必死に現代文の教科書をめくっている。

……うん、多分この時間中には見つけれないな。

「どうした早くしろ、早坂！」

「……語尾を止める、語尾を止める語尾を止めるのですう……」

どうやらイメージトレーニングをしているらしい。念仏のように自分に言い聞かせている。どこか頼りなさげなのは、良くも悪くも個性だ。

「……。……流れゆく、河の水の流れはあ」

元に戻っていた。

「早坂あ！」

教師の怒声が教室中に響くとともに、隣で座るウメがぼそりと言。

「……間抜けな人」

早坂美緒に向かってぼそり。

「歯に衣着せない言い方するな、お前は」

「奥歯に物が挟まるよりはマシだから」

言い捨てて前を向く。俺を相手はしないという意思表示にも感じられる。

「ふん……歯牙にもかけないって感じだな」

「目には目を歯には歯をが私だから」

いつの間にか『歯』の付く慣用句でパンチを打ち合う俺とウメ。

「あゝ……歯がゆい」

「歯止めがきかない」

やっと見つけた歯のつく慣用句だが、即答で返されてまた俺の番。ウメの姿を横目に見ていたら頭にふと浮かんできた。黒板を見つめるウメの美しく澄んだ瞳と、口を開くと時折見える歯並びの綺麗な白い歯……。

「うん、明眸皓歯とはこのことかな」

「……」

ウメがちらりと俺を見る。その瞳は訝しげだ。今更言葉の意味を思い出してももう遅い。

「い、今のは別に……お前のことを言っただけじゃないぞ」

歯の浮くような台詞を言ってしまった自分に恥ずかしくなる。

「知ってる。それに、はにかむような顔、面白かった」

人の顔を面白いとは、失礼なやつだ。

歯ざしりする俺のすぐ横で、ウメは教科書とノートをぱたりと閉じる。授業の終わりまでまだ十分ほどあるが、彼女はどうやらこの状況が続いて、授業がつぶれてしまうと予想したのだろう。

まあ、事実そうなってしまったのだが。

「早坂あ！」

「は、はわっ！」

まだやっていたのか、早坂……。

余談だが、桐岡は最後まで鴨長明を見つけれなかったとき。

第十五話・「せうんぱいっ!」

今日も今日とて一人の昼食。

屋上に登り、太陽を眺めながらのんびんだらりとサンドイッチを頬張るのは、のどかで平和な反面、どこか物寂しい。

「……うん、うまい」

購買部で買ったカツサンドは確かに人気商品だけあっておいしさは際だつ。カツに染みこんだソースと、周囲を包む衣の絶妙なハーモニー。

まさに、鬼に金棒。

けれど、鬼の目にも涙が光り、金棒はさびて使い物にならない。それほどまでに俺の舌を肥えさせた料理が、この世に存在していたことを俺は知っている。

この舌で、この歯で、目で、鼻で、俺は幾度となく、当たり前のようにその味を楽しんできた。学校で一、二を争う大人気商品すら凌駕する味に、俺は慣れすぎてしまった。

そのせいで、俺の味覚レベルのデフォルト数値が高めに設定されてしまったらしい。カツサンドですら、デフォルト数値をやっと上回るくらいだ。

誰がこんな俺にした？ 誰が俺を味にうるさい男にした？

「うまいな……このカツサンド……本当にうまいぞ」

満腹感は、確かに腹に溜まっていくけれど。

満足感は、一向に腹に溜まっていつてはくれない。

幸福感は、一向に腹に溜まっていつてはくれない

「あまりのうまさに感動して、涙すら出そうだぜ……」

頬は確かに喜んでいる。おいしいと訴えてくる。

「おーい、卵焼きが食べたいぞー……」

お袋の味ではない、幼馴染みの味。

それが恋しくなって、俺は青空に弱々しく叫んでみた。

青空は簡単に俺の声を飲み込んでしまう。

空はどんな胃袋をしているのだろうか。

人間がどんなに汚い物を排出しても、それをまずいとも言わずに大量に頬張ってしまう。

時々お腹を壊してしまって、ゴロゴロと何百万五ボルトという電気を伴ってお腹を鳴らしてみたりするのは愛嬌。けれど、お腹を壊した後は、決まって綺麗な笑顔を見せてくれる。にっこりと雲一つない笑顔を向けてくれるのだ。俺もそんな胃袋が欲しかった。

雨が降ってもいつか必ずあがって、雲間からは綺麗な光をのぞかせる。やがて、雲が全て消え失せて、本当に美しい蒼穹を見せてくれる。

いつかは必ず笑うことが出来る。

そんな確信を持つことの出来るこの空を、俺はとてもうらやましく思うのだった。

「ああ……くそっ……」

俺は青空の下で、うずくまる。

黒い、とても黒い感情が流れ出してくる。

胸の中心、みぞおちの一番奥。そこにもう一つの心臓があるようだ。どくん、と大きく高鳴ったかと思うと、ポンプが急速に稼働しだして、体中に黒い液体を供給しようとする。

肺に染みこんで、腹に落ちていって、指の先からつま先、頭のてっぺんまで。

……黒い闇に覆われそうになる。

「まだ……う……ぐっ……」

痛みはない。でも、大きく欠けた空間に、次々に入り込んでいく汚染された水。

ぽつかりと空いた場所。心の隙間。

かつて二人の少女がそこにいた。二人だけがそこにいることが出来た。その存在があまりにも大きすぎたから、いざそこにもなくなると、あまりにも大きな空虚が出来た。地球から太平洋がなくなつたようなものだ。

……すると、心は自動的にある対処をする。

欠けた隙間を埋めるために、必ず別の物で埋め合わせをしようとするのだ。

「いい加減にしてくれ……！ たのむから……」

空虚は悲しみでのみ埋められる。

存在していた物が欠けたとき、そこには負の感情だけが注がれていく。それ以外には何もない。

つまり、感情とは液体なのだ。

喪失感という虚空の中には、膨大な量の絶望が、悲しみが、憎しみが注がれ、満たされる。絶望が溜まりに溜まっていって、あふれ出す。

「大丈夫だ……耐えられるさ」

収まり切らなくなって溢れたものを、俺はこうやって耐えるしか

ない。

無限にわき出して虚空に注がれていくから、いつまでたっても枯渴しない。

一生、俺は耐え続けるんだ。

二人を失った悲しみに。二人を奪った人間への憎しみを抱えながら。

「慣れても良いはずなんだけどな……はは」

絶望で潤った体内とは対照的に、乾いた笑いがこぼれた。

「このまま一生苦しむんなら……いつそのこと」

一瞬、絶対に考えてはいけない安易な道に足を踏み出そうとする自分がいた。俺は驚きのあまり、屋上に仰向けに転がるしかなかった。

「何考えてるんだ、俺……シャレになんないよ……はは、ははは」

それでも青空は俺の自嘲を食べてくれる。きっと不味いに違いなのに、嫌だと言わず食べてくれる。

あ、そうか。だから、人は空に向かって叫んだり、空を仰いだりするんだ。

空になにかもを飲み込んで欲しくて。

……俺もいつか、叫べる日が来るのだろうか。恥も外聞もなく、自分の感情を、悲しみを爆発させるときが来るのだろうか。

空になにかもを飲み込んで欲しくて。

「せーんぱいっ！」

「……ゲ」

仰向けの視界に、逆さまに飛び込んできた顔を見て、俺は毒づいた。

中腰になって俺の顔をのぞき込んだのは、一つ年下の下級生。

短く切られたボーイッシュな髪が太陽に反射してきらきらと輝けば、同じように、くりくりとした子供のような目も喜びに輝く。まなざしに期待が込められているせいかな、どこかその物腰は主人にすり寄ってくる子犬を思わせた。頭には犬耳が付いていて、お尻ではしっぽがふりふりと揺れている……そんな感じの。少女のすつきりとした輪郭や、飾り気のない無垢な素顔は、自らを偽ることを知らない無邪気さを思わせた。それは、女つ気のあまりない、つまりは凹凸のない子供っぽい体格のせいかもしれない。

「ひどいひどいひどいですよ先輩！　こんな可憐かつ無邪気で純真な女の子に向かって、ゲ、はないですよ！　ゲは！」

ころころと表情を変化させる様は、ウメとは正反対だ。まるで体格が一緒で、性格だけが異なったよう。ボディランゲージも大げさで、物静かなウメとは似てもにつかない。

まるで、オセロの表と裏だ。

「じゃあ、ゴ」

俺。

「……むむっ、ガ」

少女。

「ギ」

俺。

「ビ」

少女。

「バ」

俺。

「あ、あの〜先輩？ 一つ聞いて良いですか？ この遊びが何の遊びなのか杏里あんりは知りたいです。好奇心が旺盛でワクワクテカテカです」

杏里は両手を祈るように重ね合わせると、きらきらした瞳で俺を見上げてくる。

「よし、特別にみんなには内緒という条件で教えてやる」

杏里の周囲に花畑が広がったようだ。俺の言葉を発端として、彼女の笑顔がはじける。

「内緒ですかっ！？ それはシークレットでドキドキで胸がきゅんとなる二人の秘密という禁断の甘い果実ですね？」

「そうだ、そのあれでカムサハムニダ」

「ふふふ、先輩、日頃から私を避けているのは愛情の裏返しなので

すね？ やっぱり杏里の思った通りだったのです。可愛い子には旅させよ。獅子の子落し。嫌よ嫌よも好きの内……という、思春期的スカートめくりの法則ですね！」

まくし立てる杏里を、両手を使って落ち着かせる。

「よし、いいから落ち着いてよく聞け。これはなかなか難しい遊びだ。なめるとやけどするぞ」

俺は出来るだけ真剣な顔を作るように心がける。

「ごくり、杏里はつばを飲み込んだ、です」

なぜか一人称風味につぶやき、自らの解説通りつばを飲み込む不思議少女。

「まずは屋上のドアの方を向くんだ。そして、ドアに向かって歩いていく」

俺は屋上のドアを指さし、眉に力を入れて解説する。

「せ、先輩、これで良いんですか？」

「よし、いい子だ。そしてドアのノブを握ったら、右に回して校舎の中に入れ」

空気をつかんで右に回してみせる。杏里は俺の言うことに従順に従った。

「杏里は一体どうなってしまったのでしょうか！ 良いところでお預け

なんてドラマ的な演出はいりませんよ、先輩！」

「ふふふ、まあ、そう焦るな。ここからが良いところだ。校舎の中に入ったら、全速力で教室に戻り、自分の席に座って三十分待つんだ。そこには、めくるめく出来事が待っているぞ」

口の端を持ち上げて、にやりと笑う。そんな俺を見た杏里は、好奇心という唾液を今一度、飲み込む。

「めくるめく……せ、先輩……！ それはゲームで言うところの某推奨年齢判定機構がZで規制してしまうくらい妄想と欲望のピンクの板ばさみなエログロナンセンス的なものなのではっ!？」

「分かったら、さっさと行動するんだ」

人差し指を唇に当てて、沈黙を指示してやる。すると杏里はさらに目をきらきらとさせて、まるで雲間から顔を出した太陽のように表情を輝かせる。

「は、はいっ！ この中村杏里、代えたくないけど命に代えて誰よりも早く教室にたどり着いて見せますっ！ 杏里の道も一歩からですっ！」

握り拳を突き上げる杏里に、俺は頬が引きつるのを我慢するのがやっとだった。

「あ、あの先輩！ 今のネタ、つつこむところですよ！」

「ナンデヤネン」

校舎内に消えたと思っていた杏里が再び屋上に現れたので、俺は機械的に笑うしかなかった。

「では、めくるめく世界へ突貫します！」

一陣の突風を残して、杏里は階下に消えた。杏里が去った屋上は、まさに台風一過。

木枯らしが、枯れ葉をくるりと一回転させるような感覚だった。

「……………さて、帰るか」

俺はふと胸に手をあててみる。

いつの間にか、俺を覆っていた黒が薄れていた。でも、俺が薄れていると気が付くと、黒は活動を再開しようと身じろぎした。

俺は腹部に力を入れて身構える。けれどそれは、屋上の扉を破壊せんばかりに突入してきた人間によって、吹き飛ばされることになる。砂煙を巻き上げて走るようなけたたましい足音。あまりの音に耳を押さえようと思った刹那、それは出現した。

「先輩先輩先輩！ 杏里は気が付きました！ 先輩は杏里をだましたのでありますか！」

「だまされる方が悪い」

「ひ、ひどい仕打ちですつ……………杏里がドMでなければ、泣いて先生に言いつけるところですよ？ 危なかったですね先輩っ！」

自分の性癖を暴露する杏里に、俺は新たに頭痛を覚えた。

「危ないのはお前だ」

「杏里をこんな体にしたのは先輩じゃないですかっ！」

「人聞きの悪いこと言うな！」

「もう、先輩じゃなきゃ駄目なんですっ……」

「物欲しそくに指をくわえるな！ 体をしならせるな！ 涙目で懇願するな！」

誰かに聞かれていたら一大事だぞ。

俺は屋上をきよるきよる。よかった、誰もいない。

「むうっ……だったら先輩っ！ 私をとるか、このお弁当をとるか二つに一つです！」

「いつから世界はそんな不条理になったっ！？」

見れば、手には二つのお弁当。そこは女らしいというか、かわいらしい袋に包まれている。

……不意に胸が、黒い感情ではない、懐かしい感動でうずくのが理解できた。

俺はそれを一瞬では理解することが出来なくて、思わず飽きたふりをするしかなかった。

「でないと、先輩とのアムール（愛）な日々を綴った赤裸々杏里日記を新聞部に譲与します！」

「ゴシップ!？」

「ふふふ、先輩、大衆は時に真実よりも虚像に希望をたくす愚かな集団なのですよ……」

独裁者のそれだ。

「く……分かった、百歩譲って弁当を選択してやろう。ちなみに、不味かったら食べないからな？」

俺は杏里の視線に少なからず恐怖を覚え、後ずさったのちに承諾してしまう。数秒前に訪れた懐かしい感情が、俺を妥協へと導いてしまったのだ。

「もちろんです！ 最低限の人権です！」

弁当をもったまま腕を組んで、小さな体を大きく見せる杏里。

彼女は……料理がこの上なく下手。そしてなにより、この中村杏里という少女は、俺が苦しいときに限って現れる、何ともいえない救世主だった。

……呼んだわけでもないのに。必要としたわけでもないのに。なぜかいきなりやってきて、いきなりこのような日々が始まった。俺はおそろおそろ唐揚げらしき物体を持ち上げて、口の中に放り込む。

その味は、黒い感情すら、諸手をあげて逃げ出すほどだった。

「最高に不味いっ！？ まさに塩と唐辛子の織り成す最強の断末魔っ！？」

「……やっぱり。てへへ」

杏里は舌を出して笑っていた。

この確信犯め。

第十六話・「……ストーカーめ」

俺は校門の陰に隠れて、前方をゆく小さな人影の様子をうかがう。どうやら目標は、繁華街に移動しているようだ。

俺は従える部下に指示を与えるべく、壁際で握り拳を突き上げる。部下は俺の指示を理解したようで、壁際に体を寄せて待機する。

俺は目標と、ある程度距離が出来たところで、突き上げた握り拳の人差し指を立てて、空に向かってぐるぐると回した。指示の意味するところを言えばこうである。

俺から離れるな。

「先輩先輩先輩！ それは杏里に対する愛の告白と受け取ってよいでありますか！」

唯一の部下である杏里が、任務を忘れて飛びついてくる。

「その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？ はい！ 杏里は誓っております！ 大尉殿も誓いますよね？ ね？ ね？」

自作自演もお手の物。

言葉の途中で、髪の毛の隙間から犬耳が、ぴょん、と言う擬音語を伴って跳ね上がった。スカートからはしっぱが飛び出して、嬉しそうにふりふりと揺れている。もちろん、錯覚だ。俺にそんなコスプレ趣味はない。

……むむ、でも考えたら似合うかも。

一言で言うならば、あ、杏里犬……？

俺の嗜虐心がざわめき立つ。なんかこう理不尽にいじめたくなるな。

「い、いま、杏里のM型レーダーが身の危険を察知したであります！ 杏里のかなり身近にまで危険が迫っていることを察知したでありますよ！ どうしましょう大尉殿っ！」

「うるさい、黙れ、上官命令だ。出来るなら息もするな。むしろ人間を辞めろ」

「ふ、不当な命令には従えないであります！」

俺は杏里の頭にげんこつを落とす。

「黙れと言ったはずだ、伍長」

「い、痛いですっ……女の子を殴ったですっ……ひどいです先輩」

涙目になりながら、追跡を再開する俺の後をついてくる。

どこまでもけなげな部下だった。

「でもその痛みが、愛情の裏返しだって杏里は分かっているのです。先輩は杏里が可愛くて可愛くてしかたがなくて、素直に気持ちを吐露することが出来なくて、それで意地になってこんな事をするんですよね？ うんうん、分かっているんです。杏里は耐えられる女なんです。良妻賢母です母体安全です。あ、先輩！ 今二人の愛の結晶が杏里のお腹を蹴りましたよ！ という具合に可愛い女の子なんです。……繰り返します」

「繰り返すな、長ったらしい！」

俺は同じところに再びげんこつを落とす。

「同じところを……せ、先輩なかなかのSぶり、えげつないです……。うつつ……Mな杏里でなければもだえて苦しんだあげく教育委員会に訴えるところです」

二段重ねのアイスを想像させるたんこぶが、杏里の頭にできあがる。頭から煙が上がる演出のおまけ付き。

「ちなみに言うと、教育委員会は、生徒を助けると言うよりは、先生を助ける機関だ」

「……杏里の発言を全否定する気ですね？ そうなんですね？ それが気持ちいいんですか先輩！ 陵辱です！ でも、そんな先輩だと分かっている杏里は二人の愛のために」「よし、死んでこい」

俺はゆっくりと立ち上がる。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ だからその先輩の堅くて太くておっきいもので杏里をなぶるのだけは許してくださいであります！」

壁にすがるようにしておびえる杏里に不気味に立ちはだかった。

「……あ、あれ、先輩？ ほら笑ってください、杏里は先輩の笑顔が見たいですよ？ にこにこーです。スマイルスマイルスマイル……」

無表情で杏里を見下ろす。杏里の顔は引きつっていた。

「俺はこんな時どんな顔をして良いのか分からん」

「あ……笑えばいいと思いますよ、先輩」

俺は誰が見ても犯罪者と勘違いするであろう、不気味な笑みを浮かべた。俺の姿に戦慄する杏里は、両手をがっちりと組み合わせ、哀願する。

「せ、先輩先輩先輩！ 後生です！ 最後に一言だけ……」

「発言を許す。これがお前の遺言になる。言葉を選べ」

杏里は少しだけ恥ずかしそうに微笑んだ。

「その、顔だけは勘弁ですよ？ 杏里の可愛い顔に傷がつくと悲しむ人がいるのです。杏里は、大好きな先輩が悲しむ顔を見たくないのです」

後半がやけに真剣味を帯びた様子だったが、そんなものは関係ない。杏里の前につきだした、俺の堅くて太くておっきいもので杏里をなぶる。

誤解を招くようだが……もちろん、ただの教科書の入った鞆のことだ。

遺憾ながら、追跡はそこで中断。

第一次ウメ追跡ミッションは失敗に終わったのだった。

「杏里は、先輩の笑顔が見ただけなのですよ……」

「うるさい」

ぼろぞうきんのようになってしまった杏里。俺は加害者である手前、洪々おんぶしながら日の傾き始めた堤防をゆく。

「やりすぎたことは謝る。だが、そのほかについては謝らないぞ、俺は」

杏里は一生懸命すぎる。だから、俺も本気で向き合ってしまう。男女という垣根、先輩後輩という垣根など簡単に飛び越えて、ぶつかっていつてしまう。

「ふふふ……どこまでもSな人ですね、先輩。Mな杏里でなければ臨時国会の議案にあげられているところです」

「うるさい」

緩やかな曲線を描いていく堤防。遠くの高架線には、一日の終わりを実感する人々ですし詰めになっている電車が見える。かたことかたことと線路を行く電車の音が遅れて聞こえてくる。

「繰り返します」

「繰り返すな」

太陽が山際に隠れていく。

ふと、おんぶする杏里を見れば、目を閉じて何かに浸っているように見えた。眠っているように安らかだ。

「杏里は、先輩の笑顔が見ただけなのです」

俺は堤防の先を見つめた。子供の頃、よく、幼馴染みと遊んだ堤防だ。遠く夕焼けの向こうで、幼馴染みが手招きしているように感じられた。

仁君！ 見て！ 私、二重跳び飛べるようになったよ！ ほら！

俺が見ている前では、緊張して決して飛べない二重跳び。縄跳びを足にぶつけて痛がる佳乃の膝をさすってあげた記憶が蘇る。

「杏里は、先輩の悲しい顔は嫌いなのです」

幼馴染みの幼い笑顔が道行く車に隠れると、その幻想は簡単に消えてしまう。車が通過した後に見えたのは、山の向こうに消えようとする赤く色づいた太陽の半顔。

「入学してから、いままでずっと……こっそりと見てたのですよ」

「……ストーカーめ」

俺は真っ赤な夕陽に目を細めながら、心の奥で震える琴線を感じていた。

「杏里は先輩専用のストーカーです」

「このまま交番に行くか？」

意地悪するつもりで背負う杏里を揺ると、杏里はつぶっていた

目をつつすらと開けた。

彼女の目が、二人の前方に広がる景色を目に宿す。

「……あれ……先輩は空を赤く塗ったんですね。さすがです、杏里は感動です……」

寝ぼけているのかそうでないのか、杏里の瞳を染めた真つ赤な夕陽が、やけに印象に残った。

「杏里は……これからもずっと……先輩を見て……いるのです……」

眠りにつこうというのか、杏里は口をもごもごとさせて犬耳を伏せる。もちろん幻想だが、俺には杏里が眠りにつこうとする子犬に見えた。

仁君！ 今度こそ飛んでみせるから、ちゃんと見ていてね！

あのときの夕陽と同じ夕陽であることが、胸をつぶしていく。

「ああ……俺も、ずっと見てるよ」

楽しそうな佳乃が、夕陽の袂で大きく縄跳びを回していた。

第十七話・「かもな」

授業終了のチャイムとともに、ウメは素早く荷物をまとめ、いち早く教室を出て行く。俺は隣の席でウメを横目に見ながら、ウメの唇が紡いだ言葉を思い出す。

……………パパ。

潤いのある口唇がわずかに開かれ、暗闇の中でも鮮烈に俺の目に焼き付いた。

誰とも関わりを持たず、必要以外は、かたくなに沈黙するウメという少女。人々は彼女をクールビューティーと呼んだ。

木漏れ日を浴びた清流のように美しい黒髪は腰の辺りまで伸び、日本人形という上質の形容すら当たり前のように思わせる風貌。冠に、小さい、という言葉を用いることで、彼女のほとんどは説明できる。小さい顔、小さい鼻、小さい口、小さい体……おおよそ女性の平均値を下回っているその風体。もちろん、その中にはデメリツトも含まれている。例えばそう……胸の小ささとか、声の小ささとか。もちろん、前者にはそれなりに需要があり、教室内の男子にアンケートをとれば、衆議院で賛否がまっぴたつに割れた郵政民営化法案のように、声高に持論を叫ぶだろう。

そんな世捨て人然とした山田ウメが、パパとつぶやいたのだ。それも寝言で。

ウメがどんな夢を見ていたのか気になる一方で、彼女が放課後になると煙のように教室から忽然と姿を消す理由も、十分気になった。そこからむくりと起き上がる疑問の芽。

赤色と青色を混ぜると紫色になるように、二つの気になる項目を混ぜ合わせると、全く新しい色、憶測が生まれた。

放課後とパパの関係。

俺の思考回路がその結論を導き出すまで、ものの一分とかからなかった。

そういう動機で発案、一瞬で可決されたウメ追跡ミッション。

……第二回。

「先輩先輩先輩……」

「なんだなんだなんだ」

校門を抜け、駅に向かう下り坂をウメが下り始めたところで、俺は電信柱に身を隠した。背中には、背後霊のように付き従う部下、杏里の姿があった。

「あのですねあのですねあのですね」

「言うのは一回で十分だ言うのは一回で十分だ言うのは一回で十分だ……ハア……ハア」

息切れした。

「……ハアハアっていやらしいです。それじゃ先輩が普通の男の子みたいです」

「いや、普通の男の子だが」

「飛べない男は、ただの男ですよ!？」

「いや、構わないんで。ただの男で」

ウメが横断歩道で信号待ちをする姿を、路上駐車する車の陰に隠れながらうかがう。腕時計を頻繁に気にしているウメの姿からは、焦っている雰囲気を読み取れた。杏里には視線もくれず、俺は揺れるウメの髪の毛に注視する。放課後の光を浴びて、きらきらと輝いていた。

時間を気にしているそぶりを見せながらも、信号をきっちり守っているところは、規則正しいウメらしい。社会に出しても恥ずかしくない立派な模範生徒だ。

……少し無愛想だが。

「むうつ……あの女の子の尻をこっそりと追いかけるなんて、先輩はストーカーなのでありますか？ 私の体じゃ満足しないんですか！？」

危ない発言が俺の背後から飛び出し、俺は思わず車の周囲に視線を巡らした。

「体って言うな。だったらお前は俺のストーカーか？」

なぜか、杏里の頬が桃色に染まる。

「そ、そんなこと……先輩の前で言えるわけじゃないじゃないですか……もじもじ。こんな可愛いすぎて思わず抱きしめたくなるような先輩が、夜な夜な先輩を片思っ五寸釘を握りしめているなんて……思わず頬が、ぽ、です」

こめかみに手を当てながら、頭痛に耐える。

「やめろ、今すぐやめろ」

「ぽ」

「やめろと言っている」

「人間をでありますか!？」

「……辞めるか？ 人間」

俺が手首の準備運動を始め、指をばきばきと鳴らす。するとすぐに、犬耳杏里が小さな握り拳で自分の頭を叩いた。

「てへっ」

ドジっ子的な演出。

「可愛い顔をしてごまかすな!」

俺の怒りに反して、杏里はえさを与えられた子犬のようにすり寄ってくる。パブロフの犬を思い出した。

「先輩先輩先輩！ 今のリピートです!」

目を星空のように輝かせる。まなざしに込められているのは期待。

「あ、ああ…… かわいい顔を」

瞬間、俺は気がついた。

「ブス」

「うわ……うあああ……っ」

「泣くのか！？ 泣くのかっ！？」

大粒の涙を目尻にたたえる杏里。目薬は持っていないようだから、これは自前の涙か。それにしても、涙腺の反応速度には舌を巻く。

「先輩が先輩が先輩があ……ブスって言ったあ……」

「く……完膚無きまでに俺が悪いと思わざるを得ないのはなぜだ……！」

車の陰に隠れている状況ですら道行く人には奇異に映るというのに、さらに泣かれてもしたら、始末に負えない。加え、心臓にもよろしくない。俺が考えに手間取っている間にも、大粒の涙は大きさと輝きを増す。今まさに目尻という名のダムが決壊しようとしていた。

「先輩い……うつ……うつ……ひぐっ」

「分かった！ 分かったから、捨てられそうな子犬の目で俺を見るな！ 一般の罪もない人々から人類史上最低の人間だと勘違いされてしまう！」

杏里は見た目、平均値を軽く飛び越えるマスコットの可愛さだ。そんな少女が、何の取り柄もない一般学生である俺に泣かされているのだ。周囲の同情は累乗の早さで、杏里有利に傾いていく。

「うつ……ひぐ……ぐすっ……杏里は、使用済みのぼろぞうきん

なんですね？　すごく勉強した後の小指側の手のひらみたい……
真っ黒に汚れているんですね？」

必死に勉強すると、確かにその部分が芯の黒さで汚れるが……っ
て違う！

「あーったく！　悪かった！　つい、いじめたくなっただけだ！
それに、捨てるとか捨てないとか関係ないからな！」

おそろおそろ周囲を見れば、俺はアフターファイブを楽しむ人々
から、鋭い軽蔑のまなざしをうけていた。痛い、これは痛い。人間
性を否定される視線だ。

「本当……ですか？」

「本当だ、俺が今まで嘘をついた事があったか？」

「うつ……うあああ……」

「冗談だ！　佐々木仁先輩のアメリカンなジョークだ！　く、ぬぬ、
大粒の涙はやめろ……女の最終兵器を使うのはっ……」

大慌てで、もたえるように身振り手振り。そんなわざとらしい俺
の説明でも、杏里は目尻を拭い、上目遣いに見つめてくる。薄い水
の膜を帯びた目が、揺れながら俺に問いかけてくるのだ。この凶悪
さは、手に負えない。

「だったら先輩……一つだけお願いがあるのです……」

「うつ……言ってみろ」

「杏里の頭をなでなでしながら、杏里に向かって、可愛いよ杏里、君は俺の太陽だ。そして俺は月のように君なしでは輝けないんだ。だからずっとその微笑みで俺を照らし続けてくれないか、愛しているよ……」と笑顔で言ってください」

「一つ以上ある」

「さもないと！ 杏里は民衆を味方につけて泣きます。いわゆる一つの公開処刑です」

俺の言葉を遮る杏里の言葉には、有無を言わせぬ迫力がある。私と仕事、その二者択一を迫られたカップルのようだ。

「こ、これは新手の拷問か？」

空に向かってため息をついてみる。出来れば、この状況ごと飲み込んで欲しいところだ。

「うつあう……うああああ……」

「問答無用！？」

「だったら、言ってくださいっ！」

切実な瞳。杏里のつぶらな瞳が期待に揺れる。

「さあ、先輩！ もれなく杏里の頭をかしますのでっ！」

頭を差し出す杏里からは、胸をくすぐる女らしい甘い香りがした。

「……か、かかか……かかか」

……可愛いよ、杏里。

簡単じゃないか。

心なんて込めずに、あっさりと言ってしまえばいいんだ。何をためらう必要がある。さっと言って、すつと終わらせればいいんだ。単純な話だ。難しくなんかない。これは演技だ。

可愛いよ、杏里。

「か……勘違いするなゲス野郎」

やってしまった。

「う、うあ、うああああん！」

「悪かった！ 俺が悪かった！ 嘘じゃないぞ！ いやー、こんな後輩を持てて俺は幸せだな！ は、はは……」

汗が額からだらだと流れ落ちる。通りを歩く人間が、一様にひそひそ話していた。

構図で言つと、女の子を弄んだあげく、別れ話を切り出した男と言つところだろうか。いや、この周囲のひそひそ声は違う。聞き耳を立てるに、別れ話を切り出された男が、必死に女の子にすぎる図だ。

「……ぐすん、本当ですね？ 先輩」

「まあ……嘘は言っていないつもりではあるような」

ようやく泣きやんだ杏里が、未だ涙の残る目で俺にすぎる。その汚れなき子羊のような目が、周囲の誤解を重力加速度的に増大させる。この後輩はそれが分かっているのだろうか。

「いいのですいいのです。杏里はけなげな女の子なのです。愛は耐えるものだとお母さんも言っていたのです！ 傍若無人で最悪の夫でも、時々見せてくれる不器用な笑顔が全てを帳消しにしてくれるとも、お母さんは言っていたのです！」

「なんかそこだけリアルだな」

「リアルも何も本当のことですよ？」

すっかり涙も消えてしまった杏里に、黙っていた俺の怒りの虫が怒り出した。

「……しかしながら杏里」

演技なのか、自然体なのか分からない、子犬杏里の脳天にチョップを落とす。

「い、痛いです、先輩！」

「俺をもてあそんでくれた礼だ。おつりはいらん」

頭に大きな絆創膏を貼る演出をしながら、杏里は頭を抱える。大きなたんこぶと、患部から煙が立ち上るのは、もはや約束だ。

「うつ……ドMな杏里でなかったら、国連安保理、正式名称国連安全保障理事会に訴えて」

間髪入れず、同じところに脳天幹竹割り。

「はうつ……杏里の決めぜりふを途中で遮りましたね？ ロボットアニメの悪役だって変形、合体シーンで襲ったりしないのに……極悪非道のSぶりです、先輩」

「うるさいうるさいうるさい」

俺は、もう知らん、とばかりに立ち上がる。

「あ、杏里の真似ですね？ 嬉しいです先輩」

俺の揚げ足を取る杏里に、俺は引きつった嗤い　笑い、ではない　を浮かべ、右手をわきわきとさせた。

「今宵の右手は血に飢えている……」

杏里の額からしたたり落ちる一粒の汗。それは頬を伝って、あごに到達、アスファルトに吸い込まれていった。

「た、大尉殿！　目標をロストしたでありますっ！」

「誰のせいだと思ってる！」

横断歩道にいたはずの目標がいつの間にかいなくなっていることに気がつき、大声を上げる。話題をそらそうという杏里の魂胆が見え見えなので、俺は大声を上げて魂胆を叩き潰した。

杏里は新しい言い訳、もしくは言い逃れを探そうと、脳みそをオーバークロックしていた。ああでもない、こうでもない、と大げさに百面相をする杏里を見ていると、俺はなぜか灰色のため息をつきなくなる。

……一瞬にして、俺は襲われた。

依然として俺の心の奥に溜まり続ける、黒い液体。

ため息は、一種の瘴気のようなものかも知れなかった。楽しいからこそ、その楽しい空気を汚そうと腹の奥からこぼれ出す。

歡喜を冷静に。冷静を絶望に。

……楽しんでいいのか、と。誰かを犠牲にして生きているお前が、楽しみに笑って良いのか、と。

黒い瘴気は、人の形に変形して、言葉を紡ぐ。いかめしい顔で、厳かに俺に告げてくるのだ。

そのたびに俺の興奮していた心は冷え切り、言葉はブリザードのように体を凍えさせる。体の中では、コールドールのような黒い液体だけが縦横無尽に蠢き、俺を黒く染め上げようとする。

「……なあ、杏里」

そんな一変した俺の様子をすぐさま感じたのか、杏里はこれ見よがしに横断歩道の先を指さす。散歩に行きたがる子犬が、主人のリード線を強引に引くような肌触り。

「あ、先輩、繁華街の方かもしれませんよ？」

「杏里」

杏里の声にあせりが混じる。

「まだ、あきらめるのは早いですよ」

「杏里、聞けって」

俺と目を合わせようとしない杏里。

「早く行きましょう!」

「杏里!」

「嫌です、聞きたくありません」

とうとう耳をふさいでしまった。俺はその手をやりわりと耳から引きはがす。

「俺に付いてくるなよ。これはお前の問題じゃないだろ」

冷たく突き放すはずの俺の言葉に、杏里は追いつがる。

「先輩の問題は私の問題なんです」

「何のメリットもないんだぞ?」

俺の言葉は、黒く冷え切っていたはずだ。なのに杏里は夕陽の橙色を浴びて、穏やかに微笑んでみせる。

……黒い液体が、ほんの少しだけひるんだ。

「先輩は、分かってないですね。杏里はドMなのです。身に降りかかる不幸は、大歓迎なんですよ」

「それはMっていわないだろ」

杏里の笑顔につられて表情を崩した俺に、安心したような杏里。

「えへへ、だから、杏里は馬鹿なんですね」

今一度、自分の頭を小突いてみせる杏里に、俺の心はざわついた。

「あのさ」

「何でしょう、先輩。そんな真面目な声出して、愛の告白ですか？
わくわく」

両手を合わせて、祈るように俺を見上げてくる。期待に充ち満ちたまなざしは、冗談を要求しているようだったが、俺にはそんな冗談は口に出せなかった。

俺が今も大事にしまい込んでいる記憶の奥底から、まだほこりのかぶっていないフィルムを取り出す。映写機に取り付けると、きしむような音を立ててフィルムが回り出した。

「もし……」

スクリーンには真っ白な長方形が現れ、大小様々なほこりが白いスクリーンに黒く拡大されて写り込む。やがて、上映までのカウントダウンが始まると、唯一の観客である俺は、中央の席でスクリーンを見つめ続ける。

タイトルも無しに現れた風景は、小鳥のさえずりが爽やかな朝だ

った。階段を上るとんという小気味良い音に続いて、部屋をノックする音。

「もし、俺が……」

訪問者は入室の可否を問わず慌ててベッドに向かうと、そこで布団をかぶる人間に近づいていく。白魚のような手が、丸まった布団に添えられ、柔和な唇が、笑顔とともに開かれる。

「朝起こしに来てくれって言ったら」

一番聞きたかったその声で。

仁君、起きて。仁君ってば。

「行きますよ」

俺は我にかえる。杏里の顔に焦点を合わせると、杏里の表情は、華やかな笑顔に彩られていた。

「杏里は、行きます」

杏里が俺の右手を取り、まるで凍えた登山者のそれを溶かすように、両手で包み込む。

温もりが、優しさが染みこんできた。

「先輩が朝食作れって言うのなら、作りに行きます。お弁当作ってこいって言うのなら、作っていきます。ジュース買ってこいって言うなら、買ってきます。杏里は先輩がしろって言ったら、するんです。馬鹿ですから」

スクリーンの映像は、場面を変える。

「……俺が、もし」

映像は、脱ぎ捨てたジャケットが人混みに紛れ、見えなくなるところから再開した。

俺は、道路の反対側にいる少女に大声を届け、ガードレールを乗り越えて走り出す。少女の嬉し泣きがだんだんと近づいてくる。抱きしめようと腕を伸ばす。もう少し、もう少しで、少女の笑顔をこの腕に抱くことが出来る。

「死にそんな目にあっても」

「杏里は、助けます」

俺の言葉尻はかき消された。

「もしそれで、お前の命が」

「先輩」

テープが途中で断ち切られ、フィルムが空回る。スクリーンはホワイトアウトし、映像はそこで終わりを告げた。エンドロールもない唐突な終わり方でも、俺はいらだつことも、怒鳴り声を上げることもなかった。

……結末は知っていたから。もう何度も見続けてきた映像だったから。

真っ黒な映画館がドロドロとした液体で濡れていた。気がつけば、座席もスクリーンも、映写機も、全てが重油のような黒い液体で汚

されていた。

でも、何かが違った。

気配がして振り返ると、そこには小さな体躯の女の子がいる。

「愛、なんです」

笑顔を浮かべた、子犬のような少女。

「理由はないんです。女は子宮で判断する生き物ですから」

愛。

目の前の少女が言ってくれた言葉の意味を、俺は理解できない。言葉は知っていた。辞書を引けば、すぐに見つけることが出来たし、言葉にしようと思えば、コンマ一秒で口に出れたから。

「……説得力のないヤツ」

そんな深遠なところまで意味も分からない一文字の言葉なのに、その音は、なぜか俺をゆっくりと解きほぐしてくれた。意味も分からないのに、その音だけで癒されるなんて、あるのだろうか。

「それは女であることを否定するという意味ですかっ!？」

「かもな」

俺は笑う。

「ひどいです! Mな杏里じゃなかったら、泣いて弁護士に訴えるところです!」

「かもな」

ミッション中止とばかりに、包まれた両手をほどき、来た道を引き返す俺に、杏里が叫んだ。

「先輩！」

「……ん？」

俺は肩越しに杏里を振り返る。杏里の顔が今までにないほど、真剣味を帯びていた。自分のスカートを強く握りしめる手は赤い。

俺はそんな杏里の顔に冗談を言うことも出来ず、心身の疲れを漂わせたまま、見つめることしかできない。

「杏里がもし、死にそうな目にあって」

杏里の言いたいことが分かっていたから。

「先輩の命、杏里の命が天秤にかかってしまうようなことがあったら」

だから、俺は思考を封印した。

「先輩は、杏里を助けてくれますか？」

「……………かもな」

返答ですらない言葉に、杏里は複雑な表情を見せる。

しかし、それも刹那のこと。杏里はスカートを握りしめる握力を解放する。

「目標は、駅前繁華街に向かった模様です！」

無理に作った笑顔だって事はすぐに分かった。商店街を指さして、頬を強ばらせる。

俺はその言葉にあきらめかけていた追跡を再開させることを決意する。無理にでも、そうすべきだと思った。

「よし、行くぞ！ ミッション再開だ！」

杏里が、そんな俺に敬礼する。

「サー、イエッサー！」

横断歩道に設置された信号の青が点滅を繰り返す。急げとせかす信号の下、俺達は駆け足で渡るのであった。

第十八話・「醜い気持ち」

俺が杏里と騒いでいた時間を含めても、あっさりとしすぎているほど簡単に、山田ウメは見つかった。

現状を第一種接近遭遇体制に移行……つまり、追跡を悟られない範囲内で山田ウメを監視する。

これほど早く山田ウメが再発見に至ったのには理由がある。

すでに世は夜の闇が町中を支配し、学生の姿が町中に不釣り合いになる時間帯。裏路地がネオンに揺れて活気づく時間に、長く緑の黒髪を持つ学生服姿。加え、小柄の女の子を見つければ、間違いなくそれはウメだったからだ。

ウメは、大量のサラリーマンがはき出される駅前改札口前にある、噴水の縁に腰掛けた。噴水は夜の帳に存在を主張するかのようブル―にライトアップされ、ウメの横顔を青白く染めていた。ただでさえ白磁器のような肌を持ったウメだ。青白い光を受ければ、美しいと感じると同時に、不健康にも見えた。

「先輩……」

追跡中、敵艦をやり過ごすユーボートのように沈黙していた杏里が、まだ生きてますとでも言いたそうに声をかけてきた。

「寒いかな？」

杏里は首をふるふると横に揺する。いつもは元気に跳ねる想像上の犬耳が、今は力なく伏せられてしまっているような気がした。

ウメの追跡を再開してから、杏里はずっと無言で俺の後を付いてきていた。時々思い出したように俺の制服の裾をつかんで、俺に對して、付いてきています、と存在を主張したりした。今にも捨て

られそうな子犬に見えてしまったのは、杏里に対して失礼だと思う。
「……やっぱり寒いかも、です」

俺達はウメの姿を背後から視認できるベンチに移動していた。膝の上で両手をぎゅっと握りしめたまま、杏里はうつむいている。

俺はそんな杏里に何一つ気の利いた言葉を話しかられず、夢遊病者のようにただただウメの後ろ姿を見つめていた。

ウメを見つめる俺の視線を、横切るカップルの姿が幾度となく遮った。彼らからすれば、俺と杏里はどのように写ったのだろうか。自分たちと同じには、少なくとも思わなかったのではないだろうか。見えたとすれば、死期が迫った病人と同じに見えたらう。

「嫌だったら、帰っていいんだぞ」

「違うんです。杏里が思っていることはそんな事じゃないんです」

杏里には珍しく切迫した氣勢だった。

「寒くないけど寒いんです。矛盾していると思いますか？」

ウメが腕時計を確認している。

駅前の電光掲示板を見れば、八時を回ろうとしている。時計をしきりに確認しているところからして、待ち合わせは八時といったところか。学生の待ち合わせにしては、時間が遅すぎる。

「先輩？」

俺の制服の袖を引っ張ってくる。

「あ、ああ……スマン、聞いてたよ。その通りだよな」

本当は聞いていなかった。

俺はぞんざいな返事だけをベンチの上に残して、ウメを見続けている。ウメが八時に待ち合わせる人物を、何度も何度も頭に妄想する。

「でも、矛盾していません。矛盾しているように見えてそうではないのです。寒くないけど寒い。前者と後者では、対象となる場所が違うのです」

やはり、パパ……なのだろうか。

だとするとどんな人間なのだろう。ウメには両親がいない。ウメが時々口にする情報を総合すると、ウメは他県に祖父母がいるのみで、肉親は存在していないのだ。そもそも、なぜ親戚すら存在しない場所に引越してきたのだろうか。慣れない一人暮らしを選択してまで。定期的な通院にも問題あるはずだ。

俺の通う高校が、ウメにとっての志望校だったからか？

「先輩は、近くにいるのにとっても遠くにいます。違う誰かばかり見ているのです。目で見てるのは私でも、心で見ているのは全く別のところなのです」

いや、志望校説はあり得ないな。通学している俺が言うのだから間違いない。

中堅大学への進学がほとんどの凡庸な高校だ。本当に理想の進学をしたいのなら、隣町の進学校へ行けばいい。ウメの学力ならば、それも可能だったはずだ。

「……………先輩が見ている人……………杏里は知ってます」

そうすると、ウメはそれに勝る理由があつてこの高校に入学、一人暮らしを選択、夜の町で待ち合わせているのだ。

「私、先輩のこと……入学してからずっと知ってました。……でも、いつも隣には一人の女の子がいたのです。悔しいくらい先輩とお似合いで……。私、嫌な女の子なのです」

ウメの待ち人は、やはり、パパなのだろうか。

時刻は八時十分。ウメの待ち人はまだ来ない。

ウメが駅の改札を何度も見ているのは、待ち人が駅から現れるからだろう。

「でも……でも、その人はいつの間にかいなくなっていて……私、もしかしたらチャンスなのかなって。……でも、それって、とつても……とつても醜い気持ちで……」

さっき到着したのが八時八分の電車だから、次は少なくとも十分後。十分は待ちぼうけということだ。

「……先輩？ 聞いてますか……？」

俺の制服に引かかるような感触。俺は制服がベンチの逆むけにでも引つかかったと思い、少し乱暴に振り払った。

そして、気がつく。

杏里が隣に座っていること。失念していたという事実を。

「あ……」

悲しげな驚きとともに、杏里の手が所在なげに下ろされる。杏里からすれば、鬱陶しいと思われると誤解してもおかしくない。

「……ごめんなさい先輩。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

両手をこれ以上無いというくらい強く膝の上で握りしめて、溢れそうになる感情を内に押しとどめている。杏里の両肩が小刻みに震えていた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

鼻をすする音がして、俺は杏里が泣いていることに気付く。

「……止める」

記憶がさかのぼる。

ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい。なさい。

虫酸が走った。かつて俺のそばでそう言い続けた男がいた。

直前まで携帯電話をいじっていた。慌ててブレーキを踏んだところで事故は避けられない。一人の女の子を傷つけ、拳句の果てには死に追いやった。謝ったところで、何度謝罪したところで、女の子は帰ってこない。俺のそばで笑顔の花を咲かせてくれることも、卵焼きを食べさせてくれる事もない。謝ったところで許される罪でもない。軽くなるような罪でもない。

たった一文字のメールを打つことが、それほど大事なのか。

女の子を死に追いやったあの数瞬で、男はどんなメールを打っていたんだ。

女の子の命をはかりにかけられるほど大事なメールだったのか。

押下した言葉はどんな言葉だ。打てても一文字だろう。

だとすれば、たった一文字が、女の子の命を犠牲にしたんだ。女の子の命を、佳乃の命を、二人の人格を宿した佳乃の命を、佳乃の笑顔を、俺が好きだった二人の幼馴染みの命を、通じ合った愛を……たった一文字と天秤にかけたんだ。

たったの一文字と。

「せ、先輩……先輩、先輩？」

「止めろ……止めてくれ……ちくしょう……こんな時に……」

心の底から無限に溢れる黒い濁流に、俺はなすすべなく飲み込まれていった。

第十九話・「絶望」

ひどく重い。身も、心も……記憶でさえも。

古今東西、人の全てを表すとき、身も心もなんて表現をするけれど、人はそれだけで形成されているわけではないと断言できる。身と心だけで出来た人間がいるとすれば、それは全てが空っぽの人間に違いない。

心なんて一言で言っても、それは複雑で多岐にわたる途方もない範囲のことを指すし、第一、その心ですらどんなものか分かったものではない。分ることとといえば、身が器で、それに入れるものが心、ということぐらい。

でも、空っぽの体に空っぽの心を入れたところで、人間そのものが空っぽなのは言うまでもない。だから、人間には記憶が必要なのだ。

記憶が人を動かし、記憶が人を作る。

……だからなのだろうか、俺の心の中が、こんなにも真っ暗なのは。

何十階、何百階の高さのビルから落ちていくような錯覚。眼下には、途方もない奈落が広がっていて、俺は夢中でクロールでもするようにもがいてみるけれど、落下速度が減速する兆しはない。いつ果てるでもない暗黒への自由落下。

こんなことは久しぶりだった。

この半年間、これほどの絶望の時間に引き込まれたことはない。いつしか俺は闇に落ちることもなくなった。現実の風景のまま、背中を丸めて腹筋に力を入れれば、暗闇を内側に押し返すことが出来るようになっていた。

それが成長なのか、ただ慣れただけなのかは分からない。

……いや、おそらく後者だ。しかもそれは、自分を偽った形で。慣れたと思いこんでいただけ。だから今、俺は落下している。

今更だが、黒いどろどろとした液体が、俺の奥底に溜まっていたことはずつと分かっていたことだった。佳乃という生涯の伴侶 伴侶などと人の人生を簡単に言ってしまう俺は、ひどく傲慢な人間に違いない。を失った俺は、佳乃の顔面を白い布が覆ったその瞬間から、俺の腹の奥に流れ出した。

沸々と煮えたぎる加害者への憎悪の下で、ゆっくりと流れ出した黒い灼熱。それは体という地表のさらに奥、マントルの底にひそむ黒き溶岩だった。

その熱が失われてもなお、重油のように俺の全身をなめまわし、体温を悲しみの温度へと引き下げる。

絶望。

なんて丁度良い言葉だろう。あまりにもぴつたりすぎて、鳥肌が立つ。落下を続ける俺を表現するには、本当にお似合いだ。

闇の先を凝視する。

奈落の底。そんな場所があるのなら、この目で見てみたい。絶望の底。そんな場所があるのなら、この目で見てみたい。でも、俺はきつと動じないだろう。なぜならば。

佳乃を失う以上の絶望などありはしないのだから。

やがて見えてきた暗闇の途切れ。落ちていく暗闇の底には、真っ黒な湖面が広がっていた。光も届かない闇の湖面に、俺の姿が映し出されていた。目の下は黒く、頬はこけ、髪の毛はぼさぼさ。なんて無様で、みすばらしい姿だろう。そんな俺が俺の中に落ちていく。

一度瞬きをし、理解した。

ああ、そうか。ここは、俺の中なんだ。俺の体の奥底、心臓の奥底に広がって、今もなお増殖を続ける絶望の海。俺はそれに落ちていく。この果てのない海を泳ぎ切れる力はない。抵抗する術を持たない俺は、きつと泳ぎ疲れておぼれ死ぬ。

絶望の海を泳ぐ。

その言葉だけで、俺は無理だと分かる。

絶望というのは、思いの深さに比例するもの。幸せの反対が不幸であるように、愛と憎しみが隣り合うように、戦争と平和が表裏一体であるように。

絶望もまったくもって同じ。そう考えると俺は嬉しくなってしまう。

湖面に体が飲み込まれ、服の中に水が浸食し、体を包み込まれる。真つ黒な手が俺の体を押さえこみ、濁った汚水の奥へ引きずり込もうとする。

俺は微笑んだ。

嬉しい。嬉しくて嬉しくて仕方がない。

だって、そうだろ？ この果てなく遠き深淵は、広がる絶望の海原は。

俺が一人の女の子を想った果てに、作り上げた悲しみなんだから。一人の女の子を愛して止まなかった証拠なんだから。

つまりは、さ。佳乃、こういうことなんだ。

俺はこんなにもお前が好きなんだってことだよ。

だから、こんなに海は広いんだよ。愛に泳ぎ疲れてしまっくらいにさ。

俺は目をつぶって、液体に身を任せる。どんどん沈む、どんどん引き込まれる。そして、どれくらい墜ちていったのか……。高速で打ち鳴らされるベルの音で、俺は目が覚める。

最近は忘れていたのに、また始まるのだ。
寄せては返す絶望の波。

俺が佳乃を失う旅路。

第二十話・「予定調和」

起きて最初に耳にしたのは、バイクの遠ざかっていく音だった。カーテンがすきま風でゆらゆらと揺れているのは、窓を少しだけ開けて寝たからだ。

「また……」

壁に掛けてある、当時流行した美少女ゲームのカレンダーを見る。なまめかしいバスタオル一枚の姿で、俺を悩殺しようと妖艶な微笑みを浮かべている。俺はそんな半裸の美少女にはさほど目もくれずに、カレンダーという用途を忘れたカレンダーの小さすぎる日付に目を凝らす。

「一年前……か」

ベッドに転がっている携帯電話の日付を確認してみても、一年前の日曜日だった。俺はベッドから体を起こし、床に無造作に脱ぎ捨てられたジャケットとダメージ加工の施してあるジーンズを見下ろす。

ジャケットを拾い上げ、袖を通してみる。ジーンズをはき、ベルトを締めると、体に馴染んでいるのが分かった。肌触りや動きやすさ、どれも長年付き合ってきたもの。良くも悪くも味が出ていて、自分の癖が染みついている。けれど、そのジーンズとジャケットには胸を締め付けるような香りが染み付いていた。もちろん、俺は自分の匂いで何かを催すような特異体質ではない。自己嫌悪に陥るのが分かっていて、俺はジャケットに染み込んだ甘い香りを肺活量限界までいっぱいに吸い込む。

甘い香りと、雨に濡れた露草のような切ない匂い。その二つの相

反する匂いに涙が出そうになる。この匂いが誰のもので、どうして濡らしたのか。
全て俺は知っている。

答えてよ！

頭の中に蘇る悲しみの叫びが、今一度繰り返される。俺はカーテンを開け、朝のすがすがしい空気で、肺に入っていた懐かしい匂いを追い出した。

本当はずっと肺にためておきたった。八つ当たり過ぎないけれど、呼吸をしなければ生きていけない人間が、このときばかりは恨めしかった。

俺は前髪をなでつけながら、机の上に置いてある鏡の前へ。

「あんまり、変わらないよな、やっぱり」

右手、右腕、左手、左腕。そして、下半身も同じように。自分の体を改めて観察すると、今も昔もあまり成長していないようだった。

「一年じゃ人はそんなに変わらないか」

頬をつまんで引き延ばすと、わずかな痛みが走った。

「この顔も、あんまり……いや、少しふっくらしているかな」

笑顔の練習をしてみる。一年前の自分はこんな風に笑っていたんだな、と再確認する。

「そつえば、あのときもこんなふうに笑顔の練習をしたんだっけ……」

気が付かないうちに、一年前と同じような行為を繰り返している自分がいる。

『幼馴染みの佳乃を選ぶ』
『ツンデレの佳乃を選ぶ』

ふいに、そんなことを考えていた当時の自分が思い出され、俺は自嘲を漏らすしかない。

「やっぱり世界最高の馬鹿だよ、俺は……」

鏡をうつぶせに倒して、俺は部屋を出た。
最後の日曜日。

佳乃がこの世を去った日。

……いや、正確には違うな。
最後の日曜日。

今日は、佳乃がこの世を去る日。

待ち合わせ時間を十分ほど過ぎた頃、おそらく昨日と全く同じ姿をしているだろう佳乃が待ち合わせ場所に現れた。いちいち目で探さなくとも、パンプスの規則正しい音で、俺はそれが誰だか即座に判断できた。

もう何度、このデートを繰り返しているか分からない。だから、

その音は耳にこびりついている。間違えるはずがない。

さて、そんな女の子を視界に納めてみれば、透かし編みのチュニツクを押し上げる双丘が、否応なしに目に飛び込んでくる。過去は美化されると言うが、さすがに胸まで美化されているのではないだろうか。記憶のアルバムをめくって、当時の佳乃の胸の大きさを描いてみる。……が、正確なバストサイズを知らないので無意味なことだった。

でも、ただ一つだけ言えるのは、佳乃はやはり、巨と美、を兼ね備える胸の持ち主だと言うことだ。何度が偶然にも 本当に偶然触れてしまったことがあるが、それはそれは理性を狂わせんばかりの柔らかさだった。

「悪いわね。待たされるのは嫌だったから、遅れて出てきたの」

自信のみなぎった大股の歩みで俺に近づき、開口一番、悪びれもなく言い放つ。もちろん、悪い、と言いつつ悪いとなんかこれっぽちも思っていない。

俺はすでにそう言われることは経験として知っていたので、俺も当然のように同じ言葉を紡ぐ。

「別に、それほど待ってないよ」

「あつそ、で、どこ行くの？」

これも同じ台詞だ。腕を組んだまま、人差し指で自分の腕をとたくポーズ。部下であるOLに不平を漏らすお局様のような雰囲気をもとう。

佳乃がどうしていらだっているのか、当時の俺には分からなかった。

考えてみればすぐに分かるはずだった。俺は前日の佳乃とのデー

トで気が滅入っていた。朝、鏡の前で笑顔の練習をしても、平常の状態の顔まで作れたわけではない。自分のデートの番だというのに疲れた顔をして待っていられば、シンデレ佳乃でなくとも、いらだつのは当然だ。

何度も繰り返し返せば、それぐらい分かるようになる。

同じ映画だって、繰り返ししてみれば気が付かなかったところに目がいくようになる。映画館で見て感動した映画も、ホームシアターでは全く泣けなかった。……例えるならそんなところだろう。

「佳乃の記憶を共有しているんだろ？ 聞くまでもないだろ、そんなこと」

佳乃がいらだつのが分かっているのに、俺は口にする。案の序、唇を引き結んだ佳乃の表情が険しくなった。

「今回は共有してないの。そんなことしたらアンフェアでしょ？」

険しい顔をすぐに霧散させ、人差し指をたてる。立派な胸を反らせて、得意げに俺に説明する。あのときのシンデレ佳乃は、純粹にデートを楽しもうとしていた。

……それがお別れ会だとしても、だ。

自分の怒りで場を壊すことが、自分にとってどれだけ不利益になるかを考え、佳乃は思い直したのだろう。彼女にしては、慣れないことをしたものだと思う。そう考えると、はじめからシンデレな彼女らしくなかった。

俺は前日からの気持ちの落ち込みや、佳乃を失うかもしれないという自分の悲しみのことだけを考えて、一番大事なものを見逃していたのだ。目の前の女の子を置き去りにして、自分可愛さに悶々と殻に閉じこもっていたのだから。あのとき、そんな彼女に気が付いてやれなかったのが心残りで仕方がない。

……本当に最低だ。俺は過去も現在も何も変わっていない。

「便利なんだな」

俺はつぶやいて、胸ポケットを探る。やはり映画館のチケットはそこにある。予定も何にも立てられなかった行き当たりばったりのデート。サプライズなんてのは言い逃れに過ぎない。

「映画館……鉄板ね」

「ああ、デートの王道だよ」

過去になかった軽口を口にしてみた。俺に言葉を取られて喉を詰まらせる佳乃に微笑んでみせる。思った通りの答えを返そうとしてくれるのが嬉しかった。

「……どうかしたの？」

悟ったように微笑んでいる俺をいぶかしくて、佳乃が腰に手を当てながらのぞき込んでくる。

予定調和だ。

あらかじめ決められた道筋をたどっている。強引に因果律を変化させようとしても、結局は元の道程に戻ってしまう。まるで俺の好きなシミュレーションゲームそのものだ。

選択肢を選び、願ったヒロインへと、ハッピーエンドへとたどり着くためにあがく。でも、それはあらかじめ決まったエンディングだ。もともと限られたエンディングしか用意されていないから、全

てのエンディングを見てしまえば、それで全てが終わる。そうプロ
グラミングされているから、それ以上の発展はない。同じ台詞が返
って来るようになって、新鮮味がなくなる。あとは中古屋に売って
しまつか、棚の奥で眠りにつくか。

俺が体験しているのは、その極端なもの。

エンディングは一つしか用意されておらず、しかも、バッドエン
ド。それを繰返し繰返し何度も何度も延々と延々と……。

何度も体験すれば、馬鹿でも分かることだ。この世界は、俺の心
の奥にある絶望で出来ている。

絶望は絶望でしかない。黒から白は生まれない。黒から生まれる
のは黒でしかない。

俺はそれを知り、体験し、幾度となく目にし、あきらめることを
受け入れた。

……佳乃はあと三十分もすれば、この世からいなくなる。

それがこの世界の結末だ。

「言い忘れてたけどさ。昨日、佳乃と観た映画と同じじゃないんだ」

観もしない、一生観ることのない映画の話題。

「別にいいわよ。仁も、同じ映画を二日連続で観るのはつらいでし
よ」

「つらくないよ。佳乃と二人だから」

恥ずかしげもなく口にする。

絶望が待っていることは知っている。あきらめてはいても、俺は
少しでも世界にあらがう。虚しく、それでいて、悲しくても。

「あんだ馬鹿？ 昨日、佳乃と何かおかしなものでも食べた？」

熱でもあるんじゃないの、と言いたげに俺の額に手のひらを押しつけてくる。

「そんなことない。キャラメルマキアートと、ポップコーンを食べた。美味しかった」

あらがう。虚しくあらがう。別の結末が欲しくて、俺はあえぎもがく。

「にしても、仁……デートだっていうのに、冴えないのね」

遠巻きに眺めながら、両手の親指と人差し指で作ったフォトフレームに俺を納める。

「見てみなさいよ。佳乃なんて、普段こんな服着ないのに背伸びしちゃって。香水だって、アクセサリーだって、パンプスだって……結構高いのよ、これ」

自らの着る黒いチュニツクをつまんで見せる。

「……それに、下着だっていつ脱いでもかまわないように、勝負ものだし」

泣きたくなる。胸がつまり、呼吸が苦しくなる。結末なんて変わらない。全ては予定調和。元の流れに戻る。

「なかなかきわどい下着よ？」

佳乃は洋服の首元を引っ張って、自分の胸元をのぞく。見知らぬ男が、すれ違いざまに背伸びをしてのぞき込み、だらしなく鼻を伸

ばしている。

「見なさいよ、仁、ほら」

俺に見せようと前屈みになる佳乃。白い谷間のチラリズム。佳乃はこうやって俺の動揺を誘おうとした。動揺の度合いによって、前日の佳乃と俺がどこまで進展したか計ろうとしたのだ。単純な俺だから通用する、単純な判定方法。俺はそんな佳乃が愛しく思えてくる。あんなに大人びていたツンデレ佳乃も、どこか子供めいたところがあるのだ。嬉しそうに俺の動揺を誘い、やっぱり動揺してしまう俺に、より一層の笑みをこぼす。

「大丈夫、昨日の俺はそんなところまでは進展していたりはしないから。佳乃の考えすぎだよ。俺にそんな度胸はない」

いたずらのつもりで佳乃の意図を見抜いてやる。佳乃には悪いけど、その鎌かけはもう知っているから、動揺しようにも出来ないんだ。

「ふ〜ん、そうなんだ」

俺の瞳をのぞき込み、嘘がないことが分かると得心したようになづく。

「ま、私も何かあるとは元々思ってたし。度胸がないことも知ってるし……ね!」

ね、のタイミングで、俺の額を指ではじく。探っていることを見抜かれたことに対する報復だろうか。

「さっさと行くわよ。映画が始まっちゃうじゃない」

俺はずんずんと進んでいく佳乃の背中を追いかける。のっぺらぼうのような人波のど真ん中を、海を割るように如く突き進んでいく俺はモーセの十戒を想像した。ツンデレ佳乃ならば、海を割ることも出来そうだなと、なぜか納得してしまえるほど、俺は親馬鹿ならぬ幼馴染み馬鹿　もしくはツンデレ馬鹿　だった。今でも、その想像は変わらない。

「仁、私ふと思ったんだけど、『昼下がり』って言葉を頭につけると、不思議と嫌らしい感じがしない？」

どうやらコンの会話は、予定調和として省略されたようだった。何も不思議なことではない。結末さえ同じならば、全ては万事オ―ケーなのだから。

「確かに」

胸に巣くう空虚感を押し込んで、佳乃の横に並ぶ。そして、俺はこれからの展開を思い出してみる。不思議と思い出し笑いをしてしまった。当時の俺は不思議がって首をかしげたはずだ。

そうか？　……　とても言った記憶がある。けれど、結果的にこれから二人でする掛け合いが、俺を深く納得させることになる。今思い出しても笑ってしまうほど鮮明に、やりとりは俺の記憶に残っている。

「たとえば、そうね……」

佳乃がたわいもないことを真剣に考えている。何事にもベストを尽くすツンデレ佳乃の本領発揮だった。

「……昼下がりの郵便配達」

佳乃が考えついていたいやらしい昼下がり、俺は口元をほころばせながら同意する。

「卑猥だ」

「……昼下がりのもも肉」

「卑猥だな」

「昼下がりの課外授業」

初めて聞いたときは、鼻血が出るかと思った。課外授業ですら、語尾につけるとどこか卑猥な響きになるのだ。放課後の課外授業、真夜中の課外授業、お姉さんの課外授業……これは例えとしては誘導的だったな。とにかく当時の俺は、新たな発見に胸をドキドキさせたものだ。

「昼下がりの佳乃」

仁君、今日は早いんだねっ ご飯にする、お風呂にする、
それとも、少し早いけど……わ、た、し？

あのとき俺が想像したのは、エプロン姿で優しく振り返る、幼妻としての佳乃だったのかも知れない。

何も不思議なことではなかった。

俺達二人は惹かれ合っていた。当たり前のようにずっと一緒に隣を歩いて、時々恥ずかしそうに手を繋いだりして、確かな体温と胸

のドキドキを二人で抱え込んで。好き、と声に出さなくとも、二人
変わらず過ごしていけると信じて疑わなかった。意識してそう過ご
そうとしなくとも、俺はそれが考えるまでもないことのように生き
ていた。何の疑いもなく、佳乃のエプロン姿を想像した俺の心。だ
から、惹かれ合っていたと考えてしまうのは、俺の素直な気持ちな
のだ。

「ねえ、仁」

思い出に思考を巡らせる俺は、すでに知っている次の台詞に耳を
します。

「今、どっちの佳乃を思い浮かべたの？」

佳乃の瞳は真摯な光で満ちていた。俺が想像したものはすでに看
破している、と言いたそうな瞳。

「昼下がりに、どっちの佳乃を思い浮かべたの、って聞いているのよ」

ツンデレ佳乃は直感が鋭いから困る。俺はいつも頭が上がりなく
て、困らされてばかりだった。言うまでもなく、その恨みはきつ
ちり幼馴染みの佳乃の時に晴らさせてもらった。「俺が思い浮かべ
たのは……」

「何よ？　ぐずぐずしないで言いなさいよ」

詰め寄ってくる。俺を追求するように一歩、近づいてくる。

薄暗い路地裏に置いてある青いゴミ箱。そばに落ちている魚の骨
にこびりついた肉を、黒いカラスがくちばしでつついている。

俺は佳乃の瞳をしっかりと見つめ、両肩に手を置いた。

「俺はね、佳乃」

予定調和になることが分かっているけど、俺はこの言葉を言いたくて仕方がない。

「この二日間に意味がないってことを分かっていたいなかった。佳乃に言われて、しばらく考えて、ようやく気が付くことが出来た。確かに、佳乃の言う通りだ。俺達が過ごしてきた年月が、たったの二日でひっくり返したり出来るわけないんだ」

路地に連続して吹き込んでくる風が、俺と佳乃の間を駆け抜ける。

「仁……」

佳乃の瞳が薄い水の膜で覆われていく。

「なによ。そこまで知っているなら、言う必要なんてないじゃない。私がいくら宣戦布告しても、あの手この手を尽くしても意味がないって事……。仁が必要としているのが誰かなんて、もう答えは出るんでしょ？」

風にもてあそばれる前髪の向こうで、濡れた佳乃の瞳が、強い決意と悲しみに揺れていた。

「そ。これは自分勝手な私の自己満足。この二日間は……うっん、違うわね」

路地に絶え間なく吹き込んでいた風がぴたりとやんだ。
身勝手な風。正直、身勝手すぎる。

「今日という日は」

風も、俺も。

「お別れ会だなんて言わせない。佳乃、俺はお前が好きなんだ」

風のなくなった路地裏で、俺は佳乃の唇を奪った。俺をのしる言葉ばかりを紡いできた唇が、今はおとなしく俺の唇にふさがれている。

佳乃の唇は小さく震えていた。

潤いのある口唇に、俺の唇をそつと張り付ける。冷たいと感じた後に、佳乃の体温が唇を通して伝わってきた。唇、口紅、唇。その中央の薄い膜を、二人で暖めていく。そんな奇異な作業に感じられた。ついにむくことも、舌を動かすこともないただの接触。幼稚なキス。驚きのあまり目すら閉じられない佳乃の眼前には、おそらく俺の顔があるだろう。俺は目をつぶり、佳乃の感触だけを追いかける。

「……ん、ん……っ……」

佳乃が驚きに慣れはじめ、嬉しそうに呻いた。魚をつついていたカラスは、そんな俺達に恥ずかしくなったのか、逃げるように電線の上に飛び去る。

重なり合う二人の鼓動。それは長い長いキスだった。

絶望の中で繰り返したキスは思っていた以上に甘い接触で、それが絶望の中であるということのを忘れさせる。薄く目を開けた俺の視界の真ん中、佳乃の揺れるまぶたの後ろから、きらりと光るものが流れ落ちた。美しくカールした長いまつげにも、その光る物体は付着している。

キスに数秒遅れて、佳乃の両腕が俺を包み込んだ。

右手は肩甲骨を抱くように。左手は腰を回すように。

陶器のように白い細腕が、俺の背中に添えられる。キスに平行して、ゆっくりと柔らかく抱きしめてくれる。佳乃の意志が俺を包み込もうとしてくれる。それが底なしに嬉しい。

俺自身、どうしようもなく佳乃を求めていることが分かる。そして、佳乃もまた俺を求めてくれることも……。

唐突に、二人の重なり合っていた鼓動にずれが生じる。

俺の鼓動は同じ速度を打ち続けている。徐々に速度を落とした佳乃が、自らの意志で同調を解いていく。

……キスの終わりは、やはり佳乃から。

突き飛ばすわけでもなく、慌てるでもなく、佳乃はゆっくりと名残惜しそうに俺の唇から離れていく。目をつぶり、感触をかみしめているように感じられた。大量の息を吸い、肺を膨らませる。目を開くのと同時に、肺の空気を逃がしていく。

大きな、大きな深呼吸。出てきた言葉は、あのときと同じ。

「お別れ会、終了」

佳乃は俺の胸を、とん、とこづいた。これで終わり。そう伝えるかのような意思表示。

佳乃の匂いが路地裏から消えていく。俺に背を向けて、薄暗い路地から、光り輝く表通りへ。俺は佳乃を逃がさないように慌てて手を延ばす。すんでの所で、佳乃の指先が俺の手のひらを抜けていった。まるで溢れる水を手でつかもうとするかのように。

覆水盆に返らず。

嫌な言葉が浮かぶ。でも、こぼれた水はまた汲むことも出来るは

ずだ。

「そうさ、俺は知ってる。嫌になるほど知ってる」

佳乃を光が包んでいくような幻想的な錯覚。

カラスが鳴いた。佳乃は振り向かない。最後に見たのは笑顔だったか。それとも泣き顔だったか。大きく息を吸い、佳乃が浮かべたものは。

「……知ってる。分かってる」

佳乃。佳乃。

唇を噛む。佳乃に触れた手を閉じたり開いたりして、感触を思い出そうとする。

「分かってる」

佳乃が光に飲み込まれる。

「分かってるんだよ……！」

心のはじけようとしている。

俺は佳乃を失う。この後すぐ、佳乃を失ってしまう。追いかけても、追いかけても。これは運命だ。絶望が見せる運命。でも、それでも俺はざわつく心を抑えられない。

熱波に当てられたように肌が熱い。それは管という管、動脈静脈を問わず、血管という血管、毛細血管に至るまで、高熱の液体が狂ったように流れるからだ。心臓が臨界点まで稼働し、俺を内側から責め立てる。

俺は佳乃を失う。この後すぐ、佳乃を失ってしまう。追いかけて

も、追いかけても。これは運命だ。絶望が見せる運命。でも、それでも俺はざわつく心を抑えられない。

開いたり閉じたりを繰り返していた手を、力の限り握りしめる。つめが手のひらに食い込み、今にも手の甲がつりそうなほど振り絞る。腕は震え、噛んだ唇からは生暖かい赤がしたり落ちる。痛みが体を鎮めてくれるなら、俺は唇をかみ切ってしまいたかった。

俺は佳乃を失う。この後すぐ、佳乃を失ってしまう。追いかけても、追いかけても。これは運命だ。絶望が見せる運命。

宿世をなぞる結末なんだ。無限の螺旋階段を降りているだけ。変わることはない。ずっと同じ。

頭では分かっている。体も分かっている。俺の心と体が分かっているのに。

「それでも俺は……」

一杯の記憶が、心と体を突き動かす。

「佳乃を失いたくないんだ！」

腹の底からの声。心からの声。

俺の咆哮に驚いたカラスが、電線から飛び去っていく。

のどから手が出るほどではない、心から手が出るほどに俺は佳乃が恋しい。

絶望の景色で佳乃を見る度に、それは大きくなった。同時に苦しくもなった。あのときの俺は、心に入り込んだトゲの痛みで赤子のように泣き叫びたい衝動に駆られた。肉体的な痛みとは異なっている、トゲによる内側の痛み。トゲが刺さり、はじけ飛んだつぼみの中には、小さな、けれども強く輝く恋という宝石があった。あとき、何よりも純粋な好きという気持ちが産声を上げた。

「俺は！」

でも、今は違う。

「佳乃を救いたいんだ！」

去り際に浮かべたのは、あのときと変わらない涙顔。

「佳乃が好きなんだ！」

路地裏を飛び出す。人混みの中をぐるりと見回して、佳乃を見つけようとする。

佳乃の残り香が、車通りの多い中央通りの方へと流れていく。俺は嗅覚を犬のようにとぎすまして、顔のない人の波をすり抜けていく。

「佳乃！」

佳乃のアルバムをめくる。

幼い頃からずっと一緒。

滑り台や、ブランコ、砂場で遊んだ。

砂場では、二人でほっぺに砂をくつつけながら砂のお城を作った。俺はいたずらっ子で、せっかく作った城を足蹴にした。佳乃は泣いて、砂場に大きな涙の染みを作った。俺は何度も謝りながら、落城したお城の補修作業を始める。

今度は前よりも大きいヤツな。安土城よりももっと大きな、江戸城だぞ。

目をそらしながら赤くなる俺がそう言うと、佳乃はとたんに笑顔になる。まるで元気なタンポポだ。俺も嬉しくなる。

それが幼稚園の時のこと。

「俺は！」

幼い頃からずっと一緒。

お医者さんごっこや、ままごとで遊んだ。

ままごとでは、いつも佳乃は新婚の奥さんで、お椀に砂をよそつて、帰ってくる俺を待っていた。俺が夜遅くに帰宅すると、地面に書いてある部屋割りの線を踏み越えて、玄関へてくてくと歩いてくる。

ただいま。おかえりなさい。

演技でも、そこには満面の笑みがあつて。卵のように丸い佳乃の顔がにつこりと笑みに変わる。俺は恥ずかしくなつてドメスティック・バイオレンスな亭主になつてしまふ。そんな子供じみた照れ隠し。佳乃はすぐに涙目になつてしまつて、俺は慌てて謝る。

佳乃は、もうしないだね、と涙ながらの笑顔。それはひまわりのように明るい黄色で、ぱあつと花開く。俺も嬉しくなる。

それが小学校の時のこと。

「佳乃がいらないなんて耐えられないんだ！」

ジャケットを脱ぎ捨てる。後ろ手に脱ぎ去つたジャケットは、雑踏に飲み込まれてあつという間に消失する。

「お前がいないと、俺はっ……！」

幼い頃からずっと一緒。

ゲームをしたり、電気街で買い物をしたり、アニメを見たりして遊んだ。

行きと帰りは自転車に乗つて。佳乃を荷台に載せて。佳乃は恥ず

かしげもなく俺のお腹に手を回して。頬を背中にくつつけて。スピードを早くすると余計に俺の背中にくつついてきて。佳乃が怖がるのを面白がって、俺は力一杯にペダルを踏みつける。佳乃は悲鳴を上げながら必死に俺の制服をつかむ。

いたずらが過ぎたと自転車から降りれば、佳乃はふくれ面で目にお決まりの涙を浮かべている。俺は目の前で両手をすりあわせて謝り続ける。最初は唇をとがらせてそっぽを向いていた佳乃も、大好きな小判焼きをおごるということの手を打ってくれる。

あんこだけではなくて、クリームもつける。

俺がさらなる妥協案を提示すると、佳乃は驚くほど笑顔になる。

新月から満月へ、一瞬にして満ちかける。俺も嬉しくなる。

それが中学校の時のこと。

「俺！ 駄目なんだ！」

幼い頃からずっと一緒。

登校、教室、放課後、下校、ずっと遊んでいたようなものだった。学生食堂のメニューに飽きてきた頃、不意に佳乃のお弁当をのぞいてみると、そこには黄金色に輝く卵焼きがあった。俺は佳乃に許しも得ずに、弁当箱の中から口の中へ。佳乃は怒ると言うよりは自信がないような表情で、おそろおそろ俺を上目遣いに見上げてきた。俺は頬が落ちるほどに美味しいと内心で舌鼓を打ちながらも、持ち前のいたずら精神を発揮して、不味いと言ってみた。佳乃はなぜだか涙目を浮かべて俺に謝ってきた。

俺はさすがに焦ってしまって、渋々美味しいことを白状する。

仁君にほめられるの久しぶりだよ。卵焼き、また作ってあげるね。涙なんかどこ吹く風で、太陽のようなさんさんとした笑顔がこぼれる。俺も嬉しくなる。

それが一年と少し前の時のこと。

「お前がいないと、何もかもが暗くなつて！」

幼い頃から二人一緒。

幼馴染み佳乃も、ツンデレ佳乃も、ずっと一緒。

大好きな佳乃と一緒に。

「楽しいこともすぐ冷めていつて！」

点滅を繰り返す横断歩道を走る。もう少し。もう少しで俺は佳乃に追いつく。

「俺、佳乃がいないと駄目なんだ！」

涙を浮かべた佳乃の肩にもう少しで触れることが出来る。

今度こそ、キスの雨を降らせてやる。

いや、雨なんて生半可なものではない。恋愛小説も真っ青の土砂降りのキスだ。

抱きしめて、耳元でささやいてやる。

ツンデレ佳乃は少しだけツンツンしながら、すぐにデレデレするだろう。

溢れた。

俺は全てを忘れ、ただひたすらに佳乃の背中を追いかける。俺の体を取り巻くジーンズも、汗の染み込んだシャツも、なにかもを脱ぎ捨てて佳乃を追いかけたい。俺を邪魔するものを全てなぎ払ってでも、佳乃を捕まえたかった。

「佳乃！」

ただ、温もりが欲しかった。たった一人の温もりが。

平熱、三十五コンマ七度。

少しだけ人よりも低い体温だけれど、それは俺を襲う孤独や、悲しみをぬぐい去ってくれる温もり。

愛の温度。

その温かさを持つ崇高なる手のひらで俺をすくい上げて欲しい。

この絶望の暗闇から、光のある空間まで

「仁！」

俺の声に気が付いたのか、佳乃がこちらに向かってくるのが見えた。なぜか必死の形相だった。佳乃が涙を頬に残したまま突進してくる。

刹那、かぎ爪でひつかくような大きな音が、俺に迫ってきているのが分かった。

顔を上げた運転手の目が、俺の目とぶつかる。目は大きく見開かれ、携帯電話を取り落とす。

佳乃の足音が近づいてくる。

空気を引き裂くまがましい音のまにまに、佳乃は俺を助けようと疾駆する。

近づく佳乃、迫る車。その中心。俺は限りある時間で、必死に体を動かす。

手が佳乃に触れた。

直後、暗転する俺の視界。

二回転、三回転、アスファルトの硬質な感触を身体に受けながら、俺は地面を転がる。

黒、青。黒、青。

空とアスファルトが、ストロボのように入れ替わる。痛みもなく、

黒い地面をバウンドした。痛みはすぐに俺を襲うだろう。痛覚から神経に情報が行き渡るのはもう間もなくだ。覚悟は出来ている。

冷静に痛みに耐えようとする俺。人々の叫び声や、怒号がはつきりと聞き取れた。耳鳴りが無いのが救いだった。聴覚に異常はないらしい。

君、大丈夫か！

俺は誰かに乱暴に揺り動かされていた。やはりというか、事故にあった人間をそんなに乱暴に扱わないで欲しい。気道確保とか、体を横に倒すとか、救急救命の知識には疎いが、とにかく細心の注意を払って欲しいものだ。

ブレーキを踏んだとはいえ、一トンに近い鉄のかたまりと正面衝突したんだ。命がなくなってもおかしくはない。体を襲う痛みだつて、かなりのものだ。言葉だって発することが出来ないだろう。意識ははっきりしているけれど……。

こっちは大丈夫だ！ 特に外傷はない！

……待ってくれ。

こっちは？ とは何だ。どうして俺を揺り動かしている人が叫んでいるんだ。

こっちは？ あっちが大丈夫なんだろう？ こっちが危ないんだろう？ 間違わないでくれ。

おい！ 女の子の方を早く病院に！

だから、間違うなよ。女の子は無事なんだよ。あんまりふざけたことを言うなよ。もっと冷静に周りを見てくれ。一目瞭然だろ。

おい、ひどい出血だぜ……。

そうか、俺はそんなにひどいのか。でも、いいんだ。俺が望んだことなんだから。

助かるのかよ、あれ……。

おそろおそろといった様子で、野次馬が指を持ち上げる。

……野次馬の指し示す方向に、俺はいない。

とつさに自分の体が動いた。悪夢から覚めたベッドの上。布団を払いのけるようにして飛び起きた俺は、自分の体の状態が軽傷程度ですんでいる事に驚いた。

黒く変色し、出血する両腕を見、そして、揺り動かしていた男の人を見た。精悍な顔つきのサラリーマンだった。その肩越し、両足を震わせ、手を口にくわえた若い運転手の姿があった。茫然自失といった体は、あのときと同じ。

嫌な予感がした。

振り払うようにサラリーマンの元から離れ、運転手の見つめる方向に歩いていく。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

運転手は震える声でつぶやいている。その声は、もはや念仏とは例えられない。

呪詛。邪術の類。俺にとっては、災厄を招く声。憎悪を呼び覚ます声。

うつろな目で謝罪……呪詛を繰り返す運転手の足下には、特大の

曼珠沙華が咲いていた。

ヘッドライトが壊れたのか、プラスチックの残骸が至る所に散らばっている。

見下ろせば真ん中に。

真っ赤な花々に埋もれる佳乃がいた。

黒のチュニツクは、赤い液体を吸い込んでさらなる黒に染まり、白い佳乃の肌も真っ赤に染まっている。次第に広がっていく赤い曼珠沙華の花は、彼岸の名を冠するように赤い河へと佳乃を連れ去ろうとする。徐々にではあるが、群生する範囲を広げていく。広く、周囲を深紅に染めて。

視界がちかちかする。目が痛い。

何だ、これは……？

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

止める。聞きたくない。うるさい。黙れ。耳障りだ。聞きたくない。

聞きたくない。黙れ。耳障りだ。聞きたくない。うるさい。止める。

「か……の？」

血溜まりが広がっていく。佳乃を彼岸へと連れて行く。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

殺意さえ覚える声。運転手の呪詛と混ざり合う救急車のサイレン。鼓膜をつぶしてしまいたい。もう、何も聞きたくない。しかし、その音は十分な現実感を伴いながら、俺を再度、暗闇にたたき落とす。

俺は血塗られたアスファルトにくずおれた。

ぴちやり、と水が跳ねる音。まるでにわか雨の午後、アスファルトにできた水たまりに膝をつくように、佳乃の血液が俺の膝を受け入れる。

予定調和。

俺の頭に浮かんだ言葉。決められた運命。変えられない宿命。定められた死。

変えられない。不可避。俺が何をしたところで。

ここはそういうところ。

「う……あ……あ」

暗闇。漆黒。夜陰。暗黒。それらを連綿と繰り返し。

俺は幾度となく絶望を見る。

「あああああああああああつ！ ああああああああ
ああつ！」

佳乃の笑顔が浮かんで、消えた。

第二十一話・「行かせてくれ」

……体が寒い。

それが俺の体にべとつく大量の汗と、外気の温度差だということに気が付いたとき、俺の目の前で涙ぐむ杏里が安心したような笑みを浮かべた。

「……先、輩？ ……先輩先輩先輩……っ！」

目尻に張り付く涙の雫。心配を絵に描いたようにまなじりを下げる杏里を無視し、俺は視界の隅をかすめた電光掲示板に焦点を合わせる。

「八時十八分」

あれから十分しか経過していない。気の遠くなるほど長く先の見えないトンネルを、気の遠くなるほど長い時間をかけてくぐり抜けてきた。

俺は往来の真ん中、赤い絨毯のそばで慟哭し、天をつくような叫び声を上げた。佳乃の血液は生暖かく、まるで手で温める携帯カイロのそれだった。吐息も凍る真冬、握りしめたカイロから体内に染みこんでくる温かさ。我ながら、無粋な表現だと自分の感性を嘆きたくなる。非現実な出来事が、現実の中に入り込んでしまえるという一種の倒錯的な状況を、俺は数え切れないほど続けてきた。

慣れたと思っていたのに。腹の中に押さえ込むことができるようになったと思っていたのに。現実問題、そんなものは無きに等しかった。

俺は、駄目だ。もう駄目なんだ。

佳乃がいないと本当に駄目で、どうしようもない人間になってし

まう。悲しみすら満足に表現できないで、日常の中にとけ込もうと
している。

鹿岡兄と馬鹿話をし、そんな様子を見た彼の妹には半ば嫌われ、
ぼけぼけな美緒は口癖のように相方である桐岡の心配をしている。
レスリング部の田中は毎日暑苦しい筋肉を汗で濡らしているし、新
聞部の皆川亜矢子は新聞に載せるような事件がないかいつも耳を大
きくしている。笑いが絶えない。優しさで溢れている。そんな日常
は楽しい。嘘ではない。すごく楽しい。

……でも、俺の心は例外なく冷めていく。

俺の隣の机上にあつた花瓶が取り払われてからも、俺がふと隣に
目線をずらせば、そこには透明な花瓶が置いてあつた。

教室の窓から入り込んでくるそよ風。花瓶に生けられた名も知ら
ない花が、そつと揺れ始める。ゆらゆらと、そして悲しげに揺れて
いる。

それはまるで、授業で退屈した佳乃がいたずらに花びらを指でつ
ついているようで、俺はそのたびに心が冷えていった。

ふと噴水に目をとめれば、ウメの小さな背中が寒さに震えている
ように見えた。

待ち人は未だ来ず、ウメらしくもないそわそわとした態度で、改
札口をちらちらと眺めている。

一瞬、もしかしたら俺を探してくれているのではないか、と思っ
た。

本当はパパなんか存在しない。ウメは俺に話しかけられるのをず
つと噴水の前で待っている。パパを待っているなんて、そもそも俺
が考え出した誇大妄想に過ぎないのだ。ウメは恥ずかしくて、俺に
言い出せなくて、話しかけてくれるのを待っているだけ。反対多数
で否決されるはずの自己中心的な考えが、俺の脳内参議院を危うく
通過しそうになる。

「先輩……どうしたんですか？ 杏里は心配したんですよ？ 急にベンチにうずくまってふるえだして、いくら話しかけても答えてくれなかったのです……」

俺の肩に触れる杏里の手がひどく煩わしく思える。

杏里の手が、俺の思考をさえぎる余計なものに感じられて仕方がなかった。そして俺は、そんなことを当たり前のように考えられる自分の身勝手さにあきれ果てると同時に、そんな自分でも佳乃は好きでいてくれたのだから、このままでいいのでは……と悔い改める意志を失わせていった。

「救急車を呼んだ方がいいのかな、とか考えたのですよ？ ひどく震えて、寒いのがなあって思ってた先輩の手を握って、でも先輩は目を見開いたまま細かく体を揺らすだけ……。呼びかけても呼びかけても呼びかけても、揺すっても揺すっても揺すっても、答えてくれなかったのです……。ずっとずっと放置プレイだったのです。いくらMな杏里でも、身を切られるようにつらいです」

感情に流されてまぐし立てる杏里の声が、鼓膜にぶつかって痛みをうながす。

「あのですね、先輩……杏里言いましたよね。杏里は先輩がそんな風に苦しんでいるのはすごくつらいんです。悲しいんです。かわいそうなんです」

「……………俺が、かわいそう？」

俺の隣で小さくなっている杏里の犬耳が恐怖に伏せられる。

ああ、俺の目におびえているのか。……だろうな。鏡を見なくて

もわかるさ。俺は今、そんな目をしてる。

否定はしない。

したくてしてるんだからな。

「あ、杏里は……。先輩、誤解です。そんなつもりで言ったのではないんです」

俺と目を合わせた瞬間に犬耳は力なく伏せられ、視線は足下に逃げ出していた。膝の上で握りしめられた拳はふるふると震え、強制収容所に入れられた敗残兵のようにおびえている。

「先輩……すみません。違うのです。杏里は、杏里は、杏里はですね……」

その先の言葉が出ないのだろう。

いや、出ないのではない。出せないんだ。

「……だよな、俺、哀れだよな。同情したくなるよな」

「先輩、違うのです!」

うつむいていた顔に涙をいっぱいに浮かべて、杏里は俺にすがりつく。

「気を遣うなよ、杏里。いつもそうだっただろ、俺たちはさ。今更になって隠し事なんてやめろよ」

声を凶器に変えることが、こんなにも簡単なことだったのかと、俺は内心で驚いていた。

「隠してなんか無いです！」

叫びにも似た声音。周囲の数人が俺たちを振り返った。

「杏里は先輩に隠し事なんてしていないのです！」

目を覆う透明な膜と、目尻にためる透明な粒は同じもの。透き通っていて、それでいて潤っている。

一見、純水のように美しく見える。しかし、涙というものは、どんな悪人でも殺人者でも、透明できれいなものだ。涙自体の性質に変わりがあるわけではない。涙は人間性に反映されない。元から豊潤で透き通ったものなのだ。

「もし杏里が先輩に隠していたとしたら、それは、先輩と私の」

杏里との話し合いに、俺は勝手に終止符を打った。噴水の縁に座ってそわそわしていたウメの背中。子猫のように丸めて人を待つ寂しそうなその背中が、すっきりと伸びたのだ。立ち上がり、改札口に小さく手を振るウメ。

「　　って、先輩？」

杏里が言葉を切り、疑問符で俺の袖を引く。

「ウメ、それは違う」

俺の口から、無意識にまろび出るつぶやき。

声の届かない噴水の向こう側で、ウメが俺に背中を向けていた。ひらひらと待ち人に対して揺らす手は、どこか待ちわびたように嬉しそうで、今まで俺が見た中で一番活力に満ちていたように思えた。

俺に見せたことのないウメがそこにはいる。

改札口から現れたのは、頭に白い毛が混じりだした中年の男性だった。初見、穏やかそうなその男は、噴水で待っていたウメに気がつくのと、目尻にしわを寄せて微笑み、ウメと同じように手を振った。どこか疲れたような足取りなのは、仕事帰りだからだろうか。それほど大きくない体を前に傾けて、ゆっくりと噴水へ歩を進めていく。ウメはその遅々とした歩みがじれったいのか、自分からその中年男に近づいていく。ウメが自分から誰かに近づこうとしていることが信じられなかった。

たった一人で長いこと待たされ続けても帰ろうとせず、いざ待望の人がやってきても怒ることもせず、手を振り、近寄っていく。

……まるで、主人に甘え、足下にすり寄る子猫のように。

そんなウメを俺は見ることがない。

違う、そんなウメはウメではない。

俺が知っているウメが、ウメのすべてのはずだ。

無愛想で、無口で、なぜか憎めなくて。やっと口を開いたと思ったら毒霧で、でも少しだけ優しく。加えて、日本人形顔負けの緑の黒髪と清楚な顔立ち、小柄で華奢で牡丹雪のような色の白い肌をした美少女。

それが山田ウメ。

俺が知っているすべてで、ウメ自信であるはずの情報。

心臓が銅鑼を叩いたように大きく跳ね上がる。痛みが尋常ではない。

ウメの顔が見たい。

俺はその一心で、ウメの顔が見られる位置に移動する。俺に背中を向けたまま男に近付いていくウメの表情は……。

ウメの顔が見たい。

違うよな、ウメ。俺が思った通りだよな。お前は佳乃の心臓を持つていて、佳乃そのものだ。だとしたら、そんなこと許されないだろ。純粹で、一途で、幼馴染み思いで。人の道に外れるようなことがあるはず無いじゃないか。

ウメの顔が見たい。

場所を変え、角度を変えると、ウメの表情が噴水に隠れてしまった。モザイクのような水の壁に遮られるウメの顔貌。しかし、そんなことは些細な問題。もう少し、もう少しでウメの表情が見られる。五歩……いや、三步動けば顔が見られる。

きつとうんざりしていて、迷惑そうにゆがめられていて。

そうさ。一步。

ウメは。二歩。

きつと。三步。

俺の網膜に焼き付いたその表情は……。

仏頂面に嫌悪感を漂わせた顔だった。

……否。

心の底から幸福そうな笑みだった。

怒りか、憎しみか、それとも、落胆か。俺の拳がふるう場所を求めてわななく。

今ならアスファルトを砕いてしまえそうだった。大量に放出されるアドレナリンの力を借りて、すべてを殴り飛ばしてしまえそうだった。あの中年の男も例外ではない。

「くっ……！」

俺がウメを救う。ウメはきつとだまされているんだ。そうだ、そうに違いない。佳乃はそんな人間ではなかった。もちろん、ウメもそのはずだ。

そもそも心臓を貸している佳乃が許すはずがない。思考を繰り返す。

佳乃は純粹で、一途で、幼馴染み思いの女の子。だから、こんなコトは間違ってる。ウメもそれは分かっているはずだ。よって俺は、ウメに強制的にそうさせるあの男を、拳の下に沈めなくてはいい。

これは義だ。俺は正しい。間違ってる。俺がウメを助けるんだ。

「先輩！」

走り出そうとする俺の袖口を、杏里が必死に捕まえる。今日何度目だろうか、杏里に袖を捕まれるのは。あまり捕まれすぎて、制服の袖が伸びてしまいそうだ。

「駄目なんです」

俺の機先を制する杏里の袖口攻撃に、俺はいい加減うんざりした気持ちになる。

「駄目なんですよ。行っちゃ駄目なんです」

仁君。

佳乃の笑顔が蜃気楼のようにウメの背後に立ち上る。俺はそんな

錯覚を見、今一度胸の奥の炎が燃え上がるのを感じた。

黒い炎でもかまわない。それが正しいと思える。

「行かせてくれ」

「駄目です。先輩はここにいなきやいけないんです」

次が最後通牒だ。優しくできるのもこれで最後だ。

頼むから、俺の邪魔をしないでくれ、杏里。

「駄目なんだ。行かないと」

杏里の目を見る。少女の瞳は、まっすぐに曇りがない。けなげな子犬のようにつぶらで、潤いをたたえている。

「放してくれ、杏里」

杏里だって冷静に考えれば分かるはずだ。誰が正しくて、誰が間違っているかなんてことは。杏里なら分かってくれるはずだ。

「杏里は……杏里は……」

杏里の弾け飛んだ涙は、まるでスターダスト。

「杏里は、先輩にそばにいてほしいのです!」

腹の奥から吹き出す、黒く禍々しい土石流。体内から体外へ放出する黒い錯覚に、俺は吐瀉を予感した。

「杏里の目を見て、杏里の声を聞いて、杏里の肌に触れてほしいの

です！」

杏里の懇願は、俺の右の耳から左の耳へ。一度も保存されることなく廃棄されていく。

「いつもの先輩みたいに、Mな杏里をいじめてほしいのです！」

邪魔なだけだった。うるさいだけだった。

杏里はウメを助けるなど言う。そんなことが許されていいはずがない。

一人の純粋な少女が悪漢によって虐げられてしまいかもしれないという刹那に、杏里は自己中心的な願望を優先しようとしている。見捨てようとしている。

生きたいと叫ぶ佳乃の心臓を……いや、佳乃を見捨てようとしている。

ありえない。信じられない。

俺は自己の耳を疑うばかりだ。

「杏里は先輩が……」

聞きたくない。聞く耳がもてない。

事態は一刻を争う。俺の大事なもの、少女の大事なものが汚れてしまう。杏里の声を聞く一秒ですら惜しい。今すぐウメ……かつ佳乃を救わなければいけない。それは俺の使命であり、責任であり、権利だ。

もう二度と過ちは繰り返したくない。

佳乃を失うような悲しみも。繰り返される絶望の風景も。

駆け巡る嵐。断頭台の存在意義が命を断ち切るのに終始するのと同じく、俺は袖をつかみ続けようとする杏里の意志を、当たり前のように断ち切った。

腕を外側に振り、乱暴に払う。

杏里は力強く握りしめていたせいで、外に払った俺の腕に引っ張られ、前のめりに地面に突っ伏してしまう。

地面をなめる杏里。

痛みすら忘却しているのだろうか。

すりむいてしまった膝のケアも忘れ、呆然と俺を見上げる。

信じられない。そんな感情が、次の言葉に込められている気がした。

「あ……せんぱ」

俺に弱々しく伸ばされた手を冷たく見つめると、手の前進はそこで止まってしまう。

不可視の絶対的な障壁がそこにあるかのようにだった。しかし、杏里はそれでも微弱な力を結集させる。勇気と力を振り絞って、俺のズボンの裾をつかんでみせる。

俺は自分でも残酷だと思うくらいの力で足を上げ、杏里の手を断ち切った。

俺には守るべきものがある。守るべき幼馴染みがいる。

邪魔をする人間は、それが誰であろうと許さない。

俺が俺でなくなる感覚。

いつの間にか、黒い絶望が俺を突き動かす原動力となっていた。

「せん……ぱ、い」

夢遊病者然とした杏里の姿。

無慈悲にも払われた右手。

無気力に見上げる双眸。

映るのは俺の酷薄顔。

倒れ傷ついた両膝。

乱れたスカート。

膝頭に滲む血。

頬を伝う筋。

加速する。

それは。

一滴。

涙。

「せん……」

その呆然とした声が、耳に入った最後だった。背中を向けた俺は、地面を蹴ってウメの元へ飛び出していく。

風切る音に巻かれて杏里の声は聞こえない。二度と振り返らず、俺は人混みをつっ切った。猥雑な音が後方に流れていく中で。

子犬の小さな鳴き声　泣き声　は、人々の靴音に簡単にかき消された。

第二十二話・「何も知らないくせに」

夜道を急ぐ人の群れを払いのけるように、俺は力の限り走った。そして、改札口で見つめ合う一人の少女の前に躍り出る。星の見えない黒い雲の下、俺はウメに視線を合わせる前に、驚いて目をぱちくりさせている中年の男をにらみつけた。

よれたスーツを着込んだ男はひるむように眉根を寄せる。いかにも疲れ切った四十路という感じ。

底のすり減った革靴は光沢を失い、砂埃に汚れている。スーツのパンツは中央の折れ目が消え失せて、清潔感が欠落していた。ワイシャツもぱりっとして乾燥しているというよりは、湿気を含んでどこか重く、今にも臭ってきそうだ。男の風体どれをとっても、とてもビジネスマンのそれとは思えなかった。汗水垂らした仕事帰りならば仕方のないことかもしれない。

しかし、俺の目から判断すれば、衆人環境に常にさらされ、客に対して愛想良く振る舞う社会人の姿としては不合格だった。滑り止めにも受かりそうにない。

もしも女子高生に対して嫌いな中年の雰囲気ランキングを実施したら、圧倒的大多数を占めてトップスリーにランクインしそうなその男。禿頭でないのがせめてもの救いだろうか。

初見、遠目に見たところでは見えなかった男の細かな情報が、俺の瞳に打ち込まれる。

「ウメ、こいつにだまされるな」

俺はウメをかばうようにして男の前に立ちはだかった。

どうしても釣り合わせることが出来ない。

日本美人、無愛想、華奢、緑の黒髪、オニキスのようなつぶらな瞳。

百人が百人、口を揃えるウメの姿に対して、目の前の男はあまりにも落差が激しかった。せめて、せめてもつと実業家じみたナイスミドルな男であつたなら、俺の心で燃え上がる黒い火も勢いをゆるめていたはずだ。

「さ、佐々木……？」

ウメは背中を向ける俺の登場にびっくりしているようだった。普段はフラットなその声も、今は裏返ってしまっている。

「だまされるな、この男はウメを弄ぼうとしてる」

男は俺の眼光に言葉を失っているようだ。開けようとした口を再び閉じるその様は、えさをもらえそうでもらえない哀れな金魚を思わせた。

「ウメはこんな事をするべきじゃない。ウメはこんな事をしてはいけないんだ」

そう。ウメには、ウメらしく生きていける場所があるはずなのだ。溝のないタイヤであふれかえっているアパートの通路や、無機質なベッドと飾り気のない部屋なんかよりも、華やかな場所が似合っている。無愛想なのは良くも悪くも特徴だからこのままで良いとしても、服装ぐらいいは派手なものを着ても良いと思う。ゴシックロリータ辺りが最適ではないだろうか。くるくると踊れば、パニエで膨らませたスカートの下、ふんわりとしたブルマのような白いドロワーズが見え隠れする……きっとその姿は黒いお姫様だ。

感情がない　ウメはあくまで無愛想だが　っていうのもプラスに作用するだろうな。黒いクマのぬいぐるみなんかを小脇に抱えたりして、誰もいないところではその黒クマに話しかけたり。口か

ら出るのは精神的に良くないブラックな皮肉。
想像するだけで殺人的な魅力秘めている。

「ウメは違うだろ。こんなみずばらしい男について行くような人間じゃないだろ？」

ゆえに吐き捨てる。口汚い言葉でののしることも、今は義によって成り立っている。

丁寧な言葉で言っても分からない人間が此の世にはたくさんいる。だから、俺は強い口調で宣告しなければいけないんだ。

大切なものを守るために。

二度と失わないために。

きつと佳乃は俺を分かってくれるはずだ。佳乃の心臓を持ったウメも俺を分かってくれる。

「……」

俺の背後で小さく肩を振るわせるウメ。目を伏せ、今にも感情があふれ出しそうだ。

「分かっている。俺がお前を魔の手から救う。汚させるわけにはいかないんだ」

佳乃の心臓が高ぶっているのだろうか。

ウメは胸を押さえて、苦しそうに顔を上げた。

ゆっくりと右手を俺に差し出すように持ち上げる。

「佐々木」

俺は思わず微笑みがこぼれる。

ウメが分かってくれたのだ。

俺はすぐに未来を想像する。

小さく、それでいて白いウメの手のひらが、俺の頬に添えられる。感謝が込められた指で、優しく撫でてくれる。幼馴染みがしてくれたような柔らかさが蘇り、俺は自らの行いに満足する。

正しいことをした。佳乃を、ウメを守ることが出来たのだ。

ウメは佳乃だ。だから、俺は佳乃を守るのは当然で、その当然はウメにもかかってくる。

幼馴染みとしての権利で、義務。

俺が愛して止まない佳乃が俺を理解してくれたように、ウメも俺を理解してくれた。

そして今まさに、ウメの柔和な手が俺の頬に。

「ウメ、もう大丈夫だ。俺がウメを」

添えられ 炸裂した。

「……守る……から？」

俺の視界が白と黒を往復する。

乾いた音を聞いたはずの耳は、ジェット機のエンジン音に似た音で満たされてしまって、それ以外の音を聞くことが出来ない。頬がもげるのではという衝撃の後には、ひりひりとした熱い余波が膨れあがった。

「ウ、メ？」

頬を叩かれたとき、手が自然と叩かれた頬にいつてしまうのはなぜだろうか。

「死ねばいい」

小さな口から飛び出した強烈な意志。ウメには似つかわしくない低俗な言葉。

「佐々木、死ねばいい」

左手で胸を押さえ、右手は振り抜いた体勢で静止している。

ウメの小さな体は、平板な感情や態度を忘れて憤怒に震えていた。

「めざわり」

目に浮かべるのは、感謝ではなく失望。

手に込められたのは、優しさではなく怒り。

「何も知らないくせに」

ウメはしばらくその態勢を維持し、やがてゆっくりと振り切った右手を下ろす。

胸を押さえたウメが俺の横を通り過ぎるとき、ほのかに彼女の香りがした。

早足に俺の背後から横へ、そして、男の元へ。

ひるがえるように揺れた緑の黒髪が、最後に彼女の香りだけを残す。

胸の奥、肺の奥、心の奥にまで染み込んでとれなくなるような切ない匂いだった。

「行こう」

ウメが平手打ちの余韻を引きずるように慥然としたまま、男の腕

をとる。

自らの体にあてがうように男の腕を密着させ、猫のように顔をすり寄せると、次第に慄然とした顔も落ち着きを取り戻していった。よれたスーツや、汗が染みついているだらうシャツも関係なく、ウメは男のそばに居続けようとする。より近くにしようとする。

明らかに親子の関係ではない構図だった。

のどを鳴らす子猫。感情豊かなウメ。

二つの丸く大きな黒曜石が男の顔を写し込むから、男の白髪さえもうつり込んでしまうようだった。わがままな彼女に振り回されるように、男はウメに引っ張られていく。

「夏目、早く」

なつめ、と呼ばれたその男は、俺に対して申し訳なさそうな顔をした。

……それは同情か？

とつさに俺の体が前に傾く。

気が付いたときには……なんて決まり切った文句を使う気はさらさらない。そんなものは、自分の犯してしまった罪に対する都合の良い言い訳だ。

俺はウメに打たれた頬の痛みを抱えながら、夏目に飛びかかる。

男の腕にからみつく猫を引きはがし、男を地面に引き倒す。男の汗臭さも構わずにウメが密着しようとした、という事実を思い返す度に、俺は燃え上がる黒い炎と、腹の下でうごめく黒い溶岩を止めることが出来なくなった。

制御がきかない力の奔流。それは、俺の右手を通して、男の頬に真っ直ぐ振り下ろされる。

男は車に轢かれる直前の力エルのような声を出して顔を背けた。

「駄目！」

声は左方向。引きはがしたはずのウメが、俺に体当たりを敢行した。振り下ろす当てのなくなった右腕が虚しく宙を切る。俺は馬乗りになる体勢からバランスを崩して、コンクリートにうつぶせに転がった。

事の次第を傍観していたであろう一般人のつま先が見える。

尻餅をついたまま体を起こしてウメを見やると、ウメは大慌てで男を助け起こそうとするとところだった。男のスーツを白い手ではんぱんとはたいてやり、立ち上がりやすいように肩を貸す。小柄なウメの体と、一般の男の体型。その差は子供と大人だったが、ウメは足腰に力を入れて、何とか男を支えようとしていた。

けなげで、思いやりに溢れたウメ。

胸が締め付けられるような思いだった。

ウメと佳乃が重なって見えるだけに、その光景は俺に槍を突き刺す。肋骨を貫通し、肺を破り、背中に抜ける。串刺しにしたものは、心。

「何でだよ……！」

第三者から見れば、俺は一体何に見えただろうか。

彼女に別れを宣言されても、みつともなくよりを戻そうとする元彼だろうか。

「ウメ、お前は間違ってる！ お前がこんな事をして良いはずがないんだ！」

地面に尻餅をついたまま、俺は虚しく吠えるしかない。

「佳乃だつて、分かっているはずだろ！　なあっ！　ウメ！」

俺の存在を無視して男の支えになっていたウメが、その言葉に動きを一瞬だけ停止させる。

「ウメであり佳乃であるお前なら分かるだろ！」

男の支えになっていたウメが、男の元から離れる。尻餅をついた俺の目の前まで進み出ると、もう一度その小さな手のひらを振り抜いた。

迷いもなければ、容赦もない。

「私は、山田ウメ。佳乃じゃない。それに」

重ねられた平手打ち。腫れ上がるような痛みが、寄せては返す。寸分の狂いなく同じ右頬をとらえたせい、痛みの連続から、痛みの麻痺、感覚のしびれへと推移する。

「私は夏目が好き。夏目のためなら、何だつて出来る」

ウメの言葉を聞く夏目は、ウメの背後で少しだけ困った顔をする。その意図がよく分からないうちに、ウメは俺に愛想を尽かしたように顔を背けた。見えたウメの手のひらは、鬱血したように赤く染まっている。平手打ちをされた俺だけではなく、した方であるウメにも痛みがある。その証となる赤みだった。

「行こう、夏目」

赤い手で夏目の手を取るウメ。この場を去ろうとつながすウメに對して、夏目はひどく複雑な表情を浮かべた。

「……ウメ、それでいいのかい？」

「いい。間違つてない」

抑揚のない声に、夏目は閉口する。とりつく島もないと感じたのだろうか、手を引くウメの後に従うだけ。

ウメと夏目はすぐに見えなくなった。

二人が夜の喧噪に消え、駅前が毎日の混雑を思い出しても、俺はその場を動けなかった。口内を巡る鉄の味に、俺は平手打ちでも口の中を切ることがあるのだと初めて知る。

「佳乃……」

救いを求めるようにつぶやいていた。

第二十三話・「ただそばにいたい」

翌朝早く、俺は家を出た。

世の中は何も変わっていない。

誰が悲しみ、誰が喜び、誰が泣き、誰が笑っても、世の中は急に加速したりしない。例え深く傷つき、未来が見えなくなっても、太陽は昇るし、日は沈む。

この世の終わりなんか来ないし、ノストラダムスだって虚言癖だとののしられる。

アフリカの貧しい人たちが何万人死に絶えようと、中東で頻発するテロや紛争で町を焼かれ、家族が殺されようと、相も変わらず電気街では萌えだのメイドだのツンデレだので盛り上がっているし、家に引きこもっては匿名の掲示板に暴言を書き込んで話の腰を折っている。

そうして人は相も変わらず、過ごしている。

俺も生きている。

佳乃を失っても、ウメに拒絶されても……。

「だ〜れだっ？」

朝のすがすがしい風が遮られ、目に映るまぶしいぐらいの朝の町がブラックアウトする。今どき流行らない恋人達の戯れのように、柔らかな両手が俺の両眼を包み込んだ。

「……おはよ」

「おはようです、先輩」

まるで昨日瞳を濡らしたのが嘘のような明るい声が、背中から聞

こえてくる。

「ところで先輩、だ〜れだ、です。杏里が誰か分かりますか？」

それはアイデンティティを問うていると考えた方が良いでしょうか？

せめてそういう人間当てクイズをするなら、一人称を自分の名前でないものにしてからの方が良いと思う。私とか、あたしとか、あたい、とかさ。

「……はっ！ 先輩先輩先輩！ 今のは誘導尋問だったのですね！ あ、杏里、一生の不覚です！」

勝手に自分で掘った墓穴に落ちて、墓穴の中でのたうち回っているだけだろ、とは言わない。

「それぐらいが一生の不覚なら、お前の一生は何回あるんだよ」

視力検査よろしくふさがれていた目がようやく解放された。瞳孔が開いてしまった分、朝日のまぶしさを三割り増しで感じる。

「今日も今日とておはようです、先輩」

俺の前に回り込んだ杏里が、にっこりと笑う。子犬が舌を出しながらご主人様の持ったボールを投げて投げてと催促するかのようだ。

「先輩、今日は早いのですね。杏里、結構待たなきゃなつて覚悟していたところだったのです」

俺が前進すると、杏里は後ろ向きで歩き出す。常に面と向かって

話そうとする杏里のお尻では、後ろ手に持った鞆がウエストポーチのように揺れている。

「今日は、たまたま早いだけだ」

「だったら、杏里はラッキーですね」

嬉しそうに一回転した杏里のスカートが、シャンプーハットの形を作る。そして、再び俺と向かい合う。

「早起きは三文の得って本当なのです」

薬指、中指、人差し指。その三本を笑顔の前に突き出す。明朗で快活な杏里。

俺はそんな杏里にめまいを覚えそうになる。昨日のことが嘘だったのではないかと。

「二束三文、三文文士、三文判……意味、分かるか？」

「あ、杏里を馬鹿にしましたね！ お母さんにも馬鹿にされたことないのに！」

杏里が鞆をぶんぶん振り回しながら抗議する。

「それじゃ、二束三文は？」

「靴二足で、三文なのです。つまり安っぽいという意味なのです！」

ない胸を張る。なんか、二重の意味で空しいな。

「……次、三文文士は？」

「さんもん……さんもんぶし……分かったのです！」

分かったって……もともと考えて解くような問題ではないぞ。言うまでもないが、これは知っているか、知らないかの問題だろう。

「三つの問いに答える野武士です」

「その心は？」

「ヤツは暇人」

だから、自信満々にふんぞり返るな。間違ってるから。

例えるならアレキサンドリアの天文学者プトレマイオスが提唱した天動説ぐらいに間違ってるから。放っておけば、天動説のように間違った教えを千四百年間にわたり信じ続け、それこそポーランド生まれのコペルニクスが地動説を唱えて、ガリレオ・ガリレイが木星を見つけるまで杏里は間違い続けるだろうな。

…… 本当のために息が出る。

俺は一縷の望みもなく、同情半分、憐憫半分の心　つまり百パーセント憐れみで出来ている　で一応最後まで聞いてやる。杏里は犬だから、生類憐みの令ってヤツだ。

「三文判は？」

「ふふふのふです。杏里が知らないとしても思ったのですか？　ずばり、かけ声なのです。サン、モン、パン！　って感じです。バツターがタイミングを計るときによく使つのですよね？」

「……誰が、野球の話をしろと言った」

鞆の取っ手を強く握り締めた杏里が俺に迫る。

「えええっ！ でもでもですよ、先輩、正解と言っても遜色ない筋が通ってませんか!？」

俺は眉間のしわを人差し指で伸ばす。

「違うですよ」

俺の声を耳にした杏里の顔が、懽然としたものになった。

「……む、真似ですね」

「真似なのですよ」

投げやりに答える。

「杏里の真似しないでください」

「杏里の真似しないでください」

夫婦漫才じみたやりとりに、俺は心なしか足取りが軽くなる。

「むむ、意地悪ですね」

「むむ、意地悪ですね」

杏里が難しい顔をして、鞆を持ったまま腕を組む。

歩くスピードは緩めない。後ろ歩きも慣れたものだ。

「すもももももものうち」

「すもももももものうち」

昨日の今日だというのに、朝から元気であることの出来る自分がひどく人間離れた者のように思えて仕方がない。

「赤巻紙青巻紙黄まひぎゃう」

舌を嚙んだらしい。涙目になって口を押さえている。

「赤巻紙青巻紙黄まひぎゃう」

舌を嚙んだ痛みで涙腺を緩ませる杏里の姿が、昨日の夜にはじけたスターダストを思い出させる。胸が五芒星の角に突き刺さったようにちくりと痛む。

「先輩のいぢわる、なのです。じ、じゃなくて、ぢ、なのがポイントです」

「先輩のいぢわる、なのです。じ、じゃなくて、ぢ、なのがポイントです」

俺が真似ると、怒った子犬のようにのどの奥から声を出して威嚇する。でも、上目遣いなのでちっとも怖くは映らない。杏里はなにやら思案気に俺の瞳を見つめた後、思ったより簡単に威嚇を解いて立ち止まる。俺も立ち止まる。

「……………杏里好きだ」

「さて、行くぞ」

「ひどい！」

先に歩き出した俺の背に届く言葉。

ひどい、か。……ああ、その通りだ。俺はひどい人間だよな。

本当にうんざりするぐらいひどい。自分でも不思議で仕方がないんだ。何でこんなに明るくしていられるんだろうな。一人でいるときはいくらでも黒い海に沈んでいけるのに。

悲しみに慣れたのか。それとも、忘れてしまった？

……いや、佳乃を失った絶望も、ウメに拒絶された悲しみも、きちんと胸の奥で寄生し増殖し、今もそのテリトリーを広げている。

それとも、ウメのことなんかどうでも良くなったのか？

……それも違うな。

実は子猫のようにかわいらしかったウメの笑顔……佳乃の笑顔が、夏目というただ一人の男に注がれている。

俺はそれが妬ましくて仕方がないんだ。醜い感情でいっぱいになっているんだ。

どうでも良くなるなんて、そんなことあるわけがない。絶対に。

「せめてさっきのことわざの意味教えてください！ でないと、杏里は気になって気になって気になって授業中眠れないじゃないですか！」

「禍を転じて福となす、だな。授業中寝ないのはいいことだぞ」

ぱたぱたと駆けてきた杏里が、前ではなく左に並んで歩き始める。なので、抗議の声も左からだ。

「先輩、ひどいです！ 鬼、悪魔、ドS！ Mな杏里じゃなかったら放送倫理協会にワンコールしているところですよ！」

ワンコールでは、つながるところにもつながらないだろ。

「馬鹿には付き合ってられん」

「馬鹿だからこそ、教えて欲しいのです。杏里は馬鹿だけど見てください！ この溢れる好奇心、溢れる知識欲を！」

どこを見ればいいんだよ。それに好奇心とか、知識欲ってどこから溢れてくるんだ。

そもそも、それは見えるものなのか？

「先輩の目は疑いの目です」

「分かった。分かったよ。色々話がそれたけど、教えてやるよ」

手が少しだけ疲れたので、左に持っていた鞆を右手に持ち直す。

「二束三文、数が多くて値段のきわめて安いこと。物を捨売りにする場合の値段にいうんだ」

杏里がコクコクとうなずく。

「次、三文文士。つまらない作品しか書けない文士。また、文士の蔑称のこと」

どこからかメモ帳とシャープペンを取り出して、細緻でミミズの

ような文字を走り書きする。お前は、証人喚問の速記者か。

「最後に、三文判。できあいの粗末な印形」

並んで歩きながら俺は杏里に解説してやる。

「どこか辞書を引っ張ってきたような解説ですが、一応メモメモなのです」

一言余計だ。

「そこで、最初に立ち戻るわけだ」

「謎解きですね？　どんでん返しのびっくり仰天ですね？」

俺はうつとうしい煙でも払うように左手を振る。

「あー……とにかく、早起きは三文の徳って言っただろ。それって結構得したように聞こえるけどさ、先の三つの三文にもあつたように、三文っていうのは実はそれほど価値がないものなんだよ」

「その未来がないようなオチはいただけいですよ、先輩」

疲れて徒手にした左手の小指が、温かい何かに包まれる。

「もっと明るく行きましょう！　杏里は明るい方が好きなのです！　ハッピーエンド大好きでなのですっ！」

見れば空いた左の小指が、杏里の右手に包まれていた。

「先輩、気にしちゃ駄目なのです」

なにが、とは言えなかった。

やはり夢などではない。きちんとした現実で、昨日の杏里の涙は本物なのだ。

杏里は、そのことを言っている。鈍感な俺でもそれぐらいは分かる。

「辛かったら辛い顔をする。昨日辛くされたから、今日会いにくい、明日合いたくない……分かるのです」

朝が早すぎて通学路には人影はない。

唯一、犬のリードをもちながらランニングする大学生の姿が、俺達から遠ざかる。洗濯挟みのような流行の白いメディアプレーヤーがジャージの襟元にくっついていて、俺達を抜き去るときマラカスのような音を響かせていった。どんな音楽だったかは分からないけれど、心臓が高鳴るようなエイトビートだったことは確かだった。

「普通、嫌なことからは、苦しいことから逃げると思うのです。杏里も、逃げ出したいな、って思ったのです。……でも、逃げられないのですよ。杏里は先輩のそばにいたかったです。近くにいたいと思った人から、遠ざかるうなんて、そんなこと考えられなかったのです」

小指を握られるのは初めてではない。

おぼろげながら記憶がある。

ずっと、ずっと昔の記憶。

「近くにいたいから、傷ついても、傷つけられても良いのですよ。痛くても、悲しくても、涙を流しても、杏里はMだから耐えられる

のです。Mだから笑っていられるのですよ」

杏里は今日の朝、俺に会うためにずっと待っていてしようとした。忠犬八チ公が、毎日渋谷駅前で帰ってこない主人を待ち続けたように、けなげに、一途に、自らの苦勞を厭わずに。

俺が何時に登校するかなんて分からない。もしかしたら、シヨックで学校を休んだかも知れないのに。

忠犬杏里。

…… 本当に馬鹿だ。馬鹿で馬鹿で馬鹿正直で 胸が苦しくなる。

「辛いときは明るく、明るいときはもつと明るく。それが杏里たるゆえんなのです。だから、杏里は笑わなくてはいけないのです。にこにこしなくてはいけないのです。なので…… 杏里は先輩の分も笑います。そして先輩は、そんな杏里をたくさんいじめてもいいのです。知ってますか？ 朱に交われればいつかは赤くなるのです。馬鹿は伝染するのですよ。だから、私が笑っていれば、先輩もきつと心の底から笑えるようになると思うのです」

わざと大きく手を振る。小指を握られているから俺の手もそれに従うことになる。

「なんせ、杏里はことわざの意味も分からないくらいの大馬鹿ですからね。とほほです」

鞆を持った手でこつんと自分の頭を小突いて、おどける。

「杏里……」

どうしてこんなにも、横にいる少女は俺に好意を寄せるのだろう。真っ直ぐな目で見つめてくるのだろう。

分からなかった。だから、知りたくなつた。

「どうして俺なんだ？」

「分からないです。でも、先輩が良いのです。先輩じゃなきゃ駄目なのです」

小指を離して微笑む。

「だから、杏里も参っています」

そう言つた杏里の顔は、朝日の輝きに似ていた。俺はあまりのまぶしさに手をひさしのようにかざしたくなる。太陽の下で何度かくるくると回る杏里は、どこか照れ隠し様相を呈していた。そんな杏里の姿を見る度に、俺は毎朝となりを歩いていた幼馴染みの少女を思い出してしまう。

俺を、仁君、あるいは、仁、と呼んでくれた少女を。

その笑顔の輝きを重ねてしまう。

自動的に再生されてしまう追憶の情景を俺は止めることも出来ない。止めることが出来るかもしれないが、もし出来たとしても俺は止めないだろう。過去の風景に身をゆだねることはとても心地よいし、懐かしいから。洗いたてのシーツや、干したばかりの布団に顔を埋めるように怠惰になれるから。太陽の匂いに囲まれながら、甘美な記憶に抱かれることが出来るから。

だから、俺は杏里への罪悪感を抱きながらも、過去という記憶の美酒を味わう。

「おつ、とつ、と……」

俺の少し前を行っていた杏里は、回りすぎたのか通学路の曲がり

で立っていたサラリーマンにぶつかってしまう。杏里は尻餅をついて倒れてしまい、スカートの裾を押さえながら恥ずかしそうに被害者にぺこりと頭を下げる。

「大丈夫かい？」

そう言って杏里に手を差し伸べるサラリーマン。

「すみませんです……」

反省する杏里は、申し訳なさそうに差し伸べられた手を取る。

「謝らなくていいよ。こんなところで人を待っている私も悪いんだからね」

一秒後に絡んだ二人　俺とサラリーマン　の視線が、俺の心臓を燃え上がらせた。

黒い炎。黒い溶岩。醜い感情。ぬらぬらと蠕動する。

「改めて初めまして。夏目陽司なつめやうじと申します」

慇懃に頭を下げるサラリーマン。

私は夏目が好き。夏目のためなら、何だって出来る。

ウメの声がリフレインする。和やかに見えた明るさを一瞬にして吹き飛ばした夏目陽司は、慇懃に下げた頭を戻し、俺の視線を真っ直ぐに受け止める。

正直、俺が簡単に受け止められるような視線を放っていたとは思えない。

男に手を差し伸べられた杏里は、その俺の目を見て体を縮ませていたし、俺にかけようとした声も、のど元で立ち往生しているようだった。

俺はその視線を無意識に作り出していた。

眉はつり上がり、眉間には深いしわを刻み、瞳は燃えさかる火炎をまとう。自分の目を自分で見ることは出来ないが、杏里の姿を見れば分かる。あんなにおびえた杏里を、俺は今まで見たことがない。

「佐々木仁君、ですね」

俺の父とさほど年齢は変わらないであろう夏目は、俺が年下であることをはっきりと分かっている、ゆっくりと丁寧に問いかけた。俺からすれば、その余裕の態度が癪に障る。

いや、どれだけへりくだっても、どれだけ正しいことをしても、俺は癪に障るのだろう。

夏目陽司をなす構成要素、その全てが俺は憎くて妬ましくて仕方がなくなっているのだ。

もしかしたらウメがその男の体の下敷きになっているのではないかという、妄想の加速。

陶器のような白い肌が男の脂ぎった肌で汚され、あるいは真っ赤な舌でべとべとにされる。まるでナメクジでも這ったかのように、ねっとりとした唾液の筋道を作り、それは高速道路のインターチェンジのように肌を執拗に這い回るのだ。

無精髭の残るあごでウメに頬ずりし、乾燥した唇でウメの耳たぶを食む。耳たぶの次は首筋だ。純白のうなじを皮切りに、鎖骨、胸元と落ちていき、小振りな胸を揉みしだきながら、その先端を口に含む。やがて、へそを舌先でほじくり、くるりと一周させた後、誰も見たことがない女の証へと無遠慮に突き進んでいく……。

昨日、待ち焦がれていた夏目に向けたウメの笑顔が蘇る。

あの小さくて均整のとれた美しい顔が、今度は快樂に染まるのだ

ろうか。

唇同士の接触では、ウメの可愛い舌が男の舌を求め、波のように激しくうねるのだろうか。

唾液と唾液が混ざり、舌と舌が絡み合い、新たなる快樂への嚙矢となるのだろうか。

目をつぶり、一心不乱に。歯茎をなめ、あるいはつつきながら、男の乾燥した唇を、ウメが積極的に自身の唾液で潤すのだろうか。

止まらない。

俺の想像も、想像の中で繰り返される汚れきった行為も。ウメをおとしめる猥褻な妄想も。

……俺はこんな人間だったのか。

自分ももしかしたら佳乃とそんなことをするのかと考える。しかし、それは夏目とは違い、とても美しく尊い行為なのだと思う。佳乃を愛していく行為なのだと思う。

でも、そんなものは自分勝手な愚考の産物に過ぎない。まるで愛が自分にしか与えられていないような独善的な思考回路。俺が尊いと思っている行為ですら、他人から見れば醜い行為に見えるのだ。当事者には魔法がかかっているから、綺麗に見えているだけ。だから、俺の考えていることは独りよがりすぎない。

平静になれば、そんなことは当たり前のように分かるはずだ。

例えばそれが誰と誰の行為であろうと、互いに愛という目に見えない絆がある限り、尊い行為に昇華される。

それがどんなに醜悪な男と女だろうと。

それがどんなに貧困な男と女だろうと。

それがどんなに馬鹿な男と女だろうと。

例えば他人からは醜い行為だと見られ、判断されようとも。

愛は全ての人間に平等に与えられていて、どれも平等に美しく尊いものであるはず。

……しかし、そんなきれいな事ですら、何の経験も持たない俺には分からないし、分かるつもりもない。……分かってたまるか。

佳乃が俺に注いでくれていた優しさや、温もり、まごころ、それが夏目という男によって汚されている。蹂躪されているのだ。ウメは佳乃そのもの。佳乃の心臓を持つウメは佳乃と同義なんだ。ウメが佳乃なら。佳乃がウメなら。

俺を好きでいてくれるはずなんだ。

そうでなければいけないはずなんだ。

……そう考えてしまうのは、ゲームのやり過ぎなのだろうか。

主人公は、周囲の美少女達に大小様々な理由で好かれていって、気が付けば主人公の争奪戦が始まる。全ての少女が純粋で一途。決して他の男に心動いたりしない。もちろん、他の男と付き合ったこともなく、全てが初体験だ。

多難な状況をあの手この手でぐり抜け、最後には強固な絆で、愛情で結ばれ、幸せな日々を送っていく。幼馴染み、ツンデレ、姉や妹、義妹、天然少女、眼鏡っ子、優等生……。型にはまったキャラクターと繰り広げる、型にはまったシチュエーション。家に押しかけてきて同居することになったり、転校してきたり、婚約者だったり、幼い頃に約束していたり……。馬鹿みたいに単純なゲームだ。俺もそんなゲームが好きで、幾度となく感情移入してきた。でも、そんな日々の途中で大好きな人を失ってしまったら。不意になくしてしまったら。

俺はどうすればいい？

ハッピーエンドのない物語なんて知らない。俺の知っているゲームは全てハッピーエンドだった。どんなに悲しくても、どんなに大切な者が犠牲になっても、最後には失ったものが元の形になって必ず戻ってきた。多少の御都合主義であっても、結末は明るい未来だったのだ。

佳乃、俺はどうすればいい？

ゲームは何も教えてくれない。幸せになる方法もない。先に待つものがハッピーエンドだなんて保証をしてくれない。だったら、俺は佳乃と、佳乃を構成する要素を守らなくてはいけないのではないか。

佳乃は　ウメは　きっと、俺のことを好きでいてくれるはずだから。

何より、俺は夏目よりもウメを大事にしてあげられる。俺には夏目よりも優れたところはたくさんあるはず。夏目には出来ないことだって、俺には出来るはずだ。

俺は、夏目の瞳を貫くように眼力を込める。

佳乃は渡さない。これ以上、汚れさせたりしない。

心臓が、体が爆発しそうだ。

心臓から送り出されたニトログリセリンが、血管という血管で爆発しかかっている。ミトコンドリアが俺の体に乗っ取って怒りに震えている。

ウメの恍惚とした表情が頭から離れようとしなない。

夏目がウメを　佳乃を黒で染めていくような気がしてならない。白い天使が、黒い悪魔へと墮落する。

「佐々木仁君、ですね」

まるで同じシーンを繰り返すように夏目は唇を動かした。ウメの唇を吸い上げたかも知れない唇。未成熟なつばみを含んだかも知れない唇。醜悪な唇。

「ウメの　山田ウメのことについてお話ししたいことがあります」

夏目はウメの見えないところで作った複雑な表情を浮かべる。

ウメ、そう呼び捨てに出来る間柄だということに、俺はさらなる怒

りを得、嫉妬心を覚える。

「出来れば放課後、お時間をいただけないでしょうか」

夏目の丁寧な言葉が、ぎりぎりで俺の理性を保っていた。もしも、夏目が少しでも自分勝手な発言や、ウメを軽視するような言葉を口にしていたら、俺は縮地法さながらに地面を蹴り上げて、夏目に殴りかかっていたことだろう。

「あなたに話しておかなければいけないことがあります」

聞き取りやすい声で話す夏目は、風体とは離れたところで、やはり社会人なのだと理解させられる。問答無用に叩き伏せることはいつでも出来る。俺は沸点温度辺りでさまよう理性と折り合いをつけた。

「……分かった」

「先輩！」

俺の悪鬼たる表情にとまどい、おびえていた杏里。俺と夏目の視線を遮るように前に出て、声を荒げる。

理想の早朝にはほど遠い風景。

「もう止めましょう先輩！ その……ウメ先輩に何があつたとか、夏目さんが誰なのか私には分かりません。でも……でもでも！ 私は嫌なのです！ せっかく先輩と一緒にいられる今が、なくなってしまうのはすごく嫌なのです！」

両手を左右に広げて、まるで戦場に行こうとする俺を止めるかの

ようだ。

「このままでだっていいことも、立ち止まってもいいことだってきつとあるはずなんです！ 変わらないことが正しいとだってきつとあるはずなんです！ 知らないまま生きていいってこともあつていいはずなんです！」

杏里の左右に伸ばした両腕は、翼のように大きく広がっている。それは、俺の全てを受け止める用意がある、そう言ってくれているような気がした。

ただの身勝手な俺の錯覚に過ぎないだろうが。

「夏目さんといいましたよね。……私、今のままが良いのです。先輩のそばにいられる今が一番好きなのです！ ずっと今のように先輩のそばにいられることが、杏里のただ一つの夢だったのです……！」

夏目を振り返り、懇願するように言葉を紡ぐ。両腕はそのまま、それはやはり夏目の行動を抑止するかのように広げられたままだ。

「一年前の先輩には、もうどうしようもなくお似合いの人がいて……私には入り込む余地すら、きっかけすらなくて、ずっと遠くから見ているだけだったのです……でも、でも、でも！」

三回続ける杏里の癖。その後の言葉は、どうやら夏目のみに伝えられたようで、俺の耳には届かなかった。

「……その人は突然いなくなってしまうて。けれど先輩はずっとその人のことを探していて……悲しい顔をして、でも普段から楽しそうに振る舞おうとして。そのとき思っただのです。先輩と一緒にいら

れるのなら、杏里は……その人の代わりでもいいのです。先輩のそばにいたいと思ってしまった以上、もうなりふり構ってられないのです。ただそばにいたい、それだけなのです。だから、今の杏里と先輩を壊さないでください。お願いします」

聞こえない言葉の代わりに、杏里が夏目に対して頭を下げたように見えた。

夏目の苦心する顔が、歪んだ頬から理解できた。優しさだけが言葉となってまろびでる。

「……でも、それを決めるのは残念ながら私ではないんだ。私も話しておかなければならないと思ってここにいる。話すことには何度も悩み、苦しんだ。その末の今日、この朝なんだ」

杏里の目を見つめて、気丈に言い放つ。

「私も同じ。はい、そうですかと簡単に譲れることではないんだ。立場的には、話して欲しくない今の君と一緒にだよ。だから、選ばれるべき二つの選択を、選ぶ本人抜きのまま選択同士で話し合い、一つに絞るのはいけないことなんだ。私と君は、選択される側の人間なのだから」

杏里は目を伏せ、壁のように力強く立ちはだかっていた背中を力を抜いていく。肩は落ち、左右に伸ばした両腕　両翼を折りたたむ。

「佐々木君、君が決めて欲しい。私と来るか、来ないか」

「……決まってる」

選択の側にどんな思惑があるのかは知らない。

いや、どんな思惑があったって構わない。

俺の今の怒りを鎮めてくれさえすれば。鎮めることが出来さえすれば。

俺は暴力で解決することも厭わない。

もとより、話し合いだけで解決するような、穏便な結末になるとは思っていない。俺はそれほど大人ではないから。それくらい俺の黒い炎は、可燃性のある絶望と結託して、感情にさらなる火を加えている。腹の奥で溢れる黒い液体も俺の行動を助けてくれるから、力にも事欠かない。

「俺はあんたについて行く。放課後だなんて言わない。今すぐにも」

「先輩！」

杏里が持っていた鞆を落として叫んでいた。

「ありがとうございます。実は私も今すぐの方がいいんです。出来ればそうしていただきたかったです」

頭を垂れる。一応の感謝のつもりだろうか。低姿勢なのか、小馬鹿にしているのか、大人ぶっているのか。その三択を選ぶのも面倒なほど、俺は気がせいっている。未だに離れようとしない、ウメのあられもない姿……俺の想像の中で眼前の男と乱れるウメ。

夢想、妄想することの出来る人間の脳を俺は恨む。

「少し歩きますが、付き合ってくださいますか。この先に私の家があります」

俺は何も言わずに、歩き出した夏目の背中に従う。杏里の横を無言で通り過ぎ、通学路とは反対側の道を歩き出す。もはや、学校などという日常は予定から蹴り落とした。

「あの！ 私も行きます！ 私も行きたいのです、先輩……！」

杏里の指が弱々しく俺の制服をつかんでいた。払えば簡単に手放すであろうその握力。

犬耳を伏せ、尻尾を力なく地面に落としている杏里の姿。まるでガラス細工のように不安げで、もろく見える。

とてもではないが付いてくるなとは言えなかった。

「こんなことを言ったら、おかしいかも知れませんが」

歩き出して一分と経たずに、一言だけ夏目は告げた。

「私とあなたは、似ているのだと思います」

聞こえた瞬間、目の前に火花が散る。

殴ろうと持ち上げた拳。

しかし、俺は殴れなかった。

杏里が制服の袖を握りしめていたからだ。

……それきり夏目は家に着くまで何も言わず、当然、俺も杏里も口を開くことはなかった。

第二十四話・「恋」

「ここが私の家です。手狭なところですが、どうぞ」

夏目の背中が燃え出さんばかりににらみつけていた俺は、歩いていることすら忘れていたばかりか、ここまでのようにして歩いてきたのか、その道程さえも綺麗さっぱり頭の中から抜け落ちてしまっていた。

もはやそうすることが当たり前で、なおかつその場所が指定席であると店の常連客が言い張るように、俺の制服の袖は杏里の小さい手でしっかりと握られていた。

それに気が付いたのは夏目を殴りそうになったときと、玄關口で靴を脱ごうとしたのが、それぞれ最初で最後だった。

「せっかく無理を言ってきたらというのに、何も出すものはないんだ。男の一人暮らしというのもあってね。せいぜいお茶ぐらいは出せるが……」

「あの、お構いなくです」

俺の代わりに杏里が答えると、夏目はわずかに微笑んだ。

いやらしい笑みに見えて仕方がない。

脂ぎった額に、無精髭、白髪交りの頭もそうだが、何もかもが気に入くわない。反抗期の子供だと言われても、俺は言い返す言葉もないだろう。

……殴り返す拳は持っているが。

「さて……とは言いつつも、やはり飲み物ぐらいはね」

俺と杏里を応接室であろう部屋に待たせると、夏目は家の奥に引っ込んでいった。

夏目がいなくなったところで、俺は大きく息を吐く。大きく息を吐いた分、今度は大きく息を吸わなくてはいけない。夏目の匂いが肺の奥を満たしたことで、俺は嫌悪感に咳き込みたくなった。

「……杏里はどうしてここにいるのでしょうか」

不安に揺れる瞳が立ったままの俺を写す。

「知るか。勝手に付いてきたんだろ」

俺の無下な答えに杏里は口を引き結んで、目の前のガラステーブルをじっと見つめ続ける。杏里の不安な顔が、ガラステーブルに映りこんでいる。

ソファに腰を落ち着けずに、俺は周囲を見回していた。

「そうです。そうなのですけど、でも……あのときはその場の勢いで、このまま先輩を行かせたら後悔するような気がして……」

杏里は体を石像のように強ばらせて、革張りの黒いソファにちょこなんと座っている。まるでこれから面接が執り行われる受験生の面持ち。犬耳をきよろきよろと動かして、周囲の野物音などに過敏に反応している……そんな風に思えた。

「今からでも遅くない。帰れよ」

鋭い言葉だったが、それが今の俺に出来る精一杯の優しさでもあった。

「……帰らないのです。先輩とは一蓮托生だと決めたんです」

「何で一蓮托生を知ってて、三文文士とか三文判とかを知らないんだよ」

「人ってそんなものですよ、先輩。知っておくべきことを知らなくて、知らなくてもいいことは知っている。杏里はいつもそんなのばかりです」

「言っている意味が分からん」

「あはは……杏里もです」

そこでやつと杏里は微笑んだ。

傷つけられても、痛いとは分かっている、そばに寄ろうとする健気な子犬。杏里を見ると、怒りが罪悪感で上書きされていくような気がした。

どちらにせよ、俺の心は苦しかった。

「先輩、覚えていますか。杏里と初めて会話したときのこと」

罪悪感で上書きされていく俺の怒りは、早々に鎮火に向かっていく。

「ちょうど今から百八十四日十四時間二十三分五十二秒前のことです」

俺はそれがごとく嫌で、杏里を見ていることが出来なくなつた。

「……冗談なのです。言ってみたかっただけなのです。杏里は機械ではないのでそんなに正確ではありません。……でも日付は確かにはずなのです」

冗談を交えても、それに取り合うものがなければ、冗談は虚しさ
に変わる。

「杏里はその日、先輩と廊下でござつんこしたのですよ」

夏目の家は思っていた以上に広く、落ち着いた趣だった。庭付き
の一戸建てで、一人暮らしには広すぎるくらいだ。ほこりをかぶつて
いるのがそこかしこで目立つが、それは夏目の風体を見れば分かる
ことだ。

「痛かったのです。不覚にも杏里は仰向けに倒れてしまって、パン
ツが見えてしまつて……。なんて言うか、こんなべたべたな展開
……これなんてエロゲーなのです」

杏里の言葉には答えず、俺は観察を続ける。客をもてなすための
もののなか、戸棚の中には和と洋の食器がひしめいていた。

それにしても、夏目は収集癖でもあるのだろうか。一人で使うに
はあまりにも数が多すぎる。百歩……いや、一万歩譲ってウメとの
生活があつたとしてもだ。

「初めて会話をしたのはそのときなのです。ごめん、大丈夫？ ……
…何でもないただの言葉ですけど、それは杏里にとって初めてです
から。しっかりと覚えているのです。えと……話しがそれてしま
いましたけど」

……そして、俺の観察が三百六十度を迎えようとしたとき、俺は

本棚の横にひっそりと置いてある写真立てが目飛び込んでくる。

「先輩と会話したのはそれが初めてです。その……会話をしたのは先輩を知ったのはもっともっと前なのです。見ているだけで半年、名前を知るまでさらに半年、会話をするまでさらに半年……先輩にとつての杏里のメモリーは半年にも満たないと思うのです。でも、私にとつてはもう二年分になろうとしているのです。杏里のハードディスクはもう拡張が必要なくらいです」

俺の見つめる先には、写真の中で微笑む嘘みたいに精悍な姿の夏目と、優しそうな女性の姿、そして二人の真ん中で花開くように笑う、線の細い少女の姿があつた。

ウメではない。ウメには似てもにつかない。

分厚いコートを着た二人の男に連れ去られる小さな宇宙人……例えとしては似つかわしくないが、構図としてはそれに似たようなものだった。

ただ、そこに切り取られている雰囲気は、紛れもなく幸福な家族そのものだ。

「ふざけてる……」

つめが手のひらに食い込んでいく。力は黒い液体の助力により、際限なく引き出される。ウメが弄ばれていたのだ。一人のみすばらしい男によって。

許せない、許してはおけない。

「家族がいるのに、ウメを」

俺は写真立てを手に取ると、幸せに溢れる風景を見つめ続けた。写真を覆うガラスが、みしみしと音を立てていく。

「私の妻子です」

声がして振り向けば、夏目が急須と湯飲みを乗せたお盆を持って立っていた。

「あんたは！」

この醜い男がしでかした、許されざる所行。

妻子ある身でありながらウメをたぶらかし、この世でたった一人の幼馴染みである佳乃を汚したこの男の行為は、万死に値する。

「佐々木君、君の言いたいことは分かっているつもりだ。殴りたいのなら殴ってくれても構わない。いや、そうしてくれると嬉しい。

……そうしてくれないか」

俺を止めるものはなくなった。右手に持っていた写真立てを床に落とす。

床に転がる音。点火の音。

心臓から止めどなく溢れる黒い液体が、激流になって体を回る。やがてそれは、俺の右拳に収束する。まるでベルリンの壁が崩壊したときの人々の歓喜がそのまま憎悪に変換したようだ。

俺はため込んだ力を一気に解放した。夏目のあごを打ち砕くつもりで放つ拳。

「先輩！」

夏目は大振りのそれを甘んじて受けて、お盆と一緒に転がり、次いで落ちてきた急須のお茶を頭からかぶる。熱湯は夏目の髪を濡らし、流血するように顔中を覆っていった。

火傷をしているのではないだろうか。夏目の顔からは湯気がもうと立ち上っていた。それでも夏目は痛みに叫ぶこともせず、歯を食いしばって耐えている。まるで、そうすることが自らの贖罪であるかのように。

「……………佐々木君、私は君が思っているように最低なんだ。こうして殴られ、はいつくばることも覚悟していた。そうまでしても、私は君に聞いて欲しいことがある」

夏目は湯気の立ち上る体を起こして、俺にすぐるように見つめてくる。

「私の自己満足に過ぎないことも知れない。でも、私は！」

初めて、夏目の声が高らかに震えた。大の大人が、それも妻子を持つ一人の男が、一介の高校生に殴られ、あまつさえすぐるように声を震わせている。

「私は、もう……………どうしようもなかったんだ」

杏里の息を呑む音でさえも、耳に届いてくる。

夏目は落ちた写真立てを震える手で拾い上げ、目の前に持つてくる。

「私はこの子が、冬美^{ふゆみ}が愛おしくて仕方がなかった」

割れてしまった写真立てのガラス。亀裂の入った隙間から、愛娘の笑顔がのぞく。

過去形だったが、それほど文法を気にすることでもないだろう。それよりも俺は、今一度拳を振り下ろす機会が欲しくて欲しくて

仕方がない。

黒い液体が、俺を憎悪と暴力に駆り立てる。

「……冬美は物静かな子でね。どちらかというと、外で元気に遊ぶというよりは、家の中でおままごとをしたり、本を読むのが好きな子だったよ。私は営業で外回りをしていたね。外から帰れば、今度は社内での事務作業……おかげでいつも帰りは遅くなった。でも、この子はずっと待っていてくれた。私が夜遅く玄関口に立つと、いつも、パパ、パパ、って駆け寄ってきてくれて。私が汗だくなのにもかわらず、抱きついてくるんだ……。パパ、くさいよ。そんなことを言いながら胸の中に飛び込んでくるんだ。矛盾しているだろう」

何かと思えば、思い出話か。今更、そんな風に同情を誘おうとしても無駄だ。

「あの子は私の宝物だ。あの子の書いてくれた私の似顔絵も、あの子がくれた押し花も、あの子が書いた作文も、あの子が触れたもの全てが私の宝物なんだ」

夏目の前髪から、急須に入っていたお茶がしたたり落ちる。

「一言で言ってしまえば、佐々木君……私は、あの子とウメを重ねていたんだよ」

ぼとり。

「生まれつき体の弱かった冬美は、入退院を繰り返していたね。そして、中学への進学を控えた頃から、長期入院を余儀なくされた。……まるでドラマのようだったよ……。毎日のようにテレビで見る

御涙頂戴のドラマのようだった。本当に良くできたドラマだ。ただ、だからこそ悔しかった。ドラマはただ美しいだけ。現実はそのなに綺麗なことではない。助かるはずの結末も、用意されていなかったのだから」

ぼとり。ぼとり。

「あの子がこの家のどこにもいなくなってから、私の全てが変わってしまった。妻もそんな私を見かねたのだろう……次第に離れていき、今ではこの家はほこりだらけだ。一人では、あまりに広すぎる。寂しすぎるんだよ、この家は」

夏目の前髪から垂れる雫。

そして、もう一つの雫。

「目がさめると、階段に落書きするあの子がいるんだ。妻にしかられて、私に助けを求めるあの子がいるんだ。パパ、ママが怒るの……そう言っただけで笑いながらズボンの裾を握りしめる冬美の姿が、毎日のように。キッチンを見れば、妻の横で興味深げにまな板の上を見つめるあの子がいる。背伸びをして包丁を握る様子は、まるで妻が二人いるようだった……。誰もいないはずの庭に出れば、あの子がアリの行列を物珍しそうに見ている。昆虫図鑑をのぞき込みながら、パパ、この虫なんて言うの、っておいでおいでする。そして、玄関先を見れば、幼稚園の制服に身を包む冬美が、くるりと一回転しているんだよ。パパ、似合う？ あの子がそう言うんだ。似合わないはずないじゃないか……」

夏目は泣いていた。

大きな雫が割れた写真立てに落ちていく。

「でも、私が手を伸ばすと、決まってあの子は霧のように消えてしまふ。……分かってはいた。頭の中では。でも私は馬鹿だから……。会社から、誰もいないはずの家に帰ってくると、ふと電気が点いているような気がする。全速力で走って行って、慌てて玄関の扉を開けるんだ。パパ、お帰りなさい。あの子の華やかな笑顔がそこにはあるんだよ。……この家にはあの子がいる。いつでも冬美に会うことが出来るんだ。たとえそれが、幻想の　思い出の産物だとしても」

夏目の言葉が、俺の怒りをいつの間にか押し殺していた。

おかしい。なんなんだ。

俺は目の前の男が憎くて、妬ましくて仕方がなかったはずなのに。

「そんなときに、私はウメに出会った」

杏里は俺のそばに立っていた。俺は杏里の動きに気が付かないくらい、夢中になって夏目の言葉に意識を傾けていたというのか。

「心臓の弱かった彼女と出会ったのは、病院だった。私もなぜかは分からない。ウメを助けようと思ったんだ。助けなければいけない。まるで運命が私の背中を押しているようだった」

杏里は定位置である俺の袖口をつかみ、夏目を見下ろしている。

「全てをつぎ込んで、彼女の医療費に充てたよ……。その頃からだ、私がウメにのめり込んでいったのは……」

夏目を殴るはずの拳から、力が抜けていく。代わりに充填されていくのは、何とも言えない虚しさと憐憫の情。

……憐憫？　それはあわれんでいるってことか？　同情している

ってことなのか？

俺が？ ウメを、なにより佳乃を汚したこの男に？

馬鹿な。

自らが下した自己分析の診断結果。間違いだとしても、そんな結果を出した自分自身が信じられなかった。

「ウメは……元々両親を幼い頃に亡くしていた。彼女が物心つく前のことだそうだ。ウメ自身、両親の記憶がほとんどない。あるのは、引き取られていった祖母の家での思い出くらいだ」

夏目の毛髪が水分によってまとまり、先から雫が落下する。

杏里は定位置である俺の袖口をつかみ、夏目を見下ろしていた。

「それもウメにとってはさほど良い思い出とは言えなかった。ウメの体が悪いことに加えて、その祖母というのも体調が芳しくない。寝たきりを余儀なくされ、家に来るヘルパーのおかげでどうにか生活できるといった具合だ」

落下した水分は、ほこりの付着した絨毯に吸い込まれていく。

「……ウメが自分のことに割ける時間は少なかった。彼女が何かを学びながら生きるには、あまりにも時間が足らなすぎたんだ。結果的に、自分のケアさえ満足に出来なかったウメは、当然のように病状を悪化させることになってしまった。……そして、私はそこで彼女に出会った」

一つ一つ思い出しながら話している夏目の目は虚空だけをとらえ続ける。夏目の瞳には過去の情景が広がっているのだろうか。俺の

知らないウメがそこに描かれ、思い出が上映されているのだろうか。

「冬美を亡くした直後の私にとっては、ウメがまるで天使のように見えたよ。冬美が戻ってきてくれた……そんなことさえ本気で考えたりした。私はウメの親戚でも、いところで、ましてや友達や知り合いでもない。ただの他人に過ぎなかったけれど、私にはウメがとても愛しいものに映った。愛すべき、愛情を注ぐべき我が子のように思えた」

割れてしまった写真立てを持ち上げると、割れたガラスの破片をひとつひとつ丁寧に抜き取っていく。

「笑ってくれていい……。事実、周囲の人間は私を奇異の目で見ていたよ。変質者を見る目だ。最近話題になっているような幼児性愛者だとか、ロリコンなどとも言われた」

眉間にしわを寄せ、過去にぶつけられた言葉を噛みしめているようだった。

割れたガラス片で切ってしまったのか、夏目の指からは血が流れ、筆で描くような赤い線がガラスの表面に付着する。

「否定はいくらでも出来る。私はウメをそういう目で見ていたわけではない。けれど、人は慈善事業を信じない。何の見返りもなく、私のような中年の男が、ウメのような美しい少女を助けるとは思わない。誰も信じてはくれなかった。私もそういった心理が理解できているから、つばを飛ばして抗議したりもしなかった」

こぼれて湯気の立ち上っていたお茶はいつの間にか冷え切ってしまったっており、そのほとんどが絨毯に染み込んでしまっていた。水分の残りは夏目の頬肉を伝い衣服に染み込んでいるか、前髪から今な

お垂れているか、涙と混じってしまっているかだった。

「いや……そんなことすら考える力もなかった、といった方が正しいのかもしれない。いなくなっただはずの冬美が帰ってきた。そう考えてしまえば、後は簡単だったよ」

ガラス片の取り除かれた写真立てから写真を取り出すと、夏目は一層悲しそうな顔を見せ、我が子の顔を指でなぞった。

「冬美をウメに重ねていたんだ」

女の子の上にきらめく落涙。

「ウメの面倒を見、手術に要する費用を工面し、生活に事足りるように便宜を図った。我が子に注ぐはずだった私の全てをウメに注いだんだ」

いくつもの光が女の子の上に落ちていき、外の光を浴びてきらきらと輝く。冬美と名付けられた少女の笑顔は、夏目の涙で満たされていた。右目から、左目から、涙が同じ道をトレースする。だから、涙は同じところに落ちていく。

夏目にとってたった一人の子供である、冬美の元へ。

「幸い、ドナーの提供もあって、ウメはやっと当たり前の生活が出来るまでに回復することが出来た。やっと、彼女は人生のスタートラインに立ったと言ってもいいだろう」

夏目は涙を指で拭い、息を吐く。

感情的になりつつあった自分を抑制するためだろうか、振り絞るように目をつぶる。やがて現れたのは怜悯な大人の瞳だった。みす

ばらしい格好と、脂ぎった肌、白髪交りの乱れた頭髮。夏目が手に持っている写真からは想像できない、退廃的なビフォア、アフター。それでも、今の夏目が見せる瞳の光は、当時の面影を残しているように思えた。

「ウメは本当に可愛い子だ。彼女のような純粋な心を持った人間を私は今まで見たことがない」

ウメが浮世離れしていることは、ウメを見たことがあるものなら誰でも気が付くだろう。

だからなのか、逆に浮世離れしすぎていて、ウメを知る人はウメになかなか近付くことは出来ないし、近付いたとしても一瞥ですまされてしまうか、徹底的に無視されるかのどちらか。

異性はもちろん、同性でさえ限りなく素っ気ない。

必要最小限の単語で、必要最低限の情報を伝える。まるで、逆引きの日本語辞書だ。

学校に行くこと、を言うとする。……登校。

なかなか解けない問題、を言うとする。……難解。

心の中に、それぞれ違った方向あるいは相反する方向の力があって、その選択に迷う状態を言うとする。……葛藤。

ウメはそうして、最低限の言葉選びをする。そんなウメが機械的で、冷徹に感じられてしまう。だから、みんなウメに近付こうとするためらってしまう。

だが、それは間違いだ。それはウメの一部分でしかない。

一歩踏み込めば分かることなのだ。

ウメはウメなりのユーモアを持っているし、優しさもある。思いやりだってあるし、ドジなところもある。

ウメがあまりに浮世離れしているから、みんな気がつけるところまで近付くことが出来ないだけなのだ。

「けれど、いつからか……彼女の心にはある気持ちが芽生えていた。私も木の股から生まれたわけではないからね。それぐらい分かる。私はそれに気が付かないふりをし、今まで自分を騙し続けてきた。ウメをあざむき続けてきた。……今から考えると、養子に迎えようとした私の意志を、ウメがかたくなに否定し続けてきたのはそのせいだったのかも知れないな……」

夏目がウメを養子にする。

ドラマのような非現実的な言葉。

「彼女は」

涙に濡れた写真から涙を拭くと、夏目は顔を上げる。

「ウメは恋をしている」

上げた顔は決意に塗り固められていた。

「そして、私は……ウメの想いに応えるつもりはない。そんなことは出来ないんだ。血縁関係はないが、私は一人の親としてウメを愛しているのだから。……彼女は天使だ。私の全てを失っても、彼女だけは守ってあげたい。そう心の底から思える大切な子だ」

夏目とウメに肉体関係がないことは、すでに夏目の口から証明されたも同然だった。

……ただ、俺はそれを聞いて安心すると言うよりは、それを聞くまでに俺が抱いてきた数々の妄想に対して自己嫌悪に陥っていた。

ウメを想像の中とはいえ容赦なく汚していたこと。

ウメと卑猥な想像を結びつけられない、ウメに欲情したりしないと思っていたはずなのに、誰かに汚されたと勘違いするだけで、そ

れは容赦なく実行された。

純粹なものがひとたび汚れてしまえば、もうどうでも良いのだらうか。

ウメでさえそうなのだ、佳乃に対しても俺はそう思ってしまうのだらうか。

違う。違う。違う。そうじゃない。そうじゃないんだ。

心の中でいくら否定しても、それを否定する明瞭な答えが見つけれなかった。

第二十五話・「もうたくさんだ！」

「谷崎潤一郎たにざきじゅんいちろうの小説に『痴人の愛ちじんのおい』という小説がある」

夏目の目が真摯に訴えかける。俺は自分の中で物議を醸し出すウメに対しての汚らわしい妄想を見透かされてしまったような気がして、初めて気圧されそうになった。

夏目はそれを知ってか知らずか、幾分声のトーンを落とした。

「ナオミという少女を見初めた譲治じょうじという男が、幼い彼女を自分好みに育てていき、やがて色欲に溺れ、奔放な彼女を制御しきれなくなる……という話だ。私はあの小説の再現がしたかったわけではないし、もちろん『源氏物語』で言う光源氏ひかるげんじと紫の上むらさきのうへの関係を望んでいたのではない。ただ純粹に、親子の関係でいたかっただけなんだ」

唐突に話に登場した古典や現代文の授業めいた出典。授業をしっかりとは聞いていなくとも、内容は頭の中にかろうじてだが残っていた。

光源氏は、訪れた先で見かけた少女、紫の上に亡き母の面影を見た。母親が好きだった光源氏は、当然のように紫の上を養女としてもらいうけ、自分好みで育てていったとかなんとか。

……確かそれが光源氏と紫の上の出会いだったはずだ。初めて聞いたときは、なんてマザコンかつロリコンだ、などと思ったりしたから、かろうじて記憶の片隅に残っていた。

夏目は自分がウメを育てた経緯を例えて言っているのだろうが、そんなことは俺にとってはどうでもいいことだ。もし、それをネタに自分のしてきたことを正当化するというのなら、また俺の拳を

振り上げればいいだけの話。

抑え込まれていた怒りの温度が沸点に迫っていく。

「ただ……ウメ自身はそうではない。いつのまにか、私の知る全てが、ウメの全てではなくなっていたんだ。……彼女は一人の女性として生き始めている」

夏目の深い輝きを帯びた目に、温度の上昇曲線が急停止する。

「愛を受け取るだけの子供ではなく、誰かに愛を注ぐ女性になるうとしている」

夏目の言わんとすることを、俺はにわかには理解できない。

「皮肉としか言いようがない。『源氏物語』を否定したはずなのに、その実は、そこから脱することが出来ないでいる。……光源氏が生涯で愛した女性は数多といるが、常に彼の中にはある女性がいた。母である桐壺更衣だ」

「でも愛したのは藤壺の宮で、彼女に似た紫の上なのです」

俺のわきに控えていた杏里が、夏目の独白に入り込んでくる。

俺は杏里がなぜそんなところに会話を割り込ませなければいけないのか、その理由さえ分らない。

「確かに。……だが、その紫の上と藤壺の宮も、もともと桐壺の更衣に似ているということから始まっている。結果的には、慕うものは同じだ」

夏目は俺に向けていた視線を杏里に向け、そして、やはり最後に

は俺のところへ戻ってきた。

夏目にとっては、言葉を向けるべき相手は、俺、ということらしい。

「育ててくれた人を愛してしまった点では、ウメも同じだ。そして、前述した谷崎潤一郎ですら、母を必要以上に愛していた。彼は生涯にわたって母の愛を書いている。母親と結ばれるという小説もあるぐらいだ。……『夢の浮橋』^{ゆめのうきはし}がそうだったと記憶している。そして、『夢の浮橋』は『源氏物語』の絵巻の題名でもある」

もはや夏目の言葉は理解できない。まるで研究論文でも発表するように出典を並べ立てられ、関係性を説明されても、俺にはぴんと来ない。

ただの念仏と同じだ。

南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経、臨兵闘者皆陣烈在前…… なにかの文言だということは分かるが言葉の意味は分からない。それと同じく、夏目の言葉は聞き取れるが、裏にひそむ意味までは理解できない。

「私のしてきたことが必然なのか、それとも偶然なのかはわからない。けれど、物事には原因と結果がある。そして、何が良かったのか、悪かったのかも。物事の全ては大なり小なりつながっているんだ」

夏目の視線に耐えられなくなって、となりの杏里に視線を逃がす。杏里は夏目の言っていることが理解できているのだろうか、ひどく複雑な顔をしていた。

血がでそうなくらいに下唇を噛み、俺の袖口を握る指の力も震えるほどに強くなっていた。

簡単なことわざの意味も分らないはずなのに、なぜ杏里は夏目の

言うことを理解できるのだろうか。

「私は……もう、ウメを冬美と重ねることはできない。ウメには一人の女性として生きるためのアイデンティティがある。ウメは冬美ではない。彼女を冬美として愛していくのは間違ったことだ」

夏目の独白は続く。

三人を包み込むように暗闇が広がっていく。

ふと外に目をくれば、いつの間にか青空が色を変えていた。

わたぼこりの色をした雲が空を覆っている。高速で広がっていく鉛色の雲は、容赦なく太陽を覆い隠し、世界に注がれていた光を絞っていく。鉛に埋もれた青空。今にもその痛みで泣き出しそうだ。

「ウメはとても繊細で傷つきやすい子だ」

夏目の声に、俺は外の世界から視線を引きはがすしかなかった。

「自分が誰かに重ねられていることは、すぐに看破することが出来る。私が彼女をそうして育ててしまったことが一番の原因なんだ。そして、そうやって育ててしまったからこそ、他人を敏感に読み取る反面、自分のことに対して鈍感になってしまった」

室内がかげっていく。時間上ではまだ太陽が昇っているというのに。

不気味なほどの静寂を保つ室内に、夏目の声だけが響いていく。張り巡らされた赤外線レーザー。触れれば爆破装置が起動し、木端微塵になりそうなほどの緊張感。

「ウメもどこかで気が付いているはずだ。私を愛そうとするのは一人の男だからではなく、父親だからなのだという事に」

……………パパ。

朝ウメを迎えに行つた時に聞いてしまった彼女の寝言。そして、真つ白な頬を伝つた一滴の涙。今でも鮮明に思い出せる、記憶のフオートグラフ。

「ウメはそれを理解するのを嫌っている。だから、佐々木君の前であんなことをしたのだと思う。……なによりも、命を誰よりも大切に思っている彼女が、死を軽く扱う発言をしたことが一番の証拠だ。あれはウメの心からの言葉ではないよ」

ウメは夏目をパパとは言わなかった。

夏目の言うことが正しいとすれば、パパという寝言はウメの深層心理が言わたのだろうか。

俺の頬に炸裂した二回の平手打ちも、ウメラしくない、突き放すような言葉も、何かを隠すためだとしたら。

「私はウメと生きるべきではない。私はウメの前から消えるべきだ。いくら彼女を我が子のように愛していても、天使のように思っているとしても」

太陽の光が失われていく世界で、夏目の瞳だけが光を放つ。

それは、揺るぎない意志を持った瞳。決意の表れ。

「そして、今日、私はこれからウメにそれを伝えるつもりだ」

夏目の意志の力におされながらも、俺は何とかかかとに力を入れてその場に踏みとどまる。

「……勝手すぎる」

悪役が逃げ去る際に、決まり切った捨て台詞を吐くように、俺は口から言葉をこぼしていた。何の考えも無しにこぼしてしまった言葉は、思いもよらず自分自身に返ってくる。

なにがデートだよ、なにが宣戦布告だよ……。

自動再生機能の付いた記憶は、俺に無断で再生を始める。

勝手なんだ……自分勝手すぎるんだ！ 佳乃も、俺も！

そうして佳乃を求めて走り出した。

気が付くのが遅すぎたせいで、想いを伝えることも遅れてしまった。その結果、俺は佳乃を失うことになった。迷い、悩み、気が付き、そして走り出した。

けれど、伸ばしたその手は愛する人に届かなかった。気が付くまでに時間がかかりすぎた。

身勝手な自分の思い込みが、どちらかの佳乃を選ばなくてはいけないという思い上がりが、あの暗澹たる悲劇を生んだのではないか。絶望を生み出したのではないか。

だとすれば。

俺は、同じ過ちを繰り返そうとしているのか……？

馬鹿な。俺のどこが身勝手だと言っただ。

俺はウメを救おうとしているんだ。佳乃を宿したウメは尊い。佳乃がまだ現実に生きていると証明してくれる生き証人がウメなんだ。

ウメであり、佳乃。佳乃であるウメ。

そんな彼女を守ろうとすることのどこに、身勝手さがあると言う

んだ。

そうだろ、佳乃。俺は、正しいだろ？ 間違っていないよな？

「佐々木君……君は私に似ている。だから、君には私のようになつて欲しくないんだ」

「俺はあんたのようにはならない。俺はあんたじゃない」

即答していた。今すぐ切り捨ててしまわなければならない言葉、遮ってしまわなければならない言葉に思えた。

「……そう、そしてウメは冬美ではない。ウメはウメでしかないのだと思う。誰かが誰かの代わりになることなんて出来ないんだ」

脇腹に、ゆつくりと何かが刺さっていくような感覚がした。すぐに麻痺してしまうようなわずかな痛みだけれども、確かにその痛みは俺の中に入り込んでくる。

例えるのなら、火鉢で熱した鉄の箸を、背中に差し込んでいくような、体の中に入り込んでくるような嫌悪感をともった痛み。

……俺はその痛みの原因が分からなかった。

「失われてしまったものを見つけようとするのは、意味がない。同じものは二度と得られないのだから。だから、過ぎ去った道、背後を振り返ったまま立ち止まり続けることは意味がない。もちろん、振り返ったまま歩き続けることも」

俺はいきなり襲った痛みに耐えるべく、腹部に力を入れた。
黒い絶望に耐えるときと同じように。

「……私は、出来ることならば妻ともう一度やり直したいと思って

いる。願うだけではなくて、声に出すだけではなくて、行動しよう
と思っている。止まってしまった時計の針を、他でもない自分の手
で動かさなければいけないんだ」

夏目は水滴を拭った写真に目を落とし、再び我が子に触れる。

「冬美……すまなかった。お父さんは、そんなことにも気が付くこ
とが出来なかったんだ」

二度三度と愛しそうに我が子を撫でる。

写真に写った冬美という娘は、変わらず幸せそうな笑みを浮かべて
いた。三大家族の写真の中には、一生変わらない幸福が現像されて
いる。夏目という家族が過ごしてきた過去の暮らしを慈しむように、
目の前の男は微笑みを浮かべていた。

「佐々木君……ウメを助けてやってくれ」

一度は笑みに変えた頬を強ばらせる。

「きっと彼女は傷ついてしまうから」

言われなくても、ウメが悲しんでいることを見過ごすなんて出来
るわけがない。

身を乗り出しかけた俺の前に杏里が回り込む。

「先輩……駄目なのです」

袖口をつかんだ手を離し、俺を見あげる。

「夏目さんも、どうしてそんなことを言うのですか？ ……身勝手

です。先輩に何もかも押しつけて、夏目さんの責任は夏目さんが持つべきなのです。ウメ先輩も夏目さんが好きなら、それを望んでいるはずなのです！」

今まで黙っていた分、ため込んでいた分、ダムが決壊したようにまくし立てる。

「もう先輩をこれ以上苦しめるのは止めてください！ やっと見つけた私の居場所を壊さないください！ 私は今がいいのです！先輩と二人でたわいもない話とかしていたいのです！ たとえそれが誰かの代わりでも、私は――」

「杏里、もういい」

俺はさっきまで袖口を握っていた手を取って、出口へと歩き出す。

「でも、先輩！」

杏里の金切り声が、俺の心をかき乱す。
言い足りないともいうのか、俺の手を振り払おうともがく。

「もうたくさんだ！」

俺は夏目に対して、杏里に対して、つばを吐くように俺は言い捨てた。杏里は俺の強い口調に肩をびくりと振るわせ、ごめんなさい、と一言だけつぶやいた。

「失礼します」

限りある理性を振り絞って退室を告げる。

杏里には悪いと思ったが、俺は強い力で杏里の手首を握りしめ、引きずるようにして玄関口へ向かおうとする。杏里はそんな俺の強引さに無駄口一つ言わず、されるがまま。そんな杏里の姿は、主人に引つ張られる子犬を連想させた。

「……佐々木君」

呼び止められた俺は肩越しに夏目を見る。

「ウメは本当にいい子だよ」

我が子の写真を胸に抱く夏目の表情は、すっかり暗くなってしまった室内のせいで分からなかった。けれど、夏目がどんな表情をしていても、俺の答えは変わらない。

「言われなくとも、知ってます」

杏里の口が開きかけるが、それはのど元で止まってしまったようだった。

嵐の前の静けさにも似た曇天の袂で、夏目は静かに言葉を紡ぐ。

「その言葉が聞けてよかった」

そして、雨が降り出した。

第二十六話・「どこにも行きませんよね？」

二人だけの公園に、大粒の雨が降る。

雨の作り出すその音は、まるでチャンネル設定のされていないテレビのようで、いつになっても映像を映そうとはしない。俺がチャンネルの設定をして、初めてテレビは俺の記憶を映し出した。

夏目の家での映像が鮮明に浮かぶ。記憶を再生するテレビに釘付けになり、俺は瞬きをすることも忘れて、映像にのめり込んでいく。

夏目が泣きながら俺に言おうとしたこと。ウメに対してしてきたこと。

……そして、夏目がその末に選んだ決断。

俺は夏目を殴りつけた感触思い出す。右の拳を開き、手のひらを凝視する。短い生命線の上に爪痕が克明に残っていた。

結んで、開いて。結んで、開いて。

人を殴った感触。硬質の中に粘土でもつまったような、えもいわれぬ気持ち悪い感触だった。トマトをつぶしたような感触とも違う。スイカを殴り潰すような感触とも違う。

殴った人間にしか分からないであろう、独特の感触だった。

「くしゅん！……なのです」

杏里のくしゅんが聞こえて、俺は現実に戻された。

俺と杏里は結局学校をサボってしまった。鹿岡兄妹にも、ぼけぼけした友人にも何も連絡をしていない。今頃、心配しているだろう。普段休むことはおるか、サボったこともないから、心配の前にきつと首をかしげているだろうな。

携帯電話は自宅の机の上だから、メールやら着信履歴やらでいっぱいになっているだろう。

心配性の友人を多く持つと、何かと大変なのだ。

「……風邪か？」

鼻水をすする杏里は、ふるふると首を振る。濡れた制服から透ける杏里の二の腕が、幼いはずの杏里をやたらと女らしさを強調しているように感じられた。

「いえいえ、杏里は大丈夫です。それより、先輩こそ寒くないのですか？」

「俺は……」

寒くないと言ったら嘘だ。夏目の家を無言で出た後、俺達は急に降り出した雨を鬱陶しくも思わないで、黙ってこの公園まで歩き続けた。気が付けば俺の後を無言で付いてきている杏里もびしょ濡れで、俺は近くにあった公園に退避した。

見覚えのある公園。

幼い頃、佳乃と遊んだことのある公園で、最後のデート一日目の舞台ともなった場所だ。

「俺は少し寒いかな」

体中が発火したような熱に覆われていたのに、今は凍えるような寒さで震えている。夏目を憎み、殴るだけでは鎮火しないだろうと思われていた黒い炎でさえ、元々そんなものが存在していなかったとでもいうように胸の奥で眠りにについている。

雨の冷たさが、俺の頭を冷やしてくれたのだろうか。……いや、きつと違う。

夏目の言った言葉の一つ一つが、俺の頭の中をぐるぐると駆けめぐっているからだ。

「先輩の手、冷たいのです」

杏里がためらいもなく俺の手を握る。優しく自分の口元まで持つてくると、冬場の寒さをしのぐように、俺の手に息を吹きかけた。ストーブとなった杏里がにっこりと笑う。

「あつたいですか？ 先輩」

俺達は恐竜の口の中にいる。子供向けの遊具、滑り台。ステゴサウルスの尻尾部分から登りはじめ、背中に生えた互い違いの骨盤を頼りにして恐竜の頂上へ。そこから首を抜けるようにしてトンネルの中を滑っていき、最後に口からはき出される。俺達は丁度恐竜のあごから足を出すような格好で並んで座っていた。肩身は狭いが、雨をしのぐには十分。極貧家族が身を寄せ合って生活するのと同じく、俺と杏里も肩をぴったりとくっつけていた。

「雨、止まないですね」

空に向かってつぶやく杏里。

「くしゅん！ ……なのです」

「本当は寒いんだろ？」

「えへへ……ばれちゃあしょうがないのです」

舌を出し、江戸っ子調でおどけてみせる杏里に、俺はポケットから財布を出してみせる。杏里は目の前に突き出された財布を寄り目になって見つめ、三秒後に疑問符を浮かべる。

「あつたかゝいもの買ってくるか？」

「あつたかゝい……？ 不思議な発音をするのですね、先輩。あつたかゝい、あつたかゝい……あれ、どこかで聞いたような。いや、見た、が正しいのかもです。……はうう、まさか自動販売機に書かれているっ……！？」

杏里は合点がいったという代わりに、手をぽんと叩いて見せる。

「まさかっ！？ 先輩は杏里をパシリに使うのですねっ！？ 自分で買いに行つて、杏里、ほらよ、とさりげなく渡すのが格好良さではないのですかっ！？ それを自分がお金を出すからといって、寒い寒いと体を震わせる杏里に買いに行かせるとは……むむむ、先輩のなんたるドS。DMな杏里でなければ、將軍徳川吉宗が庶民の要求不満などの投書を受けるために評定所の門前に置かせたといわれる目安箱に用紙を大量につっこんでいるところですよ？」

恐竜の口内で大げさな身振り手振り。

「それはいいけど、目安箱つてな、下手をすると投書したヤツは殺されるかも知れないんだぞ」

「ええっ！？ それは知らなかったのです！ では先輩！ 杏里は殺されてしまうのでしょうか！？ 市中引き回しの上、打ち首獄門ですか！？ 駅前とかにさらし首にされて見せしめにされてしまうのですね！？」

「時代劇の見過ぎだ」

驚きに飛び上がるあまり、恐竜の上あごに頭をぶつけそうになる杏里。俺はそんな杏里に冷静な言葉を返した後、懐かしい感覚を感じ、最後にはトゲを刺すような痛みが滑り込んできた。

夏目の告白に対して少なからず衝撃を受けている俺。それに関しでは杏里も同じだ。けれど、杏里はそれでもいつものようにおどけて見せ、笑ってみせる。

飼い主がいつものようにボールを投げしてくれるのを信じて。

「それでだ。ほら」

俺は杏里の目の前で財布をちらつかせる。なんだか意地汚い富豪が札束で人を使うような仕草に似ていて行儀が悪い。

「むう……出資者だからって無理難題を言うのですね……」

風船のように頬を膨らませ、杏里は俺の財布を受け取った。

「本当に無理難題です……雨の中、こんなに可愛い女の子をパシリに使うなんて先輩オンリーですよ。そして、そんな杏里はロンリーです」

……面白いのか、上手いのか。よく分かん。

「男女同権。女だから優しくするは通用しないぞ」

「杏里は女ではないですよ。恋する乙女なのです」

判断に困る表現を残して、杏里は再び雨の中に降り立つ。

雨は公園の樹葉を揺らし、地面を黒く湿らせていく。世界中が雨音で満たされ、何一つ同じ雨音ではないことに気が付く。ベンチに

落ちる音、葉に落ちる音、アスファルトの上に落ちる音、砂場に落ちる音、ブランコに落ちる音、恐竜の頭に落ち、口の中に反響する音……。

降水量、落下速度、打ち付けられる角度。

そのどれかが違っただけで新しい音を奏でるのだ。そう考えれば、今聞くことのできた雨の音は、聞いたことそのものが奇跡的なのかも知れない。

人間と同じだ。

出会い、別れ。行動、言動。それに従って揺れ動く時間、タイミング。

それらは、考えようによっては奇跡なのかも知れない。日常の一つ一つが奇跡。佳乃と当たり前のように過ごしてきた年月も、毎日毎日が奇跡だった。

ただその奇跡に慣れすぎて、俺が鈍感になってしまっただけ。

「ねえ、先輩っ！」

公園の外に遠ざかりかける背中が、くると振り返る。

「どこにも行きませんよね？」

肩の上を跳ねる雨の雫。雨脚はちつとも速度をゆるめない。

「杏里を待っていてくれますよね？」

俺は手を振る。回答に迷った挙げ句、答えをはぐらかす。

「行ってきますっ！」

杏里の背中が公園の外に消えていく。サッカーをするにしてもペナルティキックぐらいしか出来ない公園で、俺は一人雨音に包まれる。

「そういえば、雨音って言うけど、雨の音って雨自体の音ではないよな。雨が何かに打ち付けられて初めて音が出るわけだから……そう考えると、雨の音ってどんな音をするんだろっな」

我ながら、臆面もなく詩人をしている。杏里がいなくなつて自由の出来た恐竜の口の中、俺は夏目の述懐を再度思い出す。

雨音は記憶を呼び覚ます助力を惜しまない。

その頃からだ、私がウメにのめり込んでいったのは……。

手で顔を覆い、腹の奥で固まつたままの黒い絶望の様子を探る。

動く気配はない。まるで死んでいるように静かだ。でも、絶対に死んではない。いつまた俺を襲ってくるか分からない。絶望の淵へ連れて行かれるか分かったものではない。

手で顔を覆った隙間から、俺は雨でかすむ公園のブランコを目にする。

今日家に帰ってね。仁君との一日を思い浮かべるの。映画館で手を握ってくれたこととか、一緒にいるいろんなものを見て回ったこととか、こうして二人でお話したこととか……。

加速をつけたブランコから満点の演技で降り立つ。栄光の架け橋だ。そんな実況が聞こえてきそうな見事な着地。

でも、仁君の笑顔が思い出せないの。

雨の中、佳乃が俺の方に歩み寄る。雨に濡れる様子もなく、水たまりに跳ねる靴音もなく、無音で俺のそばへ。

どうして、そんな悲しい顔をするの……？

佳乃の白魚のような手が俺の目の前に差し出される。それはまるで天から差し伸べられる救いの手のように神々しい。

差し伸べられた手を俺は心から欲しがっていた。絶望の海で溺れる俺をすくい上げて欲しかった。

「助けてくれよ……佳乃」

触れるか触れないか、そのわずかな隙間。土砂降りにかき消されるように佳乃の姿は消える。霧で出来た幻想。

水滴に貫かれて佳乃は霧散していった。雨に濡れる俺の右手から、体温が逃げていく。

……まるで死人に引つ張られるように。

「杏里のヤツ……遅いな」

財布を預け、お使いを頼んだのはいいものの杏里は帰ってこない。

「どこで道草食ってるんだか」

犬っばいだけに、本当に道草を食っていそうだ。犬が草を食べるかどうかはこの際置いていくとして、雨の中でも大きく跳ねるように走る杏里の背中を見ていると、今日が晴れの日であると錯覚して

しまいそうになる。

「杏里……」

雨の中を笑いながら走っていった杏里の無邪気さに救われた俺がいた。

思えば杏里は、佳乃を失って間もない頃に彗星の如く現れ……いや、彗星の如く、なんて言うとても綺麗なもののように聞こえてしまうから、訂正しておく。

彗星は通り過ぎるから美しいのであって、毎日毎日目障りなほど俺の周りをくるくると、それこそ衛星のようには回り続けられたらうるさいことこの上ない。

先輩先輩先輩。

しつこく三回繰り返す独特の言い回し。

先輩、笑ってください、にこにこなのです。

脇役キャラクターによく見られる語尾の変化でキャラ割りをさせられるような口癖。

ひどいです。Mな杏里でなければ、駆込み寺に飛び込んでいくところですよ。

俺が冷たくしたり乱暴にしたりする度に、涙目で訴える決め台詞。

先輩先輩先輩！ お供するのです。

俺のシャツや袖口をちょこんとつかむその白く細い指先。上目遣

いで見つめてくる、まん丸な瞳。

舌を出して、フリスビーを投げて投げてとねだる子犬。お散歩に連れて行つてと、自らのリード線を加えてすり寄ってくる子犬。叩かれても、泣かされても、いじめられても、次の日には全て忘れてしまったかのような笑顔を見せてくれる従順な子犬。飽きることなく笑い、飽きることなくくつついてきて、飽きることなくじゃれ合う愛くるしい子犬。ご主人様の意見などまるで聞いていない、自分の欲望に忠実な子犬。

とにかく、そんな調子で子犬　杏里はそつとして欲しい俺の気分を何度うんざりさせてきたか分からない。

本当にうざったい奴だ。

でも、満場一致だったはずの心の採決は、後日、過半数で可決するようになり、後日、連立政権でしか可決できなくなり、後日、意見がまっぴたつに割れた。

今は、政権を維持するのがやっと。感動した、と大声でパフォーマンスする首相が退陣した後は、本当に足下がおぼつかなくなってきた。

…………… 本当に、うざったい奴なのか？

杏里が脳裏をよぎる。

よぎった表情は、降りしきる雨を蒸発させるぐらい燦々とした笑顔。

につこりと笑うその表情はやがて一人の少女の面影と重なり、輝きが増していく。

仁君。

声が聞こえた気がした。

恐竜の口の中、俺は公園の入り口に目を向ける。

……俺は何のためらいもなく雨の中にゆつくりと身をさらしていた。

体温のおかげである程度乾いていたシャツに、再び雨が染み込んでいく。肩を叩く雨の飛沫が俺の頬に飛びついてきても、俺は拭おうとすらしなかった。拭うぐらいの暇と労力があれば、俺は公園の入り口をずっと見つめていたかった。

「……………ささ、き……………」

凍えるような寒さを身にまとった子猫が、雨に濡れていた。

第二十七話・「重ねていたのかもしれない」

臨終まぎわの猫が、さよならを告げるべく、にゃあ、と言うように、入り口に立ちすくむその少女も、雨にもかき消されそうなか細い声で俺の名前を呼んだ。

アジアンビューティーもうらやむ長い黒髪がずぶ濡れだ。いつものしなやかさが消え失せて、鈍色に光を反射している。髪の毛が濡れた制服の輪郭に沿うように張り付いているから、ウメの体の細さがはつきりと分かった。

雨の中でたたずむその姿は、月に帰ろうとするかぐや姫のように儚く、浦島太郎を見送る乙姫のように寂しそうだ。

「ウメ……」

俺が絞り出せたのはその一言のみ。何をしたらいいのか分からない。分かったとしても、それを実行する勇気がない。その際にどんな顔をすればいいのかも。第一に、ここにいていいのかすらも。

視界を遮るような雨が降っていて、なおかつ耳をふさぐような雨音がなかったら、俺は沈黙と緊張に両側から押しつぶされていただろう。

「……私、どうしてここにいるの……？」

小さい小さいウメの体は、雨によって虐げられている。曇天から降り注ぐ雨の直線は、ウメの頭、肩、にぶつかり、跳ね回っている。ぐつしりと濡れてしまった制服には、濡れて肌に張り付く部分と、空気が入って白い筋のようにふくれた部分、その二つしかない。ウメの下着の色は真っ白で健康的な色だった。

「どうして、この公園にいるの……？」

俺の姿を目に写したウメが、信じられないといったようにつぶやく。

「ここにいる理由が分からない……」

「ウメ……」

佳乃、なのだろうか。佳乃がこの公園へと導いたのだろうか。確信までには至らないにしても、そう考えることも出来るはずだ。佳乃がまだ健在だった頃、幼馴染みである佳乃と、ツンデレである佳乃の記憶は共有されていた。ツンデレの佳乃のみが共有出来る一方的なものだが、記憶は確かに共有されていたのだ。

心臓が媒介だったのかは分からない。俺は医者ではないから。けれど、そう考えることが出来れば、ウメをここに導いたのは他でもない佳乃であるということになる。佳乃がウメの記憶を垣間見ることが出来て、ウメの意識が休んでいる間に、体を借りて言葉を発することが出来て、自由に考え、話し、行動することが出来たのだとすれば。

……だとすれば。

だとすれば、俺はもう一度佳乃に逢えるかも知れない。

俺はまるで引き寄せられるようにウメへと近付いていく。

もう一度、逢えるのかも知れない。

あの声で、あの抑揚で、俺をののしり、あるいは慰めてくれるのだろうか。

仁君。

あの温もりで、優しさで、俺の頬を、頭を撫でてくれるのだろうか。

か。

仁。

ぬかるんだ公園の泥土を生きる屍のように歩いていく。ジョージ・A・ロメロ監督の映画「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」で像の決定づけられたゾンビのように、生者の匂いをかぎ分け、新鮮な肉を食らうべく、目の前の生け贄に吸い寄せられる。

そう、生きながらに死んでいる人間が、愛する人間の魂を求めて彷徨しているのだ。

……いや、これではゾンビではないな。

ゾンビは一度死んだうえで生ける屍であって、生きながらに死んでいる人間ではない。

「佳乃……そこにいるのか？」

ウメに手が届く位置。

それこそゾンビのように頼りなく伸ばした手。

かすかな意志の宿る指先が、ウメの頬に触れる。

雨にさらされていたにもかかわらず、とても熱い頬だった。

「……やめて……」

俺の言葉が原因か、それとも触れたのが原因か、ウメが拒否反応を示す。体を強ばらせ、敵意のこもった目で俺を見上げる。熱いものにも触れたように慌てて身を退くその姿は、少なからず俺の心に傷を負わせた。

露骨な拒否ほど、胸に突き刺さるものはない。

「……私は人形じゃない」

どこかで聞いたことのあるような台詞だったが、今の俺にその台詞の出所を探る検索力はなかった。

「私は山田ウメ……夏目や、佐々木を慰める人形じゃない」

俺と夏目が並列に扱われる。

雨をはねとばす強い意志が、瞳から外へと放たれていた。無愛想で、無表情、そんな無機質な評価を覆すほどに感情が込められている。一般人に比べれば感情表現には乏しいが、今までのウメに比べたら、それは人が変わったように感情的だった。

「違う、俺は……！」

俺は夏目とは違う。

そう口にしようとしたところで、俺ののどは言葉をせき止めた。まるでそこから先に行かせないとも言うように、声帯を震わせまといと踏ん張っている。

「私は山田ウメ」

簡単に嘘をつくことができない自分。嘘を吐く手前で無意識に躊躇をしてしまう自分。

「俺は……」

……夏目と同じ、なのだろうか。

夏目を否定することが出来なくなっている俺は、夏目と同じだと自ら認めてしまっているのではないだろうか。

「……私は私。私以外の何者でもない」

ウメの瞳が揺れる。

「私は一人の山田ウメ」

リバースしたテープを巻き戻して再生するように、その言葉は寸分の誤差も存在していなかった。

「……私は人形じゃない」

大口径のリボルバーに込められた弾丸。連続して引かれるトリガー。同じ弾が何度も俺の心臓を貫き、風穴を明ける。

「私は……」

そこで初めて、スムーズに再生されていたウメの言葉に齟齬が生じた。

見れば、ウメの頭が振り子のように揺れている。右に左に、前に後ろに。平坦な地面の上に立っているはずなのに、平均台の上にも立っているように見えてしまう。

「山田……ウ、メ……だから……」

俺はとっさに何が起こりかけているのかを理解した。

触れた頬は発熱していたし、ウメは熱にうなされるように同じ言葉を繰り返している。大粒の雨をシャワーのように浴びて冷え切っているはずの体。なのに上気した頬。そんな状態で言葉を無理に言おうとすれば、感情的に見えてもおかしくはない。

そしてウメの体は、唐突に力を消失した。

「か
」

の。

一文字だけを言葉にし、残り一文字は心の中で。

ためらいもなく飛び出していた俺の腕の中に、ウメがうつぶせに倒れ込んでくる。だらりと垂れ下がった腕には俺をはねのける力もない。俺のシャツに吐き出した荒い呼吸が、シャツを通して肌に染み込んでくる。

案の定、ウメの体は火の精霊の加護でも得たかのように熱で覆われていた。溶鉱炉に大量の水を注ぎ込めば、すぐに水は蒸気と化す。ウメの体をなめる水分がまさにそれ。ほのかに白く煙るウメの体からは、男の動機を加速させる女性らしい香りが匂い立つ。

熱い吐息に、上気した頬、そして、蠱惑的な匂いと無防備な姿。

ちらりとも考えてしまった俺は、不謹慎にもほどがある。

右の拳で自分の頭を小突くと、心臓を締めつけられるような気持ちになりながら、ウメを何とか恐竜の口の中へと運び込んだ。この公園で雨をしのげる場所といったらそこしかない。

長くはいられないだろうが、当座をしのぐには十分だ。あいにく近くに病院はない。救急車を呼んで、救急隊員が駆けつけるまでの間で構わない。すぐさま俺はウメを抱いていてやることに決める。

濡れた指先で携帯電話を操作し、我ながら初めてとは思えない機敏さで、救急車の手配をすませる。こういった緊急事態にすんなりと対応できるのは、目の前で見た惨劇や血の量、そして、良きにする悪しきにしる繰り返ししてきた絶望の風景による耐性なのだろう。

「……人形……じゃない」

体が小刻みに震え、あわせるように唇も細かく震えている。

雨に濡れ、震える子猫は、俺の腕の中で華奢な体を丸めて苦しんでいる。

「……私、は」

現在進行形で力が抜けている体からさらに力を振り絞り、ウメは言葉を紡いでいた。

恐竜の口の中でずぶ濡れのウメを腕の中に抱く光景は、他人から見ればひどく勘違いをされそうな光景に違いない。

「……私だから……」

なおも繰り返すウメの呟きは、雨音にかき消されそうなほどに弱々しく、かつ平板だった。

俺はその一言一言を聞き逃すまいと雨音の中から必死にウメの声を探り出し、耳の中に滑り込ませていった。

「私、は……山田、ウメ」

夏目は失われた我が子をウメに重ねていた。夏目がウメを愛し、注いでいた愛は、本来夏目が我が子である冬美に注がれるものであって、ウメに注がれるものではなかった。

君のものだ、とずっと腕の中に捧げられてきた花束。両腕に抱えきれないほどある美しい花束が、次の瞬間には別の人に捧げられてしまう。それまで抱え込んできたものが腕の中からなくなってしまふ。

腕の中に残るものは何もない。空っぽだ。花びら一枚残らない。残り香すらない。でも、それは当然のこと。だって、元々花束はその人のものではないから。ただ代わりに持っただけだから。

花束をもらった喜びも、伝えてきた感謝も。ぬか喜びに過ぎない。

仮の人形でしかないその人間には、結局何も残りはしないのだ。

「俺は違う……俺は夏目とは違うんだ。違うはずなんだ。間違っ
てはいないはずなんだ」

言葉で否定してみても、それは俺の自己暗示に過ぎないのかも知
れない。それに、声に出して言うのは、誰かに同意して欲しいから
だ。

間違っていることを間違っていないと否定して欲しくて、俺が正
しいのだと背中を押して欲しくて、俺はつぶやいている。

安心したくて、声に出す。……虚しい自己弁護。

「ん……う……佐々木……」

苦しそうにぎゅっと閉じられていた目が、かすかに開かれる。

夢の中でうなされていたのだろうか、どこかうつろでおびえた感
のある瞳の光は、揺れながら俺の顔を映し出す。俺はウメの額に張
り付いて、ウメの視界を遮っている髪の毛を取り払ってやり、額に
浮かんでいる雨とも汗とも付かない雫を拭ってやる。ウメは荒い息
をしながらも、俺のなすがままにされていた。

……ただ単に、抵抗がないだけかもしれない。

「ウメ、大丈夫か……？ もうすぐ、救急車が来るからな」

心配しつつも、夏目に向けたウメの笑顔が思い出される。俺には
一度も見せたことのない、輝くような笑顔。

例えるなら、真夏の夜にひっそりと咲くくちなしの花。

誰にも知られずにひっそりと咲くが、誰にも知られない分、ひと
たび目にすれば驚きに変わる。満月にも勝るとも劣らない、純白の
輝き。花開く六枚の真っ白な花弁は、見る者を魅了してやまない。

だからこそ、俺は夏目がうらやましかつたし、悔しかった。憎しみさえ抱いた。暴力に訴えることすらしてしまった。

「……」

ウメは無言のまま、俺の視線を探し出した。俺はそれを見つめ返すしかない。

「なあ、ウメ、俺は間違っているのか……？」

夏目に抱いた醜い感情の数々。それは、ウメが佳乃を宿し、佳乃そのものであるという意識があつたからだ。もちろん、今もある。腕に抱いている姿こそウメではあるが、その胸の内側で脈打つものは佳乃なのだ。

佳乃が生きているんだ。

俺は無遠慮にもウメの左胸に手を延ばす。

決してふくよかとは言えない弾力の向こうに、元気に弾む幼馴染みがいる。

胸にそつと触れると、湿ったシャツの感触を追いかけるように、柔らかく温かい感触に見舞われた。

肌を通して得られるそれらいくつもの情報の最後に、俺は鼓動を感じ取る。

とくとく、とくとく、とくとく、とくとく。
とくとく、とくとく、とくとく、とくとく。

佳乃だ。

俺が大好きな幼馴染みであり、ツンデレでもある、佳乃だ。

……軽快に公園を走る少女との思い出。

小学校の頃、二人だけで追いかけてこをした。公園の真ん中に立つ電灯を中心にして、ぐるぐると佳乃を追い回した。佳乃よりも体力のあった俺が、疲れてペースの落ちてきた佳乃のランドセルをつかむと、佳乃は足をもつれさせて倒れてしまった。

二人でもんどり打つてもみくちやになった後、大きく肺を上下させて酸素を求めた。

仁君、私、こんなにドキドキしてるよ。仁君もドキドキしてる？

幼かった二人は、純粋な好奇心のみで互いの胸の鼓動を聞いた。佳乃が俺の胸に耳を当てると、くすぐったくて俺は口元を緩ませてしまう。

仁君の中をお馬さんが走っているみたいだね。黒いたてがみのお馬さんだよ。でも、私の方が必死に走っているみたい。だって、速度が違うもん。仁君の速さと、私の速さ。仁君は男の子だから、ゆっくりあるつても大丈夫。私は仁君について行かなきゃいけないから、早歩きだね。えへへ、仁君の音……。とくとく、とくとく……。

佳乃の声と、俺の手のひらを通したリズムが重なっていく。

「……佐々木……？」

佳乃なんだよ。

「駄目だ」

俺にとっては、佳乃なんだ。

「好きなんだよ……」

夏目の言うことは正しいのかも知れない。

夏目が愛娘をウメに重ねたように、俺もウメに佳乃を重ねたのかも知れない。

いくら心臓が佳乃のものだとしても、夏目から見ればそれは重ねている行為に過ぎないのだから。夏目がしきりに俺と夏目が同じだといったことも、当然の帰結だったのかも知れない。

……俺は町中に溢れる佳乃の記憶を探している。

今でも、佳乃は生きているんだ。俺の視界の中で、笑顔を見せてくれる。声を聞かせてくれる。思い出せば、いくらでも出てきてくれるんだ。

「俺は……佳乃が好きなんだ……！」

夏目の言うことが正しいとしても、どうしようもないんだ。

夏目の言うことを理解したとしても、納得できないんだ。

佳乃を忘れたり、佳乃以外を見たりできないんだ。

俺の記憶は佳乃とともにあり、佳乃によって作られてきたと言い変えてもいい。

振り返れば佳乃がいる。目覚めれば佳乃がいる。ドアを開ければ佳乃がいる。

大好きな佳乃がいるんだ。

好きだよ、佳乃。好きだ。大好きだ。伝えたくて仕方がないんだ。

この想いを、張り裂けそうな想いを、お前に伝えたくて仕方がないんだ。

「俺は……佳乃がなくて寂しいよ。胸が張り裂けそうだよ。ずっと

とずっと色褪せないんだ、お前の笑顔が。毎日毎日夢にも見るよ……馬鹿みたいに広くて真っ暗な海の中で、お前を探しているんだ。……佳乃、死ぬって何だよ……？ 俺のそばからいなくなるって何だよ……？ ちつともいなくなったりなんかしないじゃないか！ただ触れられないだけで、俺のそばにずっといるじゃないか！」

船底に穴の空いたボート。心の底から溢れてくる愛という水で、船が満ちていく。水をかき出すことのできないボートは、船内に満ちていく水の重量に耐えきれず自沈していく。二度と、前に進むことも浮き上がることもない。海溝深く沈没し、腐乱していくだけ。

「……一年経って、やっと慣れてきたと思った。でも、そんなの嘘だ。楽しくみんなと過ごしていても、ふと一人になるとお前を探してる。祭りの後みたいになると、腹の奥から黒いのがやってくる……結構さ、苦しいんだよ。大の男がうずくまってるんだぜ。痛くて、寒くて、何より寂しくて……我慢しつづけるしかなくて、抵抗できずにうずくまるしかないんだぜ……？ やつと我慢できたと思って弁当を食べようとすると、今度は卵焼きをよこせってほったがうるさいんだ」

秘めた心の叫びなのか、声に出したモノローグなのか、それすら分らない。ウメがいることも忘れて、俺は自身の思いの暴走を許している。自分自身、どんな顔をしているか分かったものではないが、そんなことは思慮の外。気にしている余裕なんかない。

「屋上に行くと、お前が俺を待つてくれているような気がするんだ。学校行くまでにお前を思い出さないことなんてない。お前のいない場所なんてどこにもないんだ！ こんなに、こんなに好きなのに、愛してやる準備ができてのに、お前がいなくて何だよ。触れられないって何だよ。ふざけるなよ！ 何でいなくなっただけから、いま

までよりお前が輝いて見えるんだよ！ ずるいだろ……いなくなつてから綺麗になつていくなんて、ずるいだろ……」

涙の流れない自分の涙腺が、不思議だった。悲しいはずなのに涙は流れない。

佳乃の葬式の時も、みんなが泣いているのにとつとつ俺は泣くことができなかった。

地球の層というマントルぐらい……いや、底なしに深い悲しみの筈なのに。

涙が出ない。

「そんなの、ずるすぎるだろ……」

閉じた瞳の奥で、見慣れた黒が蠢き出す。何百、何千という黒い大蛇の群が、俺の周囲を囲み、体をうねらせながら近付いてくる。血のように赤い目を爛々と不気味に光らせながら、俺を品定めしている黒い捕食者。

血のように赤い二股の舌をちろちろといやらしく動かしながら、袋小路に追い詰める捕食者。

格好のえさである俺は、真っ暗闇に灯る赤い灯火に怯えるしかない。

黒の中で唯一色づく赤。それは映画『シンドラーのリスト』で赤い服を着た娘が、結局殺されてしまうのと同じ。印象に残る赤。死を記憶させるための演出。

始まるのだ、また。繰り返される絶望の宴が。死で終わるエンディングが。

……しかし、ふいに俺の頬に蛍のように儚い光が添えられる。驚くほど温かいそれは、大蛇のとぐろに捻り潰される俺に染み込んできく。

頬から、顔全体へ。首、胴体に浸透し、やがて四肢、指先へと。

平行し、黒い大蛇がぼろぼろと崩れていく。

燃え尽きて灰になった新聞紙が、風に揺られて容易に四散するようになり、大蛇とその赤い目は光によってかき消されていく。

耐え抜くことを免除された俺は、接着したようにつぶった両まぶたを持ち上げていく。

恐る恐る、異世界への扉を開けるように。

扉の隙間から、光がこぼれた。

「……佐々木、不細工」

ウメが微笑んでいた。

「……佳乃のこと、分かった気がする。佐々木の気持ちも」

無表情だったはずのウメ。

苦しそうに眉間にしわを寄せていたはずのウメが、微笑んでいる。目尻がわずかに下がって、少しだけ目を細めて、口の端がいつもより大きくカーブを描いて、細い眉が緩やかに下り坂になる。

淡い光が内側から広がっていくようだった。

ダイヤモンドでも、太陽でもない。そんな神々しいまでの光ではない。薔薇のような気高く見目麗しい花でもない。

その微笑みは、まるで道ばたで見つけた何気ない花。例えるならばタンポポの綿毛のような。ぽかぽか陽気、春の風に誘われてふわりと舞い上がるような。たくさんの綿毛が、そよ風と手を繋いでいつせいに空へと昇っていく。

俺はそんな白くて淡い光達に包まれていく。

優しく、触れたら壊れてしまいそうなデリケートなものだけでも、大切に思えるもの。

夏目に向けたものとは違う、ウメの微笑みの形。くちなしに例えたはずの笑みも、実際に向けられてみて、初めて分かる真実の顔。

それが、ウメの笑顔だった。俺に向けられた初めての笑顔だった。

「……私にも分かる」

俺の頬に添えられた手。

「……夏目が好きだから」

俺の冷たい頬を撫でてくれる。

「同じ。私も……夏目と、佐々木と同じ……」

微笑みはあっけなく消えてしまう。やはり苦しいのだろう。ただでさえ表情に乏しいのに、微笑みを描いて見せたのだから、無理がたたるといふものだ。それでもウメは手を下ろしたりしない。それは俺の頬に添えた手で感情を伝えるかのように。

「……私も重ねていたのかもしれない」

俺の腕の中で、臨終まぎわの子猫のように震えている。

本当に同年代かと疑いたくなるほど、病的に軽い。乱暴にすれば壊れてしまうような、ガラス細工然とした繊細さ。華奢が誉め言葉に聞こえないウメの姿。色白で、雪国が似合いそうな。

……そんな白い子猫。

「寂しかったから」

ウメは何を見ているのだろうか。視線は俺を向いてはいるが、俺を見てはいない。そば降る灰色の雨の中、過去の小舟を俺とウメの中間に浮かべているようだった。

「欲しがっていたから」

サイレンの音が近付いてくる。ようやく救急車のお出ましだった。まだ山彦のように聞こえてくるだけで、白い体躯を現しては無いが、三分と立たずに到着するだろう。

耳障りな音。

耳を切り裂くような、過去を掘り起こすような忌まわしい音が少しづつポリウムを上げる。

「だから、同じ」

ウメのかすれ声が、サイレンよりも耳に入ってくる。

「夏目と、佐々木と、私は……同じ。……みんな……誰かに誰かを重ねてる」

今、ウメが声ににじませたのは後悔なのだろうか。そう言って閉じたウメの唇が震えている。

雨音が沈黙を埋めた数秒ののち、再びウメの唇開かれた。

「どこにも行かないでって」

俺の耳に何かが落ちる音が飛び込んできた。

財布の小銭が落ちて暴れる音。

一本目の缶コーヒーが地面に落ち、泥にまみれる音。

二本目の缶コーヒーが、一本目の缶コーヒーにぶつかる音。

スチール缶らしい硬質な音の狭間。

「杏里を待っていてくださいって」

ウメの声ではない、もう一人の声。

「それなのに先輩は、杏里のそばからいなくなるのですね……？」

杏里の声。

第二十八話・「辛いことから逃げてもいいですよね？」

雨はまるで空の涙だった。容赦なく世界を灰色に染めていく。

「……杏里の全ては、先輩なのです」

俺のシャツの裾ではない、自らのスカートの裾をこれでもかというぐらい強く握りしめている。

振り絞る。握力も、声も。

「なのに、先輩が杏里のそばからいなくなってしまったら」

落ちた二本の缶コーヒ―は泥に埋もれている。俺の財布も同様に。

「杏里には……杏里には何も残らないのです」

救急車のサイレンの音が、耳障りから鬱陶しいにランクアップする。杏里の声を掻き消そうと躍起になっているようだ。

「先輩が好きなのです。先輩を好きって気持ちで、体中がいっぱいなのです。溢れそうです。いいえ、違うのですよ……もう、とつくの昔に杏里から溢れちゃってるのです。溢れてしまって、止まらなくて、あふれ出した気持ちに自分自身が溺れてしまって、どうしようもなくなって、先輩を独り占めしたくなるのです」

水滴の落下がスローモーションで見えるような、とぎすまされた感覚。

杏里の一言一言が頭に刻まれていく。

「夕風佳乃先輩……素敵な人だったのです」

頭が殴られたような衝撃。めまいさえ覚えた。

「いつも先輩を独り占めしていたのです」

杏里の口から、夕風佳乃、という名前が発音されること。それ自体が、未曾有のマグニチュードで俺の脳みそを揺さぶった。音は空気を伝播して聴覚を刺激する。その波動が、ショックウェーブとなつて俺を吹き飛ばす。

「私も独り占めしたかったのに、入り込む隙間もなかったのです。遠くから見ていただけだったのです」

未だたどり着かない救急車は、せめて己が存在を誇示するかのようにサイレンの音量だけを上げていく。ホラー映画の効果的な演出。緊張の糸を引き絞るサウンドエフェクト。

「先輩……杏里は、夕風先輩がいなくなって、喜んでしまったのですよ。悪い子ですよ。そんな杏里に自己嫌悪です。でも……それでも先輩の隣にあるたった一席の指定席が、自由席になったのです。馬鹿な杏里としては、座らないではいられなかったのです」

ボーイッシュな髪の毛が雨に濡れている。

短い前髪から、落涙のように雨がしたたり落ちた。

「……………夕風先輩の代わりだとしても、杏里は満足だったのですよ。先輩に好きになつてもらえるのなら。飯の器でも、注がれた水は受け止められるのです」

握りしめたスカートの裾は、まるでぞうきんでも絞るかのように水を失っていく。力強く握りしめられているため、水は吸収されることなく滑落していった。

杏里の振り絞られた声や、感情が、それだけ継続的だということだろうか。

「この体は、先輩でできているのです」

うつむき加減だった杏里の顔が、真っ直ぐ俺を向いた。小さくて卵のようにつやつやで、丸みを帯びた顔。いつもは元気はつらつとして、血色の良い顔。

……それが今は、寒さと負の感情で塗り替えられて真っ青になってしまっている。

「でも、先輩は私から離れていくのですね……夕風先輩の代わりとしても、杏里自身としても、どちらの意味においても……私のことだけを見ていてはくれないのですね」

夏目、ウメ、俺……お互いに重ねた面影。

夏目は亡き愛娘、冬美をウメに重ね。

ウメは亡き父を夏目に重ね。

俺は亡き佳乃を、ウメそして杏里に重ね。

この上に杏里までもが、あえて自分に佳乃の面影を重ねようとしているのだろうか。

……いや、重ねてきたのだろうか。

感情の悪循環。幻に伸ばした手は決して届かない。

誰かが誰かの代わりになることなんて出来ない、夏目は言った。その言葉を聞いた瞬間、俺は柔らかなところを剣で突かれるような痛みを感じた。

夏目の言った言葉の意味を。痛みを伴うほどの、本当の意味を。

「ねえ、先輩」

杏里の頬を大粒の雨が伝う。涙と雨が頬で合流する。

目尻で大きな雫となり、重力に引かれてこぼれ落ちる。一筋となる涙は、途中で雨と溶け込み加速する。最後には、あごで両目の涙が一つになって、地面へと還元される。

杏里の体から離れ、地面に落ちるまで。

そのほんのわずかな時間、杏里の涙は世界で一番大きなきらめきとなる。

「杏里……空っぽです」

杏里は壊れたガラス細工のように微笑んだ。

「……どうでしょう?」

悲しみを押し隠そうとして失敗したのだろうか。それとも自嘲なのか。どちらにせよ、俺には見当が付かない。サイレンが近付いてきていることさえ忘れてしまいそうな俺には、そもそもそんな時間的、精神的な余裕はなかった。

下手な微笑みを浮かべ、今にも泣き崩れそうなむせび声。

初めて見る杏里。もろく壊れかけた姿。

……そんな時間的、精神的な余裕はない。

「……杏里は、もう駄目です」

握りしめていたスカートから手を離す。

「胸が痛い……心が砕け散って、杏里の体が空中分解してしまいそ

うなのです。もう、涙では足りない痛みなのです」

涙を拭うこともしないで、ただ言葉だけを綴る。

「……先輩、いいですよ。杏里は頑張りましたよね。だから杏里は辛いことから逃げてもいいですよ。」

心の琴線が今にも切れてしまいそうな悲哀。

「答えてください、先輩」

すぎるような声。

杏里の声が、俺のシャツの裾を引くような感覚。

どうすればいい。俺に何が言える。俺に何ができる。

佳乃がいなければ満足に生活すらない情けない俺に、何ができるっていうんだ。

感情すら満足に制御できない俺に、どうやって慰められるっていうんだ。

自分の心さえ理解できない未熟な人間に、何を理解してやれるっていうんだ。

佳乃、どうすればいい。

杏里がそうするように。

佳乃、俺はどうすればいい。

俺は幼馴染みにすがりつく。

佳乃、俺には何ができるんだ。

俺は、俺には……。

「……………答えてはくれないのですね」

杏里がふいに浮かべた表情に絶望が混じる。

何かが終わったような、もろく崩れ去ってしまったような。

覆水は決して盆には返らない。ただ手の届かないところに消えていく水を、見ていることしかできない。

「さよならです。仁」

その痛々しい顔に、胸がざわつく。記憶の底から、蘇ってくるなにか。

「えへへ……一度でいいから……呼び捨てで……言ってみたかったの……ですよ」

もう声にはならなかったのだろう。杏里の声はかすれていた。

「……………探さないでください」

雨の中を、背中を向けて走り出す杏里。

答えて！

この公園で。

答えてよ！

俺は、また。答えられずに。

今日という日は自分勝手な私の……お別れ会。

……同じ過ちを繰り返した。
遠ざかっていく杏里の背中。

俺がゲームの主人公だったり、ドラマの主役だったり、あるいはこの場面が映画のクライマックスや小説のラストシーンであったなら、きつと十中八九、公園から飛び出していく杏里を追いかけるのだろう。

大切なものに気が付いて、全てのしがらみを捨てて、杏里を力の限り探すのだろう。

脚力の差か、やがて杏里に追いつき腕をとる。嫌がって逃げ出そうとする杏里の唇を奪って黙らせた後、主人公らしい格好良い言葉で、達観した愛を語る。二人公衆の面前で抱き合って、ハッピーエンド。

でなければ、杏里を見失って息を切らせた後、杏里との思い出の場所を片っ端からあたって回るだろう。

二人で重ねてきた記憶の場所を巡り、最後に一番大切な 有り体に言えば、約束の場所なんてところで、杏里は背中を丸めて泣いている。そして、やはり主人公らしい綺麗な台詞で杏里をさとし、熱烈な抱擁が交わされる。抱擁を解くと、二人熱く視線を絡ませあって、やはりキスで終わり、ハッピーエンド。

それは、とても良い物語だと思う。

でも、その物語には続きがない。

二人仲良く結ばれて、めでたしめでたし。それはいい。とても綺麗な終わり方だ。俺も大好きだ。

……けれど、本当はそれだけじゃない。

キスが終わり、幸せな月日が訪れる。

三日、一週間、三ヶ月と月日が流れる。そして一年が経っても、ずっと幸せなままではられない。

燃えさかる火炎のような恋も、やがては冷めるときが来る。

四六時中一緒にいれば、やがて疎ましく思えるときが来る。

映画やドラマ、ゲームはいつだってそうだ。幸せの続きを見せてはくれない。終わりの悲しみを伝えようとしなない。

そして何より。一番大切なことを教えてくれないんだ。

絶望からの再生。

幸せになる方法は教えてくれるのに、苦しみから立ち上がる方法を教えてはくれない。ハッピーエンドの先を教えてくれない。

ドラマのような恋はある。映画のような恋もある。小説のような恋だってある。

本当に格好良いと思う。嘘じゃない。

なぜなら、俺だってあこがれているから。

けれど、現実はそのだけじゃないんだ。幸せな日々がずっと続くはずがないんだ。

キスをして、ハッピーエンドで。それで終わるのが人生じゃないだろ。

現実には夢じゃない。寝て起きて全てが帳消しになるような世界に生きているわけではないんだ。

リセットボタンもない。気に入くないからって、セーブポイントからやり直したりすることもできない。

同じものもない。壊れたからって、買い直すこともできない。

みんな知っている。そんなことは、誰もが知っている。

だったら、教えて欲しい。

馬鹿で、どうしようもない俺に教えて欲しい。

絶望から立ち上がるにはどうしたらいい。心の傷を癒すにはどうしたらいい。

どうやって苦しみを乗り越えたらいい。

どうやってたら、大好きな人を大好きなままで、悲しまずに生きていけるんだ。

……全ては時が解決してくれるのか？

でもそれは、本当に正しい解決法なのか。

誰かに教えられて、正しいと思いこんでいるだけではないのか。それなら、佳乃だってそうだ。

本当はまだ生きていて、俺に見つからないように隠れているだけ。俺が失ったと思いこんでいるだけで、本当は次の瞬間に恐竜すべり台の影からひょっこりと顔を出して、いつもみたいにおどけてくれるんだ。

どつきり大成功だね、仁君。

何が正しくて、どうやってたら絶望から救われるのか。

映画や、ドラマ、ゲームや、アニメ……それらは俺に何も言うてはくれない。

オタクだの何だのと言われるほど大量に見てきたのに、実際には何もできない。何も参考にできない、学んでいない自分がいるんだ。間違いを繰り返すだけの、馬鹿な自分がいるだけなんだ。

「……だったら、走ればいい」

俺の腕の中で救急車を待つウメが、震える手のひらで俺のシャツを握りしめた。

「考えるぐらいだったら、走ればいい」

弱くて、すぐに絶望にとらわれて。

「思考して停滞するなら、迷わず走ればいい」

痛みが、絶望があふれれば、抵抗するすべも持たないで体を抱えて苦しみを耐えるだけ。

「考えるのは、あの子を捕まえてからでも遅くない」

繊細だなんて言えば聞こえはいい。格好が悪いのを承知で言えば、ただ傷つきやすいだけ。

心が痛がりで、恐がりで、本当はいつも震えていた。

「何もしないでする後悔。何かした結果の後悔。……私なら、後者」

オタクだつてことも、本当は怖かった。まるで、違う生き物のように見られていたことだつて知っている。オタクだと後ろ指を指されるのが嫌で、自分が疎外されているような気がして、華やかな若者の街から逃げ出していた時期だつてあった。

それが佐々木仁、情けない俺自身だ。

「間違えるのは若者の特権。……故人はそれを、若気の至り、と」

毒のある笑みを見せるウメ。きらりと目の縁が光った気がした。ウメがこんなにも暗部に富んだ表情ができるとは驚きだった。

「私は大丈夫」

細い指先が示した先には、民家の隙間を縫う赤い光。

「救急車がくる」

無理して親指を立てて余裕を見せる。先ほどの毒のある顔とは違って、無表情なところがなんとも怖い。

俺はそんなウメの瞳をしばらく見つめたあと、無言のまま腕の中から解放した。息も絶え絶えなウメを恐竜の口内へそつと横たえる。サイレンの音が耳をつんざく距離にまで聞こえてきたところで、俺は恐竜の口から雨の中へ。

雨に打たれ続けた体は、氷をまとったように冷たい。

俺もウメも満身創痍だ。体の節々は痛みを訴え、苦しい、動かな、と叫び出す。高熱に肌を赤く染めるウメも、このままでは肺炎を併発させるおそれがある。恐竜の口内で体を丸める姿は、まるで耐える子猫。

……行くべきか、行かざるべきか。それは、出来の悪いハムレット。

「佐々木、行つて」

その言葉を疑うわけではないが、俺は無遠慮にウメの左胸に触れてみる。

ウメは少しだけびくりと体を反応させるだけで、俺をとがめようとはしない。

目をつぶって音に耳を傾ける。

ウメの内側で音を立てるやんちゃな子は、ウメと心同じくして、まるで俺をせき立てるように足を踏みならしていた。

「私は……大丈夫」

俺は立ち上がって背を向ける。そして、さらなる雨へ一歩踏み出そうとする。

「私は重ねられるだけの人形だから」

「……う、ウメ……!？」

背中を向け、片足をあげたままで停止してしまう俺。滑稽な体勢のまま肩越しに振り返る。

「嘘」

ウメは辛いくせにニヤリとした笑みを浮かべる。やはりブラックで毒々しい。黒猫が肉球から鋭い爪を出すような仕草。いたずらに目がきらりと光る。

でも、次の瞬間には真剣みを帯びて。

「私は山田ウメ。私は私。私は代わりにはならない。代わりになんてさせない」

ぼん、と背中を押される感触。情けない、どうしようもない俺を励まそうというのだろうか、この少女は。自らも苦しくて、耐え難い苦痛を抱えているはずなのに。

「ウメ、お願いがある」

「……何」

子猫のように小さい体で、借りたいぐらいの猫の手で。ウメはウメなりに何かを伝えようとしてくれているような気がした。

「語尾に、にゃ、と付けてくれ」

ウメは一瞬、目を猫のように丸くする。読み取るのは難しいが、どうやら驚いているらしい。

「馬鹿」

その声に安心し、俺は雨を払いのけるように疾駆する。

「……………さっさと行くにゃ」

その声が耳に届くより先に、俺は公園から飛びだしていた。

第二十九話・「先輩」

俺がゲームの主人公だったり、ドラマの主役だったり、あるいはこの場面が映画のクライマックスや小説のラストシーンであったなら、きっと十中八九、公園から飛び出していく杏里を追いかけられるだろう。

大切なものに気が付いて、全てのしがらみを捨てて、杏里を力の限り探すのだろう。

探さないでください。

杏里の去り際の言葉が思い起こされる。

俺はゲームの主人公でもなければ、ドラマの主役でもない。

俺が全力で走っているのは、映画のクライマックスだからでも、小説のラストシーンだからでもない。

飛び出したのはいい、杏里を捜すことを決意したのはいい。

「何がしたいんだ……俺は……！」

大切なものに気が付いたわけでもないのに。全てのしがらみを捨て去ったわけでもないのに。

……俺はどうして走っているのだろう。

雨がそんな俺を追い返そうと、顔面に攻撃を仕掛けてくる。空から槍が降るといふジョークも、今なら何となく理解できそうだった。風が出てきたところで、視界も悪い。横殴りになりつつある雨は、さながら空から降る槍。

自然が俺を追い返そうとしているかのような悪天候の中、俺は何がしたいのかも分からずに杏里を探している。

「……仁、先輩……？」

走り始めて十分ほど経った頃だろうか。

色とりどりの傘で華やぐ駅前通り。傘もささずにびしょ濡れで、なおかつとぼとぼと歩いている女の子を発見した。雨が小降りになつていたのが幸いした。杏里を見つけたとたんに小降りになる雨は、相当に意地悪だと思える。

逆に俺が杏里を見つけるのが運命だったかのように雨が小降りになったと考えれば、多少なりともドラマ的なだろうが、そんなことは些末ごとだ。神のみぞ知るところに、俺のような凡人の意志を挟む余地はない。

「……探さないでって、言っただけなんです！」

杏里は向い側から走ってきた俺を目にとめると目を丸めた。ウメを追跡していたときもそうだったが、俺は案外運がよいのかもしれない。

「今、先輩に探されると、本当に醜い人間になってしまうのです……！」

杏里が顔を伏せると、短い前髪から大粒の雫が次から次にたっついていく。一体どれほどの雨水を吸い込んでいるのだろうか。

いや……それだけ風雨にさらされ続けたのだろうか。

「だから、探さないでください！」

接近すると逃げてしまう臆病な草食動物。回れ右して急に走り出すから、相合い傘で仲むつまじく歩いていたカップルを突き飛ばすことになってしまう。

尻餅をついた女の子が大声で悪態をつくのには内心困惑していたようだったが、杏里は謝りもせずに駆けだしていく。そんな女の子の豹変に苦々しく顔を歪めていた男のわきを、俺は駆け抜けていく。

揺れるビニール傘の向こうに杏里が透けて見えた。
準備運動も無しに走り出してから十分以上。運動不足のツケが、体をむしばみ始めていた。

酷使した肺が握りつぶされるような痛みを訴えてくる。呼吸をする度に、のどの奥で何かが引っかかっているような気がしてならない。空気の通り道を何かがふさいでいる。まるでかぎ爪のような鋭いもの。それらが気管のあちこちに生えているような感覚。酸素の出し入れを妨害している。

だから、早く走れない。燃焼が間に合わない。少ない酸素では、爆発的な力も得られない。

杏里に追いつくこともできない。

体の節々が痛い。骨と骨がきちんとかみ合っていないのではない。足の骨が外れてしまっているのではないか。こすれてすり減っているのではないか。

靄がかかる視界の中で、俺は舌打ちをする。

「……く……そっ！」

右も左も傘、傘、傘。人混みと、傘の群れ。

ジャングルの羊歯植物をかき分けて進むような奇妙な光景。

色とりどりの傘の色は混ざり合い新たな色を作る。薄い色が濃い色に呑み込まれ、またあるものは透けて見え、杏里の姿にフィルタをかけていく。

セピア色。グレースケール。ネガ反転。ペイント系ソフトウェアで風景写真を加工するように、現実の風景が交わり、色を変えていく。

現実に見るものではない。試したことはないが、ドラッグを服用

するとこんな景色が見れそうな気がした。もしくは、ランナースハ
イとか、熱中症になる直前とか。

視界がかすんでいく。頭も痛い。足の節々が碎けそうだ。肺は臨
界点を軽く越え、メルトダウン寸前。雨でべとつくワイシャツは鋼
鉄の鎧のように重く感じられる。

体にまとう全てが鬱陶しい。

後ろ手に脱ぎ去ったワイシャツは、雑踏と傘に飲み込まれて
あっという間に消失した。

「……………な……………んだ？」

脱ぎ捨てた瞬間、ノイズのようなものが俺の頭に入ってきた気が
した。ひととき強烈な頭痛が襲ったかと思うと、目の前の景色がテ
レビの砂嵐のように乱れた。

いや、違う。

俺の頭の中に何かが入ってきたのではなく、出てきたんだ。

俺の頭の中から、まるで……デジャビュのように。

「構っていられるかつ！」

走りながらに崩壊してしまいそうな体をさらに酷使して、俺は杏
里の背中手を延ばす。まだ十メートル以上先なのに、すぐにでも届
きそうな距離にあるように感じる。遠近感までおかしくなってきた
いようだ。

傘もささずに俺から逃げる女の子。俺はただその背中を一心不乱
に追っている。

車窓から見える風景は、その早さゆえ、細部をとらえられない。
後ろに置いてきた老若男女の顔が全てのっぺらぼうだったような気
がする。粘土でこねられたような適当な輪郭だったような気がする。

……が、今はどうでも良いことだ。

目の前の女の子の背中さえ見ていることができればいい。最低条件として、見失わなければいいのだから。

俺が走ってきた道程とか、ぶつかつた人の風体とか、踏みつづいた靴の種類とか、無視した歩行者信号の数とか。本当にどうでもいい情報だ。

俺には、少女の背中だけが鮮明に見える。

曇り空、灰色の景色、雨の斜線、傘の色。

それらはどうでもいい。他の視界は何もいらない。

少女のすりりとした背中。それだけが、視界に映っていればいい。

……ああ、くそ。

もう少し、早く走れないものか。そうしたら、目の前の女の子を捕まえられるのに。

翻るスカート。

運動会、校庭の真ん中で風に揺れる校旗のよう。風を受けて元気よく。

舞い上がる髪の毛。

蝉時雨、運んできた風が揺らす風鈴のよう。耳を癒す清涼な音。

飛び散る雫。

河川敷、遊ぶ子供達が互いに掛け合う水。飛沫がきらきらと輝く。

追いつきたい。手で触れたい。あの背中に。

そのためには、腕を振ればいいのだろうか。足を高く上げればいいのだろうか。

……よし、やってみるか。

もとより筋肉痛は覚悟の上。明日歩けなくなってもいい。入院することになっても、あまり長期でなければ許す。それに、考えるのは後からでもいいはずだったよな。

だから、今はただ追いつくことだけを考えよう。あの背中に。

綺麗で、すらりと伸びて、俺の手を引いてくれるような、優しい背中。追いかけるのは疲れるはずなのに、俺はその背中を見続ける

ことで力が増していくような気がした。

いつまでも、どこまでも、走っていけそうな気がした。

世界の果てというものがあるのなら、そこまで。

宇宙の果てというものがあるのなら、そこまで。

少女を追いかけながら路地裏を通る。路地裏に入って俺を巻こうという算段らしい。そうはさせじと、俺も駅前通りから横にそれる。二人が作る喧噪の足音に、驚いたカラスの鳴き声が頭上をかすめる。足が地面に付いている感覚がしない。幽霊にでもなったか。幽体離脱して、魂のまま追いかけているんじゃないだろうか。だとしたら、体は置き去りか。それは不味いな。

だが、再び襲ったノイズのせいで、忘れていた感覚が戻ってきてしまった。カラスの鳴き声が甲高いせいだ。襲い来るのは、全身に溶かした鉄を流し込まれたような嫌悪感。痛みと、鈍重さと。

最悪の板挟み。

目の前の女の子、少女……………杏里を追いかけているだけなのに、体とは別のところで痛み出す。これは何だ。

くそ、駄目だ、また考えている。

俺は頭を振って考えを追い出そうとする。

雨がアスファルトを叩く音、遠くで響く車のクラクションが鳴る音、靴底が地面を蹴る音。

それだけでいい。

「……………なんで」

前方から虫の鳴くような声。路地裏を出ると、俺は三度のノイズに偏頭痛に顔が歪んでしまう。

視界が開け、再びの大通り。行き交う車のタイヤが、道ばたに泥を跳ね上げる。

「何で杏里を放って置いてくれないんですか！」

走りながら振り返る。

「こんな時だけ……いつも私ばかりで……こんな時だけ！」

咳き込みそうになる呼吸を何とか整えて、杏里は言葉を置き去りにする。ノイズのおかげだとは思いたくないが、なんとか意識がしつかりと定着してくれていた。

時間から切り離されたような、あの独特の感覚はもう味わいたくない。

「探さないでください、つてのは」

小降りの雨なのに。前に行く少女の目尻には、大粒の雨が残っていた。

「探してくださいって言うてるのと同じなんだぞ！」

見失いたくない。つかまえない。この手で。少女の背中を。

「先輩……先輩先輩！」

杏里が駆けていくアスファルトが、ぼんやりと黄色に光っていた。曇り空に晴れ間でもものぞいたのだろうか。

「杏里は杏里は……杏里はっ！」

少女が光るアスファルトを踏みつける。頭上は相変わらぬの曇り空。太陽が出ている気配はない。見上げた視線を下ろせば、アスファルトの上に光る黄色は、いつの間にか赤に変わっていた。

それは彼女の頭上にある赤が、アスファルトに染み込んだ雨水にわずかに映り込んでいるからだろう。

黄色から、赤へ。

じんわりとしみた雨水が、色を変えていた。

……………信号？

強襲してくるノイズ。

額から化け物が飛び出してくるような痛みだった。頭蓋が割れ、額が裂け、記憶が飛び出してくる。嫌悪感。恐怖感。時間から切り離されるような感触が、俺をまるごと呑み込んでいく。

黒、灰、白、黒、灰、白。

繰り返されるノイズ。現実から引きはがされた時間。

記憶と混ぜ合わせられ、強引に引き延ばされる。

……真つ黒な嵐の中、その景色は重なるように俺の目に飛び込んでくる。

かぎ爪でひつかくような大きな音。ブレーキ音。

今更無駄だ。止まらない。瞬きする間にも迫ってきている。

少女に迫っていく。

鼓膜を引き裂くまがましい音。黒塗りの鋼鉄。

俺の前を走っていた少女に襲いかかる。無慈悲なまでに女の子に迫る巨躯。

……………ここは俺の絶望の中なのだろうか。

同じ景色、繰り返される悲しみ、変わらない結末。黒い絶望。全ては予定調和。

俺がどんなに手を替え、品を替えようと、全ては同じ道順に戻る。

ゲームのような結末。プログラミングされた結末。

定められた運命。あらがえない宿命。決定的な死。

変えられない。不可避なのだ。俺が何をしたところで。

黒い残像が女の子を連れて行く。まさに死神の黒。それは絶対。

変えられない。変わらない。

予定調和だから。予定調和は。あくまで予定調和で。限りなく予

定調和で。予定調和は絶対的。予定調和なんだ。そう、予定調和。
……でも。

……予定調和であるとしても。

それでも。

それでも、俺は。

予定調和だと分かっている。

俺は……。

俺は、君が好きだから。

助けたい。命を賭して。

俺は無意識に体を動かすと同時に、ありったけの想いを込めて叫ぶ。

俺は心が痛がりで、恐がりで、情けなくて、おまけに優柔不断。

オタクだつてことを自覚していても、他人の目が怖かった。まるで違う生き物を見るような視線が、痛くて仕方がなかった。

オタクだと後ろ指を指されることが嫌で、自分が疎外されているような気がして、華やかな若者の街から逃げ出していた時期だつてあったほど。

メイド喫茶で騒ぐのは、ほかの喫茶店で同じように騒げないから。あそこが自分のような種類の人間のみが素直に存在できるテリトリーだと、そう思っていたから。

……でも。そんなとき俺の隣にいた少女が言ったんだ。

仁、アンタさ、何をそんなにびくびくしてるわけ？ 自分は自分じゃない。他人に見せつけてやる、ぐらいの勢いでいなさいよ。そんなんじゃないね、私は弱いです、カツアゲなりなんなりしてください、って首から看板下げているようなもんなのよ。

東大寺南大門に立つような顔で説教した後、少しだけ顔を背け

て恥ずかしそうに。

……その、勘違いしてほしくないんだけど。……アンタが不安なときは、私がいるからさ。な、なんなら、私が守ってあげてもいいわよ？ ……え？ 格好つけるな？ 馬鹿、ほかでもないこの私が言ってるのよ。素直に好意を受け取りなさい……よっ！

よ、のタイミングで襲ってきたデコピンに痛がる俺に、クスクス笑いを浮かべる。

私、こう見えて仁を買ってるんだから、がっかりさせないでよね。アンタの株が値上がりしてくれないと大損なのよ。意味、分かるわよね？ ……そ、分かるならいいわ。だったら、アンタは今よりもっと努力して自分の株を上げること。そして、私を………シアワセにしてよね。

なぜか急に聞き取れなくなった後半の言葉は、当たり前のように聞き逃した。口の動きだけが頭に残っていたから、俺は何度もその口の動きをまねてみる。あいうえおから並べていって、やっと導き出した聞き逃した言葉。

さすが、ツンデレは期待にそぐわない。

俺は、その少女がそばにいないと何もできなくて。

その少女がいたから、俺は俺でいられて。少女のおかげで笑っていられたんだ。

世界中に蔓延する痛みから守ってくれる絶対障壁 それが少女であり、たった一人の幼馴染み。

俺のそばで、ずっと俺の心を守ってくれていて。

俺が間違わないように、後ろから優しく見守ってくれていた人。

俺が、この世で一番好きな人。

俺は限りある時間で、必死に体を動かす。

俺は、君が好きだから。

助けたい。予定調和なんてどうでもいい。

ただ、想いがそこにあるから。

無意識に体を動かすと同時。

ありったけの想いを込めて叫んでいた。その少女の名前を。

「 佳乃！ 」

直後、暗転する俺の視界。

二回転、三回転、アスファルトの硬質な感触を身体に受けながら、俺は地面を転がる。

黒、青。黒、青。

空とアスファルトが、ストロボのように入れ替わる。痛みもなく、黒い地面をバウンドした。

軟体動物にでもなったかのようなだった。手足が関節を忘れて自由になる。

逆方向にも曲がる気がする。実際、視界の端で曲がっていた。

事故の直後、スローモーションになるってよく言うけれど、あれは半分嘘で、半分本当だ。

実際、俺は事故の直前と直後、時間が止まったかのように、三人称の視点で景色を見ることができたのだから。

一方で、人々の叫び声や、怒号がはつきりと聞き取れない。

歩道の人間が悲鳴を挙げているのは分かるが、皆一様に口をぱくぱくさせているだけ。

聞こえない。何も。聴覚に異常はないことを祈るだけだ。

緩慢に、時間が流れていく。俺の周囲だけ。ひどく静かだ。

「 ぱい せん、ぱい？ 」

俺に触れる人の声が、肌を通して聞こえてくる。

かすむ視界の中で、俺は誰かに乱暴に揺り動かされていた。

何度も繰り返しているが、事故にあった人間をそんなに乱暴に扱わないで欲しい。氣道確保とか、体を横に倒すとか、救急救命の知識には疎い俺だけど、とにかく細心の注意を払って欲しい。ブレーキを踏んでいたとはいえ、一トンに近い鉄のかたまりと正面衝突したんだ。

即、命が失われていても不思議ではない。

「いや……いやです……そんなのいやなのです……」

誰かが悲しんでいる。

予定調和なのに。変えられない結末の筈なのに。

あざけってくれていい。これは予定調和なんだ。

俺はまた絶望を繰り返したただけなんだから。

あれ、ひどい血よ……。

でも、いいんだ。

俺が望んだ絶望なんだから。

予定調和だと分かっているけど、俺は望んだのだから。

助かるのかしら、あの子……。

おそろおそろといった様子で、野次馬が指を持ち上げる。

野次馬の指し示す方向は、他の誰でもない俺だった。

俺はとつさに体を動かそうとする。顔を持ち上げ、周囲の状況を確認しようとする。けれど体は動いてはくれなかった。

指の一本すら動かないというのはどうということだろう。

ようやく動いてくれた眼球が、俺の体を映し出す。

一目で俺は体が壊れかけていることを知った。次第に視界が赤に染まっていく。腕で拭きたいのにぬぐえない。何とも歯がゆい気分だ。

……でも、それでもいいかと思える。

野次馬が俺を指さしたということは、目の前の少女を助けられたということなのだから。

絶望の中で何度も失って、その度に一年前と同じ絶望を味わって。何度も何度も味わって。予定調和だと思っていた。

変えられないと思っていた。

でも、俺は変えられたんだ。

結末を、予定調和を。

……これでやっと触れることができる。

これでやっとキスの雨を降らせてやることができる。

これでやっと愛することができる。

長かった気がするし、短かった気もする。

やっと目の前の少女を助けられた。

「……佳乃、よかった……やっと……助けられた」

俺は最後まで腕を持ち上げられなかった。頬を触りたかったし、キスもしたかった。

重くて持ち上げられなくなったまぶたの向こう。

「……先輩……？ 杏里ですよ……佳乃じゃないのです……杏里なのです」

頬に落ちてくるのは、雨だろうか。冷たくて気持ちが良い。

「いや……いやなのですよ……先輩……なんで私を呼んでくれないんですか……？ 杏里は杏里です……誰かの代わりではなくて、杏

里なのです……」

雨にしては大粒で、局地的で、リズムが悪い。

「……駄目なのです……先輩……」

雨がやんでいく。それは感覚が薄れていくからだろうか。

「目をつぶっちゃ駄目なのです！ 開けてくださいなのです！
いつものようにMな杏里を……いじめてください……先輩……！」

あがりはじめた雨音の向こう。

佳乃の笑顔が浮かんで、消えた。

第三十話・「杏里」

感覚のない真つ暗な空間で、俺は誰かの一人語りを聞いていた気がする。昔々、母親に聞かされた昔話のように。まどろむ意識、記憶に残るか残らないかの曖昧な境界線の上で、俺はその声に抱かれていた。その声は、前置きも何もなく、ただ優しい声でこう始まった。

……先輩、聞こえていますか？

杏里が先輩を初めて見たのは、高校に入学してすぐのことでした。先輩は屋上で楽しそうに友達とお話をしていました。

杏里はまだまだ新人生、若葉マークを貼り付けた生徒でしかなかったのです。

友人と呼べる人も、気兼ねなく話せる親友も……残念ながらいまませんでした。なので、ふと訪れてしまう寂しさに、気が付けば昼休みの教室を抜け出していたのです。

誰か呼び止めてくれる人はいないかな、昼食を一緒にとろうと誘ってくれる人はいないかな、淡い期待を持ちながらわざとゆっくりと教室を出ました。

……でも、現実には厳しいものなのですよ。

杏里に話しかけてくれる子は誰もいませんでした。

自分から話しかければ自ずと会話の輪ができあがるのでしょうか、当時の杏里はあまり積極的ではなかったのです。

引っ込み思案で、自分の気持ちを隠してしまっ……。

え、あ、あの、嘘ではないのですよ？

まだ　ここ強調なのです　積極的な人間になれなかったときのことなので、あまり詮索はしないで欲しいのです。それに、ここでツッコむのは野暮というものです。話の腰を折るというものなのです。

えとですね……そんな杏里でしたから、何となく楽しそうな先輩達の会話が気になってしまったんでしょうね。購買で買ったサンドイッチ　カツサンド　をちびちびと口に運びながら、楽しそうな先輩の会話を盗み聞いていたのです。

ほけほけとした女の子の会話がむずむずする一方で、なにやら騒がしい声がします。

二言目には、お兄ちゃん、お兄ちゃん……間違えました。
第一声からお兄ちゃんだったのです。

その小柄な女の子は、お兄ちゃんであろう男子生徒に向かって猛烈にアピールしていました。

見ているこちらが恥ずかしくなってしまうほどの猛烈ぶりなのです。

あゝん、して。

そんないたれりつくせりなシチュエーションが当たり前のように繰り広げられていることに驚きです。今どきの学園生活はどうなっているのでしょうか。

そのときは正直不安で仕方がなかったのです。

すみません……そんな兄妹の風景は置いておいて、先輩の話に戻します。

杏里も、まさか話がそれるとは思っていなかったので、大いに反省です。

木の幹に手をついて、頭を垂らして……はい、反省なのです。え……古いですが、そうですね。

えと、ですね……先輩のそばには、とても可愛い女の子がいたのです。

さらりとした髪の毛が太陽の光できらきらと光っていて、まるで手入れの行き届いた三冠馬のたてがみみたいなのです。杏里の見立てでは、凱旋門賞も夢ではないたてがみ　髪の毛具合なのです。でなければ、エリザベス女王杯ですね。加えて、ぱりとした制服は新入生の杏里が着ているものと変わらないくらいに清潔感が漂っ

ていました。毎日の手入れを欠かしていない証拠なのです。他の先輩達が少しよれっとしているのに比べて、本当に驚きだったのです。もちろん、可愛いと思ったからには、顔が整っているのは言うまでもないのです。

つぶらな瞳は女の子の誰もがあがれるし、少し童顔が交っているところは男心をくすぐります。先輩に対する仕草や、先輩を見つめる眼差しも乙女そのもの。

これはもう、恋する乙女。

杏里は一瞬で見通したのですよ。先輩と二人、仲むつまじそうにまるで光合成でもするように、互いの存在を支え合っているのです。昼は太陽の光を受け取って元気に活動し、夜は二酸化炭素を吸って酸素を作り出す……。

……例えばわけ分からないですか？

むむ、杏里は小説家ではないのです。それぐらい我慢して欲しいのですよ。

とにかく、そんな二人に……先輩に寄り添う女の子に抱いたファーストインプレッションは、嫉妬を通り越して尊敬だったのです。杏里もあんな風になれたらな……不覚にも思ってしまった。今では、少しだけ後悔しています。やっぱり、不覚だったのです。会話の内容は、あまりにも馬鹿馬鹿しすぎてあまり思い出せないのですけど、確か……鹿岡兄先輩に購買で飲み物を買ってお金を借りていたらしくて、そのことについて鹿岡義妹さんにいろいろと言われていました。

そのあまりのねちねち具合に怒った先輩の一言なのです。

購買ごと返してやる！

先輩、学校は買えませんか？

話に混じっていたわけでもないのに、杏里はくすりと笑いをこぼしてしまっただのです。

そんな杏里に気が付いた先輩が、恥ずかしそうに鹿岡兄先輩に八つ当たりしていたのが、ほほえましかったのです。

そんな風にして先輩を一方的に知ることになった杏里は、不意に先輩を見つけると目で追うようになっていました。

不思議です。毎日の日課というか、銭湯の風呂上がりに飲むコーヒ―牛乳だとか、温泉でする浴衣姿の卓球だとか、ビールについてくる枝豆だとか、カラオケボックスに店員さんが入ってくると恥ずかしくなって歌うのを止めてしまっただとか……言っていて何が何だか杏里も分からなくなってしまうましたが、とにかく不思議なのです。

杏里は先輩を心にとめておくようになっていました。

楽しそうな先輩。

その笑顔が杏里に向けられているわけでもないのに、杏里は嬉しくなっていることに気が付いたのです。まるで、杏里が気さくに先輩に話しかけたら、先輩は当たり前のように明るい挨拶を返してくれるような気さえしていたのです。

……杏里は馬鹿ですね。

そんなことあるはずないのです。先輩を知ったような気分になっていただけなのです。

そんなこんなで、杏里は先輩を意識するようになりました。先輩は杏里のことをちつとも知らないですけど、杏里はだんだん先輩のことを知るようになっていったのです。

初めに知ったのは、いわゆる先輩がオタクって人種なことでした。見かけによらずですね、先輩。でも、そんなことは、なんの障害にもなりませんでした。一番障害になったのは、杏里の臆病さ加減なのです。杏里は見ているだけで半年、名前を知るまでさらに半年という充電期間を経て、ついに先輩にアタックすることに決めたのです。そんな杏里の桃栗三年柿八年でした。

恥ずかしついでに色々と告白……白状するのです。

いいですよ。ここまで、聞いてくれたのですから、最後まで聞

いて下さいなのです。

先輩と廊下の曲がり角でこつこつしたあの日。先輩と初めてつながりを持ったあの日。

杏里が先輩とぶつかったのは……わざとなのです。

先輩が教室から出てくるのを不審者同然の格好で待っていたのです。

廊下の角から、顔を出して、きよろきよろして。くすくす上級生の皆様から笑われたのです。……恥ずかしかったのです。

ですが、先輩とお知り合いになれるのならなんのその。

杏里は耐える女の子です。お母さんの娘で良かったのです。

お父さんは、もう少しお母さんに優しくするのです。

さて、いざ先輩が現れたらあとは簡単でした。わざと仰向けに倒れて見せて、勝負パンツ（赤）をのぞかせて……いざとなると、恥ずかしいもののなのです。もう、やらないのです。ちなみに色彩心理学では食欲増進の色だったりします。

……でも、先輩はそんな杏里のパンツをのぞいたりはしませんでした。のぞいてはくれませんでした。

それどころか、そのときの少し悲しげに杏里に手を差し伸べてくれた先輩の表情が、杏里をつかんで離さなくなりました。

そんな不意打ち、ずるいです。そんなもの悲しい表情を浮かべる先輩がとてもとてずるいのです。

先輩は杏里の心を泥棒していきました。

……でも、そのときはすでに先輩の心も泥棒されてしまっていたのですよね。

遠く離れていった、あの女の子に。

先輩のそばでいつも笑っていた人。赤い糸で結ばれていた人。宿世から決まっていた人。

夕風佳乃先輩。

彼女がいなくなったととうこと。亡くなってしまったということ。だから、先輩は悲しくて仕方がなかったのですね。杏里の勝負パ
ンツに気が付かないほど。

それでも、ぶつかって転んだ下級生に優しく手を伸ばそうとする
健気な先輩。

…… 本当にずるいのです。

先輩に近付きたくて、夕風先輩の鞆に収まりたくて、影で企んで
いた杏里が醜悪な存在に見えてしまうのです。考えなくなかったの
に、先輩のそんな顔を見せられたら、杏里は身も心も捧げなくなる
じゃないですか。笑顔にさせてあげたくなくなるじゃないですか。

杏里は卑怯です。

先輩とごっつんこしたときには、そのことを知っていました。だ
から、先輩に近付きました。廊下の角でごっつんこして、先輩に近
付いて、話せるようになって、明るく振る舞って、先輩の悲しみに
空いた心の隙間に入り込もうとしたのです。

杏里は先輩のことをどんどん知っていくのに、杏里のことを先輩
はちつとも知ってくれない。

差は開く一方です。

何馬身差ですか？ …… 違うのです。

まだ先輩はスタートしていないのですね。

杏里ばかり、杏里ばかり、焦っているのです。馬鹿みたいで
す。悲しいです。虚しいのです。でも、そんな先輩が好きなので
す。これだけはどうしようもないのです。

本当に、杏里は自分自身の心に参っています。杏里は先輩には隠
し事はしていないつもりです。

醜い杏里のことはもう言いましたよね。でも、それでも先輩に隠
していたことがあるのです。

嘘をついていた…… と言った方が正しいのかもです。

…… 先輩、杏里はMではないのです。

驚きましたか？ 嫌いになりましたか？

残念ながら、その言葉に嘘偽りはないのです。杏里は先輩に触れ合いたいがために、Mだと偽ったのですよ。女って怖いですね。ずるい自分が怖いのです。

Mは叩かれる痛みが好き、いじめられるのが好き。

なら先輩も、そんな杏里をいじめてくれるのではないか、叩いたり言葉責めしてくれたりしてくれるのではないか……。

それはつまり、先輩に触れてもらえる、話しかけてもらえるということなのです。

安直なですけど、杏里はそう考えたのです。

そんな杏里は変態ですか？

でも、惚れた弱みってヤツなのです。メス犬呼ばわりされても構わないのです。首輪をつけられても構わないのですよ。

先輩、杏里は先輩のために自分を改造人間のように作り替えてしまいました。

先輩のためにオタクの勉強をしました。アニメだってたくさん見たのです。

先輩の話について行けるのが証拠なのです。英語が理解できるような感覚で感動だったのです。キャラだって多分立っていると思うのです。

そんなこんなで今では、先輩のために変えた杏里（先輩用）が、本当の杏里自身になってしまいました。

えへへ……馬鹿ですよ。同情の余地もないのです。自嘲なのです。

先輩に見て欲しくて、話しかけて欲しくて、触れて欲しくて、杏里は杏里を先輩色に染めたのです。

……でも、先輩の心の中には、いまでも夕凧先輩がいるのです。気が付けば、先輩はいつもお外を眺めています。杏里と話しているときもどこか上の空だったりとか、ドアを見ていたりとか、何も無い中空を眺めていたりとか。

先輩、そこに夕凧先輩がいるのですか？

いるのですよね？

夕風先輩が先輩を呼んでいるのですか？

呼んでいるのですね？

夕風先輩がお外を歩いているのですか？

歩いているのですよね？

夕風先輩がドアから入ってきてくれると思っっているのですか？

思っっているのですよね？

……先輩、駄目ですよ。夕風先輩はもう現実の人ではないのです。現実にいるのは杏里なのですよ。夕風先輩はいないのですよ。

だから、先輩、杏里を見てください。そばにいる杏里を見てください。声をかけてください。おもちゃにしてください。そして、微笑んでください。

……それでも、先輩はそんな杏里の胸の内を知らずに、お外を見していました。

夕風先輩を探していました。

どうしてですか、先輩。先輩は、杏里がこんなにしても見てくれないのですか。

なら、何をしたら見てくれるのですか？

……ごめんなさいなのです。杏里はカルシウムが足りませんね。ずっと想い続けられ願いは届く。努力すればきっと叶う。

だから、この想いもいつか必ずむくわれる筈なのです。

わがままですけど、報われない恋なんてしたくないのです。

ドラマや、アニメや、映画だって、純情に想っていれば報われるじゃないですか。

本屋さんに並んでいる純愛小説を見てください。みんな最後は結ばれているですよ。

キスして、抱き合って、幸せになるのです。あこがれるのです。うらやましいのです。うらやましくて、親指をくわえてしまいです。

そんな杏里の最後の手段。

それが、夕凧先輩の後がまではなく、夕凧先輩の代わりになるとでした。

杏里はいくじなしなのでしょうか。弱い女なのでしょうか。でも、先輩に愛されたいのです！ 好きになって欲しいのです！ どうしようもなく、先輩のそばにいたくて、先輩の体温に温められたいのです。

杏里は先輩に触れただけで、その指先一つでダウンしてしまうほど嬉しくなります。

あべし！ とか、メメタア！ …… って感じなのです。

先輩はたった一さじで人を死に至らしめる青酸カリですね。超強力です。

先輩のそばにいて、夕凧先輩のようになる。それしかないと思っただです。先輩に好きになってもらうには。

……でも、でも…… 夏目さんや、ウメ先輩…… どうして杏里の場所をとろうとするのですか。

まるで、杏里がここにはいけないような、先輩のそばにいてはいけないようなことを言うのですか？

杏里は今は良いのです。夕凧先輩の代わりとして、先輩のそばにいてあげること。先輩の悲しみを取り除いてあげられる気がするし、杏里も幸せになれる気がする。良いことづくめなのです。一石二鳥です。……でもなぜか、少しでも胸が痛いのです。

……先輩。大好きな、佐々木仁先輩。

不器用で、真っ直ぐで、やせ我慢して、決して涙を見せないオタクな先輩。

誰より寂しがりやで、繊細な先輩。温かくて、優しくて、他人思いで。

知れば知るほど、うち解ければうち解けるほど、触れ合えば触れ合うほど…… まるでカイロのように温かく染み込んでくる先輩の純粹な内面。

好きです。とっても温かいです。晴れの日に干した毛布のようで

す。ばふりと抱きしめたくなくなります。顔を埋めて、頬ずりして、匂いを胸一杯にかぎたくなります。

だから、独占したいと想ってしまう。

杏里は欲張りで、どうしようもない子なのです。

先輩の心は夕風先輩盗まれて、取り返せなくて。杏里は、私が盗みました、なんて嘘をつくような感じで。もう、何が何だか分からないのです。自分で言っていて、意味不明なのです。意味なんて無いのかも知れないのです。この通り馬鹿な子ですよ、杏里は。ねえ、先輩。

杏里の、体も、心も、全部あげます。だから先輩、笑ってください。にこにこって。

そして、もし先輩が杏里のことを好きになってくれたら、もしもそんな日が来たとしたら、そのときは……そのときは……。

優しくしてくださいね、先輩。痛くしないでくださいね、先輩。

杏里の名前を呼んでくださいね、先輩。

恥ずかしいですけど……てへへです。

最後に、杏里は先輩に恋をして思ったのです。

恋はするものではなくて、落ちるもの。

そこから生まれた感情に付ける、この言葉に陳腐だなんて言わせないので。

絶対に、誰にもです。恋から生まれた杏里の気持ちは本物です。大事な大事な一生の宝物です。

……だから、杏里は言います。

杏里から、先輩へ。

届け。

心から心へ。

……愛してます、先輩。

第三十一話・「……仁君、起きて」

太陽光を吸い込む水面にも似たきらめきが、うつすらとまぶたの向こうに見えた。

夢と現実の境界があるとすれば、まさにこんな感じだろうと自分勝手に考えてみた。

確証はない。そもそも見たことも聞いたこともない場所に確証など存在するはずがないのだから。それでも、感じることでできる情報を整理すれば、体は軽く、何の抵抗も感じないということが分かる。ゆつくりと落ちていくような、それでなければ、浮かんでいるような。どちらともとれない不思議な感触だった。

母親の胎内、生まれる前から与えられてきた優しさ。愛に満たされた羊水の中。

俺は誰かに揺り動かされていた。

「……仁君、起きて」

聞いたことのある目覚まし時計の音。

きつと世界中の目覚ましを探しても、こんなに優しい声で起こしてくれる目覚ましは見つからないだろう。そんなことをまどろみの中で思っていた。

「仁君ってば」

俺は起きようとすればいつでも起きられるのに、あえて眠ったふりをしている。決してたたき起こすわけではなく優しく体を揺り動かしてくれるのは、俺を思っていることだろう。起こすというよりは、母の腕の中で聞く子守唄のようだ。

「あと五分……」

寝返りを打つ。声から逃げるようにして布団を手元にたぐり寄せ
る。

「もう、仁君。毎朝起こしに来る私の身にもなって」

飛び起きていた。

柔らかな幼馴染みの手を握りしめようと、瞳孔が閉じぬまま手を
のばす。眠ったふりをしている自分も、あと五分寝かせておいて欲
しいと懇願する睡魔も、乱暴にはじき飛ばした。

「……ここは？」

声のする方向、俺を揺すっていたはずの幼馴染みの手はそこには
ない。

空気 幻想 をつかんだかとかっかりしたのもつかの間、俺
の握りしめた拳の先には突き抜けるような青空と、純白の綿雲があ
った。太陽を隠した綿雲は、平原を自分の形に切り取り、黒く大き
な影を落す。

影は風に手を引かれて、徐々に場所を移していった。風に揺られて
動く雲、横たわる俺。当然、影に覆われていた俺は、太陽の下にさ
らされることになる。あまりのまぶしさに、睡魔は一目散に逃げて
いく。

手元にたぐり寄せた布団を小脇に払いのけ、俺は立ち上がった。

「ここはどこだ……？」

右を見る。地平線が遠く果てない先にうつすらと見えた。
左を見る。地平線が遠く果てない先にうつすらと見えた。

見渡す限りの大平原。そよ風が草花を揺らせば、背の低い葉が膝をくすぐる。

うねることのない平坦な大地。目を細めて遠方を眺めても、山も丘陵もない。地平線だけが俺を取り囲んでいる。まるで巨大な輪が俺を閉じこめようとしているかのようにだった。

足下。名も知らない白い花の周りには、二匹のモンシロチョウが戯れていた。つがいなのだろうか。楽しそうに花々のウィンドウシヨッピングを楽しんでいる。

音もなく、ふわり、ふわり。

見上げれば、頭上を旋回するトンビの高らかな声。気持ちの良い声が、草原に響き渡っていく。次いで頬を撫でるのは、ゆるやかな風。それは俺の心を癒す、心地のよい手のひら。

肺を解放して空気を呼び込めば、手のひらが連れてきた清浄な空気の匂いだけでなく、足下に咲く小さな花々や、遠くに見える湖畔のみずみずしい香りなども味わうことができた。

緩やかな風が運んできたのは、なにも草花の匂いだけではない。

背後を駆けていく馬群。大地を蹴るひづめの音。地震かと勘違いするほどに力強く下腹部に響いてくる。距離が近いので、たなびく黒いたてがみがよく分かる。

なんだろう。すごく心地が良い。

太陽の光が雲間から伸び、草原を切り取り始める。あまりの荘厳な景色が胸を突く。

緑色の大地に、青い空。

二色にはつきりと大別された、心和む目に優しい自然の情景。そこに絶えず横たわる静寂。

俺は目を閉じる。

太陽がこんなに煌々と輝いているのに、なんて静けさなのだろう。こんな太陽の下で見慣れている俺の景色といえば、渋滞する車のクラクションや、参勤交代のような人々の通勤、通学風景。電車に敷き詰められた人々のあまりにも気だるそうな顔や、高層ビルの谷

間を揺らす陽炎ぐらいだ。忙しそうに汗を流し、靴底をすり減らす都会の喧噪。機械の稼働音を耳にしない日はない。当たり前にかが高速駆動し、当たり前前に何かが高らかに鳴り、当たり前前に時間を縛られる。

そんな日々の雑音に囲まれる日々。

どうして多忙な社会人が余暇に静かなところに行こうとするのか、少しだけ分かった気がした。

それは何も聞きたくないから。自分を縛る忙しそうな音を聞きたくないから、静かなところに行こうとするのではないだろうか。

それに比べ、この見渡す限りの大平原。

モンゴルで見ることのできる広大な地平線もかすむような、この大平原。

ここは本当に落ち着く。

不思議なぐらい心が安らぐのが分かる。

できるならば、ずっとここにいたい。心底、そう思う。

天国なんていう場所があるのならば、きっとここに違いない。

人類が至る安住の地。ずっとずっと平和に過ごせる安寧の大地だ。

……目を開ける。

風が見えた。本来見えるはずのない風を見ることが出来る。

一様に整列している草原の草木が風に揺れるとき、草原の形が風の曲線に歪む。初めて見る風景だった。俺は上京した学生よろしく、物珍しそうに風の行く先を見つめ続ける。

ふと、その先に純白が揺れるのを見た。

真っ白なワンピースに、大きな麦わら帽子。背中まで切り取られているワンピースからは、美しい肩甲骨がのぞく。まるで誰かを待っているかのように草原の真ん中に立ち、上空を見上げている。ワンピースから露出した白い肌は、太陽に焦げてしまわないかといった心配になってしまう。

「あの背中……！」

すらりと伸びた背中、俺はその少女が誰であるか分かった。引き寄せられるように、草原を歩いていく。そよ風を身にまといながら歩き続ける。

少女は逃げることも、隠れることもしないで待ってくれた。足音に気が付いたのか、少女は俺が声を掛ける前に振り向く。ワンピースのスカートが従うようにふわりと揺れた。輝く純白は、まるでウエディングドレス。麦わら帽子のつばをちょこんとあげて、つばの影に隠れた顔貌を俺に見せてくれる。微笑み。それは白百合が花開くよう。

「また会えたね、仁君」

正直、なんて声をかけて良いのか迷っていたから。

「俺……会いたかった、ずっと……」

「私も。また仁君と会えるなんて嘘みたいだよ」

その少女　佳乃の声が本当に嬉しかったから。俺は感情を止めることができなくなってしまった。細く柔らかい佳乃の体を否応なしに抱きしめ、透き通るような髪の毛の匂いをかく。

佳乃は嫌がる素振りも見せずに、俺の背中に腕を回してくれた。それがたまらなく嬉しい。

自分が抱きしめた分、同じだけ抱きしめてくれる。伝えた気持ちが返ってくることの至福。

声のやりとりだけではない、肌と肌のやりとり。

互いの鼓動が行ったり来たりする生のやりとり。
幸福が紡ぎ出す草原での風景だった。

「仁君、私……行かなきゃ」

抱きしめた腕の中から声がした。

「……行く？」

「うん、ここにては駄目だから」

別れを示唆する言葉。

抱擁を解くと、佳乃は俺から一步後退する。

「どうして？　ここはこんなにも静かで、のどかで……なにより平和だし、何も縛るものがない。気持ちが安らぐし、ずっとここにいたいと思えるんだ」

俺は佳乃の手をつかむ。別れを惜しむのではなく、決して別れないように。二度と離れないように。俺はしっかりと佳乃の手を握りしめる。

「それでも、行かなくちゃ」

佳乃が浮かべる微笑みの意味が分からない。

我が子のすることを優しく見守る母親のような眼差し。失敗しても成功しても、最後には優しく頭を撫でくれるような母性愛を宿したような瞳。母親にとって我が子とは存在そのものが愛しいと聞いたことがある。だとすれば、そんな眼差しを向けてくれる佳乃も俺の存在を愛していてくれるのだろうか。

そんなことを考えれば考えるほど自分という存在が情けなく思える。

それは単なる甘えたがりで、寂しがり屋で、情けない俺の都合の良い解釈に過ぎないから。

「もちろん、仁君も一緒だよ。仁君をここに残したままで行けるはずないよ。私は仁君を迎えに来たの。だって仁君、私が起こしてあげなかったらずっと寝てるもん。朝起こしてあげるのは、幼なじみの役目なんだから」

「そ、そうか……はは……」

俺も、一緒。その言葉に俺がどれだけ救われたことか。

「そうか、って……仁君は覚えていないの？ 仁君が教えてくれたんだからね。幼馴染み必須五箇条」

人差し指を立てて得意げに胸を張る。白いワンピースを押し上げるふくよかな胸が、今更ながらにまぶしい。

「一、幼なじみは朝起こしに行かなければならない」

毎朝毎朝、早起きして俺の家に迎えに来てくれた。男の朝の生理現象に顔を赤らめながらも、布団を揺すり、寝覚めには優しすぎる声で起こしてくれた。

嫌々ながらの義務を課せられているというよりは、日常の一部分と化していた意味合いが強かった。俺がそう思えるのは、佳乃の毎朝の笑顔で起きることができた幸福によるものだ。

「二、幼なじみは家事ができなければいけない」

のどかな風景の中で、佳乃の声が体に染みていく。

大地に埋もれた種を発芽させ、双葉がぴょこんという擬音を伴って地面から飛び出すような、滋養強壮と肉体疲労時の栄養補給をかねる声。聞くものを元気にさせるヒーリング効果を持った声だ。単なる幼馴染みゆえのひいき目かも知れない。

「三、幼なじみは家が主人公の隣家でなければいけない」

目をつぶり、声高らかに。それは佳乃式暗記述であり、競技大会の宣誓式のようなのだ。

「四、幼なじみは世話焼きでなければいけない」

予定調和ではない。こんな景色を予定調和は見せてはくれなかった。

見たことのある絶望、繰り返される悲劇。死者に鞭打つようにそれは悲しみばかりを再上映する。視聴率などゼロに近いのに。視聴者は俺しかないのに、見せつける。

けれど、この風景は違う。絶望の影などどこにもない。空は群青、雲は白、大地は緑。黒などどこにも見あたらない。この世界は、いつか脳裏によぎった爽やかな風景を体現している。佳乃と二人、まるでアダムとイヴのように。禁断の木の実を食することもなく、平穩に過ごしていける空間。そう馬鹿正直に思ってしまった。

「五、幼なじみは近くに居すぎて恋心に気が付かないでいなければならない。または、口に出せないほのかな恋心を抱いていなければならない」

ここにいたい。佳乃と、二人で。

「以上、幼馴染み必須五箇条でした」

しかし、佳乃は行かなくちゃ、と言う。こんなに綺麗な世界なのに。

「仁君、私ね、幼馴染み必須五箇条のその五だけは守れなかったんだよ」

いつの間にかうつむいていた俺は、難しい顔をしていたようだった。

あわてて佳乃の笑顔を見ると、強ばった体の力が抜けていく。同様に、眉間に寄ったしわが左右に広がっていくのを感じ、俺は自分が思考に落ちていたのだと知る。

「ほのかな恋心なんてなかったもん」

頬を淡い桃色に染める。

「ほのかな恋心なんて、とっくに通り過ぎちゃっていたよ。あとは溢れるのを押さえるのに必死だったの」

佳乃が自らの胸の中心を手のひらで押さえた。まるで、そこに心があるかのように。

「今さら、なんだけどね」

小さな握り拳で、自らの頭を小突いてみせる。ちろりと出した赤い舌は、自らの滑稽さを歌う。その佳乃の足下をアゲハチョウがくるくと飛んでいた。佳乃を慰めるように見えたのは、蝶と佳乃が

あまりにも似合いすぎるからだろうか。

「佳乃……」

手を繋いだままの俺と佳乃。繋いでいるというよりは、俺が佳乃を一方的につかんでいる。

手を捕まれている佳乃が、ころころと表情を変える様子。ひどく懐かしく、心地よい。

昔、こんな風景があつた。そんな一言で思い出される過去の情景は、いくらでもある。記憶の倉庫に入りきれないほど。あまりにも敷き詰めておいてあるから、取り出せなくて困るくらい。

本当に大事に、大事にとってある。なかなか取り出せなくても、きちんとしてしまつてある。

「……行こう、仁君」

俺が右手でつかんだ佳乃の左手。

佳乃が右手でつかんだ俺の左手。

二人で一つの輪を作るように、腕と腕を通して気持ちが始回転する。温かい気持ちが始る。温もりが始る。二人で作った円の中にアゲハチョウが舞い込んで、ひっそりと円の中心で咲く一輪の花にとまる。羽を休め、蜜を吸う。黒と黄色の美しい装飾が目にも美しい。

二人で育ててきた心が、そこにあるような気がした。

「連れて行ってあげるね」

手と手を取り合つて、長い年月をかけて、大切に育ててきた気持ち。

それは本当に小さい花。地球から見れば、本当にごくごく微細な芥子粒のようなもの。塵のようなもの。けれど、例えば小さくても、

育てるといふ行為に大きいも小さいもない。

そして、育て、花開く瞬間に訪れる歓喜には際限がない。
どんなに小さい開花でも、喜びは無限大なのだ。

俺と佳乃は恋に落ちた。

たったそれだけ。それだけのこと。むしろ、それだけでいい。
それ以外には何も必要がないんだ。ただ、一つだけ、一つだけ欲
を言えば。

……その恋に、もう少しだけ時間が欲しかった。

「うっん、一緒に行こう」

アゲハチョウが佳乃から離れて、ふらふらと飛んでいく。元気に
飛び回るといふよりは、どこか急いで逃げるといふ気配。
空がにわかに曇りだし、地平線の彼方が薄くかげり出す。風が強
くなり、草花が激しく揺れ動く。

「こっち！」

俺の手を引いて走り出した佳乃は、背後を振り返らない。俺は何
が起こったのから把握できずに、佳乃に手を引かれながら幾度とな
く背後を振り返った。

「黒い、波……？ いや、違う」

背後に広がるのどかな景色、極楽浄土に見えた平和な世界が、一
転して犯されていた。

黒い触手。あるいは、黒い溶解液。天井に広がっていた青空や、
大きな綿雲が、漆黒の絵の具を垂らされたようにまだら模様汚れ

ていく。

驚きは、浦賀に黒船が来港したときの比ではない。比べるべくもない。

エドヴァルド・ムンクの名画『叫び』にも似た背景の混濁が現れる。ムンクが見た幻想、自然を貫く果てしない叫びが、今まさにこの世界で現出しているように感じられた。

しかし、それも色が存在してこそ。

どんな名画も無情な黒の一滴が落ちれば、ただの駄作に変わる。それと同じく、蒼穹に膨大な黒が染みていく。ムンクが描いたような芸術性の欠片もない。

真っ黒なのだ。

なぶり、食らい、襲い来る。

黒の先は奈落なのか、壁なのか。

黒の先は消失なのか、影なのか、暗闇なのか。

黒の先は落ちるのか、死ぬのか、塗りつぶされるのか。

それすらも分らない黒の波。草花を枯れさせ、すぐさま黒で塗りつぶす。

花は落ち、茎は折れ、芽は大地に横たわる。草原を駆ける馬を引きずり倒し、肉食獣のように黒い触手でとらえ、捕食し尽くす。血も涙もない。モンシロチョウの羽はコールドールのような黒が染み込んでゆき、すぐに墜落した。そのときすでに地面には黒があり、蝶は静かに呑み込まれていく。

押し寄せる黒々とした津波に、世界は犯されていった。

「仁、早く立ちなさいよ！」

足がもつれて転んでしまった俺を、佳乃が強い口調で叱咤した。いつの間に入れ替わったのだろう、気の強い佳乃が主導権を握っていた。判断を下したのがどちらの佳乃であるにせよ、この状況下ではそれが正解なのかも知れなかった。

俺は佳乃と手を繋いだまま起き上がる。
すでに世界の半分が黒で覆われていた。

「駄目だ、追いつかれる！」

絵の具を垂らすなどという生やさしい表現は、もはや背後の景色には合致しない。黒い核爆弾が破裂したかのよう。すさまじいスピードで地平線の彼方からやってくる黒の爆風。

「佳乃！」

俺は佳乃の手を必死に握りしめた。

「仁！」

背後を見るのが怖かった。

世界が黒に浸食されていく様を見るのは、胸が張り裂けそうだった。

再び巡り会うことができたのに。一緒に行こうと笑いかけてくれたのに。

幾億という魔手が、手を取って逃げる二人背後に伸びる。

音はない。だからこそ、余計に恐ろしい。

忍び寄るとは言い難いスピードなのに、無音。

ドロドロとして、重くて、冷たい。

デジャビュを感じた俺は、すでに黒に呑み込まれていた。

佳乃と繋いだ手だけが、ほのかに温かい。

それだけが唯一の救いだった。

……違う、これはデジャビュじゃない。

無いと思っていたはずのものが、再び猛威を振るっているに過ぎない。

平和だと思っていた世界が、侵攻を受けている。逃げられない。

何度も何度も、俺はこの黒い液体に心身を犯され続けた。

呆れるほど苦しんで、呆れるほど身もだえて。

それでもなお、俺を苦しめ続けるもの。

暗闇。漆黒。暗黒。夜陰。暗澹。

いくつもの嫌悪を総称して。

俺はこう呼んでいる。

……絶望、と。

第三十二話・「目指していた場所」

絶望が渦を巻いて襲ってくる。暗黒の竜巻が地上にタツチダウンし、幸せを形作っていたはずの世界を暗闇の中に巻き込んでいく。

場面の転換。草原の次は、俺達の学校。

気が付けば教室の机にうつぶせになって眠っていて、佳乃はそんな俺を揺り動かしていた。教室には当たり前のように机が整然と並んでいて、黒板には消しきれなかったチョークの跡が残っている。黒板の隅っこを見ると、日直はクラスのぼけぼけ担当こと美緒とその相方である桐岡の両名の名があった。黒板消しを両手に持って拍手をするという掃除方法は、かなりの自爆を招くが、二人にはきつちりとこなして欲しい。

「仁っ！ ばけっとしてるんじゃないわよ！」

佳乃の声で我に返る。俺は慌てていすを倒して立ち上がると、嫌な予感がして窓の外を見た。

……悪い予感は当たるもの。

校庭には黒い波が押し寄せてきていた。まるで墨汁の津波。三階建ての校舎を呑み込まんばかりだ。伝説のサーファーも驚くほどの高さで、校舎に牙を向く。

俺はすぐさま佳乃とともに廊下に飛び出し、津波に背中を向けて校舎を駆けていく。一棟と二棟を繋ぐ渡り廊下。正方形の校舎の形で良かったと思う。でなければ校舎を昇るか降りるかの二択しかなく、これこそ本当に絶望的な状況だった。

「ここで捕まるわけにはいかないのよ！ あんたと一緒に行くんだからっ！」

渡り廊下を全速力で駆ける頃、校舎の窓から侵入した津波が窓を

次々に破碎していく。砕け散った破片のきらめきさえも黒で覆い尽くして、校舎を駆けめぐっていく絶望の波。渡り廊下の先に黒い影がよぎる。

黒の濁流は、壁と壁にぶつかってきりもみしながら、俺達に接近してくる。トイレのハンドソープを飲み込み、便器をもぎ取り、蛇口をパイプごと引きちぎり、タイルを引きはがし、デッキブラシをへし折りながら。

背中をちりちりと焼くような焦燥感を覚えて、俺は足をさらに酷にする。いつまでも背中ばかり見ていられない。この先は突き当たりなのだ。

右に行けば屋上へ通じる登り階段。

左に行けば体育館に降りる下り階段。

右に行けば屋上より先はない。常識の通用しない黒の溶岩だ。高さを稼いだところで逃げ場はないかもしれない。しかし、あるいは……。

捨てきれない可能性。現れる逡巡。

左に行けば体育館、間に合えば体育館を盾にして逃げられるが……。

逃げられなければ、呑み込まれてそれで終わり。

高さをとるか、逃げ道をとるか。

生まれた選択肢は二つ。

右か、左か、それとも右。

左か、右か、それとも左。

右か左、いや右。

左か右、いや左。

左か右か左。

右か左か右。

右なのか。

左なのか。

左か。

右か。

「左だ！」

急ブレーキをかけて左に方向転換。強烈なオーバーステアを出しながら俺は左を進む。曲がる際にちらりと見えた絶望の波。波と一体化した学校の公共物にさらなる仲間が加わっていた。トイレの扉が三枚ほど呑み込まれている。黒く塗られた扉。そのスピードは呑み込んだ物体全てを凶器と化す。

「馬鹿！ 仁！ 右よっ！」

背中越し。佳乃のせっぱ詰まった声。

「くそっ！」

即、急速反転。右に逃げた佳乃。左に逃げた俺。

合流させまいと、俺と佳乃の間に割って入ろうとする絶望の土石流。

俺は勇気を振り絞る暇もなく、佳乃へ手を延ばす。佳乃も俺を引き寄せようと手を延ばす。迫る三枚の扉。津波の加速を得、ドアは俺を切り刻む断頭台の刃に変貌する。

一枚目。くるくると回転しながら、俺の頭部をかすめた。髪の毛が何本か持つて行かれる。

二枚目、三枚目は、のけぞった俺の死角から襲ってきた。間に合わない。俺は救世主じゃない。心を解き放って、弾丸を止めたりなどできない。上半身と下半身が離ればなれになる悪夢。上半身からは胃袋の中身がこぼれだし、下半身の大腸からは汚物が上に向かって吹き出すだろう。

俺は視界を自らの暗闇に落とすしかない。まぶたを閉じ、恐怖か

ら逃げた。体がまっぴたつに避ける過程など見たくない。

「目を開けなさい！」

脳を揺さぶる声。見れば、佳乃が自らの危険を顧みないで手を伸ばし続けている。

「最後まで目を開けていないと、助かるものも助からないわよ！奇跡だつて起きない！」

佳乃の手を取る。

「あきらめたら、そこでゲームオーバーよっ！」

佳乃は俺を強引に引っ張り、床に転がす。俺は綺麗に受け身をとって立ち上がると、佳乃のにやりとした笑いに応えて、再度走り出す。俺達二人を引き離そうとした黒い津波は、それであきらめたりするような軟弱な物体ではない。

壁に跳ね返り、今度は、教室の備品までも呑み込んで俺達の足跡を踏みつぶしていく。

机やいすがゴロゴロと音を立てて回転しながら向かってくる。表現は安直だが闇鍋そのものだ。

何が入っているか分からない。何が入っていてもおかしくない。痛み、悲しみ、叫び、そして死。ネガティブなイメージの固まり。カオス。

俺達はリノリウムの廊下を蹴りあげ、一直線に階段へ。階段はもちろん一段とばしで駆け上る。黒い波も階段を駆け上る。予想していたとおり高さなど関係ない。生き物のように側面にはいずりながら迫ってくる様は、溶岩というよりも物の怪の類だ。

廊下、壁、窓、天井。それが黒に覆われている。まるで黒い食道

にいるみたいだ。俺達は食道に入り込んでしまった食物。消化される運命。目玉をよだれのように落とし、腕の関節がもろくも外れ、骨が丸見えになる。内臓は尻の穴からどばどばとはき出される。

それが絶望のしようとしている消化に違いない。

……背筋を駆け上がる悪寒。

目の前の扉を抜ければそこは屋上だ。それが最後の望み。

叩き破るしかない。俺と佳乃のショルダータックルは、希望への前進だ。

インパクト。

「開かない！」

俺の叫びに佳乃が舌打ちで応じた。

佳乃はなおも体当たりし続ける。硬質な音が佳乃の肩を痛めつけた。背後を振り返れば、天井を這い回る黒の波。どくどくと脈打ちながら階段を上ってくる。階下はすでに黒の海。

俺は恐怖に頬を引きつらせながら、佳乃と同じく扉に体当たりする。

「開けよっ！」

肩をぶつける俺。

「開きなさいよ！」

扉を蹴り上げる佳乃。

黒が階段を駆け上る。壁をなめ回す。

俺達までの距離は残り十三階段。

それは皮肉にも死へのカウントダウンとなる。

一段、二段、三段。

足下から切り刻まれるような戦慄の数え歌。粘着質の漆黒。迫る奔流は、死神の鎌が首筋にあてがわれるような嫌悪。俺達の前方をふさぐ扉は堅牢。蹴り上げ、殴りつけても、せいぜいへこむぐらいだ。

残り階段数は十。

秒数に換算したら十秒とないだろう。

「仁、合わせなさい！」

扉の前で佳乃と視線を交錯させる。

「分かった！」

背後に接近した死神。俺の背中を袈裟斬りにしようと、鎌を大きく振り上げる。

「チャンスは一回よ！」

「ああ！」

背後が暗闇に覆われた。おぞましい黒の群れ。分かる。追いつかれた。もう猶予はない。

「三秒カウント！ 三、二、一」

瞬間、俺の思考に迷いが生じた。

「佳乃！ ま、待ってくれっ！ それって三、二、一、零になったら飛び出せばいいんだよねっ！？」

「馬鹿仁！ それじゃ四秒じゃない！」

影が大口を開ける。頭上に迫ったそれは、まさしく絶望のあざと。

「もういいわ！ 一、零！」

再開されるカウント。俺の頭はパニックだ。

俺と佳乃が飛び出す。

一斉かどうかは分からない。タイミングは分からない。同時か、時間差か。生と死を分かつ境界。時間差だったらアウト。試合終了。タイミングを確認するか。いや、無理だ。そんな余裕は皆無。ただ賭けるしかない。俺達の絆に。

俺と佳乃の意志が固いか、それとも扉の材質が固いか。

勝負の時。

死神の鎌が俺の首筋をかすめていく。佳乃の髪の毛をつかもうとした絶望の手が空気をつかむ。肩が壊れたっていい。どんな痛みが襲ったっていい。

開け！ 開いてくれ！

インパクト。

扉が限界までたわんだ。あれだけ頑丈だと思えた扉の蝶番。緩んだねじが、蝶番ごと背後で口

を開ける黒に呑み込まれる。俺達ではない。間違っても俺達ではない。

扉が前倒しになり、俺達は屋上にまろび出た。何回転かの前転を経て、前のめりの屋上の地面をなめる。

……結局、佳乃は四秒を選択してくれた。

最後の最後まで……本当にツンデレだ。

「違う！　ここじゃないわっ！　まだ上に行かないと！」

俺のため息を無視して、佳乃が星一つない闇の空を見る。

俺は瞳を巡らせる。屋上のベンチ。俺と佳乃の思い出の場所。昼休み、騒がしい仲間達とともに昼食をとった場所。佳乃の卵焼きの味を知った場所。大切な場所。それらは無情にも俺達を執拗に追跡する黒に汚されてしまった。チョコレートのように溶けていくベンチ。なくなってしまう。消えてしまう。

……無力だ。逃げるしかない俺はあまりにも無力だ。

四つんばいになりながらも、俺達は何とか屋上の最奥までたどり着く。背中に転落防止金網のぎしという感触。ついに袋小路だ。歯ぎしりする佳乃。

「あんたと一緒に行くって決めたんだから。あんたを連れて行くって決めたんだから」

佳乃が屋上にあふれ出した暗闇から俺をかばおうと前に出る。

「必ずあるはず。上に行く道が」

首を巡らせて屋上のあらゆる箇所を目を凝らす。

「……っ！　あつた！」

見つめたのは屋上の隅。壊れかけた金網。

「行くわよ、仁！」

「行ってくて、どこに！」

金網の先は真っ暗闇。

「上よ、上!」

壊れた金網の先。広がる黒の海……その先があるとはとても思えない。光も届かないこの闇に上も下もあるものか。

「上つてどこだよ!」

「……………あんたの本来いる場所。あんたはそこに行くの」

言葉の意味を詮索する間隙も与えてはくれなかった。

「飛ぶわよ」

「……………何をっ!?!」

強引に俺の腕をとって、暗闇に飛び込んでいく。佳乃がしっかりと俺の腕をとっていてくれる感触だけが、はつきりと俺の腕に残っていた。そしてそれが、俺の力の糧になってくれる。佳乃と一緒にいら、どこへでも行ける。どんなこんなにも立ち向かっていける。そう思わせるに足る体温が、佳乃から深々と伝わってくる。佳乃は、俺を一体どこへ連れて行くこうとしているのだろうか……?

俺は理解できずにひたすら逃げ続けた。

訳も分からずひたすら上へと逃げ続けた。

思い出が、まるで車窓から見える景色のように目の前を通り過ぎていく。

学校から始まり、行きつけのゲームセンター、よくゲームを予約した電気店、雨の日の公園や、いつもと変わらない住み慣れた俺の

家、家族が減っても表札に書かれた名前が消えることのない佳乃の家、割れた写真立ての破片が散らばる夏目の家に、通路にタイヤが敷き詰められたウメの家。

まるで走馬燈のようだ。記憶の中を必死に逃げ回っている、そんな感じがした。

……絶望はどこにでも現れる。

手始めに学校を簡単に呑み込み、ゲームセンターのクレインゲームから飛び出し、電気店の大画面液晶テレビから流れ出る。俺の思い出という思い出を黒で染めながら、俺達を執拗に追い回した。俺と佳乃は必死に手と手を取り合い、あるいは励まし合いながら、階段を駆け上がり、はしごを登り、坂を上る。

走りすぎて息を切らしたかと思えば、しばらくして肺にトゲが刺さったように痛みだし、最後には酸欠で頭痛を誘発する。

もう駄目かと何度もあきらめかけた。

けれどその度に俺の前に行く白いワンピース姿の女の子に励まされた。励まされたと言うよりは、尻を叩かれたと言った方がいいだろうか。優しくすることだけではなく、時に厳しく、俺を上へと導こうとする。上に何があるのか。それすら分からないままに、俺は彼女の言葉に従うしかなかった。

でも、どこかで俺はそれを望んでいたのかもしれない。

もしかしたら、一生こうして佳乃と走り続けることになるのではないか。

それは、逆に好都合ではないのか。

心のどこかでそれを望む声がある。そこがどんなに深い闇の中でも、身動きのとれない泥沼であっても、身を切るような茨の道でも佳乃と一緒になら。佳乃がいれば、俺は耐えられるような気がしていた。

だから俺は……上に向かった先にあるものなんて、頭から消えそうになっていた。

「……行き止まり？」

膝に手をついて肩で息をする。頭がくらくらした。もしも眼球に照明などという機能がついていたら、きっと死にかけの蛍光灯のようになっていただろう。それぐらい視界が明滅を繰り返していた。貧血で倒れる瞬間というのはこんな感覚なのだろうか。

「……仁、違うわ。ここは行き止まりなんかじゃない。ここが私の目指していた場所……私達が目指していた場所」

自分の言葉選びに満足がなかったのか、佳乃は複数形に言い換えた。あえて複数形にする意味を俺は理解できない。

「かつこよく言えば、そうね……ここは終わりの始まりであり、始まりの始まりなの……って、これだと余計にこんがらがるわね。要するに、ここが終着駅で始発駅なの」

やはり、自己分析した通りだった。

俺の中に落胆が広がっていくのが分かる。苦しく上下する肺の奥から、今まで感じられなかった怠惰がひよっこりと顔を出し、吐き出す息とともに広がっていく。

上に行かなければならない。佳乃はそう言った。

目的、目標があるということは、進むべき道、先があるということであり、裏を返せば終わりもあるということだ。

行くあてもないということは、終わりがないことと同じ。
行くあてがあるということは、終わりがあることと同じ。

俺が声に出さないまでも、心の日陰で望んでいたのは、行くあてなく佳乃と一緒にさ迷い続けることだったに違いない。

だってそうだろう。そうすればずっとずっと佳乃と一緒にいられるのだから。

絶望が追いかけてさえ来なければ、俺はずっとここにいられたんだから。

第三十三話・「愛」

「さてと……何か言いたいことはある？ 仁」

俺は周囲を見回していた。

終着駅とは言っても、とてもそんな風には思えない。

丸い球体の中に俺達はいる。暗くて周囲の状況はよく見て取れないが、確かにここはガラス玉のようなものの中だ。赤っぽい粘膜のような壁から俺達を守るようにして、透明な幕が三百六十度を覆っている。球状の水晶のように思えたが、触れてみるとぐにやりと歪む。水晶ほど硬質ではない。例えるなら材質は薄いプラスチックのようで、少し頼りない強度。匂いをかいでみるが、これといって刺激臭がするわけではなかった。どこか乾燥していて、日照りが続いたあとの砂場のような匂いがした。

ずっとここにいたら、のどが渴いて、最終的には干からびてしまいそんな気がする。

それぐらい水分に富まない場所だった。けれど、水分があつた跡のようなものはある。オアシスの水が枯渴し、水分があつた証拠として空洞が残るように。川が流れていたという、うねりの痕跡が残るように。

ここには確かに水分があつたようだった。

「……聞きたいことがないなら、もう一方の佳乃が勝手に話すから。仁も勝手に聞いていて。私はパス……こういうの苦手だから」

球体の向う側。赤い粘膜のような場所に大きな切れ目が入っているのが見えた。

それは切れ目というよりは何かをかぶせたような感じで、今は閉じられている、という言葉がしっくりくるような継ぎ目だった。閉

じられていたものが開いたとき、そこに何があるのか。
もちろん想像などできない。想像したとしてもそれが正解でないこ
とだけは確かだった。

「……この場所にいてね、仁君がどれぐらい私を想っていてくれた
か分かったの。あの絶望は、仁君が作り出したんだよね」

白いワンピースは汚れ一つない。黒い絶望の染みも見あたらない。
まるで佳乃自身の心を体現しているかのように美しく輝いている。

「大きくて、果てしなく広くて、本当に深い……私ね、自分で考え
ていたよりも大きくて本当にびっくりしちゃったよ」

佳乃の瞳は澄んでいて、海の底を彩る珊瑚礁ですら見えてしまい
そうだった。

「でも、嬉しかったんだ。こんなにたくさん、仁君が私を想ってい
てくれたんだなって、感じる事ができたから」

俺の心の中でうごめく絶望は、俺が佳乃を思う量に比例している。
俺が佳乃を好きになればなるほど黒の深さは増していった。マリア
ナ海溝より深く、同海溝の一センチ平方メートルあたり千キログラ
ム以上という途方もない水圧よりも強い想い。そのあまりの想いの
水圧に心が潰されてしまいそうになるくらい。

黒に落ち、予定調和に終わる。俺の絶望を巡る旅。

「佳乃、ここは一体どこなんだ？　ここで終わりって……ここには
何もないじゃないか」

俺は周囲をぐるりと見回して、両手を広げる。

「どこに逃げても、どれだけ走っても、絶望はついてくる。私達の思い出に入り込んでくるんだよ。たくさんたくさん積み重ねた私達の思い出。誰にも負けない、強くて、優しく、温かくて、胸の中がふんわりして……自分だけではなくて、誰かにも伝えなくなるような幸せな気持ち」

「佳乃、ここは……」

俺の言葉では佳乃を遮ることはできなかった。

「そういった幸せな気持ちってね、絶望と表裏一体でできてるの。ほら、仁君、幸せっていう字から棒を一本とると辛っていう字になるでしょ。感覚的にいうとそんな感じなのかな。幸せと不幸せが表と裏であるように、愛と絶望も背中あわせなんだよ」

「……佳乃？」

佳乃が俺の心の中をのぞき込んでくるような肌触り。一本の糸でつながった俺と佳乃の視線は、まるで俺の心をたぐり寄せるかのようだ。

強く佳乃に引かれ、全てを持って行かれそうになる。

弱さも強さも。喜びも悲しみも。俺を構成する全ての要素を認め、許すように。

「絶望は愛でできている。何かを失う悲しみ、喪失感。愛はなくなるんじゃないくて、変わるの。絶望に変化しちゃうの。最初はね、愛はきつと真っ白だと思っただ。洗いたてのシーツのように真っ白。うっん、おろしたてのシーツのように純白。その真っ白な愛をね、その人を思う気持ち、自分自身の気持ち……感情の絵の具を使って、

二人で愛を染めていくの。二色の絵の具でね、一緒に染めていくの。赤く燃え上がったり、悲しくてブルーになったり、楽しそうな黄色になったり、落ち着いた緑になったり。そんな風に二人で一つの愛を……愛の色をどんどん変えていくの」

「おい、佳乃」

佳乃が何を話そうとしているのか分からない。

俺の言葉に応えず、なおも続ける。

「たくさん、たくさん仁君と染めてきたような気がする。手のひらに収まらないくらい。もう、どんなにキャンバスを広げても染めきれないくらい一杯染めてきた。大気圏を飛び出して、月まで届いちゃうくらい。たくさん……染めてきたんだよ。気が付くのは遅かったけど、仁君と一緒に見てきた私の風景は」

あえてだろうか。

佳乃は少しだけ言葉をためた。

「本当に輝いていたんだよ」

呼吸をする。吸い込んだ息とともに言葉をはき出す。

「地球ってこんなに綺麗だったかなって、馬鹿みたいに思っちゃうくらい」

につこりと笑う。真っ白なワンピースを揺らして、俺の周りを歩き出す。

一步、二歩、三歩……佳乃が地面というキャンバスに描いたのは、思い出の風景画なのだろうか。

懐かしそうに目を細め、頬を恥ずかしそうに淡く彩らせ、口元にゆるやかなカーブを作る。

「春の新芽が芽吹いて、桜が咲いて。仁君と桜吹雪の下を歩いて。髪の毛にくつついてくる桜の花びらを仁君がふとした瞬間に取ってくれるの。仁君の肩には私以上に桜がのっているのね。……桃色に輝いていてまぶしかった。仁君の背中を見て、桜を見て。幸せな気持ちになるの」

時を思い出せる。

佳乃の頬は桜の花びらのように淡いピンクに染まっていて、見ている俺も恥ずかしかった。

照れ隠しを何度したことが分らない。

ふと、どうしようもなく佳乃に触れなくなってしまうって、俺はどうしたら佳乃に触られるか、下心を介さない範囲で必死に考えた。その結果が、佳乃にくつついた花びらを取ってあげること。

……佳乃の微笑みが、桜の花びらや、枝の隙間を突き抜ける木漏れ日のように輝いていてまぶしかった。

佳乃の笑顔を見て、桜を見て。幸せな気持ちになった。

「夏の海、空を切り裂く飛行機雲の真下、二人でアイスを食べたよね。私がソーダバーで、仁君がソフトクリーム。私は食べるのが遅くて、手をべとべとにしちゃって。私が甘くなつた指を舐めると、仁君が笑いながら言ったよね。舐め方が嫌らしいって。ゲームのやり過ぎなんだから、仁君は。私が言つと、仁君はむきになって否定して。……そんな仁君の首筋を流れていく汗がまぶしかった。仁君の背中を見て、青空を見て。幸せな気持ちになるの」

佳乃の言っている時間、場所、出来事が俺の記憶であるかのよう
に理解できる。

俺が海に行くのをかたくなに拒否し続けたのに、佳乃はどうしてもってわがままを突き通して。気が付いたら俺は水着をもった佳乃と同じ電車に乗っていた。佳乃の水着は健全な男子には少しきわどくて。どうせもう一人の佳乃の入れ知恵なのだろう、とため息をつきつつも、心の中ではかなり佳乃の水着に期待した。けれど、海に到着してそれも一変、佳乃のビキニを自分の目の保養にするならともかく、他の男の目の保養にされるのは何か汚されているようで嫌だった。子供じみた独占欲だけど、俺は嫌だったんだ。二人でアイスを食べながら、俺はそんな悶々とした気分にとらわれていた。

某ロールプレイングゲームで有名な、呪われたときに流れる音楽。そのときの俺からは聞こえたかも知れない。でも、ふと佳乃の笑顔を見れば、自分のことなんてどうでも良くなっただ。俺が楽しいかではなく、佳乃が楽しいか。それが重要なのではないか。

佳乃がアイスに舌を這わせる様を横目に見ながら考えたりした。

……そんな佳乃の胸元に入り込んでいく汗がまぶしかった。

佳乃の笑顔を見て、青空を見て。幸せな気持ちになった。

「秋の紅葉、空に舞う赤とんぼ。黄金色の絨毯に敷き詰められた銀杏並木を、やっぱり二人で歩いて。仁君はそんな銀杏の絨毯を自転車で思いっきり下っていく。背中には私。まるで銀杏と遊ぶみたい。に、自転車が通ると銀杏も舞い上がる。仁君は某モバイルスーツのバーニアみたいだって得意げになって例えていて。そんな仁君の例えが分かってしまう私にちよっぴり自己嫌悪に陥ってみたり。意地悪な仁君はスピードを上げるの。私が止めていっても聞かないで、どんどんスピードを上げて……でも、そのおかげで仁君の背中にしがみつく口実ができて嬉しくて。逆襲の幼馴染み。ちよっと胸を押しつけてみたら、耳たぶを真っ赤にしていたよね。……そんな仁君の後ろ髪が太陽に反射してまぶしかった。仁君の背中を見て、真っ赤なもみじを見て。幸せな気持ちになるの」

俺はそのとき確かにそこにいて、佳乃に対して同じ気持ちを抱いていた。

二人で作った思い出の数々。二人とも大事にしているから、今でも鮮明に想いを共有できるのだ。

俺は佳乃がしがみついてくれるのが嬉しかったから、思いっきりペダルをこいだんだ。自分でも怖いくらいにスピードを上げて、背中に広がる神経を過敏にして。自分が馬鹿だと思った。でも、佳乃から感じられる柔らかさは、本当に殺人級だったから。俺はペダルをこがずにはいらなかったんだ。

自転車を降りた後、佳乃が少し涙目になっている。俺は、自分自身の若さを呪ったね。自己嫌悪だった。けれど、次の瞬間何もなかったように笑ってくれる佳乃。

……そんな笑顔が太陽に反射してまぶしかった。

佳乃の笑顔を見て、真っ赤なもみじを見て。幸せな気持ちになった。

「冬の雪、道ばたで笑う雪だるま。私達も作るって、二人で暗くなるまで雪玉を転がしていたよね。でも、私達の町は、あまり雪は降らないから、すぐに雪に泥が混じって茶色になって。それでも仁君は、私と競争するっていつて、雪だるまを転がし続けていた。二人でどちらが大きい雪だるまを作れるか。結局、その頃には雪はなくなり玉を、自分の雪玉の上にのせる。茶色ででこぼこしているけど、二人で一つの雪だるま。小枝を二本突き刺して、その先には脱いだ手袋を引っかけて。最後に小石を三つあてがって完成。少し無愛想な雪だるまだけど、私には笑っているように見えたよ。仁君は愛嬌が足りないとかディテールに凝り出して、自分のマフラーを雪だるまに巻いてあげたんだよね。……そんな仁君のかじかんだ手が、一所懸命な仁君がまぶしかった。マフラーをかけてあげる仁君の背中を

見て、茶色い雪だるまを見て。幸せな気持ちになるの」

こみ上げてくる、愛しいという想い。思い出は愛しさの積み重ね。どんどん積み重なっていつて、俺は思い出に囲まれて。俺は抜け出せなくなる。そこから出たいとすら思わなくなる。

雪だるま作成に佳乃を誘ったこと。佳乃は嫌がっているんじゃないかと思った。でも、佳乃が俺以上に頑張っている姿を見たら、俺も負けてはいられないと思ったんだ。

雪が溶け出して、泥が混ざり出して。濡れているだけだった服も、次第に泥だらけになってしまつて。それでも佳乃は小さな手のひらで雪玉を転がし続けてくれた。競争のようになってしまつたけど、俺はそんなつもりはなかつたんだぞ。佳乃の頑張る気持ちにあてられてしまつただけなんだ。最初から、二人で一つの雪だるまを作るつもりだつたんだ。共同作業……聞いていて悪い言葉じゃないよな。出来はお世辞にも良いとは言えなかつたけど俺は大満足だつた。おそらく、雪のほとんど降らない俺達の町で一番大きな雪だるまだつたんじゃないかな、あれは。今でも俺の自慢だぞ。

……そんな佳乃のかじかんだ手が、一所懸命な佳乃がまぶしかつた。

マフラーをかける俺の後ろで拍手する佳乃の笑顔を見て、茶色い雪だるまを見て。幸せな気持ちになった。

「溢れちゃうんだ……仁君への気持ち。佳乃の中から仁君が溢れちゃうんだよ」

白いワンピースの上から、自分の心臓を押さえる。

まるで、心の位置が心臓と同じ位置にあつて、思い出もそこにつまっているような。

「……そんな、仁君と作ってきた思い出がね、喪失感とともに黒く

染まってしまうの。あんなにたくさん染めてきた愛が、仁君の中で黒く染まってしまうの。愛と絶望は背中合せ。紙一重だから。愛が絶望に変わってしまった……仁君の中で。それが今、仁君の中をうごめいていて、仁君を苦しめるものの正体」

俺達を追いかけてきた黒が、思い出のなれの果てだというのだろうか。俺達が、思い出の風景の中を逃げてきたのも。その思い出そのものを絶望が呑み込んでいったのも。

全て。

「でもね、仁君……絶望はね、痛くて、悲しくて、苦しくても……」

地面に思い出を描くのを止めて立ち止まる。顔を上げた佳乃が、俺に困ったような微笑みを浮かべた。

「それでもやっぱり愛なんだよ」

佳乃が俺のわがままを許してくれるときの表情と同じだった。

「愛が絶望になるように、絶望もまた愛になるんだよ。愛はね、絶望から生まれるから。この絶望は仁君を苦しめようとしているんじゃないくて、仁君を強くしようとしているの。繰り返し見せる予定調和だって、仁君を強くしようとするからこそ。悲しみに打ち勝つ力を持つて欲しくてみせるんだよ。襲いかかってくるのだってそう。全部全部、仁君のため。ライオンが自らの子供を谷から突き落とすように、優しさからだけではなくて、苦しみからも人は成長していきけるから。仁君はそれにずっと耐えてきたよね。本当に痛かったよね、苦しかったよね。……全部、私のせい。私が仁君のそばからいなくなっただから……」

「そんなことっ！」

両腕を思い切り振って、佳乃の言葉を否定する。

佳乃のせいで俺が絶望にとらわれることになった。そんなふうには思ってた欲しくない。たたとえ一部がそうであっても、それが真実でも、俺はそう考えたくない。

「仁君、絶望を受け入れよう？」

死刑宣告のようなものに聞こえた。必死に耐えてきたもの、必死に逃げ続けてきたもの。何度も地獄に堕ちるような痛みや、悲しみに耐えてきたのに。逃亡者のように命からがら逃げてきたのに。

「今さら……あきらめろって言うのか？　今までずっと耐えてきたのに！」

「違うよ、仁君、違うの……あきらめるんじゃないの。悲しいことを我慢することは悪いことじゃないよ。辛いことから逃げるのも悪いことじゃないよ」

耐えられるさ。逃げ切れるさ。今までそうしてきたように、これから絶望から。耐え続けてみせる。逃げ切ってみせる。

「……でも、良いことでもない」

頑張れる。佳乃と一緒になら。佳乃さえいてくれれば。

「時にはね、悲しみを表に出したっていいんだよ」

胸に落ちていく。胸の中にあっけなく落ちていく。胸の底、俺の

心象に広がる荒廃した風景に、一陣の清涼な風が吹き抜けていく気がした。崩壊したビル。積み重なるがれきの風景。

「痛いことを痛いって叫んでいいんだよ。辛いことを辛いって、悲しいことは悲しいって、苦しいことは苦しいって、声に出したっていいんだよ」

倒壊した都市。そのがれきの下で小さな芽が顔を出し、その身を懸命に揺らし、背伸びをしているように思えた。

もっと高く。もっと高く。

持ち上がるはずもないがれきを押しつけようと、無駄とも思える努力を飽きることなく繰り返していく。

「仁君」

太陽の光を浴びたくて。

また花開くときを夢見て。

「もう、泣いていいんだよ」

芽は確かに息づいていく。

第三十四話・「佐々木仁」

「もう、泣いていいんだよ」

透明な球体の中で、佳乃が柔らかく告げる。

子供の頃、喧嘩に負けて泣きじゃくって、悔しさに目を腫らしながら飛び込んだ母の胸。母はそんな俺の頭を優しく撫でてくれた。俺が泣きやむまで、嗚咽がなくなるまで、なで続けてくれた。その頭を撫でる手の柔らかさと、頭上からこぼれ落ちてくる母の声の柔らかさ。

その二つの柔らかさを兼ねるような佳乃の声に、俺は思わず胸がつまった。

胸の奥から絶望ではない何かがこみ上げてきそうになる。

「……な、何を言ってるんだよ、佳乃？」

俺は今、ひどく間拔けな顔をしているに違いない。

「我慢してきたんだよね。こらえてきたんだよね」

佳乃が俺との距離を縮める。両腕を抱き留めるように広げて。全てを受け入れると言わんばかりに。

「泣くって何だよ？ 泣くはずなんかないだろ？ 悲しくなんかない、悲しくないのに泣くなんてそんなのおかしいだろ……？」

瞳をまぶたの裏に隠して、俺を否定しようとする全ての風景を遮ろうとした。けれど、佳乃の姿だけは消えない。まぶたの裏に白いワンピースがぼうつと浮かび上がってきて、佳乃の輪郭を作り出す。

ワンピースの純白は、さながら天使の白衣。高みに導く翼、俺を抱き上げる救済の手。受け入れたいし、抱きしめてもらいたい。そう思っているはずなのに、俺は首を横に振り続ける。

「もういいの、もういいんだよ、仁君。仁君は頑張ったの。一人で耐えてきたんだから」

絶望の溶岩の隙間にきらりと光るものが見えた気がした。黒くて何も見えない中で、それは暗く長いトンネルの出口のように光っている。

点いたり、消えたり。導くように存在を主張している。ただし、そのトンネルを抜けることができるのは自分だけのような気がした。だから俺は分からない振りをする。

理解したくないから。最後まで抵抗していたいから。

「もういいってなんだよ！ 頑張ったってなんだよ！」

無心になって、夢中になって首を振る。脳がぐくぐくと揺れて頭痛に変わっても構わない。

体全てを使って、佳乃の言葉を受け入れなくなかった。

もっと別の言葉を聞いていたかった。

互いの愛情を確かめ合う言葉とか、過去の喜怒哀楽の山ほどつまった思い出とか、その他かけがえのない諸々を。

永遠に、延々と。

いつまでも、いつまでも。

「私のお葬式の時だって、それからの学校生活だってそうだったよね。みんなを悲しませないように振る舞ってきたよね」

佳乃の母親の涙を拭ってあげて。葬儀時、笑う佳乃の写真と必死

ににらめっこして。教室で、心配してくれる仲間達に親指を立てて笑って見せて。授業中も自分から進んで拳手をしてみたり、体育の時間に先頭を切って走って、わざと衆目のある場所で転んで馬鹿をやってみたり。大声で挨拶して、掃除もしっかりやって。食事も三食きっちり取って。栄養のバランスも考えて。

心配させてはいけない。

俺は大丈夫でいなければいけない。

悲しみに耐えるのは、絶望にあらがうのは一人の時だけでいい。

佳乃を悲しむのは俺だけでいいんだ。

ずっと佳乃のそばにいて、佳乃と一緒に成長してきた。その俺が悲しんでやれないで、誰が悲しむって言うんだ。俺の不注意で佳乃は事故に遭った。ならば俺だけが悲しむのが当然じゃないか。

「よく頑張ったよね。必死に耐えて辛い思いもしてきたよね。そんな仁君は格好悪くなんかない。でもね、悲しみは分け合えるの。傷の舐め合いではない、悲しみの分け合い」

「違うんだ佳乃……俺は、俺はそんな言葉が聞きたいんじゃない。そんなことを望んでいるんじゃないんだ……！」

駄目だ。駄目なんだ。こみ上げてくるな。

「仁君は一人じゃないよ。みんなで悲しんで、みんなで乗り越えて。そうしたら、ほら、喜びは何倍にも膨れあがるんだよ。だから、仁君……」

「佳乃……俺は……！」

弱々しく首を振り続ける。

「今だけだよ。今だけ、頑張るのを止めて、涙を流していいんだよ」

佳乃の柔らかい言葉が耳に入ってくる度に、胸の最奥で波紋を広げる液体が、上へ上へと持ち上げられていく。水かさを増していく。井戸水を引くように、あふれ出しそうになる。定期的に吹き上げる間欠泉のように、温泉を掘り当てたように噴出しそうになる。

「違うんだ……違うんだよ……！」

俺の否定の動作に呆れることもせず、佳乃は俺を優しい瞳で見つめ続ける。

優しくしてくれる。

赤ちゃんが初めて歩き出すときの母親の目。歩行器に捕まってしか歩けなかった赤ちゃん。優しく見守る母親、その最上の庇護下のもと、赤ちゃんは何を思ったか、四つんばいから片手を持ち上げる。歩行はおぼつかなく、酔っぱらい顔負けの危険な千鳥足。

母親は必死に手を貸したい気持ちをごらえて、我が子を見守ることができるよ、歩ける。前に進める。そう信じ続ける母親の大きな存在。

……そんなふうにして、佳乃は俺を再び立ち上がらせようというのだらうのか。

佳乃の支え無しでは満足に歩けなかった俺を、今度はたった一人でも歩いていけるように。

雛が巣立つように、子が親から離れ自立するように。

「ほら、仁君……」

佳乃が俺に向けていた手のひらで、球体の向う側を指し示した。夕陽のように赤く揺れる粘膜。透明な球体の向う側、唯一切れ目が入っていた場所へ。まるで空を駆ける流星を指し示すように。一

番星を見つけた子供のように。

佳乃は赤い幕の、閉じられた場所に手のひらをかざした。

「見て」

切れ目の内側。映画でも上映するかのようには浮かび上がってくる光の幕。

古い映画のワンシーンのようにセピア色。

その映画は、俺の見たことのある顔で溢れていた。

佐々木先輩！

飛び込んできたのは、俺を敵視していた鹿岡義妹こと、鹿岡真奈美の泣き顔。

見たこともない彼女の真摯な目が俺に向けられている。鼓膜が破れてしまうのではないかという叫声は彼女自身の涙を震わせる。

仁君！ 目を開けるですう！ 古文の教科書をうまく読めるようになったのですう！ 聞かなきゃ損なのですよおっ！

ぼけぼけ少女、早坂美緒が目から涙をぼたぼたと垂らしている。

佳乃の時と同じ涙。

大粒の涙が、ぼんやりと浮かぶスクリーンに向かって落ちてくる。

「何だよ、これ…… 鹿岡義妹に早坂……」

杏里が俺をのぞき込んでいる。湖面に映る月のように、ぼんやり浮かび上がる杏里の今にも泣きそうな真っ赤な目元。いや、すでに泣きはらした後のようだ。

先輩先輩先輩、お願いなのです。目を開けて下さいなのですっ！ またMな杏里をいじめて欲しいのです！ お願いなのです！ こんどこそ杏里の……こんどこそ杏里の名前を呼んで欲しいのですっ……！

「みんなが呼んでるよ。仁君を呼んでる」

佳乃の声が耳元で聞こえる。俺はスクリーンから目を離せない。

佐々木っ！ お前までいなくなるなんて許さねえからなっ！

胸板の厚いレスリング部の田中。大声を張り上げながら、目元を太い腕でごしごしとこすっている。

真奈美ちゃんを泣かせた罪は重いぞ！ 全国義妹協会を代表して天罰を下してやるからな！

義妹の弁当を巡って鹿岡兄と鬼ごっこを繰り広げたクラスメイト達。

そつだそつだ、と賛同の声がこだまする。

見知った顔が入れ替り立ち替り、好き勝手に叫び出す。

ぼんやりと浮かぶ景色に、クラスメイトの顔が映っては消えていく。

まるでビデオレター。遠くにいるあの人へ。

届いているかも分からないのに、声を大にする。

「俺は……こんなものが見たいんじゃない！ 今さら、こんなの見
て、それで戻りたいだなんて……！」

俺の叫びは、次なる生徒の声に遮られた。

あんたの死亡的な記事なんて、誰も読みやしないんだからねっ！ ほらほら、さつさと可及的速やかに起きなさいよっ！

隣のクラス、新聞部の皆川亜矢子が、ぽけぽけ少女を押しつける。新聞記事をちらつかせて、俺を脅そうとする。

しかし、すでに新聞記事は濡れてしまっている。涙でも染み込ませたのだろうか。ふやけて破れている。

佐々木、無茶しやがって……。

桐岡が軍事オタクらしく俺に敬礼をしてくる。

夕焼け雲に仁の上半身が映り込むような絶望的なこと言うてるんじゃないわよっ！

貴様……！ 我が筋肉の垢にしてくれるっ！

そうですっ！ 仁君には死亡フラグなんて立っていないのですっ！

痛っ！ 亜矢子、田中！ ちょ、待……美緒までっ……！？

そうだそうだ！ 桐岡！ 物騒すぎるぞっ！

冗談を交えた桐岡が、周囲から袋だたきにあっている。その奥で看護士らしき女性が頭を抱えていた。クラスメイトの無鉄砲さに対処不能なのだろう。

「違っんだ……俺はっ……」

こらえきれない。もう、こらえきれそうにない。
馬鹿だ。どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。

先輩先輩先輩！ 杏里はもう佳乃先輩の代わりになろうとな
んてしません。杏里は杏里なのです。Mで馬鹿で、どうしようもな
くわがままな、先輩にいじめられるのが大好きな杏里なのです！
遅すぎますよね……でも、でもはつきりと分かったのです。だから
先輩！

杏里が泣きすぎる。どんなにひどい仕打ちをしても、すり寄って
くる子犬。涙の似合わない、笑った顔が華やかな後輩。弾ける涙は、
打ち寄せる波のしぶきのように俺のもとへ落ちてくる。

おいおい、下級生にまで手を出したのか仁のヤツ！ ぬぬぬ、
帰ってきたら許すまじ。

俺のそばで一緒にスクリーンを見やる佳乃が、肩に手を置いてく
る。

「みんなが呼んでいるんだよ。他の誰でもない、仁君を呼んでいる
んだよ？」

ああ、一発シメておかないと駄目だな、これは。

腕を組んで神妙にうなづく男子。

けどさ、お前がいないと張り合いがないんだよ。……ま、な
んだ……オタク仲間が減るのは寂しいしな。

頬をかいて照れるクラスメイトを、乱暴に押しのけて眼鏡をかけた男子が唾を飛ばす。

貸したエロゲー返してもらってないぞ！ ゴルア！

「何でだよ……俺はここにいたいんだ！ 佳乃のそばにいたいだけなんだ！」

スクリーンに向かって声を張り上げるが、どうやら聞こえないようだった。

ま、静かな教室つても悪くないけど……私はどちらかといえば賑やかな方が好きだしね。

男子を邪険に足蹴にして、強面の女子。

あ、あの……明日の日直、佐々木君なので……ズル休みされると困るって言うか……。

言葉少なめの眼鏡女子が、両手を組んだりほどいたりしながら、もじもじとつぶやく。

ふっ、こういう場合、主人公は得てして帰ってくるものさ。心配などしていないぞ、私はな。

オーバーアクションで肩をすくめてみせ、親指で自分を指し示す。さすが演劇部は芝居がかった仕草だった。

「絶望を受け入れて、涙を流して、みんな助けてもらおうよ。仁君、それは格好悪いことでもない。情けないことでもないんだよ」

佳乃の声と、クラスメイトの声が、俺の体から忘れかけていたものを呼び覚まそうとする。

うおおおっ！ 仁っ！

鹿岡兄こと、鹿岡健二が、病室に溢れかえったクラスメイトの頭の上を飛び越えて、ヘッドスライディングする。スクリーン一杯に鹿岡兄の顔が広がった。鼻の穴まで拡大されている。

いてて……の、鹿岡兄妹たつてのお願いだっ！ 帰ってきて、また一緒に登校しよう！ 今度は、僕と、真奈美と、仁と、山田さん、中村さんの五人で登校しようっ！ 楽しい、きっと楽しいはずだから！ 絶対に楽しいはずだから！

はいはいはいっ！ 杏里が仁先輩起こしに行くのですっ！

鹿岡兄の頬を右の手のひらで押しやり、左手で立候補する。

その後ろでは、鹿岡義妹が兄に抱きつき、その胸元で涙を溢れさせる。

「真奈美ちゃん……鹿岡君……」

かつて昼食をともにした彼らに、佳乃は微笑みを浮かべる。

「絶望を受け入れて、涙を流していいの。みんなに肩を抱いてもらって、みんなに悲しんでもらって。そして、今度、違う誰かが悲しんでいたら、仁君が肩を貸してあげればいいんだよ。悲しみを理解して、分かち合えばいいんだよ。二人なら、悲しみは半分に。喜びは二倍になるんだよ。三人なら悲しみは三分の一、そして喜びは三倍

になるの。四人、五人、六人……ほら、悲しみは消えてなくなりそうだよ。喜びはこんなにたくさん」

両腕を大きく回して、その大きさを体で示そうとする佳乃。

佐々木め……うらやましいヤツ。でもな、さっさと起きろよ。遅刻するぜ？

そそ、早起きなこととは三文の得っ！ 決定的よっ！

そうですう、さっさと起きるが吉ですうっ！

顔、顔、顔。

声、声、声。

クラスメイトの憂慮の表情と声音が、飽きることなく映し出される。

「立ち止まってもいいの。振り返ってもいいの。でも、人は前に進まなければいけないんだよ」

起きてください！ 先輩っ！

佐々木先輩！ 真奈美からもお願いです！

目を覚ましてくれ、仁！

「私は仁君と同じ時を生きることができないから。仁君の背中を見ていることしかできないから」

勝手にいなくなるなんて許さねえからな！

「私は仁君の背中を押してあげることしかできないから」

佐々木先輩！

「……俺は……」

佐々木仁！

仁先輩！

佐々木！

先輩！

仁君！

仁！

溢れる。

「でも、俺は佳乃と離れたくない！」

……寸前で、俺は声を張り上げていた。

ぼんやりと浮かび上がっていたスクリーンは、俺の絶叫で掻き消されてしまう。

喉がさける。血が流れたっていい、二度と話せなくなってもいい。佳乃を失うよりはずっといい。

「佳乃が好きなんだ！ 佳乃がいないと駄目なんだ！」

佳乃にすがりつく。白いワンピースの裾を握りしめ、情けなくも佳乃を見上げる。

「死ぬってことはね、それきりってわけじゃないんだよ」

命乞いをするように醜くすがる俺に、佳乃はゆつくりと膝を曲げる。ワンピースの裾を握る俺の手に自らの手を重ね、より一層微笑んで見せた。

「仁君の中に降る雨も、やがてあがる日が来る。そして、太陽の輝く世界をもう一度見られる日がきつと来る」

佳乃が俺に伝えようとしていること。それはとても明快で、分かりやすいものだったように思う。難しい言葉を用いたとしても、それをかみ砕いて何度も伝えようとする。まるで、歯の生えそろわない乳幼児が食べやすいよう、柔らかくしてあげるような。かみ砕いた佳乃自身の言葉で俺に伝えようとする。

「いつか、今ではないいつか……仁君が私との思い出を懐かしむようになる頃、時々だけ私のことを思い出すようになる頃……」

空想の未来図を描く。

「誰かが仁君を好きになって、仁君もその子を好きになって。告白して、二人で手を繋いで。帰り道、別れ際に……キス……とかしちやったりして。……やだな、なんか考えただけで嫉妬しちゃうよ。でも、いつかそういう日がきつと来るはずだよ」

佳乃の目も光を帯びていた。

透明な膜が覆っていて、水面に垂らした一滴のように揺れている。

「違う！ 俺は佳乃だけだ！ 佳乃だけがいてくれれば、他には何もいらなんだっ！ お前以外に誰も好きになったりしない！ 好きになるはずないじゃないか！」

キスをするほど顔を近づけて、俺は叫ぶ。

届いて欲しかった。佳乃の心を変えたかった。

でも、佳乃はそんな俺に涙を浮かべながら告げる。

「私は……夕凧佳乃は、佐々木仁に愛してもらえて幸せでした」

一筋の彗星が、佳乃の涙が頬を滑っていった。

涙は両目に溜まり、落ちたのは左目が先。タイミングがずれた涙は、時間差で頬を伝っていく。

ぽとり、そんな聞こえるはずもない小さな音が、胸の中に響いた。

「えへへ……過去形にしちゃった」

夕立の上がった公園の木、葉先から一滴の雫が落ちるような佳乃の涙。

「嫌だ！ 俺はお前が好きなんだ！ 今までも、これからも、ずっと好きなんだ！ 過去形になんてしないでくれ！」

「仁君……」

俺の手を包んでいた手を離して立ち上がる。

「仁君とは……また会えるよ。いつでも会える。必ずまた会えるの」

駄目だ。駄目だ。駄目なんだ。
もう、こぼれてしまいそうだ。

我慢してきたのに。こらえてきたのに。大丈夫だと思っていたのに。

「今すぐには会えないかも知れないけど、仁君が大人になって、恋愛をして、結婚して、子供が生まれて、パパになって、おじさんになって……やがて、おじいちゃんになって。そして、長い長い年月を生きて、ある日……深い、本当に深い眠りについたら、きっとまた私と会えるよ」

……理解できても、納得できないものがある。

佳乃は思い出せば町中に溢れていた。

思い出という再生機構を使えば、いつどこにでも佳乃は現れた。自動販売機に小銭を入れる佳乃、ボタンを全部同時に押してみるお茶目な佳乃、レンタルショップで最新の映画が全てレンタルされていてしょんぼりする佳乃、代わりに借りたホラー映画で肩をぶるぶる震わせる佳乃。

佳乃はどこにでもいる。俺の瞳の中になら、必ず現れる。

「死ぬことは、別れることじゃないんだよ。少しの間、離ればなれになるだけなんだよ。仁君とはいっても会える。だからね、また会える日まで、仁君には私の分もたくさんのかんことを見てきて欲しいの。外国はどんなところだとか、会社ではこんなことをしたとか、子供の名前とか……仁君のしてきたこと、見てきたこと、感じてきたこと……たくさんたくさん教えて欲しいの」

体中からかき集められたものが、俺の顔面に集中する。

鼻の奥がつんとして、胸が締め付けられて。嗚咽で今にも横隔膜

が痙攣しそうだ。

「それまで私は仁君を待ってる」

佳乃がこの世を去った。自動車事故で命を失った。移植されたとはいえ、佳乃は佳乃でなくなつた。夕凧佳乃という人物は世界から姿を消したんだ。

「ずっとずっと仁君を待ってる」

「なんで……そんなこと……」

俺は葬式の時、佳乃の写真とにらめっこをしていた。見つめ続ければ、きつと笑ってくれるんじゃないかって。負けを認めて出てきてくれるんじゃないかって。

佳乃の葬儀が今まさに執り行われているっていうのに、俺は佳乃がどこかできつと生きていると、かたくなに信じ続けていた。明らかに矛盾している。でも、俺の中でその方程式は成立していた。

そんな風にして佳乃の面影を町中に重ね、俺は自分の殻に閉じこもった。

自分の時を止めたんだ。

佳乃と一緒にいたくて、俺は成長することを止めたんだ。

立ち止まり、佳乃と手を繋いだまま、時間軸というレールを走る電車から降りた。

未来への片道切符を握りしめたまま、駅にとどまり続けたんだ。駅名の書いてある行先看板には、過去、現在、未来と書いてある。さっきまで通り過ぎてきた過去という駅、今いる現在という駅、そして、これから向かう未来という駅。

けれど、切符を失った佳乃は乗ることができない。

俺だけが切符を持っている。

佳乃を置いていくくらいなら、俺もここに残る。
そう決めたんだ。

「仁君は、もう分かっているんだよ。誰かがこうしたからじゃなくて、自分がどうすべきか。何が正しいかではなくて、自分が正しいと思えるか。……私は仁君と一緒にには行けないから。ずっと一緒にいたかったけど、もうできないから……いくら泣いて祈っても、それだけは許されないから」

佳乃の死を、俺は頭で理解はできても、心で納得することができなかった。

認めたくなかった。認めてしまうのが怖かったんだ。

だから絶望に抗い続け、何度も絶望の中で佳乃を助けようとした。佳乃の弁を借りれば、俺を苦しめた予定調和は、俺に現実を、前進する意志を教えようとしていたのか。

佳乃はもういない。助けられないと。俺の体に教え込もうとしていたのか。

だとしたら、俺のしたことは。
俺のしてきたことは。

「……無駄じゃないよ。それが仁君のペースだっただけなの。早い、遅いか。それは人それぞれなんだよ。仁君は、少しだけ回り道をしたの。無駄でもなければ、間違ってもいい。ただ、時間がかっただけ」

救われるような言葉。

「遠回りしただけ……時間がかかっただけ……俺は……間違っ
てはいないのか……？」

「うんっ！」

自分のしてきたことを否定されることは、自分自身を否定されることと同じだから。

心が、佳乃の言葉に救われた。

「俺は……」

俺の体が透けていた。

指の先から浸透してくるようにどんどん透明になっていく。消えてなくなるのではなくて、俺の体に変化していく感覚。俺が透明な液体になっていく。

「ここは……まさか……」

純水のように透過通った俺の体を見、佳乃を見る。

「そうだよ、ここはね」

水晶のような球体を見、その周りを覆う仄かに赤い皮膚のようなものを見、その皮膚にある閉じられた切れ目を見、佳乃を見る。

「ここは、仁君の体の中。心臓の場所から始まって、心の場所、記憶の場所……そして、ここ。ずっと上へ上へ走り続けてきた……。絶望が私達をつかまえようとしていたから分かるよね。そして、ここは……仁君の目、だよ」

「俺の、目……？」

「仁君が心を解放する場所」

だとすれば、この水晶のような球体は瞳で、あの切れ目はまぶたなのだろうか。

クラスメイトの面々は、俺が病室で実際に見ているもの。ぼんやりと見えているものなのだろうか。

「仁君が自分自身の意志で、自分という殻の中から飛び出していくの」

「佳乃……！」

俺が叫べば、体の一部である水分が音をあげて弾ける。

「ウメちゃんもね、今、仁君と同じように頑張っているの。雨にたくさん濡れて、震えて、救急車で運ばれて……熱が下がらないの。体が弱いはずのウメちゃんが、こうして力を貸してくれたから、私は仁君にまた会うことができた。奇跡なんだよね、きっと。想いがシンクロしているんだよ」

鼻の奥がいよいよもって痛み出す。

みんなみんな頑張っている。ウメも、杏里も、鹿岡兄妹も、ぼけぼけ少女も、桐岡も、みんな必死になって頑張っている。自分のためではない、誰かのために。

馬鹿でお人好しなクラスメイト。馬鹿で変わっているけど、最高の友人達。

みんなみんな頑張っている。

「なんで……俺なんかのために……」

もう、いいのかもしれない。

今までこらえてきたものを、溢れさせてもいいのかもしれない。

「仁君は一人じゃない。佳乃がいなくても、仁君は歩いていけるよ」

「でも！ 佳乃の……いない世界なんて」

最後の線で、俺は躊躇する。

未来への片道切符をこれでもかと握りしめて。発車のベルが鳴る直前まで、電車に乗り込めないでいる。

そんな俺の唇を、佳乃が人差し指でふさぐ。

「またいつでも会えるから。仁君とは、またいつでも会えるから。

……だからね、少しの間だけ、お別れしよう。さようならじゃないよ。別れ際にさようならは悲しいもん」

涙の欠片を目尻と頬に残して、佳乃は心地よい笑顔を浮かべた。

「またね、仁君」

佳乃が小さく手を振った。

「そ、佳乃の言うとおり。仁とは今すぐでなくても、少ししたらいつでも遊べるし。だから、それまでそっちで頑張りなさいよ、朴念仁。正直、あんまり期待していないけど……あ、あんたのさ……楽しい話、待ってるから。間違っても暗い話なんてしたら、地獄にたたき落としてやるんだからね！ ……分かった？ 朴・念・仁！」

涙の欠片を目尻と頬に残して、佳乃は心地よい笑顔を浮かべた。

「そういうことで、またね、仁」

佳乃が小さく手を振った。

電車のドアが閉まる音。

耳の奥で聞こえた気がした。

水分と化した俺の体が、皮膚の切れ目に吸い込まれていく。
夜行列車。車窓から見える佳乃の姿が遠ざかっていく。

「仁君に、おかえりを言うその日まで……」

どんどんどんどん小さくなっていく。見えなくなってしまう。

佳乃。

電車が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けてくれる自慢の幼馴染み。

佳乃。

物心ついた頃から一緒に、苦楽を共にしてきた体の一部のような人。

佳乃。

俺に初めて愛と絶望を教えてくれた最愛の人。

「いってらっしゃい、仁君」

伝えられたかどうかは分からない。

「いって……きます」

つぶやきながら、俺は切れ目に吸い込まれていった。

それからの記憶は、少し判然としない。

のちに、杏里が言うには。

そのとき俺は、病床でたった一滴の『涙』を流したそうだ。

エピソード・「再生への産声」

思い返せば……と言うか、思い返すほど長い年月を生きてきたわけではないけれど、ふと思い出せば、そこには色々な人とのつながりがあったように思う。

絆……なんて言葉で言うとは格好良いように聞こえるけれど、俺にはその言葉が一番しっくり来る。

自動車事故にあった人間の部屋に大勢で押し寄せて、包帯でぐるぐる巻きにされている　つまりは絶対安静、面会謝絶されるぐらいに大怪我だった　にもかかわらずクラスメイト全員で病室に押し寄せたばかりか、目を覚ました俺を全員で胴上げするものだから俺の意識は再び暗闇の中に落ちそうになった。

ペナントレースでリーグ優勝を果たした指揮官みたいな感覚。ただ一つ違っていたのは、それはそれは怪我の痛みがすさまじかったということぐらいだ。

とりあえず、しばらくは入院を余儀なくされ、今は松葉杖をつけてやっと自由に病院内を散策できるくらいにはなった。うずくような痛みが忘れた頃にやってくるので、退院はもう少し先だろうというのが俺の読みだ。

「早く学校に行きたいよ」

病院の廊下を必死になって歩きながら、枝から枝へと渡っていく小鳥に目で追う。

松葉杖で歩くのがこんなにも大変な作業だとは思わなかった。

入院後しばらくして松葉杖で歩く練習が始まった。松葉杖なんて……そう馬鹿にしたのがそもその間違いだった。練習などせずとも大丈夫だと高をくくっていたら、バランスを崩して転んでしまった。

激しい痛みにもんどり打った。

当たり前のように歩いていたのに、いざそれができなくなる。目の前が暗転する。本当、愕然、ってこつという状態をいうんだろ。うな。

それでも、あきらめないで練習すれば、大抵はなんとかなるものだ。

人間、努力と悪あがきだけは忘れてはいけない。格好悪いことを恥ずかしがらない。

胸の大きな看護師さんがそう言っていたっけ。

噂をすれば何とやら。車いすを押している噂の看護師さんとすれ違う。すれ違いざまに彼女は俺に笑いかけてくれた。俺もそつなく笑い返す。そんな看護師さんの背筋の伸びた背中を横目に、俺は病院の廊下を亀のように遅々として進み始める。

……そうそう、同じ病院に運び込まれていたウメが先に退院して、俺のところにお見舞いにやってきたことがあった。

ウメは相変わらず無愛想だったけれども、それはそれで彼女らしかった。

あれは、太陽も山に引き寄せられて、顔を半分ほど隠してしまつた頃。

病室に差し込んでくる橙色の光線に、花瓶に飾られた名も知らぬ花が悲しげに首をもたげてしまう頃。

花瓶に反射する光の向こうに、空を滑る夕焼けの雲がある。

故人曰く、過去の思い出に引つ張られそうになる時間帯。

突然響いたノックに、俺は反射的に、どうぞ、と言っていた。

「元気？」

ミイラ男のようになっている俺を見た開口一番だ。

「この状態を見てそれを言いますか」

「そ、ならよかった。じゃあね」

病室に入って一步。その場で回れ右。

「お、おい！ 一体何しに来たんだよっ！」

思わず身を乗り出しかけた体に痛みが走った。痛みが俺をベッドに押しつける。

抵抗力のない俺は、力なくベッドに身を預けるしかなかった。

「お見舞い」

肩越しにつぶやくウメには相変わらず感情の色というものがなかった。

雨の中で交わした会話の数々や、奇跡のような微笑みは一体どこへやら。

あの光景が、夢の中の出来事ではないかとさえ思えてしまう。

「そ、その……せっかく来たんだからすこしだけ話に付き合ってくれても、罰は当たらないと思うぞ」

正直、病室というものは暇で暇で仕方がない。

常に受け身な態勢でしかいられないから、娯楽には不向きなのだ。娯楽というものは、自分から楽しもうという姿勢があつてこそ初めて楽しく思える。身動きすらまともにとれない状態でできる娯楽といえば、本を読むか、携帯ゲームにでも興じるか、誰かと話すかぐらいだ。

活字に読み疲れ、ゲームのやり過ぎで目にも負担がかかってきた頃合いで、ウメの登場はものすごくありがたい。

最近では学校やら、部活やらで忙しく、なかなか見舞いにも来られないクラスメイトに、これ以上わがまを言うわけにもいかなくなってきた。

当然、訪問者も ある一名をのぞいて なかなか現れず、病室では閑古鳥が鳴いていた。

誰かと話すことに飢えてしまっている俺がいるというわけだ。

「分かった」

ウメは回転扉のように振り向くとわずかにうなずいて見せた。

「元気？」

「まだ言うか……」

ベッドの隣に置いてあるいすに腰掛けて、ウメは俺を見下ろす。

「元気？」

「だから、元気だったらここにはいないっての」

「元気？」

「あんな……」

英語の授業で先生に、リピートアフタミー、とでも言われているような気分だ。

「元気？」

「ウメ、俺はな……」

俺の瞳をじっと見つめていたウメに気が付く。

「元気？」

「……。げ……元気……じゃないかもしれない」

ぼつりと本音を漏らしてしまう。

そんな俺に、ウメは満足げに少しだけ頬の筋肉をゆるめたようだった。

はたから見れば変化のないその表情にもずいぶんと慣れてしまった。

少しだけ現れる変化の兆候を読み取るのも、今ではだいぶ上達した。

「……ウメは？　元気か？」

「寂しい」

「寂しい？」

無表情でつぶやくウメにおうむ返し。

「夏目がないのは寂しい」

「……そっか」

夕闇がそうさせたのだろうか。

それから十分以上も無言を貫き通した俺とウメ。病室の光量だけ

が徐々に減少し、ウメの表情もかげり出す。言葉で何かが変わるレベルのものではないことは分かっていた。

沈黙が美德であるのは日本文化だけと言われているが、今このときだけはそれが美德でも何でもないと思底思つてしまえる。

一瞬で憂鬱を消し去ってしまえるだけの言葉を、俺は持っていない。

果たしてそんな言葉があるのか。

……きっと、ないだろう。

言葉でひとくくりにしてしまうのは、あまりにも身勝手すぎる。

「それじゃ」

ウメが音もなく立ち上がる。

「あ、ああ」

「……忘れてた。これ、返す」

立ち上がったから気が付いたのか、ウメがバッグの中をぐそぐそとあさり始めた。

「佐々木の」

取り出したのは、俺が公園で杏里に渡した財布だった。

俺とウメを見たシヨックで杏里が地面に落とし、直後、俺は公園から飛び出した。それっきり行方不明……と言うか、存在そのものをすっかり忘れていた財布だった。

中身もほとんど入っていなかったから、思い出そうともしなかった。

「ウメが持っていたのか」

「そう」

「でも、なんで？」

「落とし物は届ける。常識」

「……そっか」

自然とうつむいてしまった。

何かを期待してしまったのだろう。俺の心が残念がっている。
自分のことを他人面して言うことではないが、自身、訳の分からない期待をしていたようだ。

「じゃ」

統率された兵士のように背中を向けるウメ。

「……佐々木のおかげで、佳乃に恩返しできた」

背を向け、ノブを握ったままで小さくつぶやく。

「財布、佐々木の匂いがした。心がシンクロして、佳乃と佐々木をつないだ。佳乃が佐々木の命をつなぎとめた」

ウメが唇を噛んでいるように見えた。

「………少しだけ、うらやましかった」

「うらやましい？」

「うん、うらやましかった……かも知れないだろうと多分思う」

「……ど、どれだけ推定にするんだよ」

そう言っただアの向こうに消えたウメの姿と、遠ざかっていく足音。

音楽を流してもいないのに、病室に哀調を響かせる。それはまるで悲しみのワルツを踊るかのように残った。

「さて……そろそろ、行くか」

頭を振って回想を終了する。

松葉杖で病院を歩き回ると、杏里がうるさいからな。

先輩先輩先輩！ 先輩は病人なのです！ 安静にしていないといけないのです！

水を交換するために持ってきた花瓶をぶんぶんと振り回す。

鼻先をかすめていく花瓶に一抹の悪寒を感じながらも、俺はすぐと病室に引き下がっていく。もしこれが夫婦のやりとりならば、俺はきつと尻に敷かれているに違いない。……いや、もちろん夫婦ではないから、尻に敷かれることはない。

ま、Mな杏里に限ってそんなことはあり得ないけどな。

「たまには こっちから帰ってみるか」

自分の病室からは遠回りになっているのを承知で、別ルートに歩を進めてみた。まるで何かに引き寄せられるように、俺は松葉杖を

動かし続けていた。

いつの間にか。気が付けば。今の俺にはそんな言葉がふさわしい。我ながら不思議なくらいだ。逃げる少女の背中を追いかけるように、進む必要のない廊下を夢中になって歩き続け、登る必要のない階段を額に汗浮かべながら必死に登っていた。

絶望の学校で二人手を繋いで、上へ上へと逃げ続けた。屋上への扉が開かなくて、やっとの思いでこじ開けた。

俺の記憶の中で溢れる二人の息づかい。

階段を駆け上がる足音。揺れる視界。

躍動する筋肉。彼女の呼ぶ声。

足の痛みも忘れて、屋上へと続く扉を開けはなつ。

「これは……」

額を流れ、シャツに染み込む汗など気にもとめずに、俺は視界を埋める白を見つめていた。

たくさんの物干し竿に干された、たくさんの真っ白なシーツ。整列するように屋上のスペースを埋め尽くしている。屋上を吹き抜けていく風に揺られてはためいている白、白、そして白。シーツから漂う太陽の匂いや、風を受けて国旗のようにはためくシーツの音。思わず顔を背けてしまうほどに輝く白さを誇り、頼ずりしてしまいそうになる肌触りが、俺の体をくすぐる。見渡す限りに純白で、その隙間からのぞく突き抜けるような青空。吹いてくる風の涼しさに、酷使した体が冷やされ、思わず大きく息を吸い込んだ。

何か心を洗い流していくような光景だった。

爽やかな風が俺の体の中にまで入り込んで、停滞していた空気を吹き飛ばしてくれるような。真っ白に洗い上げられたシーツが、俺の肌にまとわりつく暗い色を払拭してくれるような。それら全ての心地よさは、まるで生まれたての赤ん坊の純粹さに戻してくれるような救いさえ感じられた。

俺は真っ白なシーツの真ん中をゆつくりと進んでいく。

気持ちがいい。なんだろう、本当に気持ちがいい。

太陽が輝き、雲一つない青空がある。鳥のさえずりがどこからか聞こえ、真っ白なシーツがひるがえる。まるで、いつか見た地平線に囲まれた大平原のような気持ちよさだ。

転落防止の金網の前まできて、俺は空を見上げた。

最後の二日間も、雨の日の事故も、全てが幻であつたかのような青さ。

屋上から見える町の俯瞰図は、常時スモッグに覆われているにしてはどこか驚くように綺麗で、遠くに見える観光名所のタワーまでも綺麗に見ることができた。首輪を付けられたようにデパートから逃げられないでいるアドバルーンや、ビルの谷間をすいすいと縫っていく飛行船の輪郭が、驚くほどくつきりと見て取れた。

俺が生まれ育った町。

佳乃と出会った町。

……不意に心が痛むのが分かった。

まだ、佳乃は俺の心の中にいる。幼い頃からずっと一緒にいた幼馴染み。

佳乃が言わんとしたことは分かる。理解できる。

佳乃らしい言葉で、優しくさとしてくれた。

また会える。また、きつと会える。

そう思つてはみるが、本当にまた会える保証なんてどこにもないけれど、俺はたとえそれが嘘でも信じていたかった。他の誰でもない佳乃の言葉だから。俺に嘘を言ったことのない佳乃の言葉だから。俺は馬鹿みたいに信じるんだ。

ちくちくと痛む胸に手を置きながら、俺は佳乃と再会できるまでの長さに歯ぎしりする。俺はそれまでずっと苦しみ続けるのだろうか。クラスメイト達に迷惑をかけ続けるのだろうか。佳乃がいた頃

の、あの明るかった教室に溶け込むことができるのだろうか。

不安はいくつもある。細かい不安をあげればきりがない。

何よりも俺は、佳乃が好きだ。

理屈じゃないんだと思う。

佳乃をこのまま愛し続けていく純愛も悪くないんじゃないかと思う。手に触れることのできない佳乃を愛して、一生を終える。後世にまでたたえられるほどの純愛ではないか。でも、それは佳乃が望んでいたことではないのかもしれない……。

目頭が熱くなるのを感じて、俺は瞳を閉じた。

「俺は……佳乃、お前が……」

一陣の風が屋上を駆け抜ける。

「先輩っ」

背後から声がして振り返れば、そこには杏里がにこにこしながら立っている。後ろ手に手を組んで、純白のシーツを背にする。シーツが輝きながらはためくから、その光を受けた杏里の笑顔がいつもより数段まぶしい。

「あ、ああ……悪い。病室戻るな」

何もなかったように笑顔を作ると、松葉杖を使って方向転換しようとする。町に別れを告げることもせず、屋上の出口に一步踏み出す。

「先輩……叫びましょう?」

屋上に転がっている砂利を踏みしめたところで、杏里から聞き慣

れない言葉を聞いた。

「叫ぶんですっ！先輩っ！」

シートがはためく。白が視界を覆う。

「知りませんか？青空は全てを呑み込んでくれるのですよ。だから、心にあるもの全てをはき出してもへっちゃらなのです」

叫ぶ。

杏里の言葉に胸がざわめく。

絶望ではない。

愛でもない。

その二つを一緒くたにした言葉では表現できない感情が、俺の体中から出たがっている。

「杏里がお手本を見せるのです」

杏里が俺の横を通り過ぎて、転落防止の金網に指を通す。

屋上に溢れる爽やかな空気を肺にめいっばいにため込むと、声に変換。

世界を覆う青空の下、青空に向かって、青空の中で声を爆発させた。

「先輩の馬鹿　！」

シートの間を風が通りすぎていく。

「先輩の優柔不断　！」

風が杏里の言葉を受け入れるように、杏里の声を運んでいく。
白い洗いたてのシーツの間、俺達の町、飛行機雲。
その全てに杏里の声を届けようとするかのように。

「でも」

足を踏ん張って、金網を力強く握りしめて。

「杏里はそんな先輩が」

肺に空気を送り込で、腕を伸ばして、まるで山の頂上から人々が
快哉を叫ぶように。

「好きなのです」

杏里は世界に声を届けていく。

「ほらっ！先輩もっ！」

杏里が笑顔で振り返る。その言葉に俺は胸が大きく高鳴った。
胸を突き破らんばかりに、心臓が肋骨を叩いた。
どくん。

俺を内側からたきつけるかのように。

青空が近付いてくる。シーツの白さが俺の思考を奪う。無心の中
で、俺は体が震え出す。

視界が明滅し、心が破裂しそうになる。胸の奥でため込んでいた
ものが、繋がれていた鎖や足かせを引きちぎって、駆け上がったく
る。

抑えきれない衝動が、俺の手から松葉杖を取り落とさせる。

「俺は……俺は……っ」

屋上に響く、松葉杖の転がる音。

俺は包帯の巻かれた足で、走るように、もつれるように金網に取り付き。

「俺は」

そして。

「佳乃が好きだ」

叫ぶ。

「佳乃が好きなんだ」

空よ、受け止められるものなら、受け止めてみる。

そんな挑戦をしたわけではないが、俺は生まれて初めて本当の叫ぶという行為をしたように思える。

人はいつから叫ぶことをしなくなったのだろう。

気持ちをあからさまにぶつけることをしなくなったのだろう。

人は大人になればなるほど、叫ぶことをしなくなる。わがままな想いを、生の想いを、生まれた瞬間の言葉そのままに、衝動的にぶちまけることをしなくなる。

格好悪いから。社会的におかしいと思えるから。人から変な目で見られるから。

そんな制約が、大人になるに従って増えていく。

叫びたくても、叫べない。

そんな抑圧の日々の連続。本当は誰しも我慢していることや、打ち明けたいこと、不平不満から、愛の告白まで必ず持っているはず

なのに。

「佳乃が好きだ　！」

屋上で俺は叫んでいる。

シーツのはためきも、風の音も、何も聞こえない。自分の声で耳がふさがれてしまう。

「……………先輩、頑張るのです」

だから、そんな杏里の声も耳には届かず、俺は気持ちを振り絞る。持てる心を全て解き放つ。

力の限り、息が続く限り、喉が張り裂けない限り、叫び続けるのだ。

足の痛みなんか関係ない、格好悪いのも関係ない。

今はただ叫びたいんだ。

全てを叫びに変換してしまいたいんだ。

俺は自由だけれども、生きにくい世の中に生きている。

辛いことだってたくさんある、悲しいことだってたくさんある。

これからも、それらをいくつも経験するのだろう。

挫折したり、泥まみれになったり、傷ついたり、起き上がれなくなったりするだろう。

それでも、俺は生きていくのだろう。

生きていかなければならないのだろう。

「佐々木仁は　」

たくさん学んで、たくさん経験して、たくさん間違っ、たくさん笑って、たくさん泣いて、たくさん、たくさん、本当にたくさん……脳みそというハードディスクがクラッシュしてしまいそうにな

るまで、たくさん詰め込まなくてはいけないから。

だから、どんな困難が待っていても、どんな壁が立ちはだかろうとも俺は生きていくよ。

必ず、生き抜いてみせるよ。

いつか絶対、お前にたくさんのお思い出話を聞かせてやりたいから。

「夕風佳乃を」

分かった。やっと分かったんだ、佳乃。

「愛していました　！」

現在進行形から、過去形へ。

胸を突かれるような心痛を乗り越えて、今、叫ぶ。

「夕風佳乃が」

今ではないけど、今すぐにはいかないかもしれないけど、俺は佳乃ではない誰かを好きになるかもしれない。

好きになってもいいのかもしれない。

佳乃との数え切れない思い出を胸に秘めて、心の片隅にしまつて、佳乃ではない誰かを受け入れてもいいのかもしれない。

過去にする、なんて言葉で表現すると少し乱暴に聞こえてしまうかもしれないけど、俺は今を生きているから。

過去があつてこそ、現在があつてこそ未来に続くから。

俺は前に歩く。

立ち止まっただけではいられないんだ。

一枚きりの片道切符を握りしめ、いつまで続くか分からない人生という名の線路を行く。

佳乃は途中で下車してしまったけれど、それは悔やんでも戻ってきたりはしない。

「好きだった　！」

佳乃はもう、この世のどこにもいないんだ。

「愛していた　！」

いなくなってしまった人間に引つ張られることはもうしない。
他の誰かに佳乃を重ねたりなんてしない。

時には、重ねてしまうかもしれないけれど、佳乃の思い出に浸ってしまいかもしれないけれど、それでも俺はそれをしてはいけなことだと言えるから。

前に進むことに決めたから。

誰かが言っていたっけ。

青春とは、振り返らないことだって。

だいぶ振り返ってしまったけど、今からでも遅くはないよな。

三步進んで二歩戻ったっていい。

少しずつ、少しずつ、俺のペースで前進するんだ。過去を糧にして、未来へ前進するんだ。

最悪、三步進んで三歩戻ったっていい。

立っている位置は変わらなくとも、進んで戻った合計六歩という足跡は、必ず自分自身の経験となるはずだから。

だからさ、佳乃、お前はそこで俺の背中をみていてくれよ。

俺が馬鹿をやるところを指さして笑っていてくれよ。

俺がたくさんの思い出を抱えてそっちに行くまで、俺を見守っていてくれよ。

「好きだった！　愛していた　！」

俺のたった一人の幼馴染みとして、さ。

「……先輩、格好悪いです」

涙を流しながら、杏里が笑う。

そして、俺の隣で声を張り上げる。

「でも！ そんな先輩が好きなのです　　！」

金網から手を離し、涙を袖で拭った杏里が、俺の服の裾をくいと引っ張る。

気が付いた俺に対して、真っ白にひるがえるシーツの隙間を指さす。

俺は腹を抱えて笑ってしまいそうになった。
シーツの隙間から小柄な影が透けている。

見られていたという恥ずかしさ。自分の滑稽さからくる笑いの衝動。

知らず目には涙が浮かんでしまっていた。
長い髪の毛が風と戯れていて、シーツの黒と対比するようで美しい。

青空の袂、輝く太陽に照らされた黒髪。

まさに風景画そのもの。

まさに芸術の域。

真っ白な肌はシーツの純白に溶けてしまいそうだ。儚げで、それでいて無愛想。感情を表に出さないクールビューティーさは、全校生徒の間ではすでに有名。

クールな妖精、その名は山田ウメ。

ウメは俺達を無表情で見つめていた。でも、どこか頬が強ばっていて、何かに必死に耐えているようだった。

「ウメ！ お前も一緒に！」

「山田先輩も一緒に！」

二人でウメに手を伸ばした。ウメは驚いたように顔を上げ、つぶらな瞳に俺達を映す。

ウメも同じだったんだ。

そう、みんな同じ。

みんな辛いんだ。悲しいんだ。

俺だけじゃない。

当たり前だ。

世界には、生きとし生けるものの数だけ悲しみが存在する。

大きななんて関係ない。

悲しいものは悲しいんだ。

だから、叫んでいい。

みんなみんな叫んでいいんだ。

「ウメ！」

「山田先輩！」

杏里と俺、二人で思いつきり手を広げ、思いつきり腕を伸ばす。

ウメは心臓に手をやり、葛藤を繰り返しているようだった。

けれど、それも一瞬。

服をかきむしるようにして無表情というペルソナを地面に落とす。ペルソナのとれた相好から現れたのは、無表情にはほど遠いくしやくしやの顔。

目尻に涙を一杯に浮かべて、感情を露わにする。

手を伸ばした俺達には構わず、金網に取り付いた。

「夏目の馬鹿　！」

すんだ青空に吸い込まれていく、ウメの叫び。
こんな高い声がウメの口から出る。その発見が嬉しい。

「こんな私を育ててくれて　」

ウメの横顔が、年相応の感情に溢れている。
これが本当のウメではないのか、そう思った。
いや、それは違うのかな。

「嬉しかった　！」

無表情なもの、感情的なもの、どれも全てがウメなのだ。
こんな人間的な部分が隠れているからこそ、ウメは誰よりも魅力的なのだと思う。

ツンデレが好きな俺だからなのかもしれないが……それはそれ、
これはこれだ。

「夏目が好きだった　！」

半裸のウメを見て欲情すらしなかったのは、きっとそんな隠れた
部分のウメを知らずに、佳乃と重ねてしまっていたからなのだろう。
今さらながらに、しみじみと振り返ることができた。これからは、
もしかしたらドキドキしてしまうのではなからうか。

それはそれで、困るような気がするな。

俺と杏里の目が合う。

俺がかすむ視界で微笑むと、杏里も目に涙をためて微笑んだ。

……なんだよ、ここにいる三人とも泣いているのか。

「俺は」

「杏里は」

「私は」

三人で清浄な空気を吸い込んで、三人で真っ白なシーツはためく屋上で。

病院の窓から、たくさんの人が俺達をのぞき込んでいるのも構わずに、俺達は群青の空に向かって愛を叫ぶんだ。

再生への産声を上げるんだ。

響け、どこまでも。

三人で、金網を握りしめ。

三人で声を放つ。

「佐々木の馬鹿」

「先輩の馬鹿」

「ええっ！ 何でっ！？」

俺達はどうして生きていく。

【終わり】

エピソード・「再生への産声」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

本作『多重人格な彼女』の作者であるNAOと申します。後書きでなので、色々と言いたいことがあるのだろうなと推測されると思いますが、実のところ作者的にはとくにありません（笑）立つ鳥跡を濁さずです。

というわけで、今作を読んでいただいた方には、ありがとうございます……とだけお伝えして、そそくさと次回作を頑張りたいと思います。あ、最後に宣伝をば。お時間がいただけるのであれば、この直接的なお話である『多重人格な彼女【特別編】』の方も読んでいただけると嬉しいです。作者名NAOで検索していただければもちろんHITすると思います。

それでは、長らくお付き合いありがとうございました。ご愛読、ご声援、ご感想、作者の栄養になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097f/>

多重人格な彼女 【完全版】

2010年10月9日15時42分発行